

「大学入試研究の動向」

特集 平成 30 年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(第 13 回)

●入試担当者(アドミッション・オフィサー)の育成課題

- ▶米国における入試担当者の位置づけと役割 (オレゴン大学／Jim Rawlins)
- ▶阪大アドミッション・オフィサー(HAO)育成プログラム:背景・現状・課題 (大阪大学／川嶋太津夫)
- ▶アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会:その狙いとプログラム評価 (九州大学／木村拓也)
- ▶アドミッション担当教職員支援セミナー:ねらいと課題 (名古屋大学／夏目達也)

●大学入学共通テストの導入に向けた準備状況と試行調査(プレテスト)について

- ▶大学入学共通テスト等入学者選抜改革の進捗状況 (文部科学省／山田泰造)
- ▶平成29年度試行調査の分析結果の概要 (大学入試センター／大杉住子)

●個別選抜における多面的・総合的評価

- ▶なぜ 16 種類の入試を行なうか (国際教養大学／中津将樹)
- ▶関西国際大学における多面的・総合的評価の開発 (関西国際大学／濱名篤)
- ▶東京大学の推薦入試は何をみているのか (東京大学／濱中淳子)

電気通信

100th
ANNIVERSARY
≡ SINCE 1918 ≡



平成30年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会

電気通信大学は、創立100周年を迎えます。

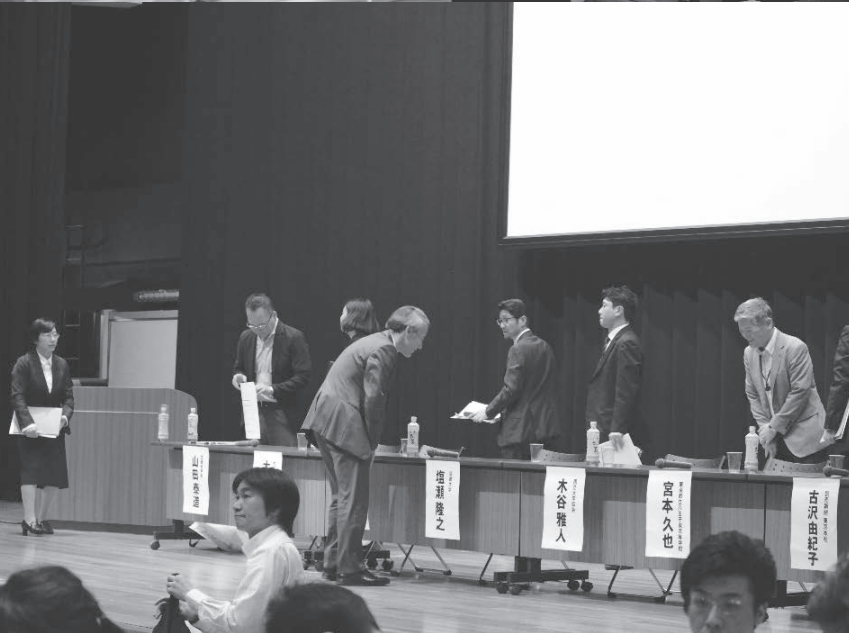


電信協会管理無線電信講習所正門

- | | |
|-------------------|---------------------------------|
| 1918(大正7)年12月 8日 | 社団法人電信協会管理無線電信講習所を創設(東京市麻布区飯倉町) |
| 1920(大正9)年12月15日 | 校舎を移転(東京府荏原郡目黒村) |
| 1942(昭和17)年4月 1日 | 無線電信講習所を通信省に移管 |
| 1945(昭和20)年4月 1日 | 中央無線電信講習所と改称 |
| 1948(昭和23)年8月 1日 | 官制改正により文部省に移管 |
| 1949(昭和24)年5月31日 | 国立学校設置法施行により電気通信大学を設置 |
| 1952(昭和27)年 4月 1日 | 岡布校舎を開校(東京都北多摩郡岡布町) |







「大学入試研究の動向」

第 36 号

独立行政法人大学入試センターは、平成 30 年 5 月 24 日～26 日、電気通信大学（東京都調布市）との共催で、平成 30 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 13 回）を開催した。本報告書は、同大会における講演、討論等を当センターの文責で採録したものである。

目 次

平成 30 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 13 回）特集

● 特集 1 入試担当者（アドミッション・オフィサー）の育成課題

- 報告 1 米国における入試担当者の位置づけと役割
Jim Rawlins（オレゴン大学副学長補佐・入試部長）－6 頁
- 報告 2 阪大アドミッション・オフィサー（HAO）育成プログラム
—背景・現状・課題
川嶋 太津夫（大阪大学教授）－20
- 報告 3 アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会
—その狙いとプログラム評価
木村 拓也（九州大学准教授）－36
- 報告 4 アドミッション担当教職員支援セミナー
—ねらいと課題
夏目 達也（名古屋大学教授）－56
- 指定討論 1 山本 以和子（京都工芸繊維大学准教授）－63
- 指定討論 2 志村 知美（追手門学院大学アサーティブ課長）－73
- 全体討論 司会・山地 弘起（大学入試センター研究開発部長）－76

● 特集 2 大学入学共通テストの導入に向けた準備状況と 試行調査（プレテスト）について

■報告 1 大学入学共通テスト等入学者選抜改革の進捗状況

山田 泰造（文部科学省大学入試室長）－**89**

■報告 2 平成 29 年度試行調査の分析結果の概要

大杉 住子（大学入試センター審議役）－**100**

■全体討論 島田 康行（筑波大学教授）塩瀬 隆之（京都大学准教授）木谷 雅人

（国立大学協会常務理事）宮本 久也（東京都立八王子東高等学校
長）古沢 由紀子（読売新聞東京本社論説委員）

司会・椿 美智子（電気通信大学副学長）

司会・浅田 和伸（大学入試センター理事）－**135**

● 特集 3 個別選抜における多面的・総合的評価

■報告 1 なぜ 16 種類の入試を行うか

中津 将樹（国際教養大学入試室長）－**174**

■報告 2 関西国際大学における多面的・総合的評価の開発 ～言語運用力と数理分析力テストの活用の可能性～

濱名 篤（関西国際大学長）－**187**

■報告 3 東京大学の推薦入試は何をみているのか

濱中 淳子（東京大学教授）－**200**

■指定討論 1 大村 勝久（静岡県立浜松北高等学校教諭）－**209**

■指定討論 2 西郡 大（佐賀大学教授）－**212**

■全体討論 司会・山路 浩夫（電気通信大学教授）

司会・大津 起夫（大学入試センター試験・研究統括官）－**215**

〔参考〕大会日程-**230**/研究会発表テーマ-**234**/大学入学者選抜改革エキスポ-**244**/

参加者数-**246**

特集 1◎報告 1

米国における入試担当者の位置づけと役割

U.S. approaches to university admission staff : Structure and roles

ジム・ローリンズ（オレゴン大学副学長補佐・入試部長）

Jim Rawlins

Director of Admissions/Assistant Vice President for Enrollment Management
University of Oregon

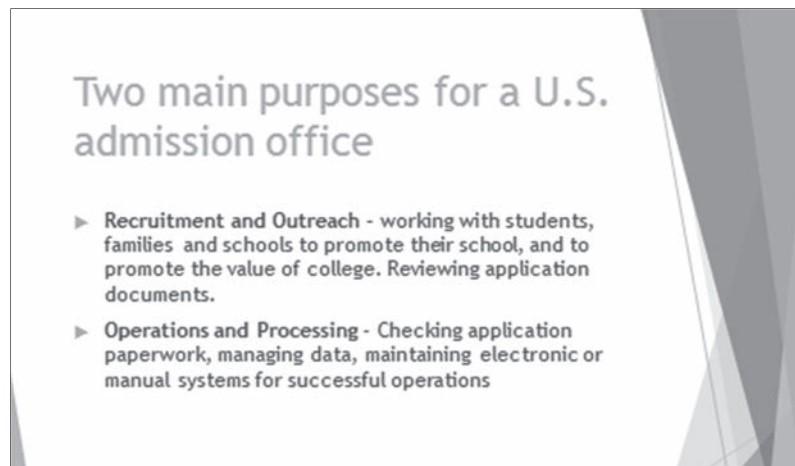


*ジム・ローリンズ氏の報告は英語で行われ、大阪大学高等教育・入試研究開発センターの石倉佑季子特任講師が適宜補足説明をした。参加者にはスライドの和訳が配布された。

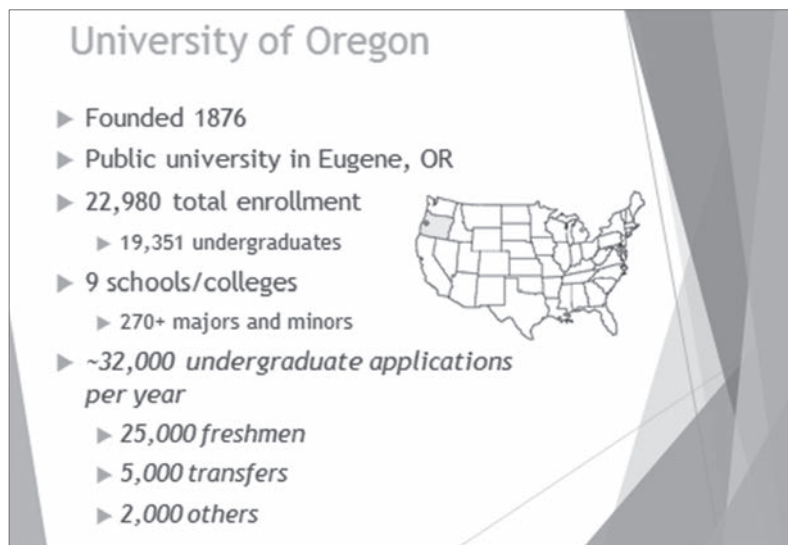
【Rawlins】 皆さんこんにちは。ジム・ローリンズと申します。アメリカのアドミッション・オフィサーの業務について、お話しできることを嬉しく思います。アメリカのアドミッションの仕組みや役割は長い年月を経て発展してきたものです。

アドミッション・オフィスには、一般的には大きく二つの業務があり、二つの業務部門があるのがふつうです。一つは、募集・広報部門（Recruitment and Outreach）といって、皆さんが、日本で言われているアドミッション・オフィサーがすると思い描いているような仕事をします。高校生やその家族

にオレゴン大学を宣伝し、オレゴン大学への進学に勧誘するような仕事を
する部門です。また、この部門のスタッフは可否の審査もします。



もう一つの部門は、事務処理部門（Operations and Processing）で、多くの事務仕事をこなし、コンピュータやデータを扱います。コンピュータシステムを保守し、募集・広報部門の仕事を支援してくれます。募集・広報部門のスタッフも彼らの存在を非常に重要だと考えています。今日は、この二つの部門についてお話したいと思います。



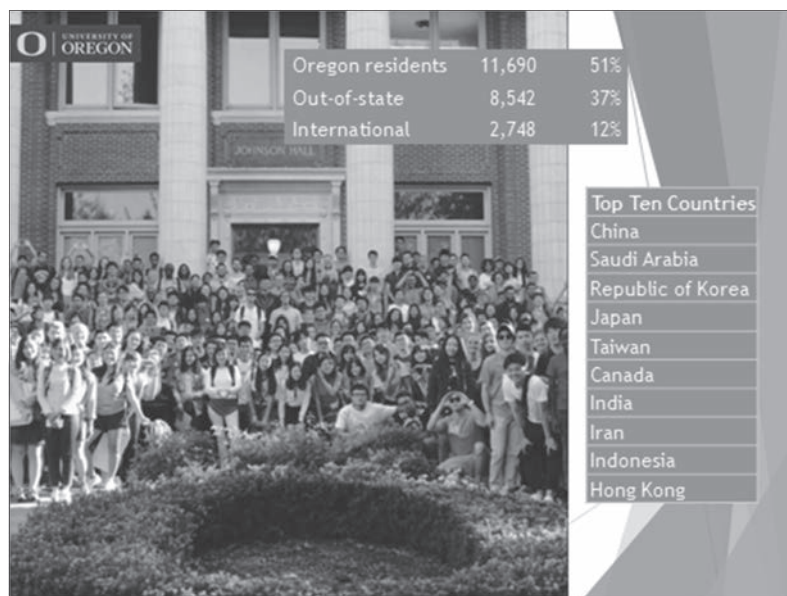
オレゴン大学についても簡単に御紹介いたします。アメリカの大学は、それぞれの立地や何を志向しているかによって様々です。

オレゴン大学は、1876 年創立でオレゴン州立の公立大学です。オレゴン州については、以前、日本のテレビで『オレゴンから愛』というドラマをやっていたそうですから、多少は御存じの方もいらっしゃるかもしれません。学生数は約 23,000 人、大部分は学部生です。アドミッション・オフィスは、1

年間に 32,000 件の出願を処理しています。ほとんどが高等学校の新卒者の出願です。

御存じのとおり、アメリカでは、編入学で大学に入学する学生がかなり多いのです。コミュニティー・カレッジで学んだ学生とか、他の 4 年制大学からの転校性です。我々は、年に約 5,000 件の編入学出願を処理しています。また、それ以外の特別な入試についての業務もあります。

オレゴン大学に出願してくる学生の多くが他大学にも出願しています。今年、我々が調査したところでは、一人の出願者が最低でも 8 大学を併願しています。そういうこともあって、我々には、高校生にオレゴン大学のことを知ってもらい、彼らを受験させ合格させるという仕事に引き続き、彼らに、併願大学ではなくオレゴン大学を選んでもらうようにするという仕事があるわけです。

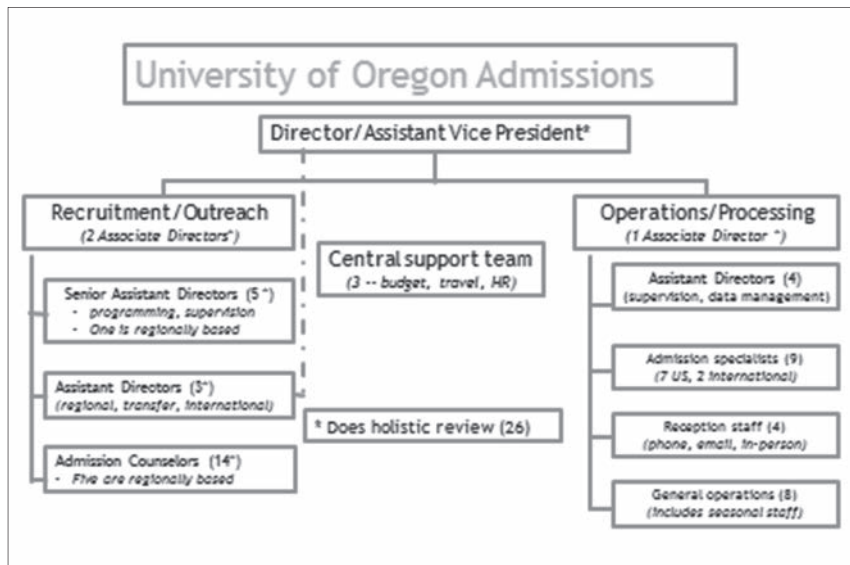


学生の約半数はオレゴン州の出身者です。37%が他州の出身者で、12%は留学生です。留学生の出身国を上位 10 か国挙げておきましたが、日本からの留学生は上位 5 位に入っており、我々も歓迎しています。

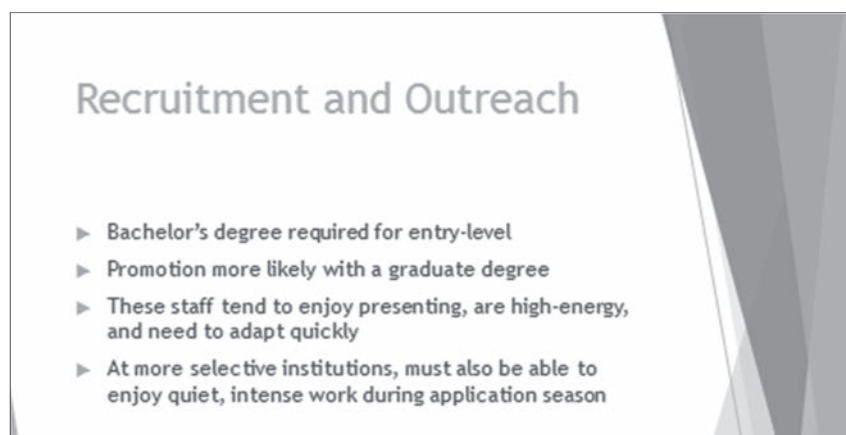
これは、オレゴン大学のアドミッション・オフィスの組織図で、私がまあ一番上の箱なわけです。図の左側が、募集・広報部門です。職員数が 20～25 人ぐらいです。右側が、事務処理部門で、情報処理ですとか裏方の事務仕事をして、募集・広報部門を支援しています。

募集・広報部門のスタッフは職位にかかわらず、出願書類を読み、生徒の出身校の状況もよく調査し把握した上で入学の判定をします。

事務部門は、面倒な事務仕事から募集・広報部門を開放してくれるという意味で、非常に重要です。



【石倉】 補足します。この組織図はあくまでもオレゴン大学の例だということを御了承ください。大学によって、組織編制はかなり異なります。



【Rawlins】 では、我々のアドミッション・オフィスで働くにはどうしたらいいのかということですが、まず、募集・広報部門、つまり、オフィスの外に出て行って広報し、出願書類を読んで合否判定するスタッフになるためには、少なくとも学士の学位が必要です。ふつうはそれ以上の学位は要求されません。単にアドミッションの世界で働き始めるというときに、そこまで求められるのはまれなことです。

修士以上の学位を持っているかどうかは、昇進にも関わりません。むしろ、我々が雇うのは、多くの出願書類を読み込み、いろいろな人たちに会い、高校の教員などと話ができるような人です。プレゼンテーションが好きで、精力的な人が雇われます。そして、適応力も必要です。➡

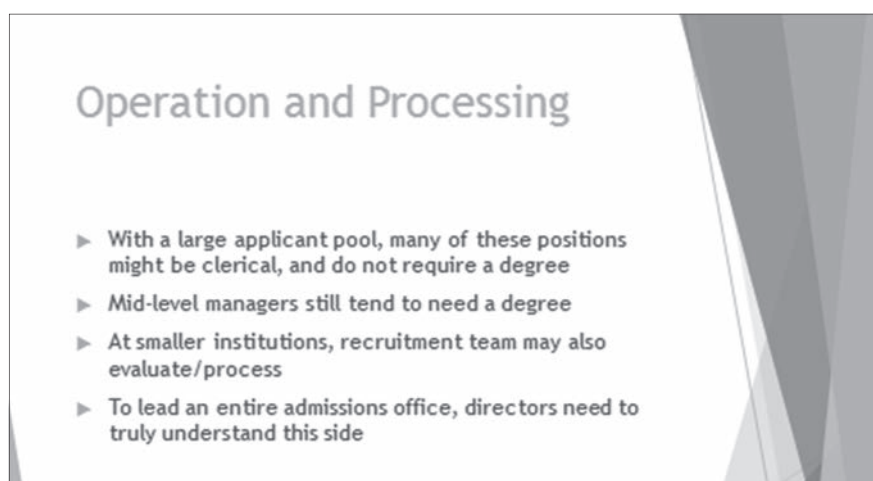
大学がアドミッションの過程で志願者に求めるものというのは、年ごとに変わりますから、アドミッション・オフィサーは、高校生や高校にオレゴン大学が求めるものを説明でき、最新の情報を与えなければなりません。

■アドミッション・オフィサーは膨大な量の書類を、無駄話をしたり外出したりすることもなく、黙々と読み続けることができるような人でなければなりません。

特に、競争的な大学の場合、アドミッション・オフィサーは、膨大な量の書類を、無駄話をしたり外出したりすることもなく、黙々と読み続けることができるような人でなければなりません。

活気がある人や誠実な人は大勢いますが、我々はどちらも兼ね備えている人を望んでいます。そういう人となるとなかなか簡単には見つからないものです。しかし、そういう性格はアドミッションの世界で成功するためには非常に重要なものです。

【石倉】補足します。アドミッション・オフィサーに必要な能力としてエネルギーッシュであるということと、そして、必要なときには静かに仕事ができるということです。相反しているようですが、そのような両方のスキルが必要になるということでした。



【Rawlins】これは、事務処理部門の職員に望まれる要件です。彼らは、合否判定をするような専門職ではありませんが、我々は非常に沢山の志願者をかかえていますので、こういうスタッフが必要なのです。彼らの仕事は、補助的

であり、意思決定をするわけではありません。学士の学位も必要ありません。

とは言っても、事務処理部門でも管理的あるいは指導的な役割につくような人は、学位を持っていることが多いようです。また、例えば年間の出願件数が4, 5千の小規模大学のアドミッション・オフィスでは、募集・広報部門のスタッフも事務仕事をすることもあります。もっと小さな組織では、全員で全ての業務をこなさなければなりません。

ですから、アドミッション・オフィスの部長は、私のように募集・広報部門出身の部長であっても、事務処理部門の業務についても知っておかなければオフィス全体を効率的に指導していくことはできません。



実は、我々はちょうど昨日、100 人の応募者の中から3人の新人を採用したところですが、我々は他の大学のアドミッション・オフィスで働いた経験の有無を問うたりしません。そういうことよりも、大学段階の教育の重要性を理解している人を採りたいのです。

大学教育の意義を、高校生の家族に説明できて、高校生に進学意欲をおこさせるようなことのできる人。あるいは、これまで大学に進学した人が身内にいないような家庭の生徒が、最初はいろいろなことに不安がっていても、彼らを安心させ冷静にさせ、進学に興味を持つよう、彼らを支援できる人を望んでいます。だから、我々は、職員を採用する時には、応募者自身がどんな信条をもち何に関心を持っているのかに注目するのです。

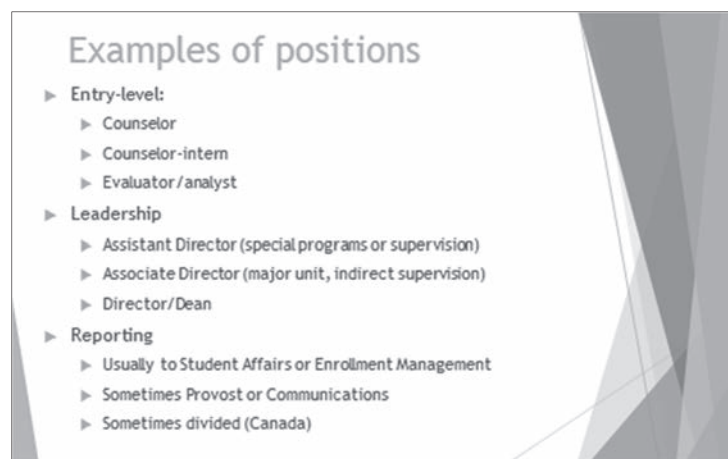
可否の判断の仕方は、採用後に教えます。大学ごとにアドミッションの方針は異なりますから、我々としては、オレゴン大学が何を重視しているのかを理解できる人を採りたいのです。

採用者の中には他の大学のアドミッション・オフィスで働いていた人や高校や地域のコミュニティーセンターで働いていた人もいますが、いずれにしても、アドミッション・オフィサーは、若い人を相手にした仕事がうまくできなければなりません。自発的で、独立心がありコミュニケーションにたけ

た人が欲しいのです。

■ 学生が自分に適した大学を選択する手助けをすることだと思います。適した大学がオレゴン大学でなければ、ほかの大学のほうが合っていますよと言います。

繰り返しになりますが、我々は、情熱的で精力的で、かつまた、2～3か月の間部屋に閉じこもって、終日資料を読み続けることができる自制心を持った人を望んでいます。



このスライドには、先ほど御覧いただいた組織図からいくつかの役職を取り上げました。新人の募集・広報部門の職員は counselor と呼ばれています。彼らは、志願者やその家族の意思決定の相談にのるからです。我々は、高校生にオレゴン大学を志望してほしいと思っています。しかし、もっと大切なことは、学生が自分に適した大学を選択する手助けをすることだと思います。適した大学がオレゴン大学でなければ、ほかの大学のほうが合っていますよと言います。

また、我々は、カウンセラー・インターンという特別のポジションを作り、オレゴン大学を卒業したばかりの学生を採用しました。将来、アドミッションなど高等教育の分野で働きたいと思っている学生です。1年任期で2人しか採用しません。給料や責任は他のカウンセラーと同じですが、1年たてばやめなければなりません。その後、彼らは他大学の常勤の職に応募するとか、大学院に進んだりします。アドミッションの仕事は非常に厳しいと知って他の分野に進む人もいますが、それはそれで構いません。

このカウンセラー・インターンというのは、アドミッションの仕事を少し経験してみるにはいい制度です。我々常勤の職員にとっても、彼らの存在はよい刺激にもなっています。

中段の Assistant Director のような指導的な立場になるには、アドミッションについての経験が必要です。教授職で御自分の専門分野に精通しているような人でも、アドミッションの実務について経験がなければ、指導的立場につくというのは難しいと思います。そういうことも可能かもしれませんが、やはり、我々としては、いろいろな人と会いに出かけていくような仕事からスタートして、様々な面倒な仕事をこなしてリーダーシップの在り方を身に付けたような人が指導的立場につくことを望みます。そして、もちろん、Director になるには修士の学位、まれには博士の学位が必要です。私は、25 年間アドミッションの仕事をしてきました。私もそうですが、多くのアドミッション・オフィサーはアドミッションの仕事が好きでやっているのだと思います。

【石倉】オレゴン大学では、最近、カウンセラー・インターンという制度を始めたそうです。対象者は新卒の学生さんで、毎年 2 名 1 年だけの雇用でアドミッション・オフィスで勤務してもらっているそうです。この 1 年間というのはアドミッションでの経験を積む機会にもなりますし、その後大学院に行きたい学生もいるし、他の職に就きたい学生もいるし、そのまま引き続きアドミッションの仕事に残りたいという学生さんもいるということです。

リーダーシップ職に関しては、入試の経験、入試の分野での職歴が必要だということでした。ジム先生自身も今ディレクターですがもう 25 年のアドミッションの職歴があるということです。また、リーダーシップの職に付く方はだいたい修士、人によっては博士の学位をもっているということでした。

【Rawlins】アドミッション・オフィスは大学の組織のどこに属するのか。オレゴン大学もそうですが、多くの大学では、アドミッション・オフィスは、学生関係の部門に属します。オレゴン大学では、Division of Student Service and Enrollment Management の一部で、私の上司は、Vice President of Enrollment Management ですが、彼の仕事は奨学金や学籍関係、新入生のオリエンテーションや宿舎にまで及びます。我々は、入学時だけではなく、在学中を通じて様々な形で学生の面倒を見ているわけです。

大学によっては、アドミッションは、教学部門のために選抜をするのだからということで、アドミッション・オフィスを学長や教学部門の職種の管理下においていることもあります。また、ネットや出版を通じて学生獲得に力を入れている大学などでは、アドミッション・オフィスが、Vice President for Communication の管轄となっていることもあります。

また、カナダなどでは、募集・広報部門と事務部門が分かれていて、オフィスも異なるということもあるようです。

Interviewing potential counselors/recruitment staff

- ▶ Brief presentation(s)
- ▶ Writing sample
- ▶ Ability to explain their own experience
- ▶ Ability to explain value of college
- ▶ Bring new perspectives
- ▶ Understand university goals and mission

これは、我々が募集・広報部門への就職希望者に対して面接で課していることです。例えば、簡単なプレゼンテーションで情報伝達の力を見ます。どれほど情熱的になれるか。また、文章も書かせます。学問的なものではなく、どれほど上手に志願者や家族とコミュニケーションできるか、少々込み入った内容でもやさしく説明できるかを見ます。我々は、我々自身とは違ったものの見方のできる人物を望んでいます。

募集・広報部門で出願書類をホリスティックレビューする職員には、客観的であり、かつ、志願者それぞれの特徴を、自分自身の経験を生かして把握できることを望みます。私は、そういう新しい観点をもっているようなカウンセラー候補者を探しています。そういう人ならば、志願者の志をよく理解でき、また、彼らの出身地についても知見をもっていると思います。

いずれにしても、募集・広報部門で働くには、オレゴン大学が何を志向しているのか、そして我々が自身のミッションをどう遂行しようとしているのかを理解していただかなければなりません。

Training staff

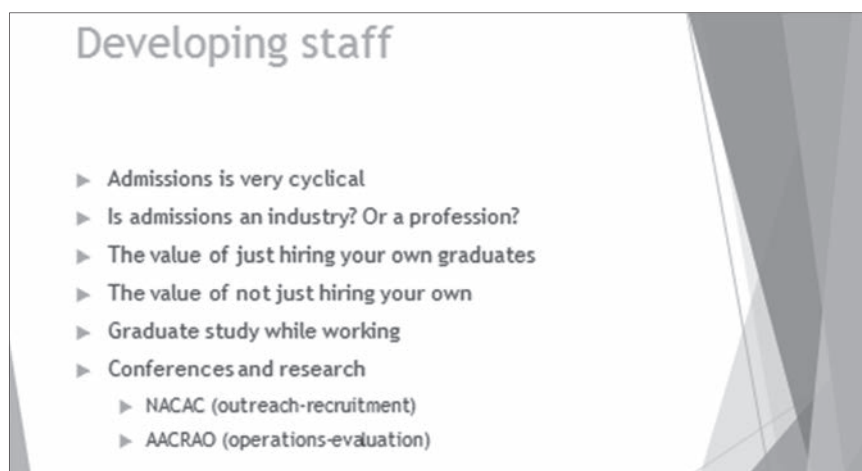
- ▶ **Counseling staff**
 - ▶ Must be familiar with what success looks like
 - ▶ Must know how to find what is unique
- ▶ **Operational staff**
 - ▶ Need to be information managers
 - ▶ Must know how to find patterns and be objective

これは採用後の研修です。我々の仕事で一番大切なことは、志願者がオレゴン大学でうまくやっていけるかどうかを見極めることです。そしてまた、

それだけをやればいいというのではなく、実際に志願者を訪問したときに、志願者がどんなふうに、自分がオレゴン大学に適合し、強い進学意欲をもっているということをアピールするのかを理解できていなければなりません。また、ある学生が他の学生よりも際立っているのはどういう点かについても理解できなければなりません。我々はいつもスタッフに、彼らは単にオレゴン大学の代表というだけではなく、他の大学や高校、そして高校の進路指導教員と連携できなければならないと教えています。

■我々は企業ではないし、大学を売り込むというビジネスをしているわけではない、それ以上の仕事をしているんだということです。

事務スタッフも非常に重要です。彼らは情報の管理者です。彼らは、仕事の最適なやり方を把握し、効率的に働けるようであればなりません。繰り返しますが、我々は年間 32,000 件の出願を 22~24 人のスタッフで処理しているのです。事務部門の職員にも、有能で、堅実で、ミスをしないことが求められます。



また、我々はある程度勤続年数を経た職員に対する研修も行っています。アドミSSIONの仕事は一年を通じた周期的なものです。出願の締切時期、あるいは、高校生が大学訪問に来る時期など、それぞれの時期に決められたことをしなければなりません。

私が、アドミSSION・オフィスの職員に銘記してほしいのは、我々は企業ではないし、大学を売り込むというビジネスをしているわけではない、それ以上の仕事をしているんだということです。高校生が自分にあった進学先を見つけることができるよう専門職として支援しているんだということ、そ

してその進学先は、必ずしもオレゴン大学でなくてもいいんだということを分かってほしいのです。そのために、我々は職員を厳しく鍛えているわけです。

職員としてオレゴン大学の卒業生を採用するのも我々の刺激になっていいことだと思いますし、他大学の学生を採用するのも大切だと思っています。現在、募集・広報部門では前者後者が半分半分です。

私はまた、職員には学位をとるよう勧めています。オレゴン大学でとれば学費も安いですし、業務のスケジュール調整もします。大学院での専攻が必ずしも教育関連でない場合でも職員が学ぶことはオフィスにとって役に立つことだと思います。



最後に、アメリカでのアドミッション専門職の強い連携に関して、私が代表を務めたことがある NACAC という団体と AACRAO という団体についてお話します。

NACAC (the National Association for College Admission Counseling) は、最も重要でかつ最大での団体です。会員数は約 15,000 人で、外国からの参加者もあります。80 年の歴史があります。この会場のロビーにも NACAC のチラシを置いてありますが、大学のアドミッション関係者と高校の進路指導担当者がお互いに学びあおうという団体です。組織の中心的な活動は、入試の倫理綱領を定めることです。アメリカの大学入試では政府がルールを定めたりしていません。入試に関するルールは NACAC が定めています。NACAC のルールが、出願締め切り時期や出願要件などの決め方を定めており、志願者はどの時期に何をすればよいのか分かります。

この組織には、地方支部がありますし、カレッジ・フェアというイベントを全国で展開しており、最近では海外でも、開催しています。いろいろな研修もしますし、学生の援助や、高等教育への援助など重要な案件については、政府に対し提言もします。



AACRAO (the American Association of Collegiate Registrars and Admissions officers.) の会員は大学関係者だけです。こちらは、システムの分析だとか、運営とか、出願登録を共同でやったり、正確な成績証明のためのルールや基準を定めたり、学生の個人情報保護に関することもやりますし、政府への提言もします。地方支部ももっています。



この AACRAO も立派な団体ですが、私は自分が代表をしていたこともあって、NACAC びいきです。誰でも加入でき、アドミSSIONの現在を知ることができます。年に1度大きな大会を開催しており、今年はソルトレイクシティで9月にあります。いろいろな分野についてネットセミナーも実施しています。

以上、今日はアメリカのアドミSSION担当者の業務や組織、そして組織同士の連携についてお話いたしました。御清聴ありがとうございました。

【山地・大学入試センター研究開発部長・司会】ジム先生、ありがとうございました。オレゴン大学のアドミSSION・オフィスの様子やそこで働く職員に求められる能力、そしてその人たちのリクルート、あるいは研修について幅

広くお話いただきました。それでは、ここで会場からの御質問をいただきたいと思います。

【フロア1】私も、去年ボストンで行われた NACAC の大会に参加しました。お話の中で、カナダの大学ではアドミッション・オフィスが二つのディビジョンに分かれているという御説明があったと思いますが、なぜカナダではそのようなことになったのでしょうか。

【山地・司会】もうお一方の御質問も一緒にお聞きします。

【フロア2】アドミッション・オフィサーのキャリアデザインについてですが、オフィサーを経てアカデミックに、要するに教授職に進まれるというケースはアメリカの大学ではよくあることでしょうか。

【山地・司会】ありがとうございます。では、ジム先生どうぞ。

【Rawlins】いろいろな事情があって、カナダの場合はアドミッション・オフィスが2部門に分かれてスタートしたのでしょうか。最初一緒だった組織が後に分かれたということではないと思います。これ以上のことは分からないのですが、良い質問だと思いますので、私もトロント大学の友人に聞いてみます。



もう一つの質問は、アドミッション・オフィサーで、教員になったりする人はいるのかということでした。いることはいますが稀です。アドミッションで働いている私の友人たちを見ても、みな長期間働いています。多分退職するまでアドミッションの仕事をするのだと思います。

教員になった人は、たいていは教育分野の研究者になることが多いようです。その一例がジェローム・ルシード (Jerome A. Lucide) さんという非常に優れた研究者です。彼はアドミッションの分野で長年働き、現在は USC (南カリフォルニア大学) の教員になっていて、アドミッションについて研究する組織を取り仕切っています。大学院の教育プログラムを作っていますし、毎年2月には研修会を開くのですが、それは素晴らしいものです。

御質問の趣旨とは少し違うと思いますが、もっと一般的なのは、学部を出てすぐに3~5年ぐらいアドミッション・オフィスで働き大学院に進むというケースです。私のオフィスのカウンセラーにも、化学とか経営とか建築とか、いろいろな分野の大学院に進んだ人たちがいます。彼らは、アドミッション・オフィスで働いたことは、高等教育を受ける上で有益だったと振り返っています。

また、オレゴン大学の学部長の一人で私の親友なんですが、彼はアドミッション・カウンセラーとしてスタートしたのですが、経済学が好きで経済学で修士号と博士号をとりました。それ以来、教官職になったのですが、今では我々アドミッション・オフィスのよき理解者です。



特集 1●報告 2

阪大アドミッション・オフィサー(HAO) 育成プログラム——背景・現状・課題

川嶋 太津夫（大阪大学教授）



皆さんこんにちは。御紹介いただきました大阪大学の川嶋です。ただ今のジム先生のお話をお聞きしますと、アメリカでは、少なくともオレゴン大学の例を拝見する限り、アドミッション・オフィスで働いている職員の方は全部アドミッション・オフィサーと言えるのかもしれませんが。その中で実際に出願書類を読んで受験者を評価している人がアドミッション・カウンセラーと呼ばれているということでした。これは後ほどの討論等でも、どういう職務をしている人をアドミッション・オフィサーと呼ぶのかという議論にもつながってくるのだらうと思います。

それでは、まず、背景として日米の大学の入試制度を比較した上で、日本における「アドミッション・オフィサー」の在り方や育成の問題についてお話ししたいと思います。

日米大学入試制度比較

アウトライン

- ・ 日米大学入試制度比較
- ・ 高大接続改革の経緯: アドミッション・オフィサーの必要性
- ・ 大阪大学の対応(補助金の獲得)
- ・ 試行版HAOプログラム
- ・ 展望と課題



日米大学入試制度比較

	日 本	米 国
国の規制	有り(文部科学省「大学入学者選抜実施要項」)	無し("Statement of Principles of Good Practices: NACAC's Code of Ethics and Professional Practices")
入学定員	国による統制	各大学の裁量
募集単位	学部・学科	原則として大学(College)
志願者	同質(ほぼ日本の18歳の高校生、それ以外は「特別入試」対象)	多様(18歳、編入生、留学生、社会人)
専攻分野	決まっている(はず)	多くの場合未定
高校の教育課程	共通(高等学校学習指導要領)	多様(Common Core State Standards)
共通テスト	1種類(大学入試センター試験)	2種類(SAT, ACT)
個別学力試験	有り	無し
受験場所	基本的に出席先大学で	大学に行く必要なし
出願方法	出願大学ごと	出願大学& 共通ウェブ(Common App, Coalition等)
選抜資料	一般入試(テスト得点)、推薦・AO入試(複数の情報)	全ての選抜で複数の情報(総合評価)
評価者	教員	アドミッション・オフィサー

御承知のように日本とアメリカの入試制度は大きく異なっています。日本では文部科学省の高等教育局長通知である大学入学者選抜実施要項が入学者選抜のルールになっています。たとえば AO 入試は 8 月 1 日以降、推薦入試は 11 月 1 日以降、一般入試は 2 月 1 日以降に実施というように国が関係者と相談をしながらルールを決めています。ところがアメリカではそのような国の関与はありません。ジム先生のお話にもありましたように、NACAC という専門職団体が倫理綱領というものを行っています。例えば、アーリーデシジョン、アーリーアクション、ローリングアドミッションといった入試の方法について、いつ募集を開始し、いつ締め切るのか、合格者をいつ発表するのかということを決めているわけです。かつては学生の取り扱いで混乱が起きていたのでこういう綱領が取り決められたそうです。

入学定員も、我が国では基本的には国によってコントロールされていますが、アメリカでは原則的には各大学の裁量です。そもそも募集単位が日本とは違います。日本では学部・学科ごとに募集しているのに対して、アメリカでは原則として一括 Undergraduate として、大学(カレッジ)単位で募集しています。志願者の構成も、日本では、ほぼ 18 歳の高校生で非常に同質的で、それ以外の社会人や編入生などは別枠の入試の対象です。アメリカの大学は志願者が非常に多様で 18 歳以上の志願者もいれば、他大学からのトランスファーと呼ばれる編入生、そして留学生や社会人など非常に多様な志願者を対象にして選抜を行っています。

そして、アメリカでは入学から卒業までを一つの大学で過ごす学生は非常にまれです。また、専攻の選択も、日本では学ぶ学部・学科を決めてそこへの入学を志願する。ところがアメリカでは多くの場合レイト・スペシャリゼーションで入学後に専攻を決める。日本の高校の教育課程は学習指導要領によってどの高校でも共通である。ところがアメリカ場合は、地域により高校により非常に多様です。そこで、ここ数年前からアメリカではコモン・コア・ステート・スタンダードと言って、数学とか英語については共通アウトカムを決めて教育し、最終的にはテストをするという動きもあります。

アメリカには、SAT と ATC と二つの共通テストがあって、どちらかあるいは両方のスコアを志望大学に提出します。日本の大学で行われているような、個別試験は原則的にありません。

■ 合否の判定も日本の大学では基本的には教員が最終的に合否を決め、また面接等も教員が行っています。アメリカではいわゆるアドミッション・オフィサーが面接をし、合否を決める、とまあ、このように様々な違いがあるわけです。

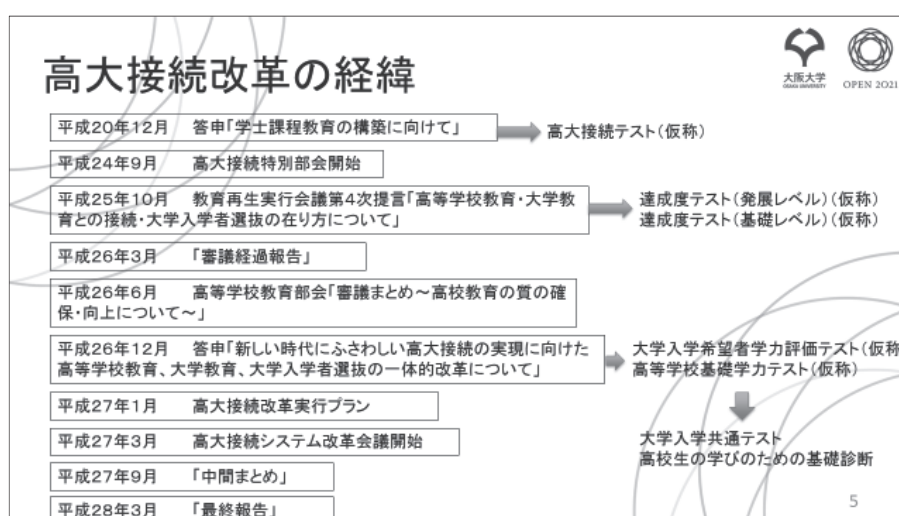
日本では出願先の大学まで出かけて行って個別試験を受験をしなければなりませんが、アメリカではそんな必要はありません。出願方法にしても、日本では志望大学ごとに書類を送りますが、アメリカでは、それもできますけれども、最近では、コアリション・アプリケーションあるいはコモン・アプリケーションといった共通の Web システムを通じて出願します。

選抜の資料は、日本の場合は一般入試では主にテストのスコアで選抜し、推薦入試などでは複数の情報を使いますが、アメリカでは基本的には全ての選抜で総合(ホリスティック)評価と言って、複数の情報を用いて評価します。

ただし、カリフォルニア州の場合はトップ校の UC はホリスティック・アドミッションですが、その次のクラスの California State の大学はほぼフォーミュラー・ベースと言って、SAT, ACT のスコアと GPA の組合せで決まってしまう。いずれにしても共通テストと高校の成績という複数の情報を使って合否を決め

ています。合否の判定も日本の大学では基本的には教員が最終的に合否を決め、また面接等も教員が行っています。アメリカではいわゆるアドミッション・オフィサーが面接をし、合否を決める、とまあ、このように様々な違いがあるわけです。

高大接続改革の経緯: アドミッション・オフィサーの必要性



我が国で、アドミッション・オフィサーという職が必要ではないかと言われたのは御承知のように高大接続改革の中でです。高大接続改革の経緯についてまとめてみました。平成20年12月の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」でAO・推薦入試等が問題になり、高大接続テストというものが仮称ながら提案されました。その後、政府の教育再生実行会議等でも高大接続改革が議論されて、達成度テスト（発展レベル）、同（基礎レベル）という2種類の共通テストが提案されました。平成26年3月には高大接続特別部会の審議経過報告が出され、平成26年6月には高等学校教育部会の審議まとめが出されました。平成26年12月にはいわゆる「高大接続答申」が出され、この中では「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」「高等学校基礎学力テスト（仮称）」という形になり、平成27年1月は文部科学大臣の高大接続改革実行プランが示され、同年3月には高大接続システム改革会議が開始され、同年9月に中間まとめが出され、翌平成28年3月に最終報告が出され、この中で「大学入学共通テスト」と「高校生の学びのための基礎診断」という正式の名称が定まりました。➡

「アドミッション・オフィサー」の必要性

こうした評価には事務的な負担が伴い、高い評価能力が要求されることから、国は、評価のノウハウを集約したセンターにおいて、多元的な評価に対応した資料の蓄積・共有、新たな手法の研究・開発を行うとともに、各大学におけるアドミッション・オフィスの強化や、評価の専門的人材の育成、教職員の評価力向上に対する支援を行うことが急務である。

「高大接続答申」p.14.

○ 以上のような個別大学における入学者選抜改革を推進するため、各大学において、アドミッション・オフィスの整備・強化やアドミッション・オフィサーなど多面的・総合的な評価による入学者選抜を支える専門人材の職務の確立・育成・配置等に取り組むことが必要である。このような専門的な組織や人員配置等を行うことは、従来、入学者選抜の業務を担ってきた個々の教員の負担軽減にも資するものである。国においても、効果的な財政支援等を通じて、各大学の入学者選抜改革を促す。

高大接続システム改革会議「最終報告」p.50. 6

大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

OPEN 2021

このような経緯の中で、アドミッション・オフィサーの必要性については、平成26年12月の高大接続答申の中で、「国は、 — 評価の専門的人材の育成、教職員の評価力向上に対する支援を行うことが急務である」と言われ、高大接続システム改革会議の最終報告では、「各大学において、アドミッション・オフィスの整備・強化やアドミッション・オフィサーなど多面的・総合的な評価による入学者選抜を支える専門人材の職務の確立・育成・配置等に取り組むことが必要である。このような専門的な組織や人員配置等を行うことは、従来、入学者選抜の業務を担ってきた個々の教員の負担軽減にも資するものである」と言及されています。

「アドミッション・オフィサー」の必要性

○ 確かな学力とともに多様な資質を持った高等学校・高等専門学校卒業者を受け入れる。

(例) 大学は、多面的・総合的な評価を含み、個々の大学のカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに沿って学修をすすめることができる者を選抜できるように入試改革を推進するとともに、推薦入試、AO（アドミッションズ・オフィス）入試、国際バカロレア入試等の導入を拡大する。

国は、各大学における丁寧な入試の実施に必要な組織整備、人材育成等について支援を行う。 「国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン」H29.9.14 p.4.

大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

OPEN 2021

確かな学力とともに多様な資質を持った高等学校・高等専門学校卒業者を受け入れる。

個々の大学のアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの整備・整備

高大接続を推進する大学改革推進・教育課程を含む入試改革のためのカリキュラムの整備（人材系を最大限に活用しつつ）

入試改革（推薦入試、AO入試、国際バカロレア入試等の拡大（入学定員の20%を目標））推薦入試における推薦・調査書の活用等（評価から選抜へ）

→

大阪大学の対応
 平成29年度入試から後期日程を停止し、
 全学部で推薦入試・AO入試を導入
 （第3期中期目標期間で約10%）

また、国立大学協会は、「国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン」の中でも、「国は、各大学における丁寧な入試の実施に必要な組織整備、人材育成等について支援を行う」と提案されています。このプランでは御承知のように、推薦入試、AO入試、国際バカロレア入試等の丁寧な入試を、入学定員の30%にまで拡大することが提言されています。私の勤務先の大阪大学でも、まずは、第3期中期目標期間は10%を目途に推薦入試・AO入試の定員を拡大する計画です。

大阪大学の対応(補助金の獲得)

大阪大学の対応

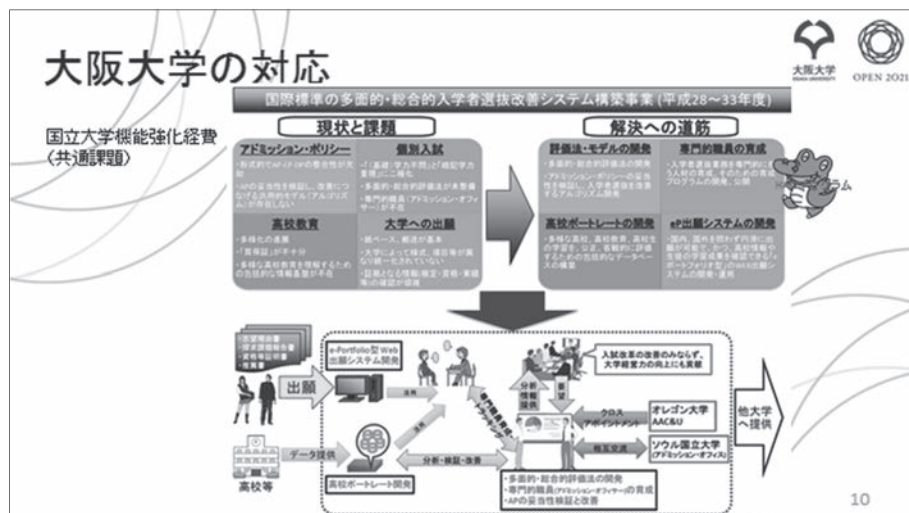


- ・平成27年度文部科学省特別経費
「教育組織の再編を見据えたグローバルな入学者選考方法の調査研究」
国内・国外大学のアドミッション・オフィスの調査
国内大学(北大、東北、筑波、九大、広島、山口、早稲田、慶應、APU)
韓国(KAIST、SNU、延世、高麗)
台湾(精華、交通)
香港(香港、香港ポリテクニク)
米国(メリーランド、ペンシルバニア、ドレクセル、UCSD、UCB、サンタクララ)
英国(オックスフォード、ケンブリッジ、UCL)
(報告書)
<https://cheqa.osaka-u.ac.jp/report/20160330282/>

9

このような国や国大協の様々な動きの中で、大阪大学がとった対応ですが、具体的に言うと、補助金を獲得してアドミッション・オフィス整備等の要請に応えようとしたしました。

まず、平成27年度に文部科学省の特別経費を獲得し、「教育組織の再編を見据えたグローバルな入学者選考方法の調査研究」と題した研究を1年間行いました。ここにありますような国内外の大学のアドミッション・オフィスを訪問していろいろなお話を伺いました。



10

これが1年で終わりました、この調査研究の成果を基に、平成28年から始まる第3期中期目標に向けて補助金の獲得を目指し、国立大学機能強化経費の共通課題で、入試改革、高大接続改革の項目の中で補助金を頂いたということで、ちょうど平成28年から平成33年度という第3期中期目標期間の6年間の事業として計画したものです。

この事業では高大接続の現状、特に入試制度については、四つの課題があると考えました。一つはアドミッション・ポリシーが非常に不明確であるということ。そして、個別入試については常に選抜制が高く試験で細かな知識まで問うような大学と、全く学力を問わずに入学させるような大学に二極化しているとか、あるいは、多面的・総合的評価がまだ未整備だったり、入試業務を担う専門職人材が足りないのではないかということ。また、先ほどもお話ししたとおり、大学への出願方法も、依然として紙ベースであり各大学の願書の様式もバラバラである。また、高校教育も非常に多様で、学力の質保証が不十分であるということ。

このような課題に対応するソリューションとして、一つはアドミッション・ポリシーにのっとった、しっかりした総合的な評価法を開発するという、その評価を担う専門的職員を育成するという。

それから、ウェブ出願システムについては、特に高校生の主体性等を評価するために、高校時代までにどのような活動をどういう思いでしてきたのかということがデータとして整備されるようなe-Portfolio型の出願システムを開発するということです。

この多面的・総合的評価をする際に気を付けなければいけないことは、高校教育が非常に多様化しているということです。例えば内申書の評定平均値が同じ3.5でも、A高校の3.5とB高校の3.5では意味するところは全く違います。やはり高校の情報をきちんと確認しながら評価しなければなりません。そのためには、高校ポートレートの開発というようなことも重要だろうということで、そういう事業も始めています。現在、約2,000校の基礎的なデータを集めています。

HAOプログラムへの歩み1



・平成28年2月4日

「多面的・総合的大学入学者選抜の可能性：米・英・日の先進事例から学ぶ」(80名参加)

プログラム

13:00-13:05 開会の挨拶

13:05-13:30 日本の大学入学者選抜改革と大阪大学の世界適塾入試
川嶋太津夫教授(未来戦略機構戦略企画室・グローバルアドミSSIONズオフィス長)

13:30-14:30 「アメリカにおける大学入学者選抜の動向及びドレクセル大学の事例」
(質疑応答 20分)ファーマー・クリストファー博士

14:30-15:30 「イギリスにおける大学入学者選抜の動向及びオックスフォード大学の事例」(質疑応答 20分)カーン・サミナ博士

15:30-15:50 休憩

15:50-16:20 「九州大学における多面的評価の試み」林篤裕教授

16:20-16:50 「多面的・総合的評価を目指した広島大学の取組」杉原敏彦教授

16:50-17:00 質疑応答

17:00 閉会

11

また、アドミッション・オフィサーの育成については、国内の講師だけによる研修ではなく、例えば、先ほど講演をしていただいたオレゴン大学のジム先生をクロスアポイントメントでお呼びしていたり、あるいはソウル国立大学のアドミッション・オフィスと協定を結んでアドバイスを頂いたりということをしています。

アンケート	人数
① シンポジウムをどこで知りましたか?	
ポスター・チラシ	3
主催者からの推薦メール	6
学会、大学、その他機関のHPやメール	9
知人から紹介	8
その他	4
② シンポジウムは期待通りでしたか?	
期待通り	8
だいたい期待通り	16
あまり期待通りでない	5
期待通りでない	9
③ 興味を持った内容について (別シート質問③記入)	
職種、所属は以下のどれですか?	
大学教員	阪大 2 その他 11
大学職員	阪大 0 その他 3
学生	阪大 0 その他 2
大学以外の機関・企業	8
その他	3
④ ご意見・ご感想 (別シート質問④記入)	

セミナーで特に興味を持った点

- 多面的評価、特に面接では多大な人員と多様な予算が必要であることが理解できた。予算が限られた日本の国立大学では極めて課題だと思う。
- 日本と海外の大学の入試制度・選抜方法の違いが良くわかった。
- オックスフォード大学のカーン先生の内容は極めて有用であった。ドレタセル大学のフーガソン先生の内容は予想した通りであったが、非常に感服しておられるのが分かった。
- 共通して手間のかかる入試とお話していましたが、それでもよい学生が入学しているということでした。
- オックスフォードの面接に驚いた。日本人は質問力が弱いため、オックスフォードのやり方は少し難しいように思える。

セミナーに対して意見や感想

- 単発ではなく、このようなセミナーを継続して実施してほしい。
- 入試の持つ可能性の広がりについて期待しております。一般社会人採用も多様化しており、今後入試を考える上で有効な要素となるのではないかと思います。
- パネルディスカッションでのまとめが良かった。
- もう少し具体例が欲しかった。

このような計画の中で、各大学にも研究成果を還元するために、平成 28 年 2 月 4 日には「多面的・総合的入学選抜の可能性」と題して、先ほど話した 2015 年の補助金で調査した大学からキーパーソンをお呼びして、国際シンポジウムを開催し、様々なフィードバックを頂きました。

HAOプログラムへの歩み2

多面的・総合的入学選抜の最前線

2015年2月4日(水) 14:00-17:00

会場：大阪大学 国際会議場

主催：大阪大学 国際会議場

協賛：大阪大学 国際会議場

講演者：Dr. Brigitte Steger, Dr. Pil Sun Park

https://chea.osaka-u.ac.jp/report/2016101495/

それから同じく 2015 年に訪問したケンブリッジ大学の Brigitte Steger 先生、国立ソウル大学校の Pil Sun Park 先生、そしてジム・ローリンズ先生をお招きして、これも今度は「多面的・総合的入学選抜の最前線」と題して、それぞれの国での取組をお聞きするような国際シンポジウムを開きました。➡

HAOプログラムへの歩み3




- ・ 平成29年3月26日
- ・ 「大学入試サミット2017」 大学入試改革における大学、国および中間団体の連携について考える
- ・ プログラム

■招待講演1「UCAS: the role of centralised admissions in the UK's further and higher education sectors」
Mark WILSON 英国UCAS 国際マーケットマネージャー

■招待講演2「The status and prospects of university admission system in Korea and the role of Korean Council for University Education (KCUE)」
Myung Chae Jung 韓国大学教育協議会 大学入学支援室長・世宗大学校 教授

■招待講演3「高大接続改革における大学入学者選抜改革の動向について」
梶田 裕 文部科学省高等教育局大学振興課 大学入試室長

■招待講演4「日本の共通試験と大学入試センターの役割」
大塚 雄作 独立行政法人大学入試センター 試験・研究統括官(副所長)

■事例報告1「名古屋大学がめざす新しい入試のあり方」
木俣 元一 名古屋大学 副総長(入試・組織改革・学生支援・図書館担当)

■事例報告2「京都大学特色入試について」
北野 正雄 京都大学 理事・副学長(教育・情報・評価担当)

■事例報告3「大阪大学の高大接続と入試改革 ― 知識基盤社会への対応 ―」
小林 傳司 大阪大学 理事・副学長(教育担当)

■パネルディスカッション・Q & A



14

やはりいろいろと各国を調査していますと、大学や国だけではなくて、国の政策と大学の実践を取り結び支援する中間団体が非常に重要な役割を果たしているということが分かりましたので、イギリスからは一元的に出願や進路指導を行っている UCAS という組織の Mark Wilson さんをお招きし、韓国から、入試についてのルール作りや個々の大学の入試改革の支援を行っている韓国大学教育協議会から Myung Chae Jung 先生をお呼びし「大学入試サミット 2017」というシンポジウムを開催しました。そこには文部科学省の政策担当者の方や大学入試センターの大塚試験・研究統括官、さらに、3大学の入試担当の副学長の方もお招きして、いろいろ議論しました。

試行版HAOプログラム

第1回 大阪大学 HAOセミナー (Handai Admission Officer)




2017年8月23日 大阪大学 銀杏会館



13:00- 開会挨拶

13:10- 「大学入試改革の背景」
川嶋太津夫(大阪大学・教授)

14:00- 「大学入試改革の動向」
大塚雄作(大学入試センター・教授)

15:15- 「多面的・総合的入試」
林篤裕(名古屋工業大学・教授)

16:20- パネル・ディスカッション

17:20 閉会挨拶

主催：大阪大学 高等教育・入試研究開発センター (CHEGA)




第1回

大阪大学 HAO育成プログラム

(Handai Admission Officer)

「多面的・総合的評価101」








8月23日(水) 12:00-17:30

イントロダクション

川嶋太津夫(大阪大学・教授)

大塚 雄作(大学入試センター・教授)

林篤 裕(名古屋工業大学・教授)

ディスカッション

8月24日(木) 9:00-15:40

倉元 直樹(東北大学・教授)

西郡 大(佐賀大学・教授)

Jim Rawlins

(オレゴン大学・入試部長/大阪大学・特任教授)

山下 仁司(大阪大学・教授)

入試

多面的

総合的

評価

AP

面接

8月25日(金) 9:00-12:20

石倉 佑季子(大阪大学・特任講師)

グループ・リフレクション

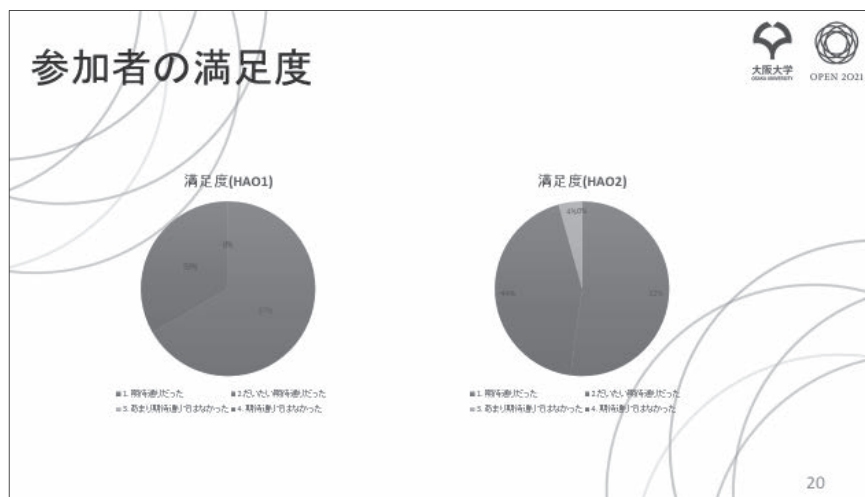
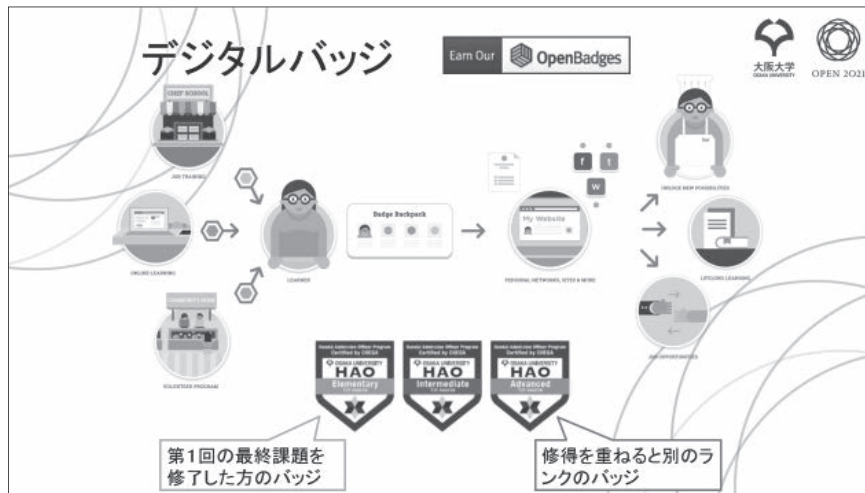
閉会

主催：大阪大学 高等教育・入試研究開発センター (CHEGA)




[illegible]

これらの HAO 育成プログラムに参加した方には、修了証書をさしあげ、さらに事後の課題をきちんと完成させた方にはデジタルバッジを授与しました。デジタルバッジというのは、クリックするとこのプログラムでどのような内容について修得したかが分かるという仕組みです。



参加者にアンケートを行いました。第1回、第2回とも非常に満足していただきました。

アンケート(今後の希望トピック)




- ・ 多面的総合的評価の評価方法。外部英語検定試験の具体的な活用法。
- ・ 面接などや書類の評価に関する実践的な内容を希望します。
- ・ 多面的・総合的入試のより具体的な内容
- ・ 記述式の段階別得点の使い方。英語4技能認定試験の使い方
- ・ 入試データの分析方法
- ・ セミナーでは、アドミッションオフィサーの役割として広報の業務に触れられることが少なく思いますので、取り上げていただきたいとおもいました。
- ・ アドミッションオフィサー(オフィス)と「入試課」の関係性
- ・

21

今後取り上げてほしいトピックを尋ねました。多面的・総合的評価の評価方法をはじめ、英語 4 技能の外部検定試験の具体的な活用法、書類や面接の評価の仕方、入試データの分析、アドミッション・オフィスと入試課との関係など、様々な要望が出てきました。

[illegible]

今年8月23日、24日には、第3回のHAO育成プログラムの開催を予定しています。今回は皆様の御要望を踏まえて、「HAO育成プログラム多面的・総合的評価201」と銘打って、より実践的なテーマとしています。仮想の大学をいくつか設定し、それぞれの教育理念に基づいてどのようにアドミッション・ポリシーを作ったらいいいのか、できたアドミッション・ポリシーに基づく選抜のためには、どのようなツールを使えばいいのかなど、かなり実践的な方法で研修をしようと考えています。

展望と課題



HAOプログラムのカリキュラム(案)



 大東大学
DAIICHI UNIVERSITY
OPEN 2017

行	科目名	科目の概要
1	基礎科目(1年次)	基礎科目(1年次)
2	基礎科目(2年次)	基礎科目(2年次)
3	基礎科目(3年次)	基礎科目(3年次)
4	基礎科目(4年次)	基礎科目(4年次)
5	基礎科目(5年次)	基礎科目(5年次)
6	基礎科目(6年次)	基礎科目(6年次)
7	基礎科目(7年次)	基礎科目(7年次)
8	基礎科目(8年次)	基礎科目(8年次)
9	基礎科目(9年次)	基礎科目(9年次)
10	基礎科目(10年次)	基礎科目(10年次)
11	基礎科目(11年次)	基礎科目(11年次)
12	基礎科目(12年次)	基礎科目(12年次)
13	基礎科目(13年次)	基礎科目(13年次)
14	基礎科目(14年次)	基礎科目(14年次)
15	基礎科目(15年次)	基礎科目(15年次)
16	基礎科目(16年次)	基礎科目(16年次)
17	基礎科目(17年次)	基礎科目(17年次)
18	基礎科目(18年次)	基礎科目(18年次)
19	基礎科目(19年次)	基礎科目(19年次)
20	基礎科目(20年次)	基礎科目(20年次)
21	基礎科目(21年次)	基礎科目(21年次)
22	基礎科目(22年次)	基礎科目(22年次)
23	基礎科目(23年次)	基礎科目(23年次)
24	基礎科目(24年次)	基礎科目(24年次)
25	基礎科目(25年次)	基礎科目(25年次)
26	基礎科目(26年次)	基礎科目(26年次)
27	基礎科目(27年次)	基礎科目(27年次)
28	基礎科目(28年次)	基礎科目(28年次)
29	基礎科目(29年次)	基礎科目(29年次)
30	基礎科目(30年次)	基礎科目(30年次)
31	基礎科目(31年次)	基礎科目(31年次)
32	基礎科目(32年次)	基礎科目(32年次)
33	基礎科目(33年次)	基礎科目(33年次)
34	基礎科目(34年次)	基礎科目(34年次)
35	基礎科目(35年次)	基礎科目(35年次)
36	基礎科目(36年次)	基礎科目(36年次)
37	基礎科目(37年次)	基礎科目(37年次)
38	基礎科目(38年次)	基礎科目(38年次)
39	基礎科目(39年次)	基礎科目(39年次)
40	基礎科目(40年次)	基礎科目(40年次)
41	基礎科目(41年次)	基礎科目(41年次)
42	基礎科目(42年次)	基礎科目(42年次)
43	基礎科目(43年次)	基礎科目(43年次)
44	基礎科目(44年次)	基礎科目(44年次)
45	基礎科目(45年次)	基礎科目(45年次)
46	基礎科目(46年次)	基礎科目(46年次)
47	基礎科目(47年次)	基礎科目(47年次)
48	基礎科目(48年次)	基礎科目(48年次)
49	基礎科目(49年次)	基礎科目(49年次)
50	基礎科目(50年次)	基礎科目(50年次)
51	基礎科目(51年次)	基礎科目(51年次)
52	基礎科目(52年次)	基礎科目(52年次)
53	基礎科目(53年次)	基礎科目(53年次)
54	基礎科目(54年次)	基礎科目(54年次)
55	基礎科目(55年次)	基礎科目(55年次)
56	基礎科目(56年次)	基礎科目(56年次)
57	基礎科目(57年次)	基礎科目(57年次)
58	基礎科目(58年次)	基礎科目(58年次)
59	基礎科目(59年次)	基礎科目(59年次)
60	基礎科目(60年次)	基礎科目(60年次)
61	基礎科目(61年次)	基礎科目(61年次)
62	基礎科目(62年次)	基礎科目(62年次)
63	基礎科目(63年次)	基礎科目(63年次)
64	基礎科目(64年次)	基礎科目(64年次)
65	基礎科目(65年次)	基礎科目(65年次)
66	基礎科目(66年次)	基礎科目(66年次)
67	基礎科目(67年次)	基礎科目(67年次)
68	基礎科目(68年次)	基礎科目(68年次)
69	基礎科目(69年次)	基礎科目(69年次)
70	基礎科目(70年次)	基礎科目(70年次)
71	基礎科目(71年次)	基礎科目(71年次)
72	基礎科目(72年次)	基礎科目(72年次)
73	基礎科目(73年次)	基礎科目(73年次)
74	基礎科目(74年次)	基礎科目(74年次)
75	基礎科目(75年次)	基礎科目(75年次)
76	基礎科目(76年次)	基礎科目(76年次)
77	基礎科目(77年次)	基礎科目(77年次)
78	基礎科目(78年次)	基礎科目(78年次)
79	基礎科目(79年次)	基礎科目(79年次)
80	基礎科目(80年次)	基礎科目(80年次)
81	基礎科目(81年次)	基礎科目(81年次)
82	基礎科目(82年次)	基礎科目(82年次)
83	基礎科目(83年次)	基礎科目(83年次)
84	基礎科目(84年次)	基礎科目(84年次)
85	基礎科目(85年次)	基礎科目(85年次)
86	基礎科目(86年次)	基礎科目(86年次)
87	基礎科目(87年次)	基礎科目(87年次)
88	基礎科目(88年次)	基礎科目(88年次)
89	基礎科目(89年次)	基礎科目(89年次)
90	基礎科目(90年次)	基礎科目(90年次)
91	基礎科目(91年次)	基礎科目(91年次)
92	基礎科目(92年次)	基礎科目(92年次)
93	基礎科目(93年次)	基礎科目(93年次)
94	基礎科目(94年次)	基礎科目(94年次)
95	基礎科目(95年次)	基礎科目(95年次)
96	基礎科目(96年次)	基礎科目(96年次)
97	基礎科目(97年次)	基礎科目(97年次)
98	基礎科目(98年次)	基礎科目(98年次)
99	基礎科目(99年次)	基礎科目(99年次)
100	基礎科目(100年次)	基礎科目(100年次)

行	科目名	科目の概要
1	基礎科目(1年次)	基礎科目(1年次)
2	基礎科目(2年次)	基礎科目(2年次)
3	基礎科目(3年次)	基礎科目(3年次)
4	基礎科目(4年次)	基礎科目(4年次

「日本の大学における『アドミッション・オフィサー』の現状と職務」に関するアンケート調査(2018.3~4)

【発送状況・回収率】

	発送数	回答数	回収率
国立	65	41	63%
公立	28	12	43%
私立	18	3	17%
不明		5	
計	111	61	59%

問1. 貴学において「アドミッション・オフィサー（入学者選抜の専門人材）」の必要性を感じていますか？ 該当するものに○をつけてください。

【回答】

	A. 非常に感じている	B. 感じている	C. 感じていない	D. 全く感じていない	計
国立	18 (44%)	23 (56%)	0 (0%)	0 (0%)	41 (100%)
公立	3 (25%)	5 (42%)	4 (33%)	0 (0%)	12 (100%)
私立	0 (0%)	1 (33%)	2 (67%)	0 (0%)	3 (100%)
不明	1 (20%)	4 (80%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (100%)
計	22 (36%)	33 (54%)	6 (10%)	0 (0%)	61 (100%)

32

問 2. 現在、貴学において「アドミッション・オフィサー（入学者選抜の専門人材）」という職名の方はいらっしゃるでしょうか。該当するものに○をつけてください。

【回答】

	A. いる	B. 「アドミッション・オフィサー」という職名ではないが、入学者選抜の専門人材の職種がある	C. 今後雇用予定である	D. いない	計
国立	8 (20%)	16 (39%)	0 (0%)	17 (41%)	41 (100%)
公立	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	12 (100%)	12 (100%)
私立	1 (33%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (67%)	3 (100%)
不明	1 (20%)	1 (20%)	0 (0%)	3 (60%)	5 (100%)
計	10 (16%)	17 (28%)	0 (0%)	34 (56%)	61 (100%)

B. 「アドミッション・オフィサー」という職名ではないが、入学者選抜の専門人材の職種がある
その職名をご記入下さい

- ・入学センター教員
- ・特任准教授（兼たし、平成30年3月末退職。後任者を現在公募中。）
- ・教育・学生支援機関アドミッションセンター専任教員
- ・教員（アドミッションセンター専任）
- ・なし
- ・大学教育イノベーションセンター アドミッション部門 教員
- ・アドミッションセンター教員
- ・准教授（所属：アドミッションセンター）、特任准教授（所属：アドミッションセンター）
- ・アドミッションセンター教員
- ・総合教育センターアドミッション部門 課長（准教授）、特任講師、特任研究員
- ・アドミッションセンター 准教授
- ・高等教育のセンター専任教員
- ・アドミッションセンター准教授
- ・教授、准教授、講師、助教、特任教授
- ・特任研究員

入学者選抜の専門人材と位置付けられている方はどれくらいいますかとお聞きしましたら、「アドミッション・オフィサーがいる」が16%、「名称は違うけれども同じような職種の方がいる」が28%、「いない」が56%でした。ただ、「どのような職名ですか」という質問からは、アドミッション・オフィサーという名称に限らず、様々な職名の方々が入学者選抜に関する業務に携わっていることが分かりました。

例 6. 現在「アドミッション・オフィサー（入学者選抜の専門人材）」が貴学にいない理由と、いないことで入学者選抜に関して何か制約が及ぼされているかを記入ください。

【回答】

いない理由

- 選抜は教員の役割になっているため
- 学内に適任者がいないため
- 予算不足、体制による
- 特になし
- 入試選抜にかかる業務を学内の入試委員会が対応しているため
- 雇用の費用がないこと、能力として求める基準が不明確であるため
- 近い職種の教員がいるため
- 人材がいない、人件費がない
- 現状においては AO 入試等 アドミッションオフィスが職務的に関わるような入試を実施していないため
- 専門人材を雇用する予算がないため
- 予算がない。アドミッション・オフィサーを育てる意思が経営層にない
- 小規模な大学では教員数が少なく、専門人材を確保するための余裕がない
- 予算的負担と組織体制的負担
- 必要性を本格的に検討していない
- アドミッション・オフィスなど入学者選抜に特化した組織がない
- 人員に余裕が狭いため
- 人件費の確保が困難
- 配置について議論されたことがないため
- 予算の都合上、専門の教員、もしくは職員を置くことができない
- 予算上の問題
- アドミッション・オフィサーの必要性を認識しているが、大学の組織として議論が進んでいない

● アドミッションセンター系設置構想中との為、アドミッション・オフィサーの雇用については未定

● 財政上の理由

● 事務方と教員が連携し、マクロとミクロの観点から大学入試選抜業務を実施している。

● 1) 入学者選抜組織が設立して存在していないこと
2) 入試の位置（組織）が、全体的に認識されていないこと
3) 予算と、考えられる。

● 設置以来、正規職員は全員設置者（市）からの経費となっている。

● 財政面での雇用が困難なため

● 予算制約がきびしく、アドミッション・オフィサーといった専門人材の雇用ができない

● AO 入試や推薦入試が学部ごとに設立した形式で行われている。

● 全学の入学試験委員会での情報交換と企画・方針の審議で代用。

● 全学の入学試験委員会での情報交換と企画・方針の審議で代用。

● アドミッションセンター及び入試選抜の職員で賄われているから。

● 担当の業務を長年にわたり、入学試験や入学者選抜研究の関係の委員会や入試担当事務部門等で処理・対応してきて、特に大きな支障がなかったという経緯や実績等から、その必要性について真摯に議論されたことがなかった。

アドミッション・オフィサーがいない大学にその理由を聞きましたら、「教員以外のスタッフは入学者選抜に関わらないことになっている」とか、「適任者がいない」、「予算がない」、「人員に余裕がない」、また、「人件費の確保が困難」などという非常に切実な理由が挙げられていました。

■アドミッション・オフィサーの職務権限についてはまだまだ関係者の間での合意形成ができていないことです。／私自身も「先生はアドミッション・オフィサーなんですか」といつも周りから聞かれますし、自問自答もしています。

アドミッション・オフィサーにどのような業務内容を期待しているかを聞きましたら、やはりアメリカとは異なり、志願者の評価と選抜は教員の仕事という意識からか、それ以外の入試広報や入試改革の企画・立案、さらにはデータ分析といったところが期待される仕事内容となっています。

問7.「アドミッション・オフィサー（入学選抜の専門人材）」にどのような業務内容を期待しますか？

【回答】

- 問5の運行と②入試における多面的・総合的評価への移行、③高大接続改革の運行
- 大学入試広報戦略の立案、入学者（入学試験区分別）学習動向調査調査、学部制選抜の方向性の検討等
 - ・ 学内の入試制度の見直し、アドミッションポリシーの策定にかかる発言等
 - ・ 志願者数の増加と入学者の学力向上を目的とした入試制度の周知、大学の知名度を上げ、志望度をあげるための各種説明会、講演の実施
- 入試戦略の立案
- 入試改革など、入試制度の変更への対応
- 高い専門性、知識、経験を活かし、本学の入学選抜の現状を分析・評価し、その結果を毎年、特にAO入試の選抜方法やAO入試合格者に対する入学後教育に適切に反映していくこと。
- 経年的な各種データの蓄積と分析、個人情報の取り扱い、（情報セキュリティを含む）
- 効果的な広報活動のPDCAサイクルを回すこと
- 入試分析、入試広報、入試制度の周知、入学前教育
- 今後の入試に必要となるであろう学力の3要素のうちの1つである主体性等をはかることのできる入試の構築
- 平成32年度以降実施する（平成33年度入学選抜）大学入学選抜「大学入学共通テスト」及び新たなルールによる個別選抜の見直し（入試改革）における先導的な役割を担っていただきたい。入試分析、例えば入試の得点と入学後の成績の相関の有無など
- 現在、本学の業務内容は妥当であると考え
- 入学選抜試験に係る専門的知見や、過去の本学における入学選抜試験の実施状況を解析した結果などを踏まえ、今後の入学選抜試験の改善案を検討すること、受験者の多面的・総合的評価の方策を検討すること、入学選抜試験の効果的な広報の手法を検討すること、入学選抜業務に携わる教員、事務職員と協働して、入学選抜試験の改善を推進していくこと。など、入学選抜試験の効果的な広報の手法を検討すること。

29

このような調査を踏まえて、アドミッション・オフィサーについての日本の課題をまとめてみました。

課題

- ・ アドミッション・オフィサーの「職務・権限」の合意形成ができていない（「アドミッション・オフィサー」とは誰か？）。
- ・ 現在、アドミッション・センター等のスタッフの業務、経歴、資格は多種多様。
- ・ 選抜方法の改革や企画、入試データの分析、入試広報への期待が多い（選抜そのものは教員の役割）。
→米国のアドミッション・オフィサーとは異なる役割期待
- ・ いずれにしても「財源」がない。

大阪大学 OPEN 2021

まず、アドミッション・オフィサーの職務権限についてはまだまだ関係者の間での合意形成ができていないことです。つまり、アドミッション・オフィサーとは誰なのかということです。私自身も「先生はアドミッション・オフィサーなんですか」といつも周りから聞かれますし、自問自答もしています。

次に、アドミッション・センター等のスタッフの業務、経歴、資格は非常に多種多様ということも課題です。先ほどアメリカのキャリアや学歴の例が紹介されましたが、日本はもっと多様です。

そして、アンケートでも見られたように、アドミッション・オフィサーに期待されるのは、選抜方法の改革や企画、入試データの分析、入試広報への期待が多くて、選抜そのものは教員の役割だという意識が根強いこと、つまり、米国のアドミッション・オフィサーとは異なる役割・期待が日本のアドミッション・オフィサーにはあるということです。

最後に大きな問題としては、財源不足ということです。アドミッション・オフィサーを雇用しようにもお金がないということです。

今回の入研協大会では、アドミッション・オフィサーの育成について、大阪大学も含めて3大学の事例報告をしており、現在入試センターでも検討中とお聞きしていますが、アドミッション・オフィサーに必要な能力・適性について、一つの大学で全てのコンテンツをカバーすることはできません。大学入試センターが中心となり、お互いに足りない部分を補いあうような仕組みの構築を、ぜひ進めていきたいと思っています。以上で私の報告は終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。



特集 1◎報告 3

アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会 ——その狙いとプログラム評価

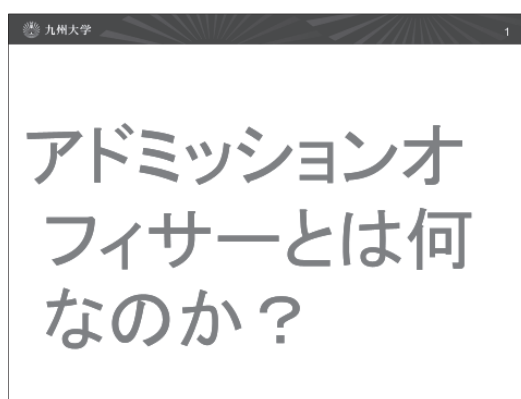
木村 拓也（九州大学准教授）



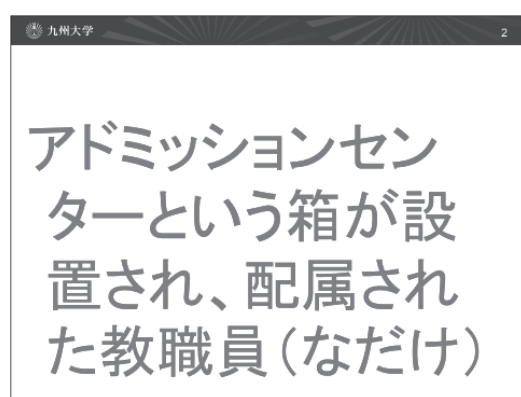
ただいま御紹介いただいた九州大学の木村と申します。先ほどから日米のアドミッション・オフィサーの違いという話題が出ていますが、皆さんは『アドミッション —— 親たちの入学試験』という映画を御存じでしょうか。プリンストン大学の女性アドミッション・オフィサーが訪問した高校の先生に恋をするという筋書きなのですが、アメリカのアドミッション・オフィサーの活動の一端が見えます。私たちのような日本のアドミッション・センターを経験した者が共感できる内容がたくさんあります。例えば、学生に「あなたの大学に行って何になるんですか」というような、きつい質問をされたりする場面なども描かれています。よろしかったら御覧ください。

今日私がお話するのは、文部科学省の教育共同利用拠点の事業として九州大学が行っているアドミッション・オフィサーの養成講座についての話です。いろいろな議論があって、「アドミッション・スペシャリスト」という言葉を使っています。教員・職員を問わずアドミッションに関してスペシャリストになりたいと思

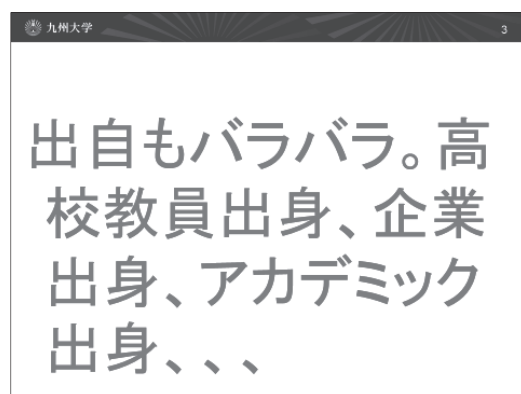
っている人たちの役に立つようなものにしたいと思っています。



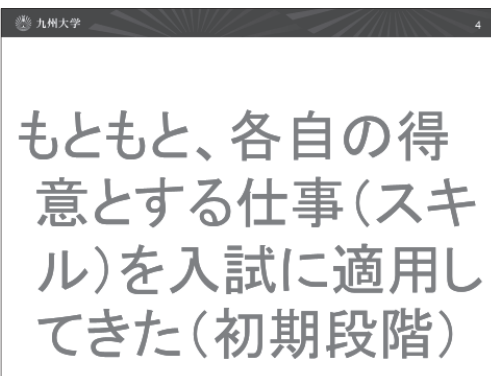
そもそもアドミッション・オフィサーとは何者でしょう。



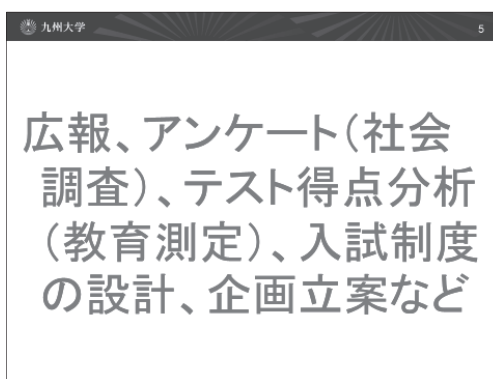
単にアドミッション・センターという箱の中に、置かれた教職員のことをアドミッション・オフィサーと呼んでいたというのが、最初の段階だろうと思います。



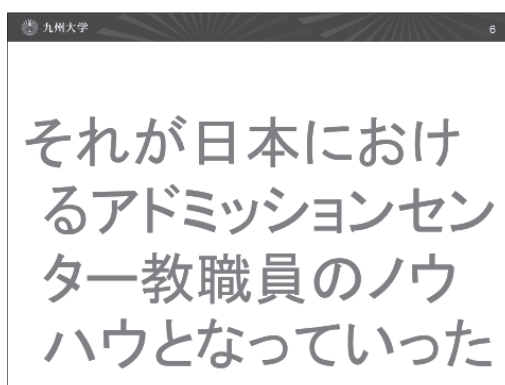
その出自も高校の先生だった方、企業から来られた方、博士号を持っている人など、様々です。



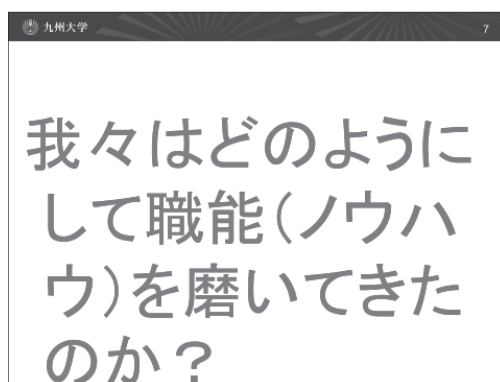
恐らく最初期の 2000 年に筑波大学，東北大学，九州大学にアドミッション・センターができたときは，アドミッション・オフィサーの役目もノウハウも今以上に不透明で，そこに配置された人たちが，もともと各自が得意としていた仕事やスキルを入試に適用してアドミッション・オフィサーなるものを自分たちの仕事にしていっていったのではないかと思います。



それは，広報の経験であったり，アンケート（社会調査）のテクニックであったり，テストの得点分析であったり，様々な入試制度の設計，企画立案などのスキルだと思います。それらを駆使して，様々な経験をしていくなかでグッドプラクティスがなされて，



恐らく帰納法的に、日本におけるアドミッション・センター教職員としてのノウハウになっていったのではないかと思います。



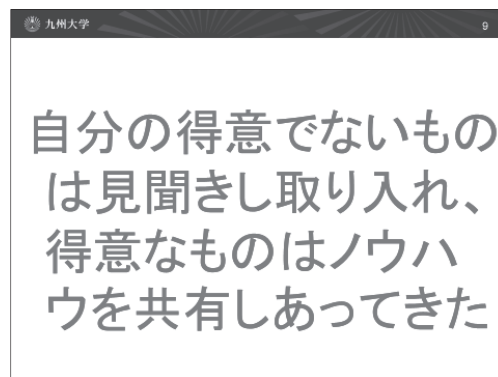
私自身は、アドミッション・オフィサーとし8年間やってきたのですが、どのようにしてノウハウを磨いてきたのか思い起こしてみますと、



一つはアドミッション・センターの教員同士の交流です。私はこれが自分のアドミッション・オフィサーとしての職能を上げるのに一番役に立ったと思っています。いろいろな先生方のグッドプラクティスを拝見し、このプレゼンはうまいな、こういう方法は取り入れたいななどと考えながらやっていった昔の自分を思い出します。

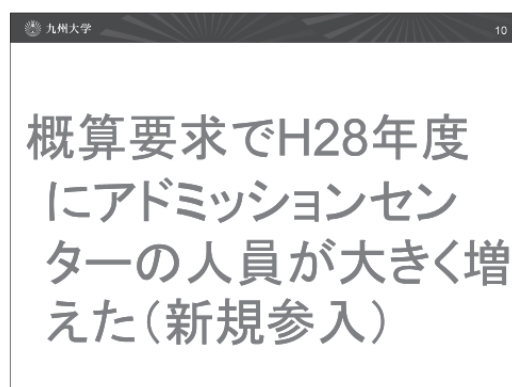
■一つはアドミッション・センターの教員同士の交流です。私はこれが自分のアドミッション・オフィサーとしての職能を上げるのに一番役に立ったと思っています。

ときには、お互いの大学のプレゼンのスライドを見せ合って、品評会をやったこともあります。各大学や各人が独自に作り上げたものを共有しながら作っていたというのがまさしく実態ではないかと思います。

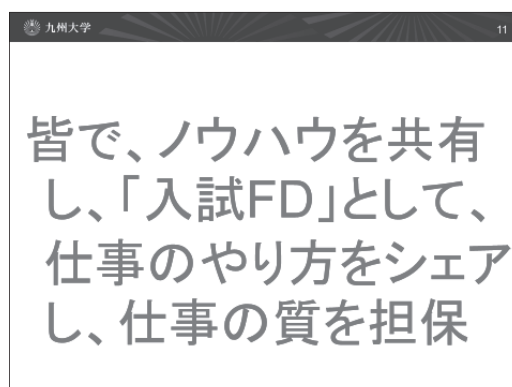


自分が不得意なものについては他の人からノウハウを学び、自分の大学にどう適用するかということを四六時中考えたりしていたのが、懐かしい思い出です。

ノウハウといっても、広報の方法やプレゼンの技術だけではありません。例えば、入試課長とうまく付き合うコツもあるでしょうし、大学の上層部を説得したり、同僚の先生に自分たちの考え方を理解してもらうためにも上手なやり方があると思います。私自身は、そういったノウハウを教科書からではなく、いろいろな先生たちの実践から教わってきたわけです。



御存じのとおり、平成 28 年度の概算要求では、アドミッション・センターの人員採用関係がずいぶん増えたようで、



そうなってくると、入試のFDのようなものを通じて、新規参入の方も含めて皆でノウハウを共有し、仕事の質を担保していかなければならないと思います。

九州大学	12
2015年6月大学教育学会(長崎大会)にて山本、木村で構想	
2015年度拠点申請見送り	
2016年度拠点申請→3年間認定	
2016年12月ループリック(カリキュラム案)作成	
2017年3月1回目開始	

これまでの現実の経緯としては、2015年6月に長崎大学でありました大学教育学会で山本・木村が入試FDのようなものの必要について話していきまして、2016年度には文科省の共同利用拠点の申請が3年間認定をされ、いま3年目を迎えています。そのプログラムを始める前の2016年12月に、後で御紹介しますが、ループリック・カリキュラムを作成して、2017年3月に1回目のアドミッション・スペシャリスト研修会を開催しました。

九州大学

13

文部科学省教育共同利用拠点事業 九州大学 次世代型大学教育開発拠点(2016～)の概要

- ・科目の壁を越えて、科学の基礎的な観点や共通する方法論を基盤とした授業開発や教育改善を推し進める基幹教育院の組織文化を活かした、リベラルサイエンスの取組を行う
- ・大学院生や新任教員等に関しては、教育に関する標準的スキル開発のFDを行う
- ・大学運営において必須とされる専門人材養成プログラムの開発と研修を行う

リベラルサイエンス教育開発

- ・STEM教育の観点を基盤とした新たな授業開発と文系分野科目への展開
- ・担当:野瀬健

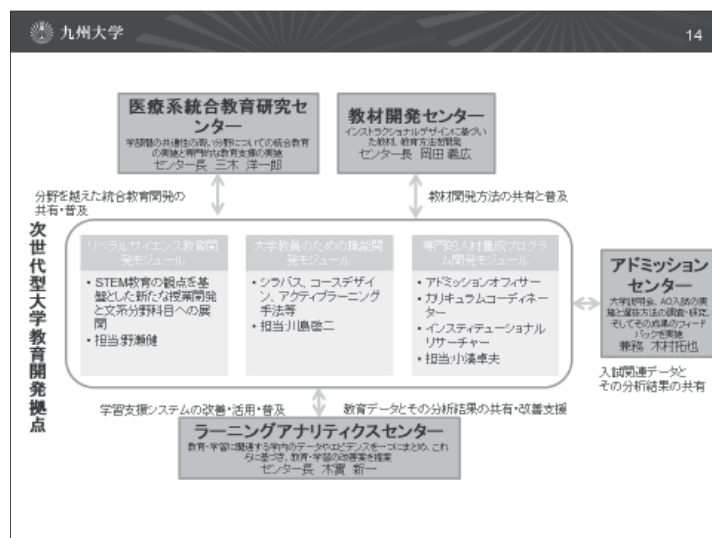
大学教員に求められる標準的スキル開発

- ・シラバス、コースデザイン、アクティブラーニング手法等
- ・担当:川島啓二

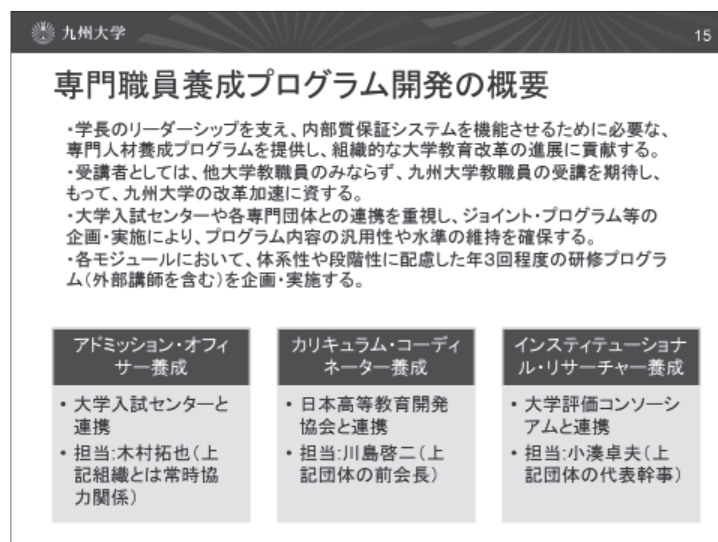
専門人材養成プログラム開発

- ・アドミッション・オフィサー
- ・カリキュラムコーディネーター
- ・インスティテューショナルリサーチャー
- ・担当:小湊卓夫

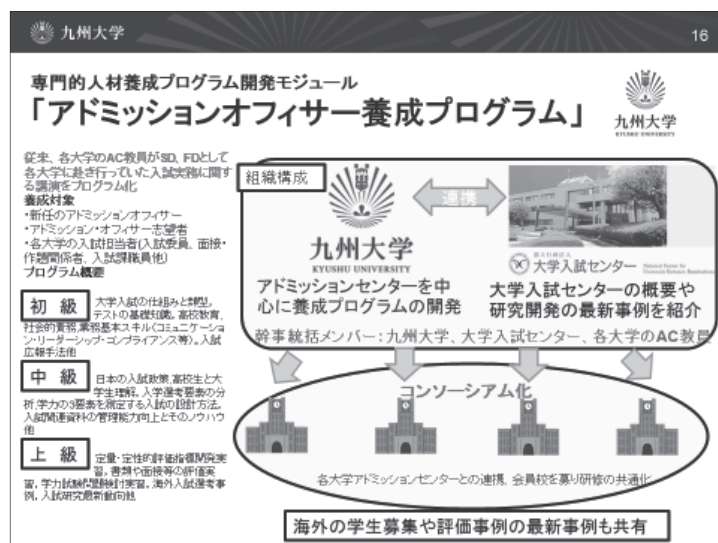
このスライドは文科省の共同利用拠点に申請したときのプレゼンの資料です。皆さんから見て一番右にある専門人材養成プログラムの箱の中に、カリキュラムコーディネーター、インスティテューショナルリサーチャーと共にアドミッション・オフィサーの項目を立てていただき、共同利用拠点事業のFDの一つとしてこの研修もやってきました。



これは当時の関係者の分担です。私はアドミッション・センターの兼務でした。



専門職育成プログラム開発の概要ということで、左の箱がアドミッション・オフィサー養成です。大学入試センターの大塚先生にお願いし、毎年の養成講座には、入試センターからお一人講師を派遣していただけるよう協力をお願いしました。我々は、このように当初から、入試センターとの連携と協力ということを心掛けてきたわけです。



また、我々はコンテンツを作りますので、皆さんの大学等々で必要なコンテンツがあれば講演に伺ったり、一緒にFDをしたりということも考えています。当初文科省に出した案の中には、将来的にはコンソーシアムのようなものを目指したいという希望も書かせていただいた次第です。

九州大学 17

アドミッションオフィサー養成講座 運営委員

木村拓也 (九州大) 代表	山本以和子 (京都工繊大)	西郡大 (佐賀大)	立脇洋介 (九州大)
---------------------	------------------	--------------	---------------






アドミッション・オフィサー養成講座の運営は、私と京都工芸繊維大学の山本以和子先生、佐賀大学の西郡大先生、九州大学の立脇洋介先生の4人で進めています。➡

九州大学
20

大学コンソーシアム京都 第15回高大連携教育フォーラム

第15回高大連携教育フォーラム

いま育成すべき力は何かをともに考える ～高等学校・大学の役割～

日 時 ▶ 2017年12月9日 9:30～17:15 (受付9:00より)

会 場 ▶ キャンパスプラザ京都

参加費 ▶ 京都府内の高等学校・大学関係者：1,000円
上記以外の方(京都府内企業関係者含む)：2,000円
※[レジュメ・資料集][報告集]を含みます。

出張アドミッションオフィサー養成講座
特別分科会①「アドミッション専門人材の育成」
講義1 アドミッション・オフィサー入門
講義2 総合的・多面的評価の理論と実践

それと、もう一つ大きな企画としては、我々は他の大学でもFDができるように、あるいは他の地域でも使えるようなコンテンツを作っておりますので、その一つの試みとして、「大学コンソーシアム京都」の第15回高大連携教育フォーラムで出張アドミッション・オフィサー養成講座というものを行いました。これは第1回のアドミッション・スペシャリスト能力開発研修会から二つの講演内容を京都で再演したのですが、今年もまた去年の内容を利用してやらせていただこうと考えています。

九州大学
21

参加者の内訳

	大学教員	大学職員	高校関係者	企業関係者	その他 (学生など)
第1回 (N=61)	32(52.5%)	19(31.1%)	8(13.1%)	2(3.3%)	0(0.0%)
コンソ京都 (N=37)	9(24.3%)	16(43.2%)	7(18.9%)	2(5.4%)	3(8.1%)
日米韓 (N=39)	21(53.8%)	12(30.8%)	2(5.1%)	2(5.1%)	2(5.1%)
第2回 (N=97)	53(54.6%)	31(32.0%)	13(13.4%)	0(0.0%)	0(0.0%)
合計 (N=234)	115(49.1%)	78(33.3%)	30(12.8%)	6(2.6%)	5(2.1%)

第2回には、情報交換会も開催し、48名が参加

ところで、以上のような企画の参加者の内訳を集計して驚いたのは、アドミッション・センターに所属する大学教員だけではなくて、多くの大学職員の方に来ていただいているということでした。

本日の参加者もアドミッション・センター担当の職員の方だけではなく、一般

の入試課の事務職員の方々もたくさんいらしています。

■入試課の事務職員の方々とアドミッション・オフィサーは車の両輪のように協力して仕事をしていかなければならないものだと思います。

アドミッション・オフィサー単独では良い仕事できません。入試課の事務職員の方々とアドミッション・オフィサーは車の両輪のように協力して仕事をしていかなければならないものだと思います。入試課長さんだけではなく、たくさん入試課の職員の方々に来ていただいて、アドミッション・センターの役割、アドミッション・センターの教員はどういうことをやっているのか、あるいはどういうことを考えているのかということを知っていただけたことは、我々にとって非常に大きな成果だったと思っています。

その他、高校関係者や企業の方の中には、将来アドミッション・オフィサーになりたいからこの講座に参加したという方もいらっしゃいました。また、大学入試改革に興味があるという方もいらっしゃいました。

第2回目にはやはり参加者同士のノウハウの交換、そして横のつながりという人脈を構築するために、情報交換会を併せて開催しました。約100名の参加者の半数の方に御参加いただきました。

研修会に当たりまして、運営委員で話し合いこのようなループリック案を作成しました。入試の仕事をしていくには、やはり様々な素養が必要になってきます。我々が議論して書き出しただけでも、この程度は必要なのではないかということになりました。

九州大学		22
研修会のループリック		
分類	Level	達成目標
制度・政策	初級	日本における大学入試に関わる制度や政策に関する基本事項を理解できる。
	中級	国外の大学入試に関わる制度や政策の特徴を理解し、日本の制度と比較して理解できる。
社会責務・倫理	初級	アドミッション・オフィサーとしての社会的責務や倫理に関する基本事項を理解し、実践することができる。
	中級	中等教育の仕組みや高校生の基本的な行動を理解できる。
高校生・高校教育	中級	高等学校のカリキュラムや高校生の進路選択の傾向について理解できる。
	上級	高等学校の進路指導の考え方や特徴を理解し、高校生の進路選択や受験行動を考察することができる。
大学生・教育	初級	高等教育の仕組みや大学生の実態を理解する。
	中級	中等教育と高等教育の教育的な接続についての意義や課題点を理解できる。

九州大学			23
分類	Level	達成目標	
統計・テスト理論	初級	統計やテスト理論に関する基本的な事項を理解できる。	
	中級	分析ソフトを利用して統計的な処理や分析結果の解釈ができる。	
	上級	多変量解析や項目反応理論など高度な統計手法を用いたデータの分析ができる。	
評価技法	初級	大学入試における基本的な評価技法の特徴を理解し、実際の適用場面を想定できる。	
	中級	各評価技法の効果検証に関する方法を理解し、実践できる。	
	上級	複数の評価技法を組み合わせて多面的な評価を行うための具体的な提案ができる。	
追跡調査法	初級	追跡調査の意義と基本的な考え方を理解できる。	
	中級	追跡調査の基本的な技法の理解と実践ができる。	
	上級	具体的な事例に対して、最適な追跡調査を選択し、分析結果の解釈と具体的な提案ができる。	
社会調査法	初級	社会調査の基本的な技法を理解することができる。	
	中級	質問紙調査や聞き取り調査などの具体的な技法を活用することができる。	
	上級	調査によって得られたデータを分析し、報告書としてまとめることができる。	
コミュニケーション	初級	アドミッション業務において重要なコミュニケーション場面を想定することができる。	
	中級	アドミッション業務の各場面において、適切なコミュニケーションを行うことができる。	
	上級	広報活動において、相手を惹きつけることができるような魅力的なコミュニケーションを展開できる。	
入試企画	初級	企画立案のために必要な情報を収集し、課題点を整理することができる。	
	中級	整理した情報をもとに、具体案を策定することができる。	
	上級	策定案を実現するために必要な体制を整えたり、建設的な議論を展開できるような提案ができる。	

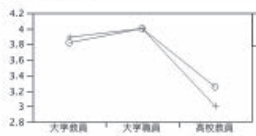
九州大学			24
分類	Level	達成目標	
入試戦略・マーケティング企画	初級	戦略策定のために必要な情報を収集し、課題点を整理することができる。	
	中級	整理した情報をもとに、具体案を策定することができる。	
	上級	策定案を実現するために必要な体制を整えたり、建設的な議論を展開できるような提案ができる。	
高大連携・高大移行企画	初級	高大連携活動の目的や種類、その特徴を理解できる。	
	中級	高大連携活動プログラムの具体的な企画ができる。	
	上級	高大連携・移行に関する企画を実現するために必要な体制を整えたり、建設的な議論を展開できるような提案ができる。	
グローバル戦略	初級	海外からの学生獲得に関する基本的な仕組みを理解できる。	
	中級	大学におけるグローバル戦略の事例を知っている。	

各人の出自により知識の濃淡がありますから、それを埋めていくことがやはり研修には必要だろうと思います。高校に関すること、社会的な責任、そもそもの大学生の在り方、もちろん評価技法やテスト理論、アンケート等の社会調査法の技法、統計学などの知識も必要です。それ以外にも、あるいは、高校訪問の際に高校の先生方のお気持ちをつかむスキルや、どういう観点で入試の企画を立てていけばいいのか、最近ですと国際的な入試の設計の仕方、マーケティング、高大接続をはじめ教育事情等々知っておくべきことがらは、大変多岐に及びました。我々はこういった項目について一つ一つコンテンツを作っていこうとしているわけです。

第1回目の研修会では、佐賀大学の西郡先生が「アドミッション・オフィサー入門」という題で講演をされたのですが、感想の中に、アドミッション・オフィサーの仕事の領域の広さにびっくりしましたというものがありました。➡

九州大学 25

アドミッションオフィサー入門



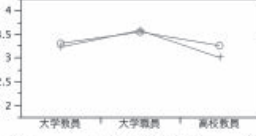
要因	パラメータ数	自由度	平方和	F値	p値(Prob>F)
新人度合い	1	1	0.0192283	0.2290	0.6350
職種	2	2	2.0861552	12.4204	<.0001*
新人度合い*職種	2	2	0.0725630	0.4320	0.6523

職種で主効果が見られる(5%水準)

(感想例)
 国立大学のアドミッション・オフィス付の先生がカバーされている領域の幅広さに驚きました。

九州大学 26

高大接続概論



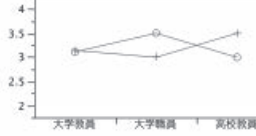
要因	パラメータ数	自由度	平方和	F値	p値(Prob>F)
新人度合い	1	1	0.0517067	0.1280	0.7225
職種	2	2	1.0325880	1.2781	0.2903
新人度合い*職種	2	2	0.0662431	0.0820	0.9214

(感想例)
 「高大接続」「高大連携」など用語の正確な使い方は、盲点だったので勉強になりました。

山本以和子先生からは、「高大接続概論」というタイトルで、「高大接続と高大連携の言葉の意味の違い」というものをきちんと理解して皆さんは仕事をされていますか」という趣旨のお話がありました。

九州大学 27

初等統計学—Excelでやってみる入試データ分析



要因	パラメータ数	自由度	平方和	F値	p値(Prob>F)
新人度合い	1	1	0.0007443	0.0021	0.9633
職種	2	2	0.1327481	0.1915	0.8267
新人度合い*職種	2	2	1.0926638	1.5761	0.2229

(感想例)
 PPTのスライドのわかりやすさと実習の組み合わせだったので、統計に対する理解が深まりました。

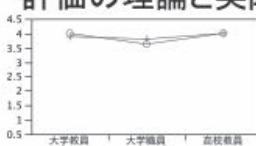
また、統計学に関する知識も必要だということで、「初等統計学－Excel でやってみる入試データ分析」という授業もやりましたし、



九州大学

28

総合的かつ多面的な 評価の理論と実際




要因	パラメータ数	自由度	平方和	F値	p値(Prob>F)
新人度合い	1	1	0.00300054	0.0100	0.9208
職階	2	2	0.49546918	0.8289	0.4457
新人度合い*職階	2	2	0.15532745	0.2599	0.7728

(感想例)

「受講者にとって役に立つ研修にしたい」という熱意が伝わる素晴らしいご講演でした。学術的な理論に加えて、入試の最前線における多数の実践例に裏打ちされたお話は大変迫力があり勉強になりました。

■アドミッション・センターの職能として一つ重要なのは、自分の大学だけではなく他大学の入試方法について情報を収集しており、それを学部先生に適切に提供できる能力だと思いますので、／

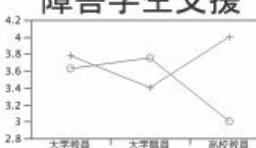
私は、総合的かつ多面的な評価について、実際の入試での事例を紹介いたしました。アドミッション・センターの職能として一つ重要なのは、自分の大学だけではなく他大学の入試方法について情報を収集しており、それを学部先生に適切に提供できる能力だと思いますので、そのような話をしたわけです。



九州大学

29

大学入試における 障害学生支援

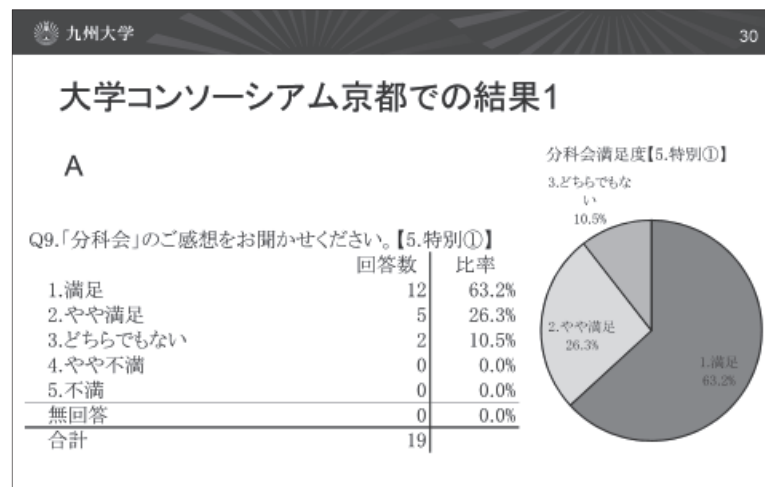



要因	パラメータ数	自由度	平方和	F値	p値(Prob>F)
新人度合い	1	1	0.29479387	1.2601	0.2732
職階	2	2	0.15338040	0.3278	0.7238
新人度合い*職階	2	2	0.99742610	2.1318	0.1415

(感想例)

本学では障がい学生支援が本格的になってきており、全国平均より高めの割合の学生が合理的配慮の対象になっています。入試の段階での配慮は新しいAPに入れるようにしましたが、学部への情報提供が充分かはわかりません。講演内容をふまえて学内に理解を求めていきたいと思ひます。

大学入試センター（当時）の立脇洋介先生からは、大学入試における障害学生支援についてのお話を伺いました。



九州大学 31

大学コンソーシアム京都での結果2

■特別分科会①
満足度(5)=満足した

番号	所属	満足度	コメント
1	高校教員	5	アドミッションについてこのように実証的なデータ分析まで含めた内容を知る機会にはなかったので、大変参考になった。
2	大学教員	5	アドミッション業務が、“科学”をより求めるものであることを、再認しました。
3	大学職員	5	今後の業務に非常に役立ったため
4	大学職員	5	事例が多く盛り込まれ参考になった
5	大学教員	5	実用的なお話がたくさんきけてとても良かったです。
6	高校教員	5	大学入試にかかわる業務全般を包括的に見ることができました。生徒を送り出している立場として大変興味深かったです。
7	大学職員	5	大変貴重なお話どうもありがとうございました。
8	大学職員	5	入試の運営や採点に関して具体的な事例がきけたこと

満足度(4)=やや満足した

番号	所属	満足度	コメント
1	大学職員	4	今在で入試部門に関わったことがなかったため、とても興味深い内容でした。とくに入試の採点基準や採点方法の設定については様々なデータ分析ができると感じました。

満足度(3)=普通

番号	所属	満足度	コメント
1	高校教員	3	とても興味深かったが、大学職員対象だったようでスミマセン。
2	大学職員	3	前半:概論としては解るが使えない 後半:事例が多くわかりやすかった 内容的に終日一日分けてゆくりやわたい。 通じて、「井分散」やってみます

こちらは、大学コンソーシアム京都でのアンケートの結果です。「アドミッション業務が科学的な、学問的な背景を持っているきちんとしたものなんだということを確認しました」という感想がありました。



九州大学

32

日米韓のアドミッション・スペシャリスト養成講座の現在

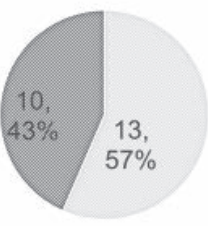
(感想例)

- ・韓国の入学査定官制度については大変参考になりました。(あまりに制度が異なり、業務の中で使えるかは分かりませんが)
- ・米国の例では、AOにカウンセリング技術研修があるという点はこれからのAOが身につけていくべき能力だろうと思い、今後勉強していこうと思いました。
- ・山本先生の総括では、学部・高校の先生方とAO担当者の信頼関係構築の重要性を再認識できました。これからのキャリアプランニングについても、考えていきたいと思います。
- ・木村先生の最後のコメントも改めて、AO入試の存在意義を考えさせられました。



シンポジウムの満足度

■ 満足 ■ 概ね満足



満足度	人数	割合
満足	10	43%
概ね満足	13	57%

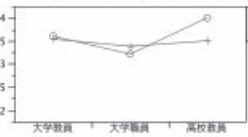
「日米韓のアドミッション・スペシャリスト養成講座の現在」では、韓国の入学査定官制度を支える養成講座がどのような内容なのか情報提供していただきました。



九州大学

33

戦略的アドミッションマーケティング入門



経験年数2年以上
経験年数2年未満

要因	パラメータ数	自由度	平方和	F値	p値(Prob>F)
新人度合い	1	1	0.1154812	0.4086	0.5257
職種	2	2	1.2920243	2.2860	0.1126
新人度合い×職種	2	2	0.4602340	0.8143	0.4490



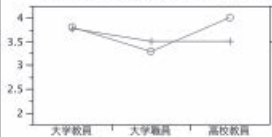
(感想例)

“戦略”をたてて、広報してくれと言われても、どのようにすればよいのか、具体的な事がよくわからずやっていることが多かったです。参考にして、次に生かしていきたいと思います。

第2回目のアドミッション・スペシャリスト能力開発研修会では、広報活動を中心にやりました。まず、山本以和子先生から「戦略的アドミッションマーケティング入門」ということで、マーケティング理論を入試に応用するとどのようなか、どのような考え方ができるかということ、ワークを含めながらやっていただきました。➡

九州大学 34

高校訪問における戦略的な入試広報について



要因	パラメータ数	自由度	平方和	F値	p値(Prob>F)
新人度合い	1	1	0.0758928	0.2519	0.6180
職種	2	2	2.0427172	3.3896	0.0418*
新人度合い*職種	2	2	0.5267936	0.8741	0.4236

職種で主効果が見られる(5%水準)
(感想例)

来週、高校訪問の予定があるので、早速実践させていただこうと思います。初めて1人合格が出た私立校にも行きますが、学内では「1人？」と(部局に)言われ、がっかりしていたのですが、力をいただいた気持ちです。



その次に名古屋大学の永野先生から「高校訪問における戦略的な入試広報について」話していただきました。高校訪問については、日本では永野先生の右に出る人はいないと個人的に崇拝しているのですが、高校訪問のコツのようなものを教えていただきました。

九州大学 35

アドミッション・アンケートの設計



要因	パラメータ数	自由度	平方和	F値	p値(Prob>F)
新人度合い	1	1	0.10304114	0.4051	0.5277
職種2	1	1	0.00286225	0.0113	0.9160
新人度合い*職種2	1	1	0.00286225	0.0113	0.9160

(感想例)

入試の作問に役立つ項目が現在はなくなっているもので、AD部門の教員と検討(再検討)したいと思います。学部の役に立つデータの提供が生き残りに必要という危機感を持って今後もIRデータを活用していきたいと思います。



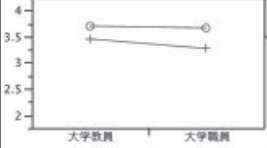
その次に、これは私が作ったコンテンツですが、「アドミッション・アンケートの設計」としてオープンキャンパス・アンケート，入学者アンケート，そこからエンロールメント・マネジメントにいて、卒業生アンケートまでつながるようなアンケートの作り方，そしてアンケートを作るときにはどういう部署と連携してうまくやっていけばいいのか，鍵となるのはこういうデータですというような話をさせていただきました。皆さんが各大学にお持ち帰りいただけるようにアンケートの具体的な質問項目も用意しました。



九州大学

36

アドミッション・オフィサー のための記述統計学



要因	パラメータ数	自由度	平方和	F値	p値(Prob>F)
新人度合い	1	1	1.1196027	3.2747	0.0779
職種2	1	1	0.1267698	0.3708	0.5460
新人度合い*職種2	1	1	0.0603797	0.1766	0.6766



職務経験年数で主効果が見られる(10%水準)

(感想例)

記述統計の話なのか、アドミッションにおいて重要となる統計の話なのか目的がややあいまいな気がしました。各手法のアドミッション業務における重要性もあわせて聞ければよかったように思います。

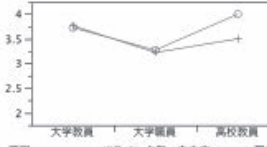
また、「アドミッション・オフィサーの記述統計学」は1年目に引き続きやりました。これについては、もう少し入試業務との関係性を話してほしかったという意見と、統計を初歩から教えていただいても良かったというような意見がありました。参加者各人の統計についての知識量に応じて感想が分かれていたように思います。



九州大学

37

センター試験の受験 動向を探ろう!



要因	パラメータ数	自由度	平方和	F値	p値(Prob>F)
新人度合い	1	1	0.1887941	0.6230	0.4344
職種	2	2	2.9043264	4.7923	0.0133*
新人度合い*職種	2	2	0.2521221	0.4160	0.6624

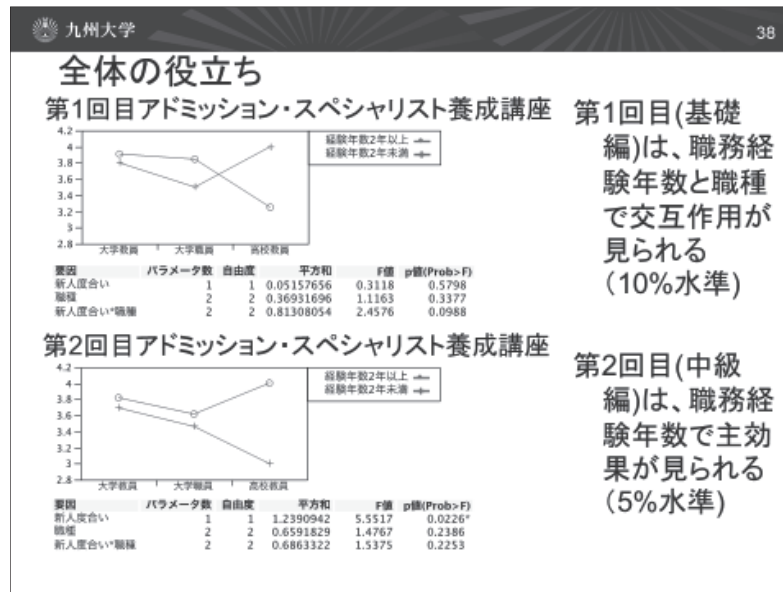


職種で主効果が見られる(5%水準)

(感想例)

他府県の動向もあわせて考えることができ非常に有意義でした。広報や入試設計の戦略を考えるために、とても大切な観点だと思いました。

そして、最後は大学入試センターの内田照久先生に、センター試験の受験者動向に関する講演をお願いしました。入試関係者はともすれば、自分の大学や高校に関するデータは見ていますが、センター試験受験者の総体的な受験動向についてはあまり御存じないと思うのですが。この講演ではじめてそのような話を聞き非常に勉強になったという感想がありました。



アンケートでは、養成講座が全体として有益であったかどうかを 1～5 点で聞きや経験年数や職域で分析しました。経験年数が 2 年以上の方が少し高く出ていましたから、経験のある人にも御満足いただけた内容になっていたのではないかと思います。

九州大学 39

まとめ

教育測定(テスト理論)の専門家＝入試の専門家ではない。

政策を読み解き、実務もこなして初めて「テストの専門家」になる。

アドミッション・オフィサー養成講座のニーズは、アドミッション・オフィス(入試課)に配属されたばかりの教職員に多かったが、意外に、経験年数が多い教職員に役立った。

どうやって学内でコネクションを作り、どういう考え方で、アドミッションの仕事を進めたら良いのか、アドミッション・オフィサー養成講座は、そのノウハウを交換する業務の羅針盤になるべきではないだろうか。

私たち、アドミッション・オフィサーが、数々の先人から教えていただいたように。→次は、皆さんが講師の番です。

以上のように、私たちは、アドミッション・オフィサーとはどのような職能を持つ必要があるのかを考え、大勢の先生方に御協力を頂きながら様々なコンテンツを作ってきました。

そういう中で私が気付いたのは、テスト理論や教育測定の素養があるだけでは入試の専門家とは言えないということです。

入試の現場では、テストのデータ分析だけではなく、広報から試験の実施業務にいたるまで様々な実務が必要です、そちらについても十分に理解していなければ

ば入試の専門家にはなれないと思います。今現在アドミッション・オフィサーとして活躍されている先生方、職員の方々も、そういう実感をお持ちなのではないかと思います。

アドミッション・オフィサー養成講座のニーズは、アドミッション・オフィスや入試課に配属されたばかりの教職員に多く、参加者も、配属1年未満の方々が非常に多かったです。ただ、アンケートを見ますと、意外に経験年数の多い教職員の方々からも、自分たちの仕事を相対化することができたとか、あるいは自分の不得意分野に気付いたというような感想もいただき、これも我々のやってきたことの成果の一つかなと思っています。

我々がアドミッション・オフィサーになった頃は、この種の養成講座はありませんでしたから、実際に御活躍されていた先輩に直接教えられてこれまでやってきていますが、そのような経験を踏まえて、今度は私たち自身がアドミッション・オフィサー養成講座を通じて組織的に、次の方たちにノウハウを伝え業務の羅針盤的な役割を果たすことが期待されていると思います。

今後も、様々な先生にお声掛けをさせていただきますので、我々と一緒にアドミッション・オフィサー養成講座のコンテンツを作っていただければありがたいと思っています。それでは、私の話は以上になります。どうも御清聴ありがとうございました。



特集 1●報告 4

アドミッション担当教職員支援セミナー—— ねらいと課題

夏目 達也（名古屋大学教授）



名古屋大学の夏目と申します。まず、私の所属している「名古屋大学高等教育研究センター」について一言触れさせていただきたいと思います。

このセンターは文字どおりに解釈しますと、高等教育の研究をするセンターということになります。もちろん高等教育についての基礎的な研究も行いますが、昨今の厳しい大学環境の中では、基礎研究だけに終始しているわけにもいきません。名古屋大学という組織に直接貢献するような応用研究もいたしますし、また、名古屋大学内のみならず全国の大学の教育の質向上を支援するために情報収集、ツール開発、セミナー提供、教材の提供などの実践活動も行ってきました。

こうした実績が評価され、平成 29 年 8 月に文部科学大臣から「質保証を担う中核教職員能力開発拠点」に認定されました。そのような流れの中で、今日お話しする「アドミッション担当教職員支援セミナー」も行なわれているわけです。

1. 背景

・名古屋大学高等教育研究センターの研究領域

- ・大学教育改善に資する研究・開発
- ・教職員の能力開発＝FD・SD
- ・上記に関連した教材の開発・提供
- ・高大接続への着目：大学教育改善の観点から

・組織改組により本部組織の一部を担う。

- ・教育基盤運営本部・高等教育システム開発部門
- ・アドミッション部門との連携

2. 概要

- ・2017年度に5回開催。
- ・主催：名古屋大学高等教育研究センター
第4回は名古屋大学高大接続研究センターと共催
- ・講師：高大接続・入学者選抜等の問題に詳しい研究者
- ・形態：講演＋質疑応答
- ・対象者：限定せず。大学入試や高大接続業務に携わる教職員、問題関心を持つ方。

「アドミッション担当教職員支援セミナー」は、2017年度に5回開催しました。主催は私どものセンターです。ただ、第4回目だけは名古屋大学高大接続研究センターと共催しました。

セミナーは高大接続・入学者選抜等の問題に詳しい研究者に講師になっていただき、講演と質疑応答が各1時間という構成です。対象者は特に限定していません。大学入試や高大接続業務に携わる教職員の方々、あるいは高大接続問題に関心のある方々であれば、誰でも参加できます。

「アドミッション担当教職員支援セミナー」の講師・講演テーマ

日 時	講 師	講演テーマ
第1回 2017年4月21日	大塚 雄作 大学入試センター・教授 林 篤裕 名古屋工業大学・教授	大学入学者選抜における共通試験の現状と課題 アドミッションセンターの役割
第2回 2017年7月21日	荒井 克弘 東北大学・大学入試センター・名誉教授	高大接続改革に何が欠けているのか
第3回 2017年9月28日	木村 拓也 九州大学人間環境学研究院・准教授	総合的且つ多目的な評価に基づく入学者選抜とその学修成果の可視化－九州大学21世紀プログラムを事例に
第4回 2017年10月2日	野口 裕之 名古屋大学名誉教授	IRTとCBTの光と影 －高大接続改革の夢か現か幻か
第5回 2018年1月19日	山本 以和子 京都工芸繊維大学アドミッションセンター・准教授	韓国の入試専門官の職務内容と養成システム

これが5回の内容です。こうして見ますと大阪大学や九州大学のプロジェクト、そして私どものプロジェクトで講師の方がずいぶん重なっているのがお分かりかと思います。そのような人材を拡大していく必要を感じながらやっているわけです。



これが、実際のセミナーの様子です。

3. ねらい

- ・高大接続や大学入試の改革が大きな政策課題に。
- ・必要な知識やスキルが十分な提供ないまま、教員・職員が職務遂行を余儀なくされている場合も少なくない。
- ・幅広い角度から関連知識を提供。職務遂行を支援する。
- ・入試関係業務の見直しに必要な視点を提供する。
 - ・入試業務の範囲：現状と課題を認識。
 - ・多様な職務と関連に配慮

セミナーの狙いは、高大接続に関連する幅広い知識を提供することです。それを通じて、入試に関わっておられる教職員の方々の職務遂行を支援しようというのが狙いです。その背景は言わずと知れたことですが、高大接続や大学入試の改革が大きな政策課題になっているにもかかわらず、ほとんどの方々が高大接続や大学入試の改革に関して、十分な知識やスキルの提供もないままに職務遂行を余儀なくされているという実情です。

本来、高大接続や大学入試は、大学の活動の根幹をなす非常に重要な活動です。しかしながら、こういう活動について大学人が本当に真剣に語りあっているのだろうかと思うわけです。この入研協なども非常に貴重な機会ではありますが、ここにいらっしゃるのは、大学全体の教職員のほんの一部に過ぎません。センター

試験の実施など、本当に多くの教職員が膨大な時間とエネルギーをつぎ込んでいる割には、そもそも入学者選抜や高大接続にはどういう目的や意味があり、両者はどう関係しているのか、そして、それが学生の発達や学習にどうつながるのかについて、あまりにも知る機会が少なすぎるのではないか、そうであるならばそこにきちんとした情報や知識を提供する機会を設けようではないか。それが私どものセミナーの狙いです。また、それと併せて具体的な入試関係業務の見直しに必要な視点も提供していきたいと考えています。

また、自分が入試に関わるようになって痛感したのは、入試というものに対する大学コミュニティの意識の未形成ということです。社会からの期待あるいは注目に比べて大学コミュニティの中で共有されている入試に対する認識は相当に小さい。そんなことでよいわけがありません。では、一体どこをどのようにすればそういう認識が改まるのか、それを考える契機にもなればというのも、このようなセミナーを始めた一つの理由です。

4. 課題

4.1 「入試担当者(アドミッション・オフィサー)」育成

- ・「入試担当者」の専門的能力の形成。
 - ・「入試担当者」の現状の調査・分析
 - ・現在の勤務条件、今後に求められる能力・資質
 - ・高大接続・入試担当の一般教職員との関係

4.2 セミナー関係

- ・セミナーの定例化
- ・内容：上記の調査に基づきニーズに対応。
- ・資金確保

4.3 情報発信

さて、このセミナーの課題ですが、大きく 4.1 から 4.4 としてまとめてみました。一つは入試担当者（アドミッション・オフィサー）の育成です。私はアドミッション・オフィサー養成講座やアドミッション・スペシャリスト養成講座や研修という言い方はなるべくしないようにしています。それはなぜかというと、簡単に言えば、大学コミュニティが全体として本気になってアドミッション・オフィサーを育てよう、あるいは雇用しよう、大切にしようと思っているかどうか、若干の疑念を持たざるを得ないという状況では、安易にアドミッション・オフィサーという言葉を使うべきではないと考えるからです。

私も、本当はアドミッション・オフィサーと言われるような専門職を育てていくことが必要だと思っていますが、そういう現実がすぐにはやっこないとするのであれば、差し当たりはアドミッションに関わらざるを得ない教職員に、まずは職務遂行に必要な知識・技能を提供していくべきではないかということです。

その一方で、アドミッション・オフィサーというか、入試担当者の専門的能力の形成の在り方についても考えていく必要があります。その前段階として入試担

当者の現状の調査・分析などもいま一度きちんと行っていく必要があるのではないかと考えています。

■大学コミュニティが全体として本気になってアドミッション・オフィサーを育てよう、あるいは雇用しよう、大切にしようと思っているかどうか、若干の疑念を持たざるを得ないという状況では、安易にアドミッション・オフィサーという言葉を使うべきではないと考えるからです。

4-2 はセミナー関係という視点からまとめてみました。まずは、セミナーを定例化していく必要があるだろうと考えています。また、先ほど木村先生が必要なコンテンツについてかなりの項目のリストを作っていたらっしゃいましたが、私が見るところ、恐らくそのリストは限りなく続いていきます。一体どこをどのように、あるいは重点的にやるべきかということが次の課題になるでしょう。しかし、重点だけに絞ったとしてもかなりの数になるはずですから、やはりこういうセミナーを数多くやっていくということも必要だろうということです。

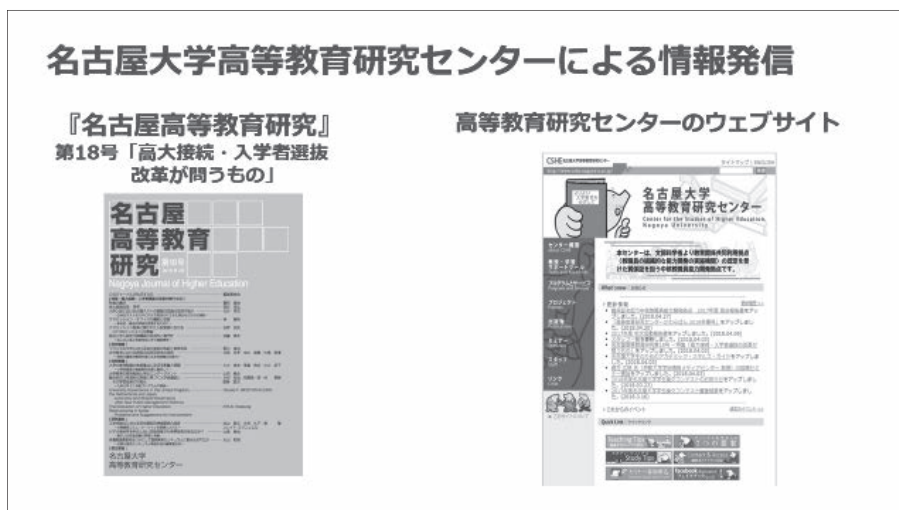
一方で、ニーズの問題もあります。誰が本当に求めているのか、どのくらい求められているのか、その優先順位はどうなのかというような問題も考えていかなければ、セミナーは続かないということです。

それともう一つ、資金確保の問題があります。現在私どものセミナーの資金は、実は私が研究代表者になってとった科研費でまかなっています。「大学入試多様化に対応した入試業務専門職化の可能性検証と養成プログラム開発」ということで科研費を頂いて研究しています。先ほどお名前を挙げさせていただきましたけれども、大塚雄作先生や林篤裕先生や金沢大学におられる吉永契一郎先生、そして、私どもの名古屋大学高等教育研究センターのスタッフと共同の研究会をやっています。そういう研究の成果を学内外に発信すること、参加者からの意見を踏まえて研究成果としての養成プログラムの改善・充実を図ること等を目的に、セミナーを開催しているわけです。

大阪大学や九州大学におかれましても拠点としてやっておられるので、予算的な裏付けがありますけれども、私どもは、本当に限られた予算の中でやっています。その科研費も今年度限りということなので、セミナーの続行も非常に難しい状況です。続けていくための枠組みを考えていかなければいけないと思っています。

課題の 4.3 は、情報発信ということです。この点も私どもはいろいろと頭を悩ませました。左側の、『名古屋高等教育研究』というのは、私ども高等教育研究センターのジャーナルです。セミナーで登壇していただいた先生に、その講演内容をベースに原稿をお作りいただき、それをこのジャーナルに掲載させていただく

という形を取っています。このジャーナルは、ウェブで PDF ファイルとしても御覧いただけます。右側は高等教育研究センターのウェブサイトです。セミナーの講師の先生方にお作りいただいた要旨をほぼそのままの形で載せています。現在は、こういったもので情報発信をしているということです



4. 課題

4.4 その他

- ・入試担当者に対する専門性の認知・処遇の改善
 - ・「入試担当者の専門性やキャリアパス等について日本では十分な検討が行われておらず」（本全体会の趣旨説明から）
- ・高大接続・大学入試の意義に関する意識向上
- ・そのための手段とは？
 - ・研修の新たな対象者
 - ・研修だけでよいのか

■本気かどうかは処遇を見れば一目瞭然です。任期付きの雇用では、当該の仕事や職がいかにか大切にと言われても、疑問に感じます。

さて、課題の最後として、4.4「その他」について若干申し上げたいと思います。3項目に分けています。まず1番目は、入試担当者に対する専門性の認知、処遇の改善という問題です。アドミッション・オフィサーと呼ぶのかどうかは別にして、各大学には、入試担当者として働いている教員や事務職員の専門性をやはりきちんと認知していただくことが必要です。それは取りも直さずきちんとした処遇をしていくということです。専門性が大事だという発言はしばしば耳にします

が、それが本気かどうかは処遇を見れば一目瞭然です。任期付きの雇用では、当該の仕事や職がいかに関わると言われても、疑問に感じます。本当に専門性が大事だと政策担当者側もお考えなら、やはりきちんとした処遇をしなければなりません。処遇が伴わなければ、専門性形成のための研修や能力開発を、我々3大学の関係者がいかに一生懸命にやってみてもなかなか定着しませんし、また、後継者もなかなか育ちにくいと思われます。研修の効果も疑問視されます。

2番目に、先ほども少し申し上げましたが、高大接続や大学入試の意義に関する大学コミュニティとしての意識向上が必要ということです。

3番目には、意識向上や専門性認知のために手段として何が必要なのかということです。本当に今日紹介されたような研修だけでいいのか、それだけでないとするなら一体何が必要なのかという問題です。

■入試担当者の専門性をきちんと認めて処遇するためには、その処遇を考える人たち、つまり、大学の中で管理的な立場にいらっしゃる先生方にこそ、こういう研修を受けていただきたいのです。

また、研修については、最前線で入試業務に従事していらっしゃる大学の教職員にはどんどん来ていただきたいのですが、それ以外の方々にもぜひ来ていただきたいと考えます。入試担当者の専門性をきちんと認めて処遇するためには、その処遇を考える人たち、つまり、大学の中で管理的な立場にいらっしゃる先生方にこそ、こういう研修を受けていただきたいのです。

少し話が長くなりましたが、様々な課題を抱えながら、試行錯誤している状況を御紹介させていただきました。私からは以上とさせていただきます。どうもありがとうございました。



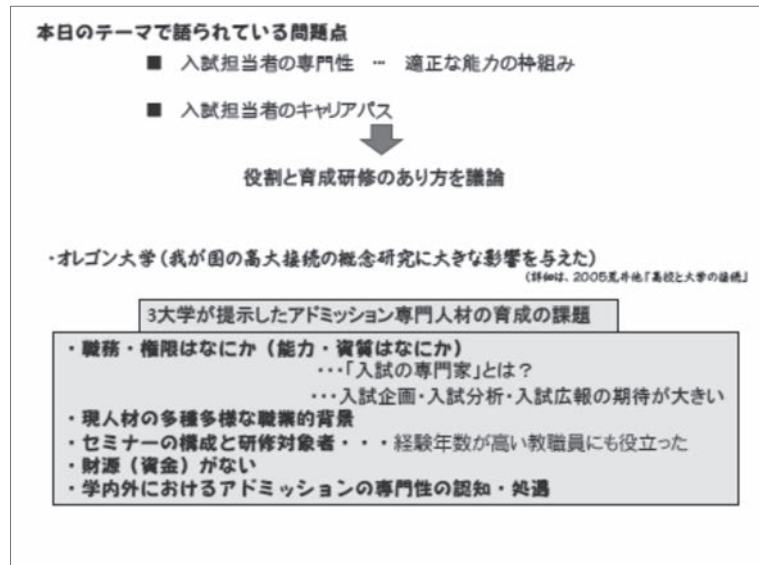
特集 1◎指定討論 1

山本 以和子（京都工芸繊維大学准教授）



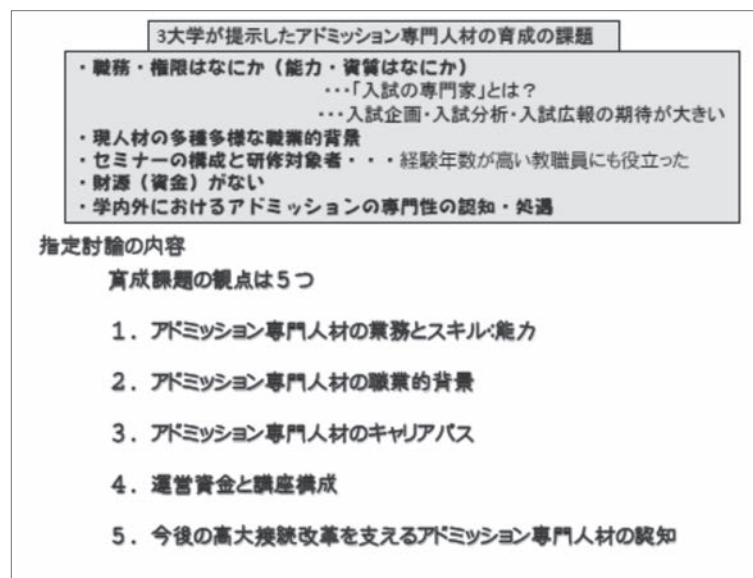
皆様、こんにちは。京都工芸繊維大学の山本です。アドミッション人材育成の研究と実際に講座を企画したということで、指定討論者に人選されたのかと思います。本日は3名の先生方からの御報告と併せて会場の皆様と現状の日本のアドミッション専門人材の課題について議論し、共有できればという思いで参りました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、本日のテーマで語られている問題点を整理しました。一つ目が「入試担当者の専門性」、二つ目は「入試担当者のキャリアパス」という点です。このアドミッション専門人材の能力開発については、3大学のほうから詳細で興味深いお話を伺ったところです。また、本日はオレゴン大学のジム・ローリンズ入試部長から、アメリカの入試担当者の役割と位置付けについて御説明を頂きました。オレゴン大学は、実は日本の高大接続研究に非常に大きな影響を与えた大学の一つです。特に我が国の90年代以降の入試課題の中で、高大接続という概念の理解を広めることに貢献されました。詳しくは2005年に玉川大学出版から出版された、荒井克弘先生たちが執筆された『高校と大学の接続—入試選抜から教育接続へ』に当時のオレゴン大学のシステムが詳しく載っていますので、入試関係者は一度御覧いただければと思います。

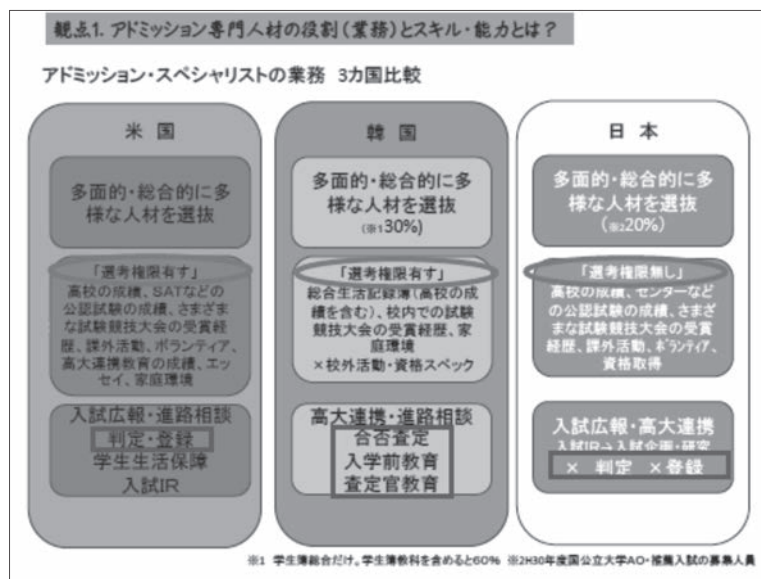


さて、そのジム・ローリンズ入試部長には後ほど日本のアドミッション・スペシャリストの現状を見てどのような感想をお持ちか、また我々の進むべき方向性の示唆を、御意見も含めてお伺いしたいと思います。

3 大学による発表によれば、アドミッション専門人材の育成の課題は次のようにまとめられるのではないかと思います。それを踏まえて議論を進めたいと思います。



まず、観点1は「アドミッション専門人材の役割とスキル・能力」です。



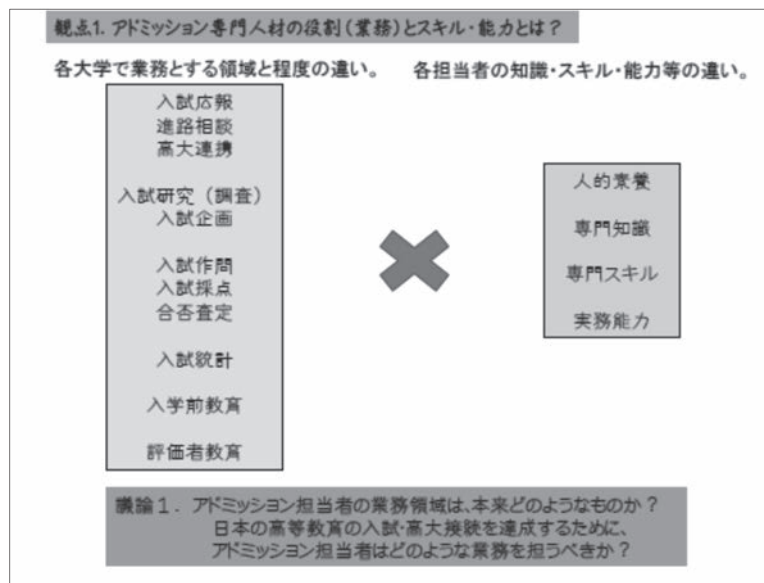
皆様に見ていただきたいのは、日米韓3か国でのアドミッション専門人材の役割の違いです。日本が米韓と大きく異なるのは太線で囲んだ部分で、多くの大学では、判定や登録に関することはアドミッション担当者はせずに、入試広報、高大連携、入試IRからの入試企画提案をします。米国の場合は、判定・登録以外にも学生生活保障、韓国では入学前教育と査定官教育の役割が特徴です。

例えば、韓国の入学査定官。。。>

<入学チームの業務>	<入学査定官チームの業務>
■入学企画担当 新入学、編入学等の入学選考開発 入学案内・募集要項・願書様式の作成 入学選考施行計画および指針策定 入試管理委員会入試計画案審議 入学奨学金案の策定 部署別分担 入学業務細部計画及び指針策定 入試関連の統計作成 ■選考管理担当 新入学、編入学の入試選抜 入試問題作成進行 入試願書の管理、保存 入試資料、成績電算処理 入試関連各種様式の開発と製作 合格者審議(電算及び査定監査) 合格者発表 入学手続き登録案内および追加合格 入試予算編成・管理 ■入学広報担当 広告・広報計画策定 各種広報物製作 対外広報活動(入学説明会、資料集配布等) 広報結果分析及びフィードバック	■選考研究パート 国内外入試制度研究 入学査定官選考の学生選抜の手続きの開発及び運用 入試選考開発計画策定 入学管理システム研究開発 ■高校連携パート 高大連携プログラム開発及び運用 入学説明会等運営 高校DB調査及び管理 中等教育政策分析及び研究 ■教育研究パート 入学生分析及び成果検証 選考情報管理 入学査定官教育プログラム及び運用 入学生追跡管理プログラム開発及び運用

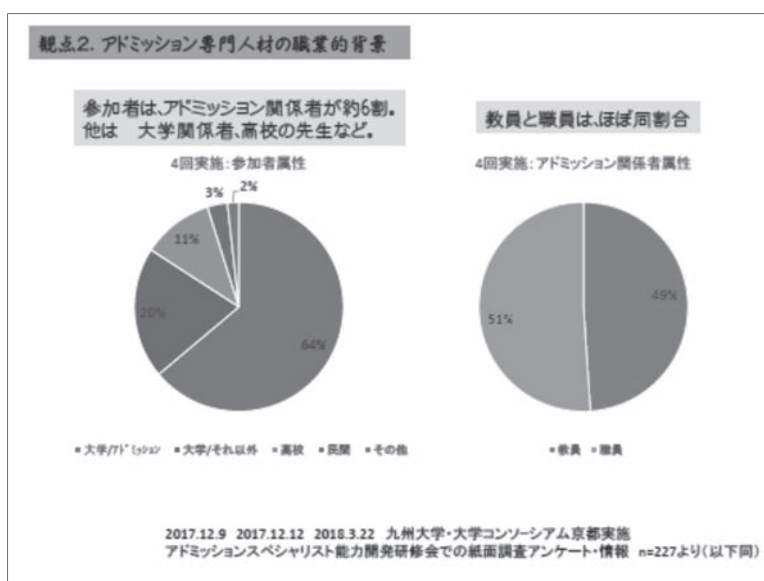
これは、私が一昨年の入研協大会でお話ししたときに提示した資料と同じものです。韓国では従来の入試課とアドミッション専門人材の業務の役割の違いも明確になっています。ここにあるように入試企画や選考管理、入学広報、これらが入学チームの役割です。アドミッション専門人材を韓国では「入学査定官」と呼

びますが、彼らの業務は選考内容やシステムの研究，接続教育，評価判定に活用するための高校連携です。それから，成果検証や評価者検証のための教育研究を担っています。

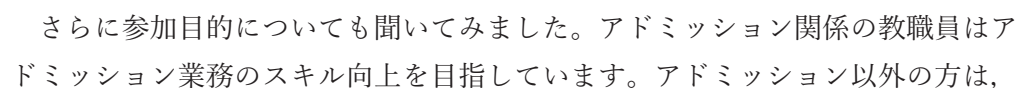
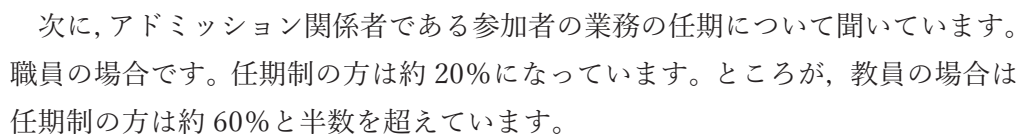


しかし、日本の場合は、大学によってアドミッション人材の業務の領域，またはその程度が違っていて，また，アドミッション担当者の知識，スキル，能力など，担当者の力量に頼っています。したがって，担当者が替わると内容も質も変わってしまうというような状況です。

そこで私のほうから掲げたい議論1です。まず一つ目は，アドミッション担当者の業務領域は本来どのようなものなのか，日本の高大接続の現場でアドミッション担当者はどのような業務を担うべきか，を提示したいと思います。



まず、研修参加者の属性です。左側を御覧ください。アドミッション関係者が約6割参加されています。その他はアドミッション以外の大学関係者、もしくは高校の先生などとなりました。右側を御覧ください。そのアドミッション関係者の中で教員と職員の割合はほぼ半半ずつでした。九州も京都もほぼ半分でした。



アドミッションに従事することを目指したいという目的でした。その他の方の参加目的は、アドミッション組織の管理者として業務内容を知りたい、学内でアドミッションの専門職を検討したいなどがありました。

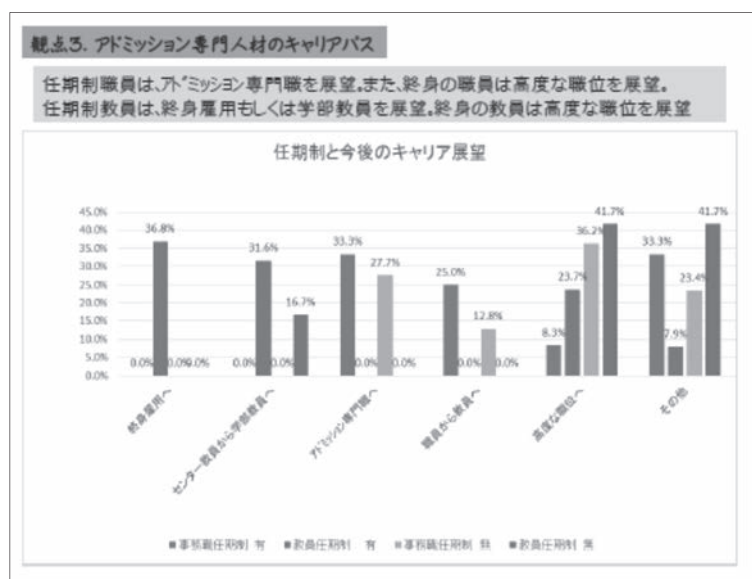
そこで、議論2です。アドミッション担当者の育成はどのような人材を対象として実施すべきかを論点として提示したいと思います。先ほど名古屋大学の夏目先生にもこのお話をさせていただきましたが、いま一度他の先生にも聞いてみたいと思います。

観点3. アドミッション専門人材のキャリアパス			
前職キャリアの代表例			
事務職員（任期制）	:	学校教員	民間企業
事務職員（任期無）	:	大学職員	民間企業
教員（任期制）	:	民間企業	学校教員 大学研究員
教員（任期無）	:	大学教員 高校教員	民間企業（教育関係・予備校）

次に、観点3のアドミッション専門人材のキャリアパスについてです。京都と九州の参加者に前職キャリアを聞いています。

アドミッション関係の部署で働いている事務職員で任期制の方の前職は学校の先生、もしくは民間企業の方です。任期がない事務職員の場合は、大学職員で他の部署から異動した方、そして民間企業からの転職の方でした。

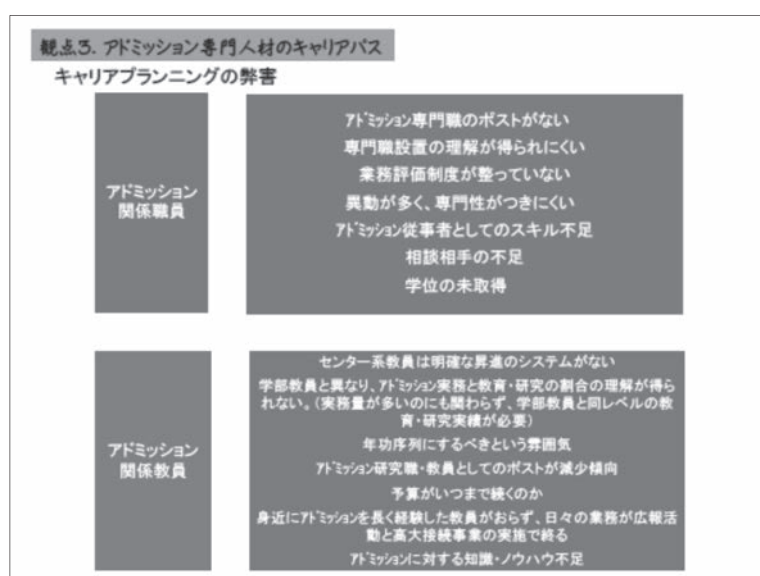
任期制の教員の前職は、民間企業、そして学校教員です。この場合の学校種は、高校の教員だけではなく、中学校や専門学校の教員も複数いらっしゃいました。そして、大学の研究員だった方です。任期のない教員の前職は、大学の教員、恐らく学部教員と兼任されていた方です。また、民間企業からの転職者は全員が教育関係か予備校の方でした。そして高校の教員といった前職の状況が分かりました。



次に、職種と任期の有無によって今後のキャリア展望に違いがあるかを調べています。職員で任期がある人はアドミSSIONの専門職になりたい、職員から教員になりたいといったことを希望していらっしゃいます。終身雇用の職員の方は今より高度な職位、もしくはアドミSSIONの専門職を希望している割合が高いという結果になりました。

教員の場合、任期のある教員は任期のない教員や学部教員を目指すという展望があります。そもそも任期のない先生方の場合には高度な職位、また学部教員を目指している割合が高い結果になっています。

そして、その他というのは、ほとんどが今のままでいいという方々です。

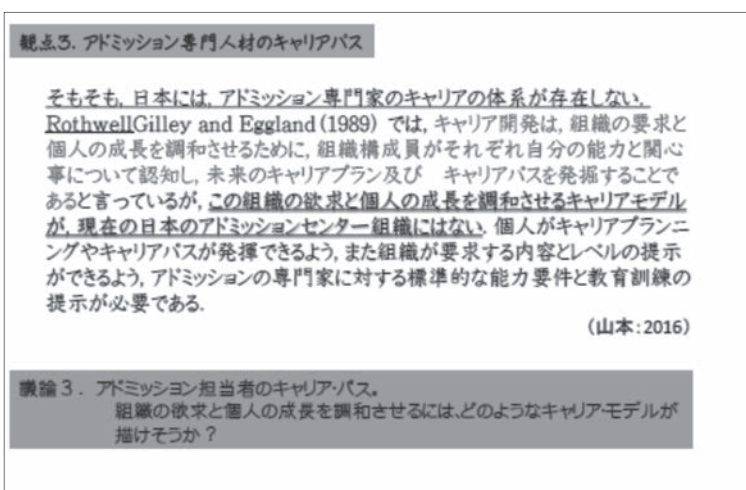


ここでは、現在キャリアプランニングをする際に何が弊害かを聞いています。職員の方はアドミSSION専門職の重要性の認知がないためポストがなく、業務

評価も曖昧なので、従来どおり異動も多く、専門性が付きにくく、さらに相談相手すらいない、学位もなかなか取れないという弊害を抱えていることが分かりました。

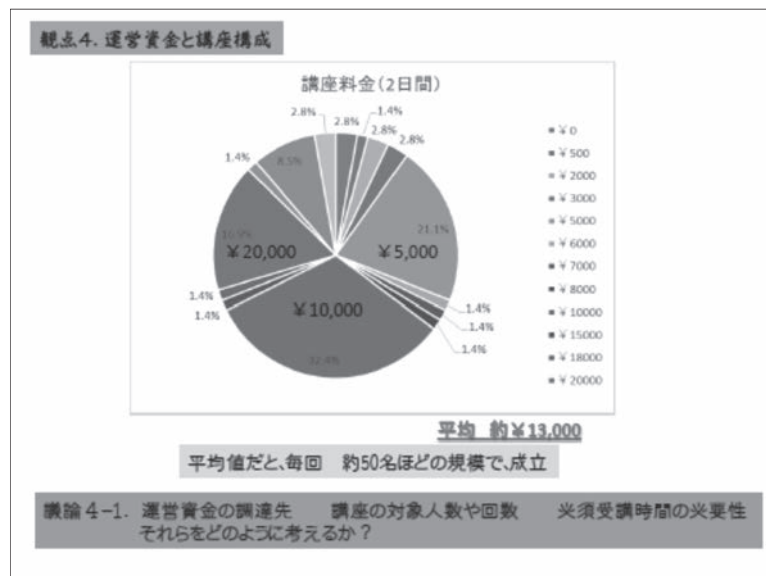
■ アドミッション職の重要性の認知が得られていないため継続性がなく、アドミッションに対する知識・ノウハウが継承されないという弊害を抱えていることが浮き彫りになりました。

アドミッション関係教員では、センター教員の昇進システムの未整備が元で、学部教員と同様の実績を求められるが、日々の業務が広報活動と高大連携に振り回されてしまう、さらにアドミッションの研究職・教員というポストが減少傾向で、予算次第で削られてしまうというように、アドミッション職の重要性の認知が得られていないため継続性がなく、アドミッションに対する知識・ノウハウが継承されないという弊害を抱えていることが浮き彫りになりました。



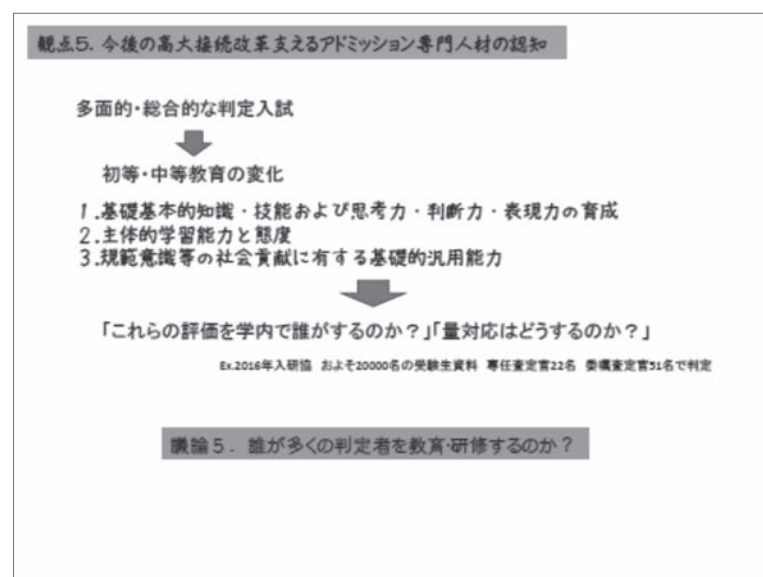
そもそも日本にはアドミッション専門人材のキャリア体系が存在しませんが、人的資源開発（Human Resource Development : HRD）に関する多くの著書がある Gilley & Eggland は『人的資源開発論』の中でこのように言っています。赤字の部分ですが、「キャリア開発は、組織の要求と個人の成長を調和させるために、組織構成員がそれぞれ自分の能力と関心事について認知し、未来のキャリアプラン及びキャリアパスを発掘することである」と言っています。この組織の要求と個人の成長を調和させるキャリアモデルは、現在の日本のアドミッション・センター組織ではなく、組織と人材の向上が見込めない状況になっていると思われます。

そこで議論3です。組織の要求と個人の成長を調和させるにはどのようなキャリアモデルが描けそうでしょうか。



さて、次は観点 4、資金の話題がありました。調査アンケートでこの点についても聞いています。2 日間の講座でどのくらいなら参加料を支払えそうかと聞いてみました。大変聞きづらかったのですが、皆様に御協力いただきまして、本当にありがとうございます。一番多いのは 1 万円で、次が 5,000 円、そして 2 万円、4 番目に多かったのが 3 万円でした。平均は約 1 万 3,000 円です。こうなると毎回約 50 名に集まっていたいただかないと経費をペイできないことになります。

そこで、議論 4-1 は運営資金の調達先、講座の対象人数、回数、必須時間、必須受講時間の必要性など、それらをどのように考えますか。



最後に、高大接続を支えるアドミッション専門人材の認知についてです。要はホリスティックな評価の入試を始めようという動きがありますが、では学内の誰がその総合評価をするのか、その量対応はどうするのかということです。例えば、これも一昨年に韓国の報告をしたときに申し上げましたが、ある韓国の大学はおよそ2万名の受験生の資料を、22名の専任査定官が評価します。また、委託査定官として学内外からその時期だけ評価をしていただく人を51名雇います。選任査定官がこの51名に教育研修をしているのですが、日本の場合は仮にこういう人たちを雇った場合、誰が教育研修するのかが、議論5ということになります。

少し長くなりましたが、時間となりましたので、私の指定討論はここまでにしたいと思います。御清聴ありがとうございました。



特集 1◎指定討論 2

志村 知美（追手門学院大学アサーティブ課長）



皆さん、こんにちは。大阪の追手門学院大学で教務部アサーティブ課の課長をしています志村と申します。よろしくお願いします。

最初にこのお話を頂いたときに、二つ返事で行きますと言ってしまいましたが、実際に何を討論したらいいのだろうと戸惑いました。いろいろな方に相談したら、「いつもどおりの志村さんでいいよ」と言われましたが、「いつもの私って、一体どんなふうに見られているんだろうな」と逆に考えてしましまして、結局今日になってしまい、特に資料も作ってきませんでした。いま、各報告者の御講演を聞いて、思いついた質問をまとめて原稿を1枚作ったところです。

まず、司会の方から御紹介のあったように、私はアサーティブ・オフィサーという肩書を名乗っています。私は、4年前に大学教育再生加速プログラムに採択されたアサーティブ・プログラム、アサーティブ入試の企画、運営、実施を担当してきました。当時は入試課の所属でしたが、肩書もない普通の平職員でした。いろいろなシンポジウムなどからお声を掛けていただきお話をする機会が多くなったのですが、そのときに何も肩書がないのは少し困ると言われました。だからといっていきなり課長や部長という役職が付くわけでもありません。結局、アサーティブ・オフィサーに落ち着きました。それから2年後にアサーティブ課ができ、そちらの課長を拝命しました。

ですから、私は教員ではなく事務職員として採用されていて、アサーティブ課長という職位でお給料を頂いていますので、課長という肩書を一番最初にお伝えさせていただいております。もともと新しい入試改革ということで入試を作りました。そして運営をして、実施をしました。ですから、ここが昨今言われているアドミッション・オフィサーと若干違うところだと感じています。

今は、この4月から教務部に移りました。それまでは入試改革をメインにやってきましたので入試部に所属していましたが、なぜ教務部に異動したかという、私どもは、学生を合格させ入学させればそれで終わりではなく、入学後、4年間の大学生活をきちんと送らせて、卒業まで支援をしていきます。そのためには、入試という部分ではなく、やはり教務という部分で、入学後、入れただけではなく、入れた後も育てていくために教務部に移りました。

私は、入試というのは一過性のものではなく、あくまでも教育の一環だと考えています。先ほどのジム先生のスキルと能力開発のスライドにあった、「入試とはビジネスなのか。専門職なのか」という所を見て、直感的にもう一つ教育をプラスできないかと考えました。確かに入試というのは、私立大学では大事な収入源になるのでビジネスとも言えます。受験生の人生に関わってくる大切な部分ですから、確かに専門職でもあるだろうと思います。でも、先ほど御紹介したように、入試というのは教育の一環だと考えている私からすれば、大学生になる準備をする場として入試があってもいいのではないかとということで、ここに教育をプラスしたいと感じたのが一つ感想ではあります。

■今これだけアドミッション・オフィサーの養成をしようという流れになってきていますから、その行き着く先に合否の権限をアドミッション・オフィサーという専門職に持たせることができるのか、そこまでいくと／

最近アドミッション・オフィサーやその育成というようなことをよく聞くようになり、アサーティブ・オフィサーと何が違うのかという御質問を頂くのですが、冒頭に申し上げたとおり、私は入試の企画・運営まで携わっているという点ではないでしょうか。しかし合否に関わっているという点では、アドミッション・オフィサーでもあると思います。最終的には教授会での合否で、これは法律で決まっているので仕方がないと言われてしまえばそうなのですが、これが今の日本にないのではないかと思います。

ここで感じた今日の議論として一つお聞きしたいと思ったのは、本学は職員が入試の評価にも関わっていますが、最終的な合否を決めるのは学長です。今これだけアドミッション・オフィサーの養成をしようという流れになってきていますから、その行き着く先に合否の権限をアドミッション・オフィサーという専門職

に持たせることができるのか、そこまでいくと法律まで変えることになるのだろうか、それができるのかということになるかと思います。そうしたことが可能なのか、または必要なのかということを先生方にお聞きしたいと思いました。

そして、もう一つ、皆様のお話を聞いてふと思ったのが、昨今話題になった『13歳のハローワーク』（村上龍，幻冬舎）という本のことです。13歳の子供たちを想定して、自分の本当に好きなことを考えて仕事を選ぼうと、約500の仕事を紹介したものです。この本でアサーティブ・オフィサーという職業を紹介するなら何と書くだろうかと考えながら、皆様にこの質問を試してみようと思いました。つまり、アドミッション・オフィサーという仕事のやりがいはどういうものなのでしょうかということです。以上で私からのお話は終わらせていただきます。ありがとうございました。



特集 1◎全体討論

入試担当者(アドミッション・オフィサー)の 育成課題

Jim Rawlins (オレゴン大学副学長補佐・入試部長) / **川嶋 太津夫** (大阪大学教授) / **木村 拓也** (九州大学准教授) / **夏目 達也** (名古屋大学教授) / **山本 以和子** (京都工芸繊維大学准教授) / **志村 知美** (追手門学院大学アサーティブ課長) / **山地 弘起** (大学入試センター研究開発部長 ■ 司会)

【山地・司会】お待たせしました。それでは、指定討論者の山本さん、志村さんの御指摘を踏まえて、まずは、各報告者の方々から御発言いただきたいと思っています。まず、アドミッション担当者の業務領域、そしてスキル・能力について川嶋先生からまいりましょうか。

【川嶋】志村さんのお話にも、山本さんの日米韓の比較にもありましたが、要するに入学を決めるのは誰かということですね。私は、本来、その決定は、教員ではなくて、アドミッション・オフィサーと呼ばれるような専門人材が担うべきだと思います。

大学の教員はずいぶん多忙になっています。もちろん教育・研究だけが教員の仕事ではなくて、社会貢献や学内のマネジメントなども大学教員の職務だとは思いますが。しかし、教育の範囲に入試が入るからといって、教員が入試の合否判定まで全部やるというのはどうかということです。韓国でも、例えば国立ソウル大学校ですと1次選抜は専任と兼任の査定官が行い、2次選抜は教員が行うという役割分担があります。

■学部・学科が募集単位になっていると、当然教員の意識からすれば自分が将来教育する人材についてはやはり自分の判断で入れたいという思いがあるわけです。(川嶋)

米国ではなぜそれが可能なのか。そして日本の場合にはなぜ難しいのか。それは、私が冒頭に日米の比較でお話したように、日本の募集単位が学部・学科になっているわけです。アメリカの場合は大学全体で大きくくりです。学部・学科が募集単位になっていると、当然教員の意識からすれば自分が将来教育する人材についてはやはり自分の判断で入れたいという思いがあるわけ

です。

ところが、アメリカでは、カレッジという大くくりで学生を入れますから、ファカルティーないしはデパートメントに所属する先生の所に必ずしも学生が来るわけではないので、むしろ大学のこと、高校のことを教員以上によく知っているアドミッション・オフィサーが合否判定まで行うことができます。

もちろん、アメリカでも全く教員が関わっていないかというと、それはまた大学にもよります。我々の調査ではUCバークレーなどでは、どういう観点で合否を決めるかの基準はファカルティーが決めます。その基準を実際に行う役割を持っているのはアドミッション・オフィサーです。

日本もこれからはそういう方向で多少なりともアドミッション・オフィサーと言われるような、教員ではない専門職が合否の判断に関わっていけば、大学の研究パフォーマンスが向上するのではないかと思います。

【山地・司会】ありがとうございます。木村さんは教員とアドミッション・オフィサーとの役割分担をどうお考えですか。

【木村】まず、日本の大学では、入試課や学部との関係も含めて、アドミッション・オフィサーの役割というのは大学ごとにバラバラなのが現状だと思います。

いずれにしても、アドミッション・オフィサーはやはり大学にとって役立つ存在であることが大切だと思います。報告の中でいろいろとループバックを挙げましたけれども、一人であの能力を全部身に付けている人は多分いません。

■結局は学部の教員や入試課の人や入試課長ができない仕事、代わりの効かない仕事をどれだけアドミッション・オフィサーができるのか、多分ここが一番大きなこと／（木村）

つまり、大学にとって役立つか、あるいは入試課にとって役立つかが大事で、学部の先生の仕事を余計に増やすような仕事をするなら、アドミッション・オフィサーはいらないわけです。

入試結果の分析一つとっても、次年度の入試の作問をする時期に間に合わないければ意味がありません。1年もかかってやっと出してきたところで、いくらデータの分析能力があっても、そんなアドミッション・オフィサーはいらないわけです。そのように何に役立つのかということをまず一つのポイントにするべきだと思います。

あと、学部教員や職員がやったほうが早いと思われたら、どのようにやっ

てもだめだと思うので、結局は学部の教員や入試課の人や入試課長ができない仕事、代わりのきかない仕事をどれだけアドミッション・オフィサーができるのか、多分ここが一番大きなことではないかと思います。

ですから、初期の頃にアドミッション・オフィサーに就かれた人たちは任期付きだったと思います。その大学にとって役に立つ、あるいはなくてはならない存在だと思われて任期なしの職になってきたのだと思います。これが多分この十何年間の経験だと思いますので、アドミッション・センターの任期が外れて、その大学に定着した先生が何をしてこられたかの分析が進めば、何がアドミッション・オフィサーとして役立つスキルなのかということが分かるのではないかと思います。

アドミッション・オフィサーが合否判定にまで関わるということも、それができるとするのは一つの理想的な在り方かもしれませんが、まずはアドミッション・オフィサーが大学の入試に、ひいては日本の社会にも役立つ存在だと認識してもらうことが第一ではないかと考えます。

【山地・司会】役立つ存在というのも、恐らく各大学の置かれている文脈や状況によってまた異なってくるものかもしれません。この辺り、夏目先生はどうですか。先生はアドミッション・オフィサーという言葉とは少し距離を置きたいということでしたが、アドミッション・オフィサーと教員の役割分担や合否判定への関わりについては、どう思われますか。

【夏目】アドミッション・オフィサーはどういう仕事を担い得るのか、あるいは大学として任せるのかということは、まだ非常に不明確というのが実情だと思います。それは木村先生が指摘されたとおりです。それを確定していくというのがまずは大切だと思います。

■現状は大学によって非常に様々です。どこまでが職域なのか、言われるまま何でもやりますというのでは、何年たっても専門職とは見なされないと思います。(夏目)

つまり、大学にはいろいろな専門職がありますけれども、例えば大学における専門職とは何かという問題を我々は真面目に考えていく必要があるのではないのでしょうか。

現状は大学によって非常に様々です。どこまでが職域なのか、言われるまま何でもやりますというのでは、何年たっても専門職とは見なされないと思います。現在、アドミッション・オフィサーと呼ばれるようなポジションに就かれておられる方々は、まず専門職としての立場を確立するために汗をか

いていただくことが必要だと考えます。

【山地・司会】今おっしゃった専門職というのは、例えばFDの担当者や、IRの担当者など、言わば第三の職と言われる方たちを指しておられるのですね。

【夏目】はい、そうです。

【山地・司会】ありがとうございます。ジムさんにお聞きしたいのですが、先ほど川嶋先生のほうからUCバークレー校などでは教員が合否の観点を決めて、アドミッション・オフィサーがそれを実施するというお話がありました。オレゴン大学の場合は、教員とアドミッション・オフィサーとの役割分担はどのようなになっていますか。

【Rawlins】カリフォルニア大学ではユニバーシティー・セネットといいまして、大学の教員が入試の政策を決める部署があります。その政策を教員が決めて、その後アドミッション・オフィサーがその政策を実行します。

オレゴン大学では、入試の選抜に教員は関係していませんが、入試委員会があって、そこに教員が所属しています。そこで何が決められるかというと、入試のクライテリアや入学した後の学生のパフォーマンス、また今後どのように入試の政策を変えていくのかというような討論がなされます。

【山地・司会】ありがとうございます。ポリシーを決める人と実際にそれをやる人というような分け方ですね。

それで、先ほどの志村さんの御質問の一つにもありましたが、今は最終的な合否決定は、学長が教授会の意見を聞いて決めることになっておりますが、私はアドミッション・オフィサーが合否の判断にもう少し関わってもいいのではないかなと思ったのですが、どうでしょう。追手門学院大学ではどのようにやっているのでしょうか。

■アメリカのように自分の責任で合否を判断できるような制度にいずれなるのか、あるいは、果たしてそういったものが日本では必要なのか／（志村）

【志村】アサーティブ入試は1次試験と2次試験という2段階で実施しています。

1次は職員が評価します。その評価に基づいて、入学者選抜委員会という委員会が合否を決めます。ですから、例えば私が評価をしてどうしてもこの子に入ってほしいと思って合格と書いても、それはあくまでも意見を述べたの

であって、それがそのまま通るわけではありません。アメリカのように自分の責任で可否を判断できるような制度にいずれなるのか、あるいは、果たしてそういったものが日本では必要なのかということが最近思うところではあります。

【山地・司会】志村さんの場合は自分が推した学生たちがどのようなパフォーマンスをしていくかということも見ていくべきだということで、教務にも関わっておられるわけですね。

【志村】入試区分ごとに学生の分析をすると、「この入試で入った子たちは少し学力がねえ……。」というような声が出たりもします。そんなとき、入れてから否定的なことを言うなら入れなければいいと思いました。入学させるなら卒業させるまでの責任をきちんと果たせるような仕組みを作らないと受験生がかわいそうだということです。ですから、教務部では、入った子たちがきちんと4年間歩んでいけるように、心配なところがあればそこも支援するような仕組みをこれから作っていこうと思っています。

【山地・司会】山本さんの示された表でも、韓国・アメリカでは可否の決定までアドミッション・オフィサーが関わっており、日本では関わっていないという比較がありましたけれども、その辺りはどうですか。

【山本】今、川嶋先生が話されたとおり、韓国の大学も様々で、進んでいる大学では入学査定官が結構権限を持ってやっています。韓国は一度合格発表をしたあとに、その後もどんどん追加入学を電話連絡するようなシステムを取っています。ですから、合格発表の期間も2週間ぐらい設定されています。そうなりますと、どこまで線引きをしてやっていくのかを判断する必要が出てきますが、そこも入学査定官の判断になります。

ただ、それはホリスティック評価をするという募集単位での実施であって、全部の定員で行われているわけではありません。ですので、個別の大学によって入学査定官が査定できる、できないという多少の温度差があるという状況だと思います。米国では、大学の教育課程の中で、韓国でも養成機関や研修の中で、判定の知識やスキルを開発して、その学位や受講証明を武器に専門職に就きます。日本は、前職の知識やスキルに頼ってしまう、また学内の従来のニーズに応じる形で能力開発を個人がする状況です。アドミッションに必要な能力の統制がとれておらず、またそのため大学全体の足並みがそろわないというところも問題かと思います。

【山地・司会】ありがとうございます。ここでフロアから御意見・御質問を伺っ

てみたいと思います。

【フロア1】福岡県立大学の柴田です。大変興味深い御議論をありがとうございました。合否判定に関するアドミッション・オフィサーの関わりというお話がありました。

実は私は20年ぐらい前に、当時AO入試を導入した三つの国立大学の一つである九州大学で副学長をやっていました。文科省といろいろな協議をやったのですが、文科省からアドミッション・オフィスに求める機能として、合否判定まで教授会とは別にやってほしいという要望がありました。

そのことを私は忘れていましたが、最近当時の係官の方が再び大学振興課長と課長補佐として文科省に戻ってきて、「あなた方はこの20年間何をやってたのか」と言われたことを、いまの議論を聞いていて思い出した次第です。ただ、やはり、先ほど木村先生がおっしゃいましたけれども、日本の学校教育法上は、合否は教授会の権能という合意がありましたので、それをクリアするが非常に難しかったのです。しかし、これをクリアしないとアドミッション・オフィス入試、あるいはアドミッション・センターの設置が通らないというので、いろいろと知恵を出しまして、先ほどからお話があるように、まず教授会の方がアドミッション・ポリシーに基づいて、こういう学生が欲しいというスペックを出し、それをアドミッション・オフィスが受け取って、実際の選抜業務を行い、合格候補者も出します。ただ、最終的にはやはり教授会を通さなければいけないので、その選抜プロセス全体を教授会のほうで包括的に承認していただきます。そういう形でやらせていただきました。

ただ、実態的にはやはり教授会の御意向が随分強かったです。それを理想的にやってみたいというので、御承知の方もおられるかもしれませんが、教育システムと連携した九州大学の21世紀プログラムではそういう選抜をやらせていただきました。

これはアメリカのカレッジなどのように、学部にも所属せずに全学的に入学させるというので、教授会からの縛りというのはかなり緩かったと記憶しています。その後20年たってかなり風化が進んだのかもしれませんが。

いずれにしても、そういうことで、先ほどから議論になっている権能ということは、当初はかなり我々も理想的なものを求めていたという状況があったということをお知らせしておきたいと思います。以上です。

【山地・司会】ありがとうございます。貴重な情報提供でした。先ほど、アドミッション・オフィサーが合否判定に関わるには法律まで変えなければいけないのかという話がありましたけれども、大学入試センターの浅田理事のほう

からアドバイスがありました。学校教育法第 93 条では「大学に、教授会を置く」となっていて、「教授会は、学長が次に掲げる事項について決定を行うに当たり意見を述べるものとする」とあり、その「次に掲げる事項」の一つに「学生の入学」とあります。ですから、法文に忠実に読むとすれば、学長が決めるに当たって教授会が意見を述べるという形になっていて、学長がもしアドミッション・オフィスにも意見を求めるということを決めれば、法律を変える必要はないのかもしれないという御助言をくださいました。

【浅田・大学入試センター理事】 こういう場で誤解があってはいけないので、今の法律の規定がどうなっているか、事実のみ御紹介させていただきます。先ほども御紹介がありましたように、学校教育法第 93 条の第 2 項で、「教授会は、学長が次に掲げる事項について決定を行うに当たり意見を述べるものとする」とあり、その各号列記の第 1 号に「学生の入学」が出てきます。したがって、決定を行うのは学長です。その際に教授会の意見を聞くということも法律上はマストです。ここまでは必ず満たさなければいけません。それに加えて何らかの仕組みをそれぞれの大学が付け加えるということはある話だろうと思いますが、私は今、文科省の人間でもなく、この条文を有権解釈する立場にはないので、もし何かこんなやり方かどうかということがありましたら、文科省に御相談いただくのがいいかと思います。

【木村】 九州大学の「21 世紀プログラム」は平成 29 年度までで廃止になりました。17 年間の最後にこの入試を担当した者として一言述べさせていただきたいと思います。非常に貴重な経験させていただいたことはとてもありがたく思っています。

■アドミッション・センターの先生が、広報業務や高校訪問などで、受験生の多くに既に会っているということです。つまり面識のある受験生を公平に評価できるのかという論点があります。(木村)

もう終わった入試ですから言ってもいいかもしれませんが、今は名古屋工業大学におられる林先生と僕は最後の 2 年間、実際に生徒の判定させていただきました。我々に先立つ 15 年間の間に、前任の先生方が苦勞して学内の信頼を勝ち取ったのだと思いますが、僕らにやらせていただいてよろしいのですかと言って、最後の 2 年間、本当の合否判定に加わったということがあります。ですから、教授会の構成員ではないという法律上の壁ということもあるのですが、やはりアドミッション・オフィサー自体を学内で認めてもらう

ことが大事だと思います。

それと、もう一つ大きな壁があるとすれば、アドミッション・センターの先生が、広報業務や高校訪問などで、受験生の多くに既に会っているということです。つまり面識のある受験生を公平に評価できるのかという論点があります。日本の大学の入試では、接触したことのある生徒の合否判定はしないという不文律があり、例えば高大連携の模擬講義をした先生はその年の入試担当から外されたりもします。

アドミッション・センターの教員が合否判定に関わるのであれば、法律の問題とは別に、後者の問題を解決するためにも、学内の信頼を勝ち取ることが重要だと思います。

【山地・司会】ありがとうございます。関連して、川嶋さんどうぞ。

■高校や志願者をよく知っている方が評価に加わるというのは、別の観点から言うと極めて公平公正な評価になるのではないかと、私はアメリカのお話を聞いてそのように思いました。(川嶋)

【川嶋】アメリカのほぼ全ての大学だと思いますが、実はアドミッション・オフィサーは、担当する地域が決まっています。例えば州立大学ですと郡ごとに、州単位で例えば隣接する州など、そのテリトリーの担当者がこまめに高校を回って、もちろん進学相談をします。実際に評価するのも彼らです。というのは、高校のことをよく知っているからです。ですから、先ほど私が申しましたように、例えばこの高校の GPA3.8 というのはどういう意味なのかということをよく知っているわけです。ですから、彼らの一人が評価をするわけではないですけれども、オレゴン大学でも必ずそのテリトリーを担当しているアドミッション・オフィサーが出願してきた高校からの受験生の書類を見ます。それプラス、もう一人見るという形でやっています。

ですから、まさにホリスティック、個別化した評価です。相対的な評価ではなくて、一人一人をきちんと見ることについては、高校や志願者をよく知っている方が評価に加わるというのは、別の観点から言うと極めて公平公正な評価になるのではないかと、私はアメリカのお話を聞いてそのように思いました。

【山地・司会】先ほど大阪大学では高校のプロフィールを蓄積しているというお話がありました。そのように高校のことをよく知ることによって、そこからの受験生のこともよく分かるということでしょうし、そういう背景をしっかりと見る

ということも一つの大きなヒントになるかもしれないですね。

【フロア2】私は、去年の3月にアメリカの四つの大学のアドミッション部門の調査に行って、9月にはNACACの大会にも行ってきました。先ほど川嶋先生もおっしゃったように、アメリカではアドミッション・オフィサーは入学志願者と会っているわけですね。韓国の入学査定官は会ってはいけないらしいのですが、アメリカは会っているからこそよい選抜ができるという考え方だと思います。

■アメリカのアドミッションというのは志願者の人物像を隠さないわけです。ところが日本の一般入試は受験番号で匿名化しているわけです。(フロア2)

つまり、アメリカのアドミッションというのは志願者の人物像を隠さないわけです。ところが日本の一般入試は受験番号で匿名化しているわけです。合計点だけで合否を決めるので、人物像は見えません。アメリカは、そういう方法は良くないと考えているので、今のやり方採っているのだと思います。私は実は質的研究者なのですが、日本のやり方というのは、質を量に還元して選抜していると思います。ところが、アメリカのやり方というのは質でとっていて、その中に量を指標として入れているということだと思います。そこが多分大きな違いです。

では、どちらが大学にとっていいのでしょうか。おそらくアメリカの大学は、個々の大学にとってどちらがいいのかということだけではなく、社会にとってどちらがいいのかということも考えていると思います。大学間の競争だけでなく、大学全体が社会にとってどういう意味を持つのかということを考えてときに現在の方法がいいと考えてやっているのだらうと私は推測しています。以上です。

【山地・司会】ありがとうございます。受験生の顔を見ながら選抜をするのか、それとも顔を隠して公平性を担保するか、そういう考えの違いということですね。もうお一方、お願いします。

【フロア3】私はデータ分析などが担当ということでアドミッション部門に入っている者です。データ分析をやっている身として今怖いのは、やはりAIが進化してきて、例えば志願者の動向把握、入試点数の把握など、いろいろなデータ分析関係が全部AIに取って代わられるのではないかということです。高校訪問や面接試験の際の対人場面などでは、アドミッションの専門人材

としての立つ瀬が将来もまだ残されているのではないかと思います。木村先生から試験問題の解答状況の分析などは5月ぐらいまでにできないと意味がないという話がありましたけれども、そういう仕事をAIが迅速にこなしてしまうという状況が訪れた際に、データ分析者はどういった価値を提示していけるか、もし何か御示唆があればお聞かせください。

【山地・司会】ありがとうございます。アドミッション・オフィサーがAIでなくて人でなければいけない理由は何かということや、あるいはデータ分析の部分でどのような関わりが必須なのかということです。いかがでしょうか。レスポンスされる方はいらっしゃいますか。

【夏目】私は、専門性を主張するポイントをどこに置くかということが大事だと思います。しばしば合否判定が非常に強調されますが、本当に合否判定で専門性を主張するのがアドミッション・オフィサーとしての専門性認知にプラスになるのかどうか、そういうことも考える必要があると思いました。

【山地・司会】他に御意見はありますか。木村さん。

【木村】AIがどこまで何ができるか、僕はよく分かりませんが、人間の場合は、ただデータを分析するだけではなくて、それを会議にかけて、それをもって例えば入試改革を進めるという場面があると思います。例えばコンピューターがこれから導入される大学入学共通テストについての方針を読んで適切な配点の比率を出してくれるわけではありません。

データ分析をするときにも何かの主張を通したかったり、会議の中でどう運用していくのかを考えて資料を作ることが大事だと思います。データ分析をし一生懸命資料を作ったのに会議では1秒も見られないというのはとても悲しいことなので、会議で参照されるデータ分析とは何なのかということを考えるのも僕らの仕事です。

また、多くの大学では、現在でも、例えば合否入れ替わり率などのいろいろな指標については、毎年同じルーティン作業によってすぐに出るようになっていていると思います。分析して1年かかってやっと出したものをありがたがられないというのは、別にAIが来ても来なくても状況は同じだなという部分もあるかと思います。

【山地・司会】ありがとうございます。AIがどういう形で進化するかということがなかなか見えないところもあるので、議論しにくいところではあるのですが、少なくともAIがどんどん使われていくということは想定しておく必要があると思います。

時間が来てしまいました。まだ御発言をされたかった方もおられると思いますし、積み残した議論がいくつもあります。山本さんから指定討論で頂いた他の論点もありますし、あるいはアドミッション・オフィサーの研修ということから考えれば、内容がこれで十分なのか、あるいは研修の方法、オンラインでやるのか、対面でなければいけないのか、学習センター的にグループワークで進めていくのか、いろいろな形が考えられます。その辺もかなり積み残していますけれども、これを一つの契機として、一体自分の大学に役立つアドミッション・オフィサーとはどういう役目を負うものなのかということをはっきりさせることからまず始めていただくことになろうかと思います。

時間を超過して大変失礼しました。先生方から、あるいは指定討論の方から何かこれだけは言っておきたいということがありますか。ジムさんからこれだけは日本の関係者に言っておきたいということはあるですか。お願いします。

■アメリカでは、教員は入試の業務をしませんが。／今日ここで拝見した、教員が選抜すべきか、職員が選抜すべきかというディスカッションは本当に素晴らしいと思います。
(Rawlins)

【Rawlins】アメリカでは、教員は入試の業務をしませんが。私としては、もう少し教員に関わってほしいという気持ちがあるので、今日ここで拝見した、教員が選抜すべきか、職員が選抜すべきかというディスカッションは本当に素晴らしいと思います。やはり学生が大学に入って何を成し遂げていくかということをきちんと職員と教員で話していくことが重要になってくるのではないのでしょうか。ここで学んだことをアメリカでまた応用していきますので、今後ともよろしくお願いします。

【山地・司会】大変長時間にわたりまして、ありがとうございました。最後に登壇された方に改めて大きな拍手をお願いいたします。







特集 2●報告 1

大学入学共通テスト等入学者選抜改革の 進捗状況

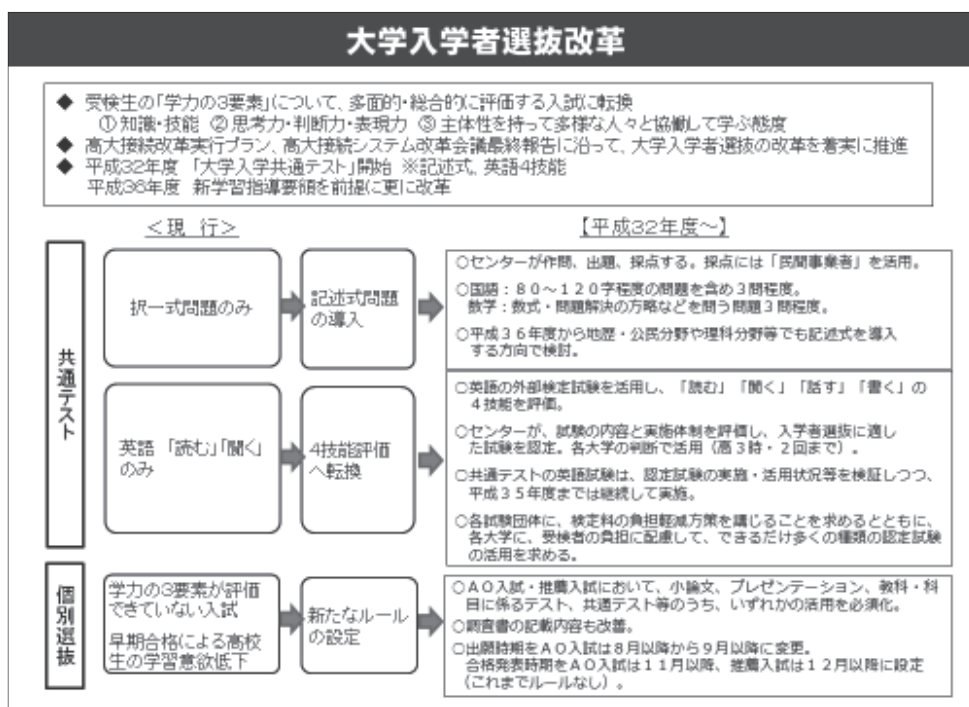
山田 泰造（文部科学省大学入試室長）



大学入試室長の山田です。たびたびお話をさせていただく機会を頂きまして、ありがとうございます。私からは、大学入試改革全体の進捗状況につきまして、簡単に御説明を申し上げます。

そもそも、いま、なぜ高大接続改革なのかということです。皆さんも御承知のとおり、現在、グローバル化ですとか IT ですとか、世の中がものすごいスピードで変わりつつあります。近い将来、今世の中にある仕事の半分ぐらいはなくなるのではないかという予想などもあります。10 年後、20 年後ですら、世界があるいは社会がどうなっているのか想像するのが難しいぐらい、この変化は急激です。

そういった中で、我々文部科学省としましても、新たな価値を創造していく力を育成するために、高等学校教育、大学教育、そして大学入学者選抜の三者を一体的にとらえた高大接続改革を推進しようと考えているわけです。➡



そうするために、ここにあります学力の3要素という原点に立ち返って、高校でも大学でもしっかりと、身に付けていただく。また、大学入試においてもしっかりとその評価していくということが必要だという、一貫した考え方に立って、この取組を進めているわけです。

以前、ともすると高校でも大学でも、あるいは入試でも、知識・技能の習得と評価に偏っていたのではないかという指摘も一部にありました。

これからの社会においては、思考力、判断力、表現力も重視して、それらの評価を入試に取り入れていくことが望まれます。これはセンターが実施する共通テストもそうですし、各大学における個別選抜においても、そういった必要性が高まってくるのではないかと思います。

また、なかなか評価することが難しい主体性についても、高校での活動等を見せる、あるいは丁寧な入学者選抜を実施することによりまして、その評価を進めていければ、高校における学び、取組、活動を大学入試にも活用できる。またその成果が、大学の生活、あるいは学びにも直接役立ってくるだろうと考えているところです。

改革の大きな柱は3点あります。そのうちの二つは、共通テストに係るものです。共通テストについては、ここに挙げているものは、先ほどお話もありましたけれども、記述式問題の導入と英語の資格・検定試験の活用のお話です。また、先生方も昨年11月の試行調査を御覧いただいておりますけど、大学入試センターは、マークシート方式の試験についても思考力、判断力、表現力を、より深く問えるよう改善に取り組んでいます。

記述式問題については、国語で3問、数学で3問取り入れたいと考えています。

40 字や 120 字程度の記述で、本当の思考力、判断力、表現力を測れるのかという
ような御指摘があることも承知しております。もちろん、各大学がそれぞれのアド
ミッション・ポリシーに応じた本格的な記述式問題によって、思考力、判断力、
表現力を評価することも重要だと思っています。最長でも 120 字程度の記述式の
問題ではありますけれども、共通テストにおいても、共通的、基盤的な部分は、
かなり評価できると思います。

**■これは、もしかすると、大学入試が 2 技能中心であることが、
高校教育の足を引っ張っているのではないか。**

英語の 4 技能については、最近の文部科学省の調査でも、6 年間学んでいるの
に、スピーキングとライティングについては、十分養成しているとは言えない。
また高校 3 年生の授業、コミュニケーション英語Ⅲを例に取っても、スピーキン
グですとかライティングの評価が十分に実施されているとは言えない。英語表現
の授業でも、十分に実施されているとは言えないような調査結果が出ています。
これは、もしかすると、大学入試が 2 技能中心であることが、高校教育の足を引
っ張っているのではないか。高校の先生が 4 技能を習得させようと、一生懸命取
り組んでも、一部の保護者の方から、3 年生になったら 4 技能なんかやらずに、
入試対策に専念してくださいなどと言われるなどという場面もあるのではないか。
したがって、英語力の習得という意味では、高校の授業とともに大学入試も一体
的に変わっていく必要があるのではないかということで、4 技能の獲得を重視す
る必要があると考えています。

そのためには、既に一部の大学の入試でも活用され始めてきた民間の資格・検
定試験の活用を促進することが有効ではないかということです。そして、その活
用の際には、現在は、志願者は、英検や TOEFL の成績を紙ベースで大学に提出
しているわけですが、それらの成績を大学入試センターが仲介して各大学に提供
できれば、受験生の負担も大学側の負担も減るのではないかということで、その
ような成績提供システムを立ち上げたいと考えているところです。

三つ目の柱は個別選抜ですけれども、学力の 3 要素の評価と時期の問題です。
一部の AO 推薦では、出願ただけで合格になるような学力不問の入試があるの
ではないかという指摘があります。入試区分の別を問わず、しっかりと、この学
力の 3 要素の評価をしていくことが重要ですので、何らかの、小論文なりプレゼ
ンテーションなり、教科のテストなりを実施していただくことが、32 年度から必
要ではないかと打ち出しています。

また、先ほどの主体性の評価ということでは、調査書の記載についても改善し
ていきたいと思っていますし、現在その調査書は紙ベースですけれども、これを
電子化すれば、高校における主体性の評価を、より大学入試に生かしやすくなる

のではないかとこの検討も併せて進めています。また、文部科学省から関西学院大学を中心とする大学に委託しまして、JAPAN e-Portfolio という形で、学生の取組をデータで大学にお届けして、入試に活用していただくという委託調査も、併せて実施しているところです。

試行調査（プレテスト）の実施内容と今後のスケジュール									
【大学入学共通テスト】の導入（平成29年11月1日文科省発表）と 1期実施（平成29年8月1日決定）									
	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	35年度	36年度
「大学入学共通テスト」の導入		「英語大綱」の策定・公表 （28年度） 試行調査の実施 （29年度）	試行調査の実施 （30年度）	「英語大綱」の策定・公表 （31年度） 確認試行調査の実施 （31年度）	「大学入学共通テスト」の実施	新学習指導要領に対応した 「英語大綱」の策定・公表		新学習指導要領に対応した 「英語大綱」の策定・公表	新学習指導要領に対応した テストの実施
試行調査等	フィージビリティ調査事業	試行調査	試行調査	確認試行調査					
	受検者数	約1千人	5万人規模	10万人規模					
	対象者	大学1年生	原則、高校2年生以上 （一部、高校3年生以上を含む）	原則、高校2年生以上 （一部、高校3年生以上を含む）	平成29、30年度の調査結果を踏まえ、実施も含め、詳細について、今後検討予定				
	対象教科等	国語、数学	国語、数学、地理・公民、理科、英語、特別対応科目等	国語、数学、地理・公民、理科、英語、特別対応科目等 ※具体的な対象科目は要検討					
	実施時期	11月、2～3月	11月 （一部、2月頃）	11月					

時期については、御案内のとおり、33 年 1 月に実施される、33 年度入学者の入試に向けて試行調査等様々な取組を実施しています。

平成29年11月試行調査（プレテスト）実施概要			大学入試センター資料室
① 意義	○ 新たなねらいの問題を出題した場合の正答率や解答の傾向等を地域バランス等にも配慮しながら分析に必要な規模のデータを収集。 ○ 高校生にとっても試行調査により、深い理解を伴った知識や思考力・判断力・表現力を問うことをより重視した問題で、自分の力を試すことができる。 ○ 試行調査はあくまで検証のためのものであり、今回の問題構成や内容が必ずしもそのまま大学入学共通テスト（平成32年度～）に受け継がれるものではない。		
② 実施日程	平成29年11月13～24日内で参加高校が任意の日時で実施 ※英語や受験上の配慮については、平成30年2月頃実施予定		
③ 実施科目	<記述式＋マークシート式> ・国語 ・数学Ⅰ・数学A ※その他アンケート、自己採点を実施	<マークシート式> ・数学Ⅱ・数学B ・世界史B、日本史B、地理B、現代社会 ・物理、化学、生物、地学 ※その他アンケートを実施	
④ 試験時間	・国語：100分 ・数学Ⅰ・数学A：70分	・すべて60分	
⑤ 実施規模	・1,889校（全高校数4,963校中） ・国語 約65,000人 ・数学Ⅰ・数学A 約54,000人	・1,889校（全高校数4,963校中） ・1科目当たり約1,000人～約16,000人	
⑥ 受検対象者	高2生以上	高3生（原則）	
⑦ 調査結果	統計処理をしたうえで全体の調査結果を公表予定		
⑧ 実施会場	参加する各高校		
⑨ 試験監督等	参加する各高校の教職員		

4

今日の参加者の中には高校関係者も大勢いらっしゃると思います。試行調査の実施に当たりましては、高校関係者の方々に多大なる御協力をいただき、ありがとうございました。

平成30年11月試行調査（プレテスト）実施概要（予定）

大学入試センター資料部企画

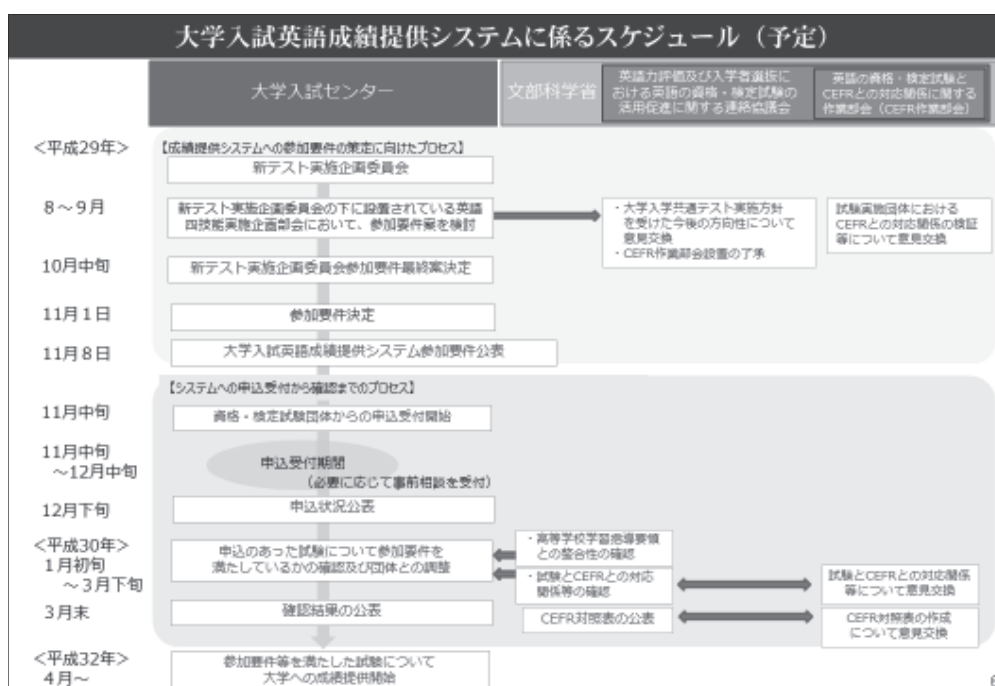
区分	A日程	B日程
①趣旨	記述式やマークシート式の問題等の検証 新たに試験の実施運営等も含めた総合的な検証	
②実施日程	平成30年11月10日(土) 13時～18時 ※試験時間は検定中	平成30年11月10日(土)、11日(日)の2日間 ※現行のセンター試験と同様の時間割
③実施科目	・国語（記述式含む） ・数学Ⅰ・数学A（記述式含む） ※その他アンケート、自己採点を実施	・国語、英語（リスニング含む） ・数学Ⅰ・数学A、数学Ⅱ・数学B ・地理歴史、公民、物理、化学、生物、地学、 ・物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎 ※その他自己採点、アンケート、大学からの開講取り等を実施
④試験時間	・国語：100分 ・数学Ⅰ・数学A：70分	・国語：100分 ・英語：80分＋リスニング45分 ・数学Ⅰ・数学A：70分 ・その他の科目はすべて60分
⑤受検対象者	高2生以上＜B日程と合わせて10万人規模＞	原則高3生＜1科目数千名、総数2万人程度で検討中＞
⑥実施会場	原則、現行センター試験のすべての大学会場	現行センター試験の大学会場（全都道府県）で検討中
⑦試験監督等	大学教職員	
⑧費用負担	会場費用、試験監督者謝金等の経費は、現行センター試験の配分の考え方を踏まえ、所要額を措置	
⑨検証項目	・実施・監督マニュアル、問題冊子、解答用紙、下書き用紙及び筆記用具 ・試験時間延長に伴う時間割等の構成と受検者の負担感等のバランス ・平成29年度試行調査の結果を踏まえた、問の構成の在り方、問題の内容と試験時間のバランス ・作問過程、採点基準、採点期間中の作問担当者を含めた採点のあり方や採点の工夫 など	

○ リスニングは、個別音声機器以外の方法で実施する予定であるため、試験時間は45分。（現行の大学入試センター試験では60分）。

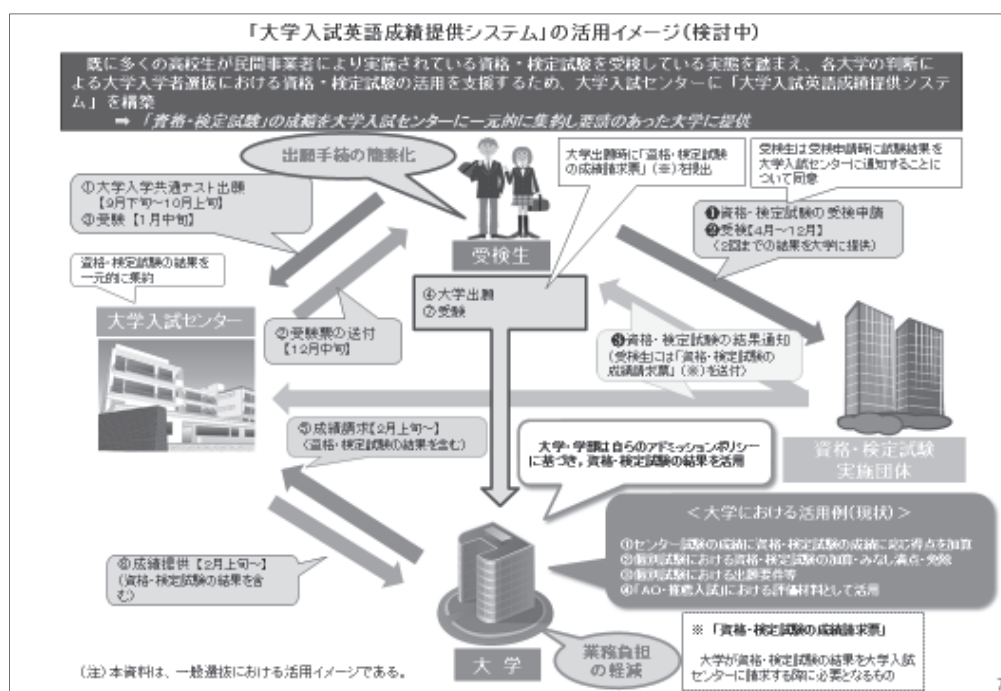
○ 現行のセンター試験を利用大学において、原則としてA日程・B日程いずれかの日程で実施することを想定。

○ 各大学における試行調査の実施規模については、センター試験の試験場確保や高校生の交通の利便性なども踏まえつつ検討中。

この成果を、確実に今年の11月に10万人規模で行われる試行調査にもつなげて、平成32年度に実施されます、本番の大学入学共通テストの実施に向けて、万全を期してまいりたいと考えています。



英語の話をさせていただきます。昨年の3月に大学入試センターが、どのような団体が実施する資格・検定試験が共通テストで利用されるのかを公表しました。



先ほど申し上げたように、各資格・検定試験の成績を、センターが仲介して大学にデータで提供します。

大学入試英語成績提供システムへの参加要件①

◆大学入試英語成績提供システム参加要件(平成29年大学入試センター裁定)より抜粋

第1 趣旨
大学入試英語成績提供システム(以下「成績提供システム」という。)への参加に必要な要件については、「大学入試英語成績提供システム」運営要項(平成29年理事長裁定)に定めるもののほか、この要件に定めるところによる。

(中略)

第4 資格・検定試験に関する要件

- 日本国内において、原則として、申請日の時点において2年以上、英語に係る資格・検定試験が広く実施されている実績があること。
ただし、既に英語に係る資格・検定試験の実績がある実施主体において同一試験と認められる範囲での試験内容の変更を行う場合や、同実施主体において新たな試験を開発する場合には、独立行政法人大学入試センター大学入試英語成績提供システム運営委員会(以下「運営委員会」という。)の審議により、基礎となる資格・検定試験で得られた知見の活かされ方を勘案し、実績が2年に満たない場合であっても参加を可能とする場合がある。
- 日本国内において広く高校生の受検実績や大学入学者選抜に活用された実績があること。
ただし、既に英語に係る試験の実績がある実施主体において同一試験と認められる範囲内での試験内容の変更を行う場合や、同実施主体において新たな試験を開発する場合には、運営委員会の審議により、基礎となる試験で得られた知見の活かされ方を勘案し、受検・活用実績にかかわらず参加を可能とする場合がある。
- 1回の試験で英語4技能の全てを極端な偏りなく評価するものであること。
また、技能別の成績をセンターに提供することが可能であること。
ただし、4技能を極端な偏りなく評価している試験であって、テスト設計上、4技能別の成績を示すことができない場合には、4技能別の成績表示に最も近い方法で成績を提供することが可能であること。
- 高等学校学習指導要領との整合性が図られていること。
- CEFR(Common European Framework of Reference for Languages)(ヨーロッパ言語共通参照枠)との対応関係並びにその根拠となる検証方法及び研究成果等が公表されており、実施主体においてその対応関係を検証していく体制が整っていること。

大学入試英語成績提供システムへの参加要件②

- 第4 資格・検定試験に関する要件（続き）
- 6 毎年度4月から12月までの間に複数回の試験を実施すること。
当該複数回の試験は、原則として、毎年度全都道府県で実施すること。
ただし、当分の間、受験希望者が著しく少ない地域では、近隣の複数県を併せた地域で合同実施することができる。
この場合であっても、全国各地の計10か所以上で複数回の試験を実施していることを要するものとする。
その試験に申し込んだ受験希望者の受験機会の確保に努めること
 - 7 経済的に困難な受験生への検定料の配慮など、適切な検定料であることを公表していること。
 - 8 障害等のある受験生への合理的配慮をしていることを公表していること。
 - 9 試験監督及び採点の公平性・公正性を確保するための方策を公表していること。その際、次の（1）及び（2）の要件を満たしていること。
 - （1）会場ごとの実施責任者及び各室ごとの試験監督責任者が、受験生の所属高等学校等の教職員でないこと。
それ以外の試験の実施に協力する者としては、同教職員の参画を認めるが、この場合には研修の受講や誓約書の提出を要すること。
 - （2）受験生の所属高等学校等の教職員が採点に関与しないこと。
 - 10 採点の質を確保するための方策を公表していること。
 - 11 不正、情報流出等の防止策及び不測の事態発生時の対応方策を公表していること。
- （中略）
- 第6 その他
- 1 成績提供システムへの参加に当たっては、別に定める協定書等を遵守すること。
 - 2 本参加要件及び別に定める協定書等で拘束内容が満たされなくなった場合には、改善案を速やかに理事長に提出するとともに、これに係る状況を公表すること。
理事長は、改善状況の確認を行い、改善されない場合は必要に応じ当該試験についてシステムへの参加を取り消すものとする。改善状況の確認等必要な手続きについては、別に定める。

8

どんな資格・検定試験でもいいというわけにはいきませんから、センターと我々で参加要件を決めました。これまでの実績があることですか、4技能全てを偏りなく評価していること、学習指導要領との整合性があるか、複数回、各都道府県で実施しているかなどといったことです。

大学入試英語成績提供システム参加要件を満たしていることが確認された資格・検定試験

（アルファベット・50音順）

	資格・検定試験実施主体名	資格・検定試験名
1	Cambridge Assessment English (ケンブリッジ大学英語検定機構)	ケンブリッジ英語検定
2		C2 Proficiency
3		C1 Advanced
4		B2 First for Schools
5		B2 First
6		B1 Preliminary for Schools
7		B1 Preliminary
8		A2 Key for Schools A2 Key
9	Educational Testing Service	TOEFL iBTテスト
10	IDP:IELTS Australia	International English Language Testing System (IELTS)
11	一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	TOEIC® Listening & Reading TestおよびTOEIC® Speaking & Writing Tests
12	株式会社ベネッセコーポレーション	GTEC
13		Advanced
14		Basic
15		Core CBT
16	公益財団法人日本英語検定協会	Test of English for Academic Purposes (TEAP)
17		Test of English for Academic Purposes Computer Based Test (TEAP CBT)
18		実用英語技能検定(英検)
19		1級(対象:「公開会場実施」)
20		準1級(対象:「公開会場実施」・「1日完結型」)
21		2級(対象:「公開会場実施」・「4技能CBT」)
22	ブリティッシュ・カウンシル	準2級(対象:「公開会場実施」・「1日完結型」・「4技能CBT」)
23		3級(対象:「公開会場実施」・「1日完結型」・「4技能CBT」)
		International English Language Testing System (IELTS)

10

そして、この7団体による23の試験が、参加要件を満たしていると公表したところ。今後、各大学で2年前予告に向けて、どの試験を活用いただけるのか御検討いただくことになります。

また、各高等学校でも、そういった検討状況を見ながら、英語の授業の進め方をお考えになっていただくのかなと思います。

新しい経済政策パッケージについて

◆新しい経済政策パッケージ（平成29年12月8日閣議決定）より抜粋

第2章 人づくり革命

③、高等教育の無償化

（これまでの取組と基本的考え方）

最終学歴によって平均賃金に差があることは厳然たる事実（※5）である。また、貧しい家庭の子供たちほど大学への進学率が低い、これもまた事実である。貧困の連鎖を断ち切り、格差の固定化を防ぐため、どんなに貧しい家庭に育っても、意欲さえあれば専修学校、大学に進学できる社会へと改革する。所得が低い家庭の子供たち、真に必要な子供たちに限って高等教育の無償化を実現する。このため、授業料の減免措置の拡充と併せ、給付型奨学金の支給額を大幅に増やす。

（具体的内容）

低所得層の進学を支援し、所得の増加を図り、格差の固定化を解消することが少子化対策になるとの観点から、また、真に支援が必要な子供たちに対して十分な支援が行き届くよう、支援措置の対象は、低所得世帯に限定する。

第一に、授業料の減免措置については、大学、短期大学、高等専門学校及び専門学校（以下「大学等」という。）に交付することとし、学生が大学等に対して授業料の支払いを行う必要がないようにする。住民税非課税世帯の子供たちに対しては、国立大学の場合はその授業料を免除する。また、私立大学の場合は、国立大学の授業料に加え、私立大学の平均授業料の水準を勘案した一定額を加算した額までの対応を図る。1年生に対しては、入学金についても、免除する。

第二に、給付型奨学金については、学生個人に対して支払うこととする。これについては、支援を受けた学生が学業に専念できるようにするため、学生生活を送るのに必要な生活費（※8）を賄えるような措置を講じる。在学中に学生の家計が急変した場合も含め対応する。

また、全体として支援の崖・谷間が生じないように、住民税非課税世帯に準ずる世帯の子供たちについても、住民税非課税世帯の子供たちに対する支援措置に準じた支援を段階的に行い、給付額の段差をなだらかにする。

（※8）他の学生との公平性の観点も踏まえ、社会通念上常識的なものとする。例えば、（独）日本学生支援機構「平成24年、26年学生生活調査」の経費区分に従い、修学費、課外活動費、通学費、食費（自宅外生に限る。）、住居・光熱費（自宅外生に限る。）、保健衛生費、授業料以外の学校納付金等を計上、娯楽・嗜好費を除く。併せて、大学等の受験料を計上する。

（実施時期）

こうした高等教育の無償化については、2020年4月から実施する。なお、上記で具体的に定まっていない詳細部分については、検討を継続し、来年度までに一定の結論を得る。

11

昨年の12月に、政府が新しい経済政策パッケージというものを策定しました。消費税財源を使って、高等教育の一部無償化を進めてまいりたいということで、一つ目が授業料の減免措置、二つ目が給付型奨学金の支給です。その給付型奨学金には、必要な生活費も賄えるような措置を講じましょうということになっていますが、併せて、大学等の受験料を計上するということとされています。

また、政府部内でも今、英語の受験料の取り扱いについても、どうにかならないかという検討を進めているところです。

主な英語の資格・検定試験及び参加試験※									
平成30(2018)年3月現在									
試験名	ケンブリッジ英語検定	英検	GTEC/GTEC CBT	IELTS	TEAP/TEAP CBT	TOEFL iBT	TOEIC L&R	TOEIC S&W	
実施団体	ケンブリッジ大学 英語検定機構	公益財団法人 日本英語検定協会	ベネッセ コーポレーション	テスト作成: ケンブリッジ大学英語検定機構、ブリティッシュ・カウンシル 日本事務局: (公財) 日本英語検定協会	公益財団法人 日本英語検定協会	テスト作成: ETS 日本事務局: CEE	テスト作成: ETS 日本事務局: EBC		
受験人数 (単位: 千人)	非公表 ※全世界では約550万人	約339.4万人 ※英検J、英検GAS全5回検定テストファミリー連立調査	約38万人	約8.7万人 ※全世界では300万人	約2.5万人 ※登録者数	非公表	約250万人 ※TOEICプログラム全世界約100万人	約32万人 ※TOEICプログラム全世界約100万人	
回年数	各10～20回 程度、計211回 (2018年・世界共通)	英検3回 CBT3回 (CBTは毎月実施 なし、検定回ごと に回実施)	PBT 3回 CBT 3回	PBT 4回 CBT 2回	約40回 22回・24回	各3回	40～45回 26回	10回 6回	24回 (1日2回×12回)
会場数	最大 71地区 20会場	最大 10地区 47会場	公開会場230 都市400会場・ 準会場 (海外・最大 各10,500会場 10都市約100会場)	全都道府県 1,250会場 (CBT: 58会場)	全都道府県 700会場程度 (CBT: 70会場)	20都道府県 以上 約900会場	10地区 以上 会場数未定	全都道府県 約900会場 (うちCBT: 15会場) ※全都道府県 10地区以上、全都道府県 10地区以上	最大 10地区 70会場
成績表示 方式	CEFR・Cambridge English Scale Score (80～230)・合格グレード	合格・ 英検CSEスコア(0～3400)・ 英検バンド	スコア(0～1400)	CEFR・ バンドスコア (1.0～9.0、0.5別 み)	スコア(TEAP: 80～400、TEAP CBT 0～800)・ CEFRバンド	スコア(0～120)	スコア(10～690)	スコア(0～400) ※4技能での評価に 加えては0～1000として 公表	
実施形式 (単位: 回)	L、R、W 紙/CB S ペア面接	L、R、W 紙 S 面接/CBT (CBTは全てCBT)	L、R、W 紙 S タブレット (CBTは全てPO)	L、R、W 紙 S 面接	L、R、W 紙 S 面接 (CBTは全てCBT)	CBT	紙	CBT	
受験料 (単位: 円)	D2 Proficiency 25,390 D1 Advanced 22,140 B2 First 19,890 B1 Preliminary 11,800 A2 Key 9,720 (※3)	1級: 8,400 準々: 5,111 2級: 5,800(※4) 準々: 5,111(※4) 3級: 3,800(※4) 準々: 5,111	紙 5,040 紙 6,700 CBT 9,720 CBT 9,720	25,390	6,000 L/R 13,111 L/R/W/S	2,350米ドル	5,725	10,260	

※既存の資格・検定試験と「大学入試英語成績提供システム」準1級試験とで違いがある場合、既存試験は左欄、準1級試験は右欄の欄に情報に記載した。なお、IDP IELTS AustraliaによるIELTSは条件付きで準1級要件を満たしているものとみなすことができると判明されたため、掲載していない。準1級試験に関する情報は予定であり変更がある。

*1全ての試験においてスコアを技能別に表示。 *2: L=Listening(聴く)、S=Speaking(話す)、R=Reading(読む)、W=Writing(書く) *3: 既存試験は実施試験センターにより異なることがあるが、参加試験はレベル別に価格を統一する。 *4: 準会場における受験料は400円引き *5: TEAP、TEAP CBT共にL/Wのみでも受験可能 *6: 開催月により異なる

こちらは、各7団体の試験を比較した表です。

各資格・検定試験とCEFRとの対照表									
文部科学省(平成30年3月)									
CEFR	ケンブリッジ 英語検定	実用英語技能検定 1級～3級	GTEC Advanced Basic Core CBT	IELTS	TEAP	TEAP CBT	TOEFL iBT	TOEIC L&R/ TOEIC S&W	
C2	230 200			9.0 8.5					
C1	199 180	3299 2600	1400 1350	8.0 7.0	400 375	800	120 95	1990 1845	
B2	179 160	2599 2300	1349 1190	6.5 5.5	374 309	795 600	94 72	1840 1560	
B1	159 140	2299 1950	1189 960	5.0 4.0	308 225	595 420	71 42	1555 1150	
A2	139 120	1949 1700	959 690		224 135	415 235		1145 625	
A1	119 100	1699 1400	689 270					620 320	

○ 表中の数値は各資格・検定試験の定める試験結果のスコアを指す。スコアの記載がない欄は、各資格・検定試験において当該欄に対応する能力を有しているとは認定できないことを意味する。

※ ケンブリッジ英語検定、実用英語技能検定及びGTECは複数の試験から構成されており、それぞれの試験がCEFRとの対照関係として測定できる能力の範囲が定められている。当該範囲を下回った場合にはCEFRの判定は行われず、当該範囲を上回った場合には当該範囲の上限に位置付けられているCEFRの判定が行われる。

※ TOEIC L&R/ TOEIC S&Wについては、TOEIC S&Wのスコアを2.5倍して合算したスコアで判定する

※ 障害等のある受験生について、一部技能を免除する場合等があるが、そうした場合のCEFRとの対照関係については、各資格・検定試験実施主体において公表予定。

これは新たに作成しました各資格・検定試験と CEFR との対照表です。➡

大学入学共通テスト実施方針（追加分）（たたき台案）

「大学入学共通テスト実施方針（追加分）」検討・準備グループ
（第12回）資料

大学入学共通テスト実施方針（平成29年7月文部科学省公表）では、「7. 英語の4技能評価」において、「民間の資格・検定試験を活用するとともに、資格・検定試験のうち、試験内容・実施体制等が入学選抜に活用する上で必要な要件を満たしているものを大学入試センターが認定し、その試験結果及びCBFRの段階別成績表示を要請のあった大学に提供する」としており、具体的には大学入試センターにおいて、参加要件を満たしていることが確認された民間の資格・検定試験が参加する「大学入試英語成績提供システム」を新たに設ける予定である。同方針で明らかにされていなかった事項につき、次のとおり定める。

- 1 高校2年時に大学入試英語成績提供システム参加試験（以下「参加試験」という。）を受検し、文部科学省が公表しているCEFR対照表のC1以上に該当する結果を有した者で、次の①～③のいずれかの負担を軽減すべき理由があり、かつ、高校の学びに支障がないと学校長が認めた者は、高校3年の4月から12月の2回に代えて、その結果を活用することができる。

＜負担を軽減すべき理由＞

- ①参加試験のうち、「高校生のための学びの基礎診断」として認定を受けたものを受検した者
- ②非課税所得世帯であるなど経済的に困難な事情を証明できる者
- ③離島・へき地に居住または通学している者

- 2 高校3年の4月から12月を含めた一定期間海外に在住していた者は、高校3年の4月から12月の参加試験と同種同名の海外の試験結果を活用することができる。

- 3 既卒者も含め、病気等のやむを得ない事情により受検できなかった等の者であって特別に配慮すべきとされた者については、前年度の参加試験の結果を活用することができる。

- 4 既卒者については、受検年度の4月から12月の2回までの試験結果を活用することとする。

- 5 障害のある受検生については、障害の内容によって不利益が生じないよう試験結果の取扱いに関して各大学で積極的な配慮を求める。

14

もちろん、各資格・検定試験には、各試験ごとに本来の目的があり、ほとんどは大学入試のために作られている試験ではないのですが、既に大学入試でも御活用いただいております。今後の活用を促進していくためにも、このような表が有益ではないかと考えています。

入学選抜におけるミスに対する文部科学省の対応及び今後のスケジュール（H30年）

1月9日 全大学に対し、改めて入試ミスの防止及び早期発見、特に外部から入試ミスに係る指摘があった場合に適切に対応するよう求める通知を発出

2月1日 入試ミスの防止等のためのルール作りを進めるとともに、各大学の取組状況について調査・把握を行うこと、入試ミスに係る専用の窓口を設置する旨の「文部科学大臣コメント」を公表

2月1日 入試問題のミスの早期発見のため、入試ミスに係る専用の窓口を設置

※ホームページ<http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/1400778.htm>

～6月 大学及び高等学校の関係者等の意見も踏まえ、入試ミスの防止や早期発見のため、解答例等の具体的な開示の在り方などについて検討し、入試ミスの防止等のためのルールを作成

15

なお、これは近日中に発表できると思いますけれども、本年の初頭から、大学入試におけるミスが報じられています。発覚が遅くなり、受験生に大変な御迷惑をお掛けしたような事例がありました。文部科学省としても、大学の関係者、また高校の関係者の御意見を伺いながら、入試ミス防止のための新たなルールを作るために、様々な検討をしているところです。

「大学入試英語成績提供システム」 参加試験ニーズ調査について（概要）

①趣旨	「大学入試英語成績提供システム」参加試験の実施主体に対し、生徒の負担軽減のため、さらに多くの地域における実施や検定料の配慮を求めるため、受験ニーズを把握する
②調査内容	2020年度に大学入学者選抜の受験を希望する高校1年生（平成30年4月現在）が、2020年度に高校3年生となった時、どの試験をいつ、どこで受験することが予測されるか
③回答者	全ての高等学校に、受験の動向を予測した上での回答を依頼
④提出先	公立学校：所管の教育委員会、私立学校：所管の都道府県私立学校担当部課、国公立大学の附属学校：大学の附属学校担当部署
⑤提出期限	各提出先から文部科学省への提出期限は平成30年9月14日（金）まで

調査票イメージ

入力欄 コード	資格・検定試験名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月～ 12月
1	1級								
2	準1級								
3	2級						100		
4	準2級								
5	3級								
23	上記のいずれかの級								
6	ELTS								
7	TEAP								

各学校が、受験希望参加試験の受験希望月に該当する生徒の人数を入力。
※赤丸の場合は、英検2級を9月に受験したい生徒が100人いることを示しています。

※「大学入試成績提供システム」に活用しない高1～高3の受験ニーズの調査（任意）も併せて実施

最後ですけれども、先ほどの英語の話に戻ります。先般、各都道府県宛てに、国公立の高校を対象とした英語の資格・検定試験へのニーズの調査を発送しました。高校側として、現在の1年生が3年生になったときに、どの試験をどのくらい受けそうかという予測を、あくまで分かる範囲で書いてくださいということです。

この調査の目的ですが、これまで資格・検定試験では試験場を設定していなかった地域でも、これが入試に使われるということになると、実は、これだけのニーズがありますよ、ぜひここに試験場を設定する必要があるのではないですかといった情報を得ることです。そういった情報を各資格・検定試験実施団体にお示しすることによって、受験者の経済的な負担の軽減にもつながるのではないかと考えています。

大変予測が難しい部分もありますけれども、ぜひ現在分かる範囲でお答えいただき、御協力をいただければと考えています。私からの御報告は以上とさせていただきます。ありがとうございました。

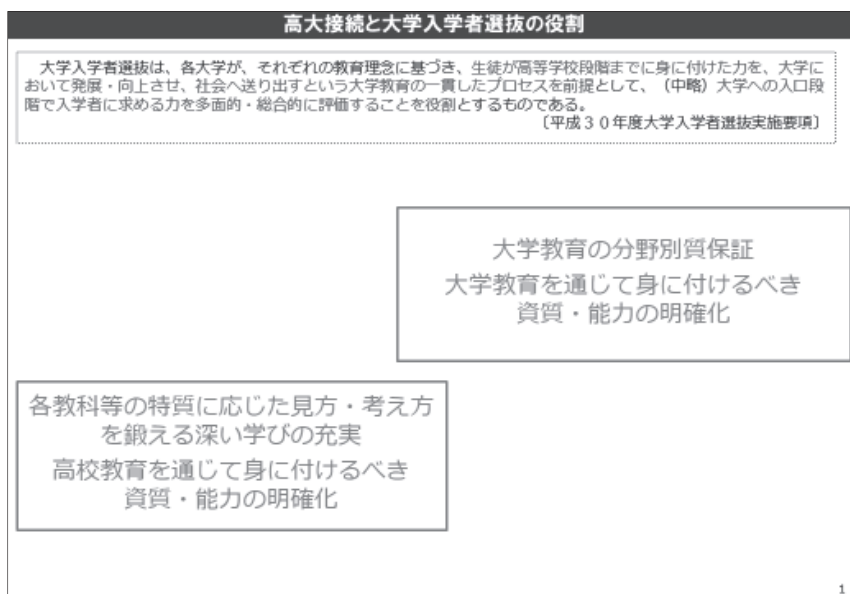
特集 2●報告 2

平成29年度試行調査の分析結果の概要

大杉 住子（大学入試センター審議役）



御紹介いただきました大杉です。今日は昨年（平成 29 年）11 月に実施した「試行調査（プレテスト）」の実施結果の概要についてお話しします。

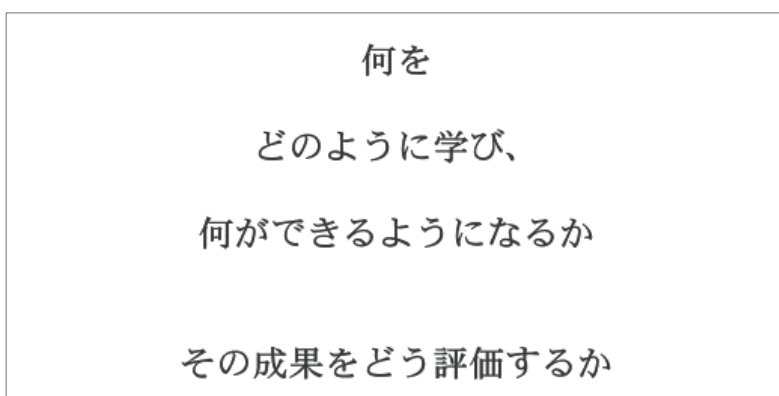


「高大接続」とは、文字どおりには高校教育と大学教育をどのようにつなぐかを考えることですが、それは、学習指導要領や検定教科書に基づく各教科等の学びの成果を、様々な学問領域におけるより主体的な学びにどのようにつないでいくかを考えることにほかなりません。

学校段階間の移行においては、高大間に限らず、例えば幼稚園から小学校に上がる段階でも、総合的な学びから教科等の学びへと移行していくという段階で課題になるわけですが、いずれも、それぞれの学校段階の学びを充実させながら、互いの教育の特質を理解し、その成果を次の段階につないでいくための工夫が求められるところです。

■／何をどのように学び、何ができるようになるかを明確にして、しっかりと子供たちの力を育んでいく。

高大接続の場面で行われている大学入学者選抜の役割について、「大学入学者選抜実施要項」では「生徒が高等学校段階までに身に付けた力を、大学において発展・向上させ、社会へ送り出すという大学教育の一貫したプロセスを前提として、（中略）大学への入口段階で入学者に求める力を多面的・総合的に評価する」こととされています。今般導入される「大学入学共通テスト」につきましても、大学への入り口段階で、受験する全ての高校生に共通に求められる力とはどのような力なのかを考えていくことが重要になります。



初等・中等教育段階では、主体的・対話的で深い学びを通じた、資質・能力の育成が図られています。そして大学教育におきましても、各分野別の質保証、あるいは三つのポリシーの明確化を通じて、卒業までにどのような力を育成するのかという観点から教育の質的向上が目指されています。いずれも、それぞれの学校段階の特色を踏まえながら、何をどのように学び、何ができるようになるかを明確にして、しっかりと子供たちの力を育んでいく。そして、その間の大学入学者選抜で、高校教育の成果として身に付いた力を、どのように次の段階につないでいくかが問われているということです。

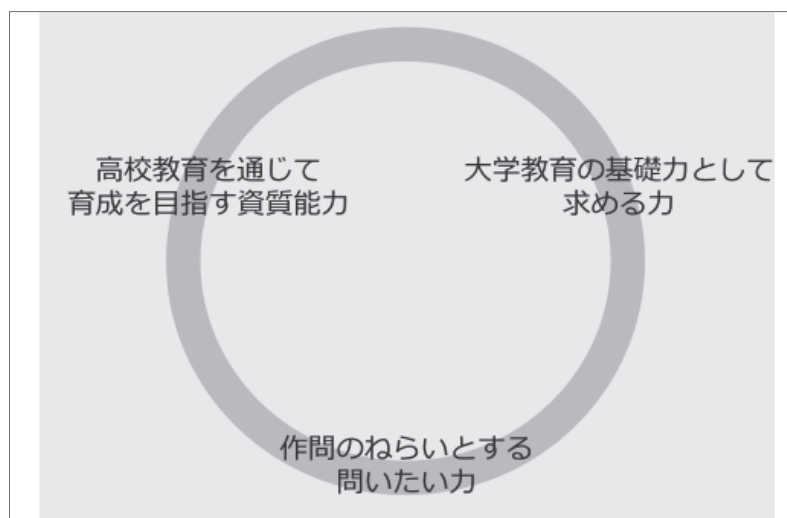
第2問 問題のねらい

図表や写真が含まれた論理的な文章を題材としている。図表や写真と文章とを関連付けながら、構成や展開をとらえるなど、テキストを的確に読み取る力を問うとともに、設問中に示された条件に応じて考えを深め、テキストの内容と結び付き情報とそれらの適切な論理の展開を判断する力を問う。

解答 番号	高等学校学習指導要領の内容	主に問いたい資質・能力		小問の概要	正答率 (%)
		知識・技能	思考力・判断力・表現力		
問1		言葉の特徴や使い方にに関する知識・技能 (文や文章)	目的等に応じて情報をとらえ、テキスト全体の要旨を把握することができる。	テキストの中における語句の意味を文脈に即して適切にとらえる。	53.6
					32.0
問2	C 読むこと (1) イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。	言葉の特徴や使い方にに関する知識・技能 (文や文章)	テキスト全体を通じて対比されている事項について考察し、共通点や相違点を整理することができる。	図の内容を踏まえ、テキストの中で言及されている二つの事例を対比しながら適切に整理する。	61.8
問3		言葉の特徴や使い方にに関する知識・技能 (文や文章)	目的等に応じて情報をとらえ、テキスト全体の要旨を把握することができる。	テキストに示されている図の内容について、文章との関連において適切にとらえる。	19.2

そうした中で、平成29年11月に実施した試行調査におきましては、大学入学共通テストの2020年からの導入を見据えまして、より各作問のねらいを明確にし、高校関係者や大学関係者をはじめとする関係者の中で、どのような力を問おうとするのかという共通理解が促されるような設計がなされています。

ここには、国語の「第2問 問題のねらい」とありますが、今回の試行調査では、このように出題のねらいも公表しています。表の中央の列が「主に問いたい資質・能力」となっており、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」の双方が示されています。「知識・技能」だけを問う問いはありますが、思考力だけを問う問いはなく、知識と思考力をセットで問われます。知識があるからこそ思考も発揮でき、思考があるからこそ知識が深まるという関係が意識されているわけです。



私どもは、高校の先生方が教科ごとに育もうと考えている力、それから、大学側が大学教育の基礎力として入り口で求める力、そして、私どもが大学入学共通テストで問いたい力、これらをしっかりとつなげるようなねらい作りが重要であると考えています。共通テストで問いたい力は、いろいろな議論の中で今後も少しずつ進化はしていくと思いますけれども、ある年から問いたい思考力ががらりと変わるといことではありません。共通テストとして問いたい力を、高校関係者、大学関係者と共有させていただきながら、作問していく体制を整えているわけです。

[illegible]

「【国語】作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」，及びそれらと出題形式との関係についてのイメージ」とありますが，これも右上に，「検討中」とあるように，これからも議論を続けながら仕上げていくものです。高校関係者と大学関係者からなるワーキンググループを教科ごとに設置しまして，作問の前提として，どういう力を問いたいのかを整理をしながら進めています。

これは国語の例ですが、表の左の列の見出しには①から④まで記されています。①～②は、テキストの内容、構造を把握、解釈する力。①がテキストの部分について。②がテキスト全体についてとなっています。③は、解釈したものに基づく考えを整理して表すという力。そして④には、もう少し豊かに、自分の考えを発展的に表現するということを書いてありますけれども、残念ながら、共通テストの枠組みの中では、この④までは問うことはできません。共通テストの記述式で問う思考力、判断力、表現力は、③の部分までです。④については個別入試において多面的、多角的に評価していただくことで、総合的にこの表全体の力を問うことができるよう、共通テストとの役割分担ができればと考えています。

【数学】作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」、及びそれらと出題形式との関係についてのイメージ（素案）					検討中
※試行調査の結果、分析の結果及び高等学校学習指導要領の見直しの内容等を踏まえ、更に整理する。 ※作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」と出題形式との関係は、例として挙げているものであり、同じ学習指導要領によって採 取の出題形式等でも同様の可能性もあろう。					
ア	イ	ウ	エ	オ	
日常生活や社会の問題を数理的にとらえること 数学の事象における問題を数学的にとらえること	数学を活用した問題解決に向けて、構図・変通を立てること	焦点化した問題を解決すること	解決過程を振り返り、得られた結果を意味づけたり、活用したりすること 解決過程を振り返りなどして概念を形成したり、具体化したりすること	数学的な表現を用いて表現すること	
日常生活や社会の問題における事象の整理に資して数学的な問題を思いだすことができる	数学的な問題を整理を思いだすことができる（問題力）	焦点化した問題を目的に応じて数・式・図表、グラフなどを活用し、一定の事象にしたがって数学的に処理することができる	解決過程を振り返り、得られた結果を元の事象に照らしてその意味を考察することができる		
日常生活や社会の問題における事象の特徴をとりえて数学的な表現を用いて表現する（事象を数理化すること）ができる	数学的な問題を解決するための変通を立てることができる（変通力）	焦点化した問題を数学的な能力・考え方を基に、的確かつ数学的に処理することができる	解決過程を振り返り、得られた結果を様々な事象に活用することができる		
数学の事象から問題を思いだすことができる		焦点化した問題を解決することについて、論理的に考察することができる（論議・推察、説明）	解決過程を振り返りなどして、数学的な能力・考え方を思いだすことができる		
数学の事象から問題をとりえ、数学を学ぶことができる			解決過程を振り返りなどして、得られた結果を基に論理的に検討し、体系的に組み立てていくことができる		
数学の事象から得られた結果を基に拡張・一般化することができる			解決過程を振り返りなどして、数々の問題を基に論理的に検討し、体系的に組み立てていくことができる		
			解決過程を振り返りなどして、数々の問題を基に論理的に検討し、体系的に組み立てていくことができる		
			解決過程を振り返りなどして、数々の問題を基に論理的に検討し、体系的に組み立てていくことができる		
			解決過程を振り返りなどして、数々の問題を基に論理的に検討し、体系的に組み立てていくことができる		
日常生活や社会の問題を数学的にとらえ、問題に似た条件等を整理することができる	問題解決の過程等を理解したり、その過程となる数学的な能力・考え方を整理することができる	数学における基本的な概念や原理・法則等の理解を基に、公式や定理等を用いて問題を解決する活法を整理することができる	得られた結果の数学的な意味や他の方法で解決する立場等を思いだし、説明することができる	数学的な表現を用いた説明を整理したり評価したりすることができる	
特定の条件下に成り立つ性質が、一般の場合でも成り立つかを考える整理することができる	成り立つことが予想される数学的な事象・事象を、数学的な表現を用いて整理することができる	問題場面における数値関係を式に置き換えることができる	解決過程を振り返りなどして概念を形成したり、具体化したりして概念・数値的に考えられる問題を数学的に表現することができる	結果に応じて、自分の考えなどを数学的な表現を用いて説明することができる	
日常生活や社会の問題について、条件を設定したり、数学の事象について、条件を設定したりして新たな問題をつくること	条件が与えられた問題を整理する、あるいは問題となる数学的な能力・考え方を整理することができる	問題場面における数値関係を式に置き換えることができる	得られた結果の数学的な意味や他の方法で解決する立場等を思いだし、説明することができる	数学的な表現を用いた説明を整理したり評価したりすることができる	
日常生活や社会の問題について、条件を設定したり、数学の事象について、条件を設定したりして新たな問題をつくること	条件が与えられた問題を整理する、あるいは問題となる数学的な能力・考え方を整理することができる	問題場面における数値関係を式に置き換えることができる	得られた結果の数学的な意味や他の方法で解決する立場等を思いだし、説明することができる	数学的な表現を用いた説明を整理したり評価したりすることができる	
日常生活や社会の問題について、条件を設定したり、数学の事象について、条件を設定したりして新たな問題をつくること	条件が与えられた問題を整理する、あるいは問題となる数学的な能力・考え方を整理することができる	問題場面における数値関係を式に置き換えることができる	得られた結果の数学的な意味や他の方法で解決する立場等を思いだし、説明することができる	数学的な表現を用いた説明を整理したり評価したりすることができる	

次は数学の例ですけれども、共通テストでは、2重線から上の①、②までの力を、記述式問題も含めて問うていくということです。

【歴史】作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」についてのイメージ（素案）

検討中

※試行調査の結果、分析の結果及び高等学校学習指導要領の見直しの内容等を踏まえ、更に整理する。

【考査・表現力】

- 歴史に関わる諸事象等の意味や意義、特色や相互の関係について、概念等を用いて多面的・多角的に考察することができる
- 歴史に現れる課題を整理し、その解決に向けて構想することができる
- 複数の立場や意見を踏まえて解決に向けて選択・判断することができる

【説明】

- 考察したことや構想したことを適切な資料・内容や表現方法を選び効果的に説明したり、それらに基づき議論したりすることができる
- 学習課題を振り返り、得られた結果をまとめたり、結論について検証することができる
- 新たな問い（課題）を思いだしたり追究したりすることができる

○作問にあたっての場面設定の工夫例

- ・歴史的観点から資料を活用して探究し、その成果を論述したり討論したりするなどの活動を通して、現代につながる課題について自分の意見を形成する場面
- ・歴史的観点から資料を活用して探究し、その成果を論述したり討論したりする活動を通して、新たな課題を思いだす場面

大学入学 共通テスト において 問いたい 「思考力・ 判断力・ 表現力」	資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを整理することができる	考察したことや構想した過程や結果を、理由や根拠に基づいてまとめることができる
	歴史的事象を時系列的にとらえることができる（時系列）	
	資料から読み取った情報や習得した知識を活用して、歴史的事象の展開について考察することができる（脈絡や変遷）	
	複数の歴史的事象を比較して共通性や差異をとらえることができる（諸事象の比較）	
	地域世界との接触や交流などが歴史的事象にどのように作用したのかを明らかにすることができる（事象相互のつながり）	
	背景、原因、結果、影響に着目して歴史の諸事象相互の関係を明らかにすることができる（事象相互のつながり）	
	歴史的事象の多面的・多角的な考察を通して、日本や世界の歴史の展開や歴史的な意味や意義をとらえることができる	
	習得した歴史的観念を活用し、現代的課題に応用することができる	

《注》構想については、社会科学科群に見られる課題の解決に向けて、広い視野から構想（選択・判断）することを示している。（参考：『平成28年12月21日中央教育審議会答申』より）

○自由記述では、以下のような考えの可能性がある。

- ・歴史的な事象を多面的・多角的に考察して、論理的・体系的に整理することができる
- ・歴史的な事象について考察したことを踏まえて、課題の解決に向けた自分の意見を形成して、適切に表現することができる
- ・考察したことや構想したことなどから、新たな課題を思いだして追究することができる

歴史については、このように整理しています。「考察、構想」の力と「説明」の力に分かれていますけれども、マーク式問題ですので、どうしても説明の力については少し薄くなっています。ただし、例えば資料を活用して探究し、その成果を論述

することを念頭に置いて作問するというような、説明のために能動的に資料を読むような場面設定の工夫などは検討しています。

【地理】作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」についてのイメージ（素案）		検討中
※試行調査の結果・分析の結果及び高等学校学習指導要領の見直しの内容等を踏まえ、更に整理する。		
【考察・留意(注)】	【説明】	
●地理に関わる諸事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察することができる ●地理的な課題を把握し、その解決に向けて構想することができる ●複数の立場や意見を踏まえて解決に向けて選択・判断することができる	●考察したことや構想したことを適切な資料・内容や表現方法を選び効果的に説明したり、それらに基づき議論したりすることができる ●学習課題を振り返って結論をまとめることができる ●結論について検証することができる ●新たな問い（課題）を見いだしたり追究したりすることができる	
大学入学 共通テスト において 「思考力・ 判断力・ 表現力」	事象について位置や分布などからとらえ考察することができる	地理的事象を多面的・多角的に考察した過程や結果を、理由や根拠に基づいてまとめることができる
	事象が生起している場所の特徴をとらえ考察することができる	
	地理的事象について人間や社会と自然環境との相互依存関係などの関わりをとらえ考察することができる	
	地理的事象について空間的相互依存作用など地域間の様々な関係をとらえ考察することができる	
	地域的特色について多面的・多角的に考察することができる	
	地理的な課題について多面的・多角的に考察し、解決策を合理的に構想（選択・判断）することができる	
【注】議題については、社会科学科科目に見られる課題の解決に向けて、広い視野から構想（選択・判断）することを示している。（参考：『平成28年12月21日中央教育審議会答申』より） ○自由記述では、以下のことを問える可能性がある。 ・事象などの資料を、適切に作成することができる ・地理的事象を多面的・多角的に考察し、構想した結果、地域調査や調査資料などの根拠に基づいて論理の構築・効果的に表現することができる ・地理的事象や地理的な課題の解決について、自らが検討し、加えて意見を形成し、適切に表現することができる ・課題に対して、具体的な解決策を提案することができる		

【現代社会】作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」についてのイメージ（素案）		検討中
※試行調査の結果・分析の結果及び高等学校学習指導要領の見直しの内容等を踏まえ、更に整理する。		
【考察・留意(注)】	【説明】	
●社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連について、概念等を活用して多面的・多角的に考察することができる ●現代社会に見られる課題を把握し、その解決に向けて構想することができる ●複数の立場や意見を踏まえて解決に向けて選択・判断することができる	●考察したことや構想したことを適切な資料・内容や表現方法を選び効果的に説明したり、それらに基づき議論したりすることができる ●学習課題を振り返って結論をまとめることができる ●結論について検証することができる ●新たな問い（課題）を見いだしたり追究したりすることができる	
大学入学 共通テスト において 「思考力・ 判断力・ 表現力」	社会的事象等をとらえるいくつかの「考え方」に基づいて内容を考察し、関連性や社会的な意味をとらえることができる	社会的事象等を多面的・多角的に考察した過程や結果を、理由や根拠に基づいてまとめることができる
	概念や理論を活用し、制度や政策の本質や日常生活に見られる人々の行為の意味をとらえることができる	
	社会的事象等をとらえる概念や理論を活用し、他の社会的事象等をとらえることができる	
	社会的事象等をとらえる概念や理論を活用し、原因と結果の関連性について考察することができる	
	社会的事象等を多面的・多角的に考察し、課題の解決に向けて、公正に判断することができる	
	様々な立場からの主張を、根拠に基づいて多面的・多角的に考察し、課題の解決に向けて、公正に判断することができる	
【注】議題については、社会科学科科目に見られる課題の解決に向けて、広い視野から構想（選択・判断）することを示している。（参考：『平成28年12月21日中央教育審議会答申』より） ○自由記述では、以下のことを問える可能性がある。 ・社会的事象等を考察するにあたって、自ら課題を設定し、適切な資料や方法を用いて考察することができる ・社会的事象等を多面的・多角的に考察し、自らが検討した過程や結果を調査資料などの根拠に基づいて論理の構築・効果的に表現することができる ・社会的事象等を多面的・多角的に考察した過程や結果を踏まえ、課題解決に向けて自分の意見を形成し、適切に表現することができる ・考察したことや構想したことから、新たな課題を見いだすことができる		

【理科】作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」についてのイメージ（素案）					検討中
科学的な自然観を育成するための各領域における特徴的な見方 ●エネルギー（主に、物理）：量的・図画的な視点 ●粒子（主に、化学）：質的・実体的な視点 ●生命（主に、生物）：多様性と共通性の視点 ●地球（主に、地学）：時間的・空間的な視点 ※試行調査の検証・分析の結果及び高等学校学習指導要領の見直しの内容等を踏まえ、更に整理する。					
課題の把握	課題の探究（追究）		課題の解決		
抽出・整理した情報について、それらの関係性や傾向を見いだすとともに、課題を設定することができる	見通しをもち、検証できる仮説を設定し、それを確かめるための観察・実験の計画を評価・選択・決定することができる	観察・実験等の結果を分析・整理することができる	仮説の妥当性を検討したり、考察したりすることができる	全体を振り返って再論したり、次の課題を発見したり、新たな知識やモデル等を創造したりすることができる	
大学入学共通テストにおいて問いたい「思考力・判断力・表現力」	図・表や資料等から、自然の事物・現象に係る情報を、原理・法則に従って抽出し、関係性などを発見することができる	自然の事物・現象に係る仮説を立て証するため、原理・法則に従い、その方法・過程などを決めることができる	自然の事物・現象に係る基本的な概念と、観察・実験等の結果などから得た情報を、原理・法則に従って統合することができる	観察・実験等の結果から考察した情報と、自然の事物・現象の基本的な概念との整合性を、原理・法則に従って判断することができる	自然の事物・現象の基本的な概念を基に、見いだした課題について、原理・法則に従って再論することができる
	図・表や資料等に基づき、設定した条件で自然の事物・現象に係る情報を、原理・法則に従い、整理することができる	自然の事物・現象の基本的な概念を活用し、原理・法則に従って新たな情報を基に仮説を立てることができる	自然の事物・現象に係る基本的な概念を基に、原理・法則に従って情報を一定の条件で処理することができる	自然の事物・現象に係る新たな得た情報と、結果などから得た情報を、原理・法則に従って統合することができる	探究活動を振り返り、自然の事物・現象に係る新たな課題について、原理・法則に従って再設定することができる
		自然の事物・現象に係る情報を検証し、設定する条件などについて、原理・法則に従い判断することができる	新たな情報や、自然の事物・現象の基本的な概念によって、整理・説明することができる	自然の事物・現象に係る様々な情報を、原理・法則に従って整理するときに根拠を見いだすことができる	
			自然の事物・現象に係る基本的な概念及び観察・実験の結果などを、原理・法則に従って比較分析することができる	自然の事物・現象に係る数値的な情報を一定の条件で行い、その結果を基に、原理・法則に従って考察することができる	
			自然の事物・現象に係る場について、原理・法則に従って帰納し、グラフ等を活用して分析することができる		

理科の場合は、問いたい思考力等という点では、共通した課題の探究プロセスを前提にこういった整理をさせていただいています。

今回の試行調査におきましても、次の11月の試行調査におきましても、こうした整理をしながら、どういう知識や思考力等を問いたいのかを検討しながら作問を進めているところです。

試行調査問題の趣旨
高等学校学習指導要領において育成を目指す資質・能力に準拠し、知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題しています。 【国語】言語を手がかりとしながら、与えられた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じた文章を書いたりすることなどか求められます。大問ごとに固定化した分野から一つの題材で問題を作成するのではなく、分野を越えて題材を組み合わせたり、同一分野において複数の題材を組み合わせたりする問題も含まれます。

今回の試行調査の問題では、「知識の理解の質を問う問題」や「思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題」を重視しています。

科目ごとの問題作成の方向性としては、例えば国語においては、複数の題材を組み合わせたり、分野を越えた題材を組み合わせた問題も含まれることとしたところです。

試行調査問題の趣旨

【数学】事象の数量等に着目して数学的な問題を見いだすことや、目的に応じて数・式、図、表、グラフなどを活用し、一定の手順に従って数学的に処理することなどが求められます。日常の事象や、数学のよさを実感できる題材、受検生が既知ではないものも含めた 数学の事実、定理等を既知の知識等を活用しながら導くことのできるような題材等も取り扱うこととしています。

【理科】自然の事象の中から本質的な情報を見だし、課題の解決に向けて主体的に考察・推論することが求められます。教科書等では扱われておらず受検生にとって既知ではない 資料等を分析的、総合的に考察することができるかという、深い理解を伴う知識や思考力等を問う問題や、仮説を検証する過程で、数的処理を伴う思考力等が求められる問題 なども含まれます。

12

数学では、図、表、グラフを活用したり、あるいは、日常生活の中からの課題の発見、解決を求めたりする問題も重視しました。

理科では、既知ではない資料を基に分析、考察するような問題も出題されています。

試行調査問題の趣旨

【歴史】用語に関する知識ではなく、事象の意味や意義、特色や相互の関連等に関する理解が求められます。教科書等で扱われていない初見の資料についても、そこから得られた情報と授業で学んだ 知識を活用しながら、仮説を立てたり、歴史的事象の展開を考察したりすることができるかどうかを問う問題や、時代や地域によらず「歴史の見方」のようなテーマを設定した問題、時間軸を長く取った時代を貫く問題なども含まれます。

【現代社会】文章や資料をしっかりと読み解きながら、重要な概念や理論等を活用して考察することが求められます。身近な社会的事象に重要な概念や理論等を適用して考察する問題や、各種の統計など多様な資料を読み解き、さまざまな立場から考察する問題などが含まれます。

13

歴史では、仮説を立てたり、歴史的事象の展開を考察したりすることができるかを問う問題や、時代や地域によらず「歴史の見方」のようなテーマ設定をしたような問題、時間軸を長く取った問題が出題されています。

現代社会では、文書や資料をしっかりと読み解きながら考察する問題が重視されています。

センター試験の蓄積を生かして新テストへ

- 大学入試センターでは、センター試験の問題評価を行うために、試験問題評価委員会を設置。出題された試験問題の内容、程度、出題方法等について意見・評価。
- 現行センター試験の問題は、高校における日常の教育活動を踏まえつつ、大学教育の基礎力を適切に問う問題として評価されている。
- さらなる良問作成に向け工夫・改善が必要な点として、例えば、高大接続システム改革会議最終報告において「単なる知識の量や細かな知識の有無のみにより評価を行うことがないよう、作問の改善を図ることが重要である」と指摘された歴史系科目や生物などについて、より歴史的思考力を問う設問や、科学的な探究活動を取り入れた設問の重要性などのご意見をいただいているところ。

大学入学共通テストにおいては、こうした方向性の問題作成方針が検討されているわけですが、これは全く新しい方向性というわけではなく、現行のセンター試験における工夫・改善の蓄積の上に、さらにその先を目指すということになるわけです。センター試験の問題は、作問委員の先生方がおよそ2年間かけて作っていますが、毎年、実施した後に高校の先生方、あるいは関係学会の先生方の御意見や評価を頂きながら、常に改善を重ねてきています。おおむね良問であるという高い評価を頂いていますけれども、さらなる改善に向けてのアドバイスも頂いているわけです。

■国語におきましては、もう少し言語活動を取り入れた問題ができないかなどの提案は毎回頂いています。

例えば理科においては、もう少し実験、観察を通じた探究的な活動を取り入れた問題を出すことができないか。あるいは、歴史では資料の読み解きなども通じて、さらなる歴史的思考力を問うような問題ができないか。また国語におきましては、もう少し言語活動を取り入れた問題ができないかなどの提案は毎回頂いています。こうした御意見も踏まえながら、この新テストへの移行を契機としまして、問題のさらなる充実を図っていくということです。

探究の過程等をより重視した問題のイメージ

- ✓ 授業において生徒が学習する場面の設定
- ✓ 社会生活や日常生活の中から課題を発見し、解決方法を構想する場面の設定
- ✓ 資料やデータ等をもとに考察する場面の設定

「探究の過程等をより重視した問題のイメージ」ということですが、問題作成のねらいとする力を問うための場面設定として、作問チームはこうした場面設定を重視しています。授業において、生徒が学習する場面の設定。あるいは、社会生活や、日常生活の中から課題を発見して、解決方法を構想する場面の設定。また、授業で学んだ知識や既知ではない資料やデータを基に考察する場面の設定。高校の授業で身に付けた知識や思考力が、教科書の場面だけではなくて、新しい場面でも発揮できるかどうかを問うために、受験生にとって既知ではない資料やデータも敢えて提示してみる。そういった工夫もしてきているということです。扱われる題材は新しいものに見えても、使うのはあくまで、授業で身に付けた知識や思考力です。

11月の試行調査では、おおよそ全ての大問について、これらの場面設定を重視して出させていただきましたけれども、現実的には解答時間とのバランスがあります。従来のセンター試験における問題作成の蓄積の上に、知識の理解をストレートに問うような問題と、設定された場面の中で少しじっくり考えさせるような問題のバランスを取りながら、出題していくことになると思います。

■文学は出題されなくなるのではないかという誤解も一部にありましたけれども、国語は試験時間が延長されることになり、文学作品もしっかり出題されます。

それでは、試行調査における具体的な問題を御紹介しましょう。

国語では、これは生徒会規約ですけれども、このような実用的な文章も題材になります。この新しいジャンルに注目が集まることによって、文学は出題されなくなるのではないかという誤解も一部にありましたけれども、国語は試験時間が延長されることになり、文学作品もしっかり出題されます。➡

【資料3】

部活動に関する生徒会への主な要望

要望の内容	要望したクラス	生徒会長見解に 回答された数
ダンス部の設立	1年A組 1年B組 1年C組	35議
部活動の終了時間の延長	1年D組 2年C組 2年D組	25議
シャワー室の改修	3年A組 3年B組 3年C組	34議
照明機器の増設	2年A組 2年B組 2年C組	34議
審判見直しの見直し	3年C組	34議
同好会規定の見直し	2年B組	34議

【資料2】

青高生の主張

「部活動の充実」に関するアンケート結果

第一位は「部活動の充実」

第二位は「部活動の充実」

第三位は「部活動の充実」

第四位は「部活動の充実」

第五位は「部活動の充実」

第六位は「部活動の充実」

第七位は「部活動の充実」

第八位は「部活動の充実」

第九位は「部活動の充実」

第十位は「部活動の充実」

青原高等学校 生徒会活動規約

第一章 総則

第1条 本規約は青原高等学校生徒会によって制定する。

第2条 本規約は生徒会活動委員会によって制定する。生徒会活動委員会は生徒会本部役員と各部の部長によって構成する。

第3条 生徒会本部役員は、生徒会本部役員と各部の部長によって構成する。

第4条 生徒会活動委員会には、委員会の円滑な運営のため、次のように構成する執行部を置く。

委員長 各部の部長のうちから1名
副委員長 生徒会本部役員のうちから1名
執行部代表 各部の部長のうちから1名
文化部長 文化部長のうちから1名

第二章 部の運営

第5条 部活動は部員の自主的・自発的活動によって部員の興味・関心を高めると同時に、人間性を高め、研究活動の充実、技術の向上を図ることを目的とする。

第6条 部活動として次の部を置く。

体育部 硬式野球部 ソフトボール部 サッカー部 剣道部
卓球部 バスケットボール部 バドミントン部 テニス部
文化部 吹奏楽部 演劇部 茶道部 美術部 音楽部
新設部 同好会

第7条 生徒は自由意志により所定の申請書を取り、どの部にも所属できる。

第8条 原則として、一人の生徒が複数の部に所属すること(兼部)は禁止する。ただし、体育部と文化部との兼部については、双方の顧問の了解が得られれば可能とする。

第9条 各部は部長・副部長を選挙する。

第10条 部活動の終了時間は17時とする。

第11条 休日は、祝日は顧問が必要と認めた場合、顧問の指導のもとに、午前中又は午後の平日部活動を行うことができる。

第三章 部の新設・廃止・転部

第12条 部の新設は、同好会として3年以上活動していることを条件とする。

第13条 条件を満たし、部として新設を希望する同好会は、当該年度の4月第2週までに、所定の様式に必要事項を記入し、生徒会活動委員会に提出することとする。なお、提付期限に達した場合は、部の新設は次年度以降とする。

第14条 部の新設には、生徒会において出席者の過半数の賛成を必要とする。

第15条 部長数が2名未満であり、その活動も不況な状態が3年以上続いたと認められる場合、生徒会活動委員会において審議の上、廃止とする。

第16条 休部の状態が2年以上続いた場合、生徒会の議決を経て、廃止とする。

第四章 同好会

(以下略)

以前、モデル問題として駐車場の利用契約が題材として出され、これは果たして国語の問題なのかと話題になりましたけれども、これも法律上の知識を要する問題ではなく、言葉の力で捉えて必要な情報を考え、構成していくような問題です。どんなに大事なことで同じことは繰り返さないという法律的文章の特徴を踏まえながら、その言語活動の場面に応じて必要な情報はどこになるのか、等価値で並べられた条文の中から、必要な情報を取り出して場面に応じて構成するという力を問うています。

■内容面の条件に加えて、示された文字数で表現されているかどうかといった形式面の条件も求められます。

正答の条件が全て満たされていても、全く同じ表現にはなりません。表現は異なりますけれども、採点においては、正答の条件を満たしているかどうかのチェックをしていくことになります。内容面の条件に加えて、示された文字数で表現されているかどうかといった形式面の条件も求められます。

2020 年からの本番に向けて、句読点の扱いや禁則処理、字下げの扱いなど、形式面の条件に関わる表記のルールをまとめているところです。そのルールが、高校の国語教育を通じて、受験生にしっかり伝わるようにしなければいけないと思っています。

数学ですけれども、この問題は授業で生徒がコンピュータのグラフ表示ソフトを使って学習する場面を想定しています。将来的には CBT などが可能になれば、動きを示して出題したいような設問なのですが、いまのところは、紙ベースでこのように図示しています。不等式を用いて理由を説明せよという記述式の問題になっています。

■対話文にすることによって、問題解決の結果だけではなくて過程を可視化し、プロセスの吟味を求める出題とすることをねらいとしています。

今回の正答率を考えると、今回の試行調査の問題のように数式と文章を交えてここまで書かせる問題を出題するのはちょっと厳しいかなとも思います。将来的には、こういう問題を目指していきたいわけですが、記述式問題が初めて導入される開始当初については、もう少しシンプルな数式や短文で表記してもらおうという方向で、次回試行調査の問題作成を進めています。

〔2〕以下の問題では、 $\triangle ABC$ に対して、 $\angle A$ 、 $\angle B$ 、 $\angle C$ の大きさをそれぞれ A 、 B 、 C で表すものとする。

ある日、太郎さんと花子さんのクラスでは、数学の授業で先生から次のような宿題が出された。

宿題 $\triangle ABC$ において $A = 60^\circ$ で $X = 4 \cos^2 B + 4 \sin^2 C$ の値について調べなさい。

放課後、太郎さんと花子さんは出された会話を読んで、下の問いに答えよ。

太郎： $B = 13^\circ$ にしてみよう。数学の教科書に三角比の表があるから、それを見ると、 $\cos B = 0.9744$ で、 $\sin C$ は……あれっ？ 表には 0° から 90° までの三角比の値しか載っていないから分からないね。

花子：そういうときは、キ という関係を利用したらいいよ。この関係を使うと、教科書の三角比の表から $\sin C =$ ク だと分かるよ。

太郎：じゃあ、この場合の X の値を電卓を使って計算してみよう。 $\sqrt{3}$ は 1.732 として計算すると……あれっ？ ぴったりにはならなかったけど、小数第 4 位を四捨五入すると、 X は 1.000 になったよ！

(a) これで、 $A = 60^\circ$ 、 $B = 13^\circ$ のときに $X = 1$ になることが証明できたことになるね。さらに、(b) 「 $A = 60^\circ$ ならば $X = 1$ 」という命題が真であると証明できたね。

花子：本当にそうなのかな？

この問題も授業の場面を設定していますが、対話文にすることによって、問題解決の結果だけではなくて過程を可視化し、プロセスの吟味を求める出題とすることをねらいとしています。

第2問（必答問題）

〔1〕〇〇高校の生徒会では、文化祭でTシャツを販売し、その利益をボランティア団体に寄付する企画を考えている。生徒会執行部では、できるだけ利益が多くなる価格を決定するために、次のような手順で考えることにした。

価格決定の手順

(i) アンケート調査の実施
200人の生徒に、「Tシャツ1枚を購入してもよいと思う価格」を1500円、2000円の四つの金額から選ぶ。

(ii) 業者の選定
無地のTシャツ代とプリント代を比較し、最も安い業者を選ぶ。

(iii) Tシャツ1枚の価格の決定
価格は「製作費用」と「見込まれたい利益」の合計に釣り銭の処理で手間取らないように決める。



(i) 売上額は

$$(\text{売上額}) = (\text{Tシャツ1枚の価格}) \times (\text{販売数})$$

と表せるので、生徒会執行部では、アンケートに回答した200人の生徒について、調査結果をもとに、表1にない価格の場合についても販売数を予測することにした。そのために、Tシャツ1枚の価格を x 円、このときの販売数を y 枚とし、 x と y の関係を調べることにした。

表1のTシャツ1枚の価格と「ア」の値の組を (x, y) として座標平面上に表すと、その4点が直線に沿って分布しているように見えたので、この直線を、Tシャツ1枚の価格 x と販売数 y の関係を表すグラフとみなすことにした。

このとき、 y は x の「イ」であるので、売上額を $S(x)$ とおくと、 $S(x)$ は x の「ウ」である。このように考えると、表1にない価格の場合についても売上額を予測することができる。

〔2〕地方の経済活性化のため、太郎さんと花子さんは観光客の消費に着目し、その拡大に向けて基礎的な情報を整理することにした。以下は、都道府県別の統計データを集め、分析しているときの二人の会話である。会話を読んで下の問いに答えよ。ただし、東京都、大阪府、福岡県の3都府県は含まれていない。また、以後の問題文では「道府県」を単に「県」として表記する。

第3問（選択問題）

高速道路には、渋滞状況が表示されていることがある。目的地に行く経路が複数ある場合は、渋滞中を示す表示を見て経路を決める運転手も少なくない。太郎さんと花子さんは渋滞中の表示と車の流れについて、仮定をおいて考えてみることにした。

A地点（入口）からB地点（出口）に向かって北上する高速道路には、図1のように分岐点A、C、Eと合流点B、Dがある。①、②、③は主要道路であり、④、⑤、⑥、⑦は迂回道路である。ただし、矢印は車の進行方向を表し、図1の経路以外にA地点からB地点に向かう経路はないとする。また、各分岐点A、C、Eには、それぞれ①と④、②と⑤、③と⑥の渋滞状況が表示される。

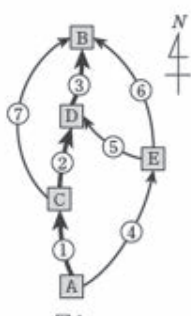


図1

Tシャツの販売価格の決定や高速道路の渋滞予測といった、身近なテーマや社会的な課題に数学の学びを使うという問題も出題されています。➡

(1) 下の図の点線は $y = \sin x$ のグラフである。(i), (ii)の三角関数のグラフが実線で正しくかかれているものを、下の①～⑧のうちから一つずつ選べ。ただし、同じものを選んでよい。

(i) $y = \sin 2x$ ケ (ii) $y = \sin\left(x + \frac{3}{2}\right)$

(2) 次の図はある三角関数のグラフである。その関数の式として正しいものを、下の①～⑦のうちからすべて選べ。 サ

① $y = 2 \sin\left(2x + \frac{\pi}{2}\right)$ ④ $y = 2 \cos\left(2x + \frac{\pi}{2}\right)$ ⑦ $y = \cos 2\left(2x - \frac{\pi}{2}\right)$

② $y = 2 \sin 2\left(x + \frac{\pi}{2}\right)$ ⑤ $y = 2 \cos 2\left(x - \frac{\pi}{2}\right)$

③ $y = \sin 2\left(2x - \frac{\pi}{2}\right)$ ⑥ $y = 2 \cos 2\left(x + \frac{\pi}{2}\right)$

これは、「正しいものを全て選べ」という解答形式の問題です。同じグラフでも、数式の表し方はいろいろあるわけです。一問で複数マークする場合に、マーク読み取り上の支障がないか技術的な検証も進めています。次の試行調査ではもう一度、この「全て選べ」問題を出させていただきますけれども、その技術的な検証と併せて、試験本番で出題するかどうかの方針を決めて、お知らせすることになろうと思います。

太郎：振り子が10回振動する時間をストップウォッチで測定し、周期を求めることにしよう。

花子：小学校のときには振動の端を目印に、つまり、おもりの動きが向きを変える瞬間にストップウォッチを押していたね。

太郎：他の位置、たとえば中心でも、目印をしておけばちゃんと測定できると思う。

花子：端と中心ではどちらがより正確なのかしら。実験をして調べてみましょう。

図 2

表1 測定結果

測定 [回目]	周期 × 10 [s]
1	14.22
2	14.44
3	14.31
4	14.37
5	14.35
6	14.19
7	14.25
8	14.47
9	14.22
10	14.35
平均値	14.32

測定 [回目]	周期 × 10 [s]
1	14.32
2	14.31
3	14.32
4	14.31
5	14.31
6	14.31
7	14.32
8	14.28
9	14.32
10	14.28
平均値	14.31

こちらは、物理の問題です。振り子の周期をどう求めるか、小学校のときは振動の端から端の幅で測っていたものが、学校段階が上がるにつれデータの正確性を期すため中心で測っていくようになるといった、小学校以来の理科の学びを追体験するような問題になっています。

問 4 シクロヘキサン 15.80 g にナフタレン 30.0 mg を加えて完全に溶かした。その溶液を氷水で冷却し、よくかき混ぜながら溶液の温度を 1 分ごとに測定したところ、表 1 のようになった。下の問い(a・b)に答えよ。必要があれば、表 2 の数値と次ページの方眼紙を使うこと。

表 1

時間(分)	温度(℃)
3	6.89
4	6.58
5	6.30
6	6.08
7	6.18
8	6.19
9	6.18
10	6.17
11	6.16
12	6.15
13	6.14
14	6.12
15	6.11

表 2

	シクロヘキサン	ナフタレン
分子量	84.2	128
融点(℃)	6.52	80.5

b aで選んだ溶液の凝固点を聞いて、シクロヘキサンのもル凝固点降下を求めると、何 $\text{K}\cdot\text{kg/mol}$ になるか。有効数字2桁で次の形式で表すとき、 に当てはまる数字を、下の①～⑩のうちから一つずつ選べ。ただし、同じものを繰り返し選んでもよい。

$\times 10^{\text{$ $\text{K}\cdot\text{kg/mol}$

① 1

② 2

③ 3

④ 4

⑤ 5

⑥ 6

⑦ 7

⑧ 8

⑨ 9

⑩ 0

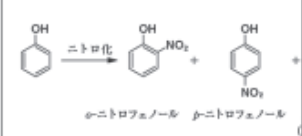
a この溶液の凝固点を求めると何℃になるか。最も適当な数値を、次の①～④のうちから一つ選べ。 ℃

① 6.08
② 6.19
③ 6.22
④ 6.28

これは化学の問題です。答えを導くために、計算しても構わないのですが、グラフから導ける場合に活用できるよう、問題冊子にグラフを描けるスペースを印刷しています。

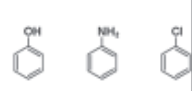
問 4 ある大学の体験入学で、次のような話を聞いた。

ベンゼン環に官能基を一つもつ物質に置換反応を行う。(m-)、パラ(p-)の位置で反応が起こる可能性がある。どがは、最初に結合している官能基の影響を強く受ける。フェノールをある反応条件でニトロ化すると、おもにo-ニトロフェノールが生成し、m-ニトロフェノールは少なかったが、ベンゼン環に結合したヒドロキシ基はo-やp-にしやすい官能基といえる。

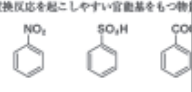


o-ニトロフェノール p-ニトロフェノール

一般に、o-やp-の位置で置換反応を起こしやすい官能基のがある。



一方、m-の位置で置換反応を起こしやすい官能基をもつ物



このことを利用すれば、目的の化合物を効率よくつくり出すことができる。

この情報をもとに、除草剤の原料であるm-クロロアニリンを、次のようにベンゼンから化合物A、Bを経て効率よく合成する実験を計画した。



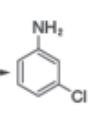
操作1 →

化合物A

操作2 →

化合物B

操作3 →



操作1～3として最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

操作1 操作2 操作3

- ① 濃硫酸を加えて加熱する。
- ② 固体の水酸化ナトリウムと混合して加熱融解する。
- ③ 鉄を触媒にして塩素を反応させる。
- ④ 光をあてて塩素を反応させる。
- ⑤ 濃硫酸と濃硝酸を加えて加熱する。
- ⑥ スズと塩酸を加えて反応させた後、水酸化ナトリウム水溶液を加える。

同じ化学の探究的な問題ですが、ある大学の体験入学で講義を聞いたということ
を前提に、講義の中の新しい情報と、自分が授業で学んだ知識を組み合わせる解く
ような問題です。

B あるクラスで、探究活動のテーマとして、除草剤が植物を枯らすしく
上げるようになった。除草剤の一つであるXについて、有効成分の作
タネット調べてみたら、グルタミン合成酵素を阻害するとあった。
ン合成酵素は、アンモニウムイオン(NH₄⁺)とグルタミン酸からグルタ
くる反応を触媒する。できたグルタミンはケトグルタル酸との反応で、
グルタミン酸となる。そして、グルタミン酸からのアミノ基の転移が、
機窒素化合物の生成につながっていく。このため、グルタミン合成酵
れると、(d)有機窒素化合物ができなくなって欠乏するとともに、(e)NH
する。これらの情報を踏まえて、Xについてさらに探究を基めた。

問 4 探究の手始めに、NH₄⁺の濃度を簡単に測定できる市販の試薬
使って、植物をXで処理したときに実際にグルタミン合成の阻害
いるかどうかを確かめてみることにした。計画した実験の手順は、
(4)のとおりである。

(1) 同じ場所に生えている同じ種類の植物を6つの実験区に分けて
はXの水溶液を、残り三つには水を噴霧する。



問 5 図書館で調べてみたら、NH₄⁺から生じるNH₃は植物にとって有害であ
ることがわかった。このことから、下線部(d)と(e)のどちらも、Xで植物が
枯れる原因となり得ると考えた。これらの可能性を念頭において、Xによ
る植物枯死の主な原因を調べるための実験についてクラスで議論をしたとこ
ろ、5つの班から異なる実験の案が出た。

次のA班案～E班案のそれぞれについて、主な原因が下線部(d)と(e)のどち
らであるかを判定するための根拠となる情報が得られる場合は①を、得られ
ない場合は②をマークせよ。

A班案 : 十分に高い濃度のXの水溶液を噴霧し、同時にグルタ
ミン酸を与えた場合と与えない場合とで、植物が枯れる
までの時間を比べる。

B班案 : 十分に高い濃度のXの水溶液を噴霧し、同時にグルタ
ミンを与えた場合と与えない場合とで、植物が枯れるま
での時間を比べる。

C班案 : 十分に高い濃度のXの水溶液を噴霧し、同時にケトグ
ルタル酸を与えた場合と与えない場合とで、植物が枯れ
るまでの時間を比べる。

D班案 : 土壌に窒素肥料を施した条件と施していない条件とで、
いろいろな濃度のXの水溶液を噴霧し、植物を枯らす
のに必要なXの濃度を比べる。

E班案 : Xの水溶液を噴霧せずに、高濃度のNH₃水溶液を植物
に与えて、NH₃の処理だけで枯れるかどうかを調べる。

ここからは生物の問題ですが、探究活動で必要になる実験・観察の手順等に関わ
る問題です。

A ホタルのルシフェラーゼは、ATPの存在下でルシフェリンを分解することに
より発光させる酵素である。このルシフェラーゼを大腸菌に合成させることにし
た。そこで、(a)ホタルのルシフェラーゼ遺伝子の発現を行うことのできるブラ
スミドを導入した大腸菌をつくり、寒天培地上で培養した。

第6問 次の文章を読み、下の問い(問1～3)に答えよ。
〔解答番号 ～ 〕

オオカミを祖先とするイヌは、オオカミとは異なり、1万年以上前から人間との
絆を形成している。この絆は、見つめ合い行動によって形成される。見つめ合い
行動と視床下部で産生されるオキシトシンというホルモンの分泌との間に、互いに
効果を強め合う関係があるという仮説を立てて、次の実験1・実験2を行った。な
お、オキシトシンは、血液中に分泌されて作用し、最終的に尿に排出される。

また、犬と人との見つめ合いやホタルの発光など、身近な科学の不思議と学校での学びをつなぐような問題も出しています。

第2問 次に示したものは、ある高校生が観察活動の成果を発表するために作成したポスターの一部である。この観察活動に関する下の問い(問1～8)に答えよ。

(解答番号 ～)

石材として利用されている岩石について

【はじめに】
会館やビルなどで見かけた石材に関心を持ったので、石材店を訪ねて情報を収集した。そこで入手した石材(X, Y, Z)のサンプルを学校に持ち帰って調べた。

【目的】
石材として利用されている岩石の種類や性質を調べ、用途との関係を明らかにする。

【方法・結果】
(1) 石材のプレバート(岩石薄片)を作成し、顕微鏡で観察した。
(2) 石材の薄片を希塩酸に浸し、反応して発泡するかどうかを調べた。
これらの結果を、図1と表1に示す。

	石材X	石材Y	石材Z
写真 4 cm×4 cm			
主な用途	屋内の壁など	屋外の床や壁など	屋外の床など
顕微鏡観察でのスケッチ Q 5 mm			
希塩酸との反応	発泡する	発泡しない	発泡しない

図1 観察や実験の結果

表1 顕微鏡観察の結果

	構成鉱物	顕微鏡による観察項目			
		色	多色性	へき裂	干渉色
石材X	方解石	無色	なし	あり	弱やかな色
	角閃石	緑色	あり	あり	弱やかな色
	輝石	淡緑色	あり	あり	弱やかな色
石材Y	斜長石	無色	なし	あり	灰色
	かんらん石	淡黄色	なし	なし	弱やかな色
	輝石	淡緑色	あり	あり	弱やかな色
石材Z	斜長石	無色	なし	あり	灰色

(注) 石材Yについては、研磨面に方眼の入った透明シートをのせて測定し、格子点上の鉱物を数えることで、色指数を求めた。その結果、石材Yの色指数は、であった。

【考察】

石材X	石材Y	石材Z
粗粒の方解石(成分はCaCO ₃)だけで構成されていることから、結晶質石灰岩であり、固いに固いと考えられる。	顕微鏡観察の結果から判断すると、 イ であり、これは、求めた色指数からも裏付けられる。	顕微鏡観察の結果から判断すると、玄武岩であると考えられる。石材Zでは、斜長石が(固りに固く)。

【結論】
観察・実験の結果や考察から、ことがわかった。

【今後の課題】

＜以下省略＞

これは地学の問題です。授業で行った探究活動の成果が題材になっています。

B 自宅に戻ったハナコさんは、観察ツアーで知り合った大学の先生を訪れた。ハナコさんと大学の先生の次の会話文を読んで、下の問い(問4・問5)に答えよ。

大学の先生：ツアーで配られた資料(図3)を見てください。皆既日食が見られた場所は、西から東へ移動して行きましたよね。その場所が地球の表面を移動する平均速度Vは、どのくらいだったと思いますか。

ハナコさん：図3の地点Xで食が最大になったのは、午前10時56分頃でした。皆既日食のとき、私たちが乗った船は地点Yにいました。X-Yの距離をこの図から大雑把に見積もって、食が最大になった時刻の差を考えれば、Vは km/sと計算できます。ずいぶん速いんですね。

大学の先生：そうですね、とても速いですね。

皆既日食が見られるところ

X 北緯 29.5 度
東経 129.6 度
食の最大 10 時 56 分

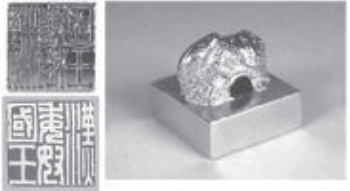
Y 北緯 24.8 度
東経 141.3 度
食の最大 11 時 28 分

図3 ツアーで配られた資料

この問題の地図では、あえて縮尺を示していません。日本の国土のおおよその大きさが身に付いているかどうか問われる問題です。

第1問 私たちは、文献や遺物、遺跡などから過去の歴史を知ることができる。歴史資料に関する次の文章A・Bを読み、下の問い(問1～6)に答えよ。

A エリさんは、1世紀に中国からもたらされた金印について、パネルを用意して発表した。



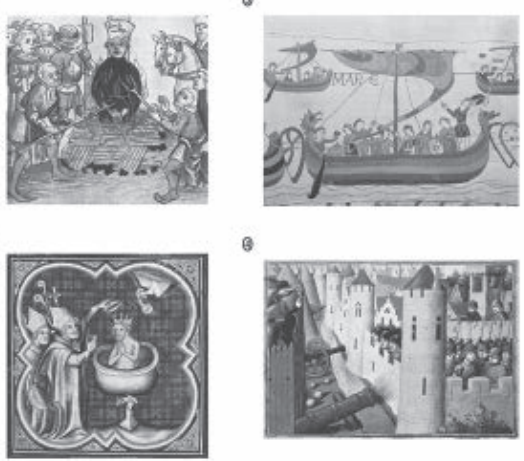
金印は、1784年に、現在の福岡市に属する志賀島の土中から発見された。印文は「漢委奴国王」の5文字。
金印に関する『後漢書』東夷伝の記事：
建武中元二年(57年)、倭奴国が貢物を奉じ、朝貢してきた。使者は大夫であると自称した。(その国は)倭国の東南の界にある。光武帝は印と綬*とを賜った。
*綬：印を身に帯びる際に用いた組みひも。
当時、倭には多くの国があり、それぞれ世襲の王がいた。①『後漢書』は楽浪郡からの距離や方向によって、倭人の居住地の位置を示している。

この歴史の問題では、「金印」が題材になっていますが、日本史ではなく世界史の問題です。当時の東アジアの状況と関連付け、日本の歴史と世界の歴史の接点として取り上げています。

B 次の文章は、6世紀のトゥール司教グレゴリウスが著した『歴史十巻』の中の一節である。(引用文は原文を一部省略したり、改めたりしたところがある。)

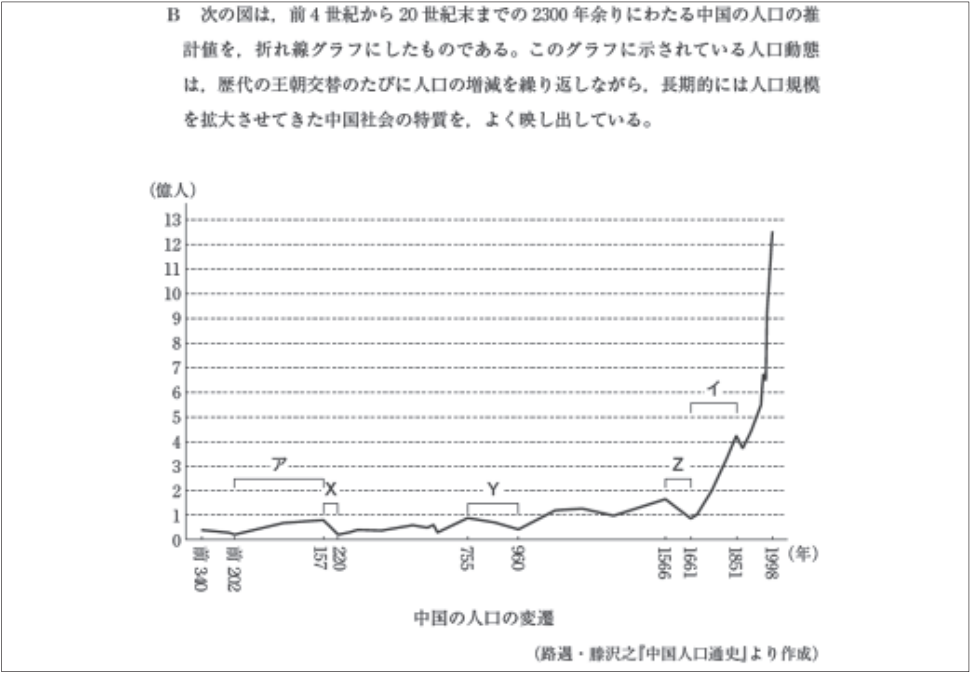
王紀クロティルドは、まことの神を認め偶像を放棄するよう、王クローヴィスを説得し続けた。しかし、ある時アラマン人との戦いが起こるまで、どうしても王の心を揺り動かしてその信仰へ向けることはできなかった。⑤ この文章の主題を語っている図版として適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 **5**

次のようなことが起こったのである。双方の軍隊が衝突した。やがて、クローヴィスの軍隊は壊滅しかけた。彼は、悔恨の念にかられ、涙にかきくれて言った。「イエスの助力という栄光を切実に懇願します。この敵に私を勝(中略)私はあなたを信じ、あなたの名のもとに洗礼を受けが助力を噴出した神々は、私を助けてはくれませんでしたは従っている者たちを助けず、信奉者たちへ何の力も及ばない。彼がこのような言った時、アラマン人が背を向けて、逃走分たちの王が殺されたのを見てとると、クローヴィスの権(中略)そこで王紀は、ランス市の司教である聖レミギウスを密に言葉の言葉を教え込むように懇願した。司教は王を密かに招あるまことの神を信じ、王や他の者にとって無益な偶像を始めた。(中略)最初に王が司教から洗礼を授かることを申**イ**として洗礼所へ進み出た。洗礼を始める時、神のように彼に語りかけた。「シガムベル人*よ、静かに首が燃やしたものを崇め、あなたが崇めていたものを燃やし



*シガムベル

この問題では、グレゴリウスの『歴史十巻』が取り上げられていますが、この資料そのものを学習しておくことが期待されているわけではありません。問われているのはフランク王クロビスの改宗についての知識であり、授業で学んだことを新たな資料を通じて問おうと工夫した出題方法です。



この問題では、B.C.340年から1998年までという時代区分を越えた長期間にわたる中国の人口の変遷を示し、変化の要因などを問うています。

第5問 高校生の明子さん・太郎さん・武史さんは、江戸時代末期から明治時代にかけたの勉強をしている。その学習で使ったA・Bの資料と会話文を読め、問1～5に答えよ。

A 幕末期の年表

西暦(年)	事 項
1853	④ペリー来航
1854	日米和親条約調印
1858	⑤日米修好通商条約調印
1860	板垣外相の来 (ア)
1863	八月十八日の政変
1864	禁門の変
	四国連合艦隊、下関を砲撃
	第一次長州征討(長州戦争)
1866	薩長同盟(薩長連合)
	第二次長州征討(長州戦争) (イ)
1867	七政出雲

問1 下線部②に関連して、明子さんは、このできごとの前後関係3枚のカードを作成した。次のa～dの文のうち、カード1の文の組合せとして適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

カード1

カード2

カード3

問2 明子さんと太郎さんは、なぜ江戸幕府が滅亡したのかを考えた。その結果、滅亡までの十数年間に、幕府が統治能力を失う重大なできごとがあり、それが幕府滅亡への画期(ターニングポイント)になったとの結論にいたった。明子さんは、年表中の(ア)のできごとを画期ととらえた。太郎さんは、年表中の(イ)のできごとを画期ととらえた。あなたは、どちらの考えを支持するか。支持するできごとと理由を正しく組み合わせよ。できごとは次の①・②のうちから、理由は下の③～④のうちから一つずつ選べ。

できごと 20

① 年表中の(ア)のできごと ② 年表中の(イ)のできごと

理由 21

① この事件の結果、流通機構が混乱し、幕府の市場統制力が弱まったから。

② この事件の結果、圧倒的な軍事力を背景とした幕府支配が困難となったから。

③ この事件の結果、幕府は朝廷への報告を行い、諸大名にも広く意見を述べさせたため、外交を専断できなくなったから。

④ この事件の結果、一部の幕府による専制政治を進めてきた幕府が、強権で反対派を抑えられなくなったから。

この問題は、歴史のターニングポイントになった事象を理由とともに選ばせるものの問題です。正解の組合せが複数あるという、新しい解答形式の問題です。

問 1 次の図 1 は、世界の主な国の人口のカルトグラムに人口密度を示したものである。図 1 から読み取れることがらを述べた文として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。 13

問 5 次の図 3 は、日本における大都市の内部構造を模式的に示したものであり、下のサ～スの文は、図 3 中の E～G の各地区について述べたものである。サ～スと E～G との正しい組合せを、下の①～④のうちから一つ選べ。 17

地理では、こうしたカルトグラム（統計地図）や、模式図を取り上げた問題も出題しています。

問 5 焼津市の防災施設を見て防災について関心をもったサクラさんは、静岡県中部で防災に関する地域調査を行い、地理の先生に報告した。次の図 8 は静岡県中部のある地域の地形図(左)と、同範囲の地形分類図(右)である。下のサクラさんと先生との会話文中の下線部サ～スの正誤の組合せとして正しいものを、次ページの①～④のうちから一つ選べ。 29

図 8

問 6 静岡県中部での地域調査を終えて、日本全体の自然災害や防災に関心をもったサクラさんは、教科書や資料集に挙げられている日本の自然災害や防災対策の概要を整理し、プレゼンテーション用の資料を作成した。次の図 9 はサクラさんがそのまとめとして作成したものである。日本の自然災害と防災対策をまとめた文として~~不適当でない~~ものを、図 9 中の①～④のうちから一つ選べ。 30

図 9

地理院地図、土地条件図により作成。
地形分類図は小面積のものを一部省略してある。

この問題は、ある主張をするための論拠としてどのようなデータが必要になるかを考えさせるものです。

第5問 次の文章は、ある大学の1年生向けの「法学基礎ゼミナール」の授業で、学生が日本の三権分立と司法制度についてまとめたものである。これを読み、下の問い(問1～5)に答えよ。

日本国憲法は、国の統治機構に関し、立法権を国会に、行政権を内閣に、司法権を裁判所にそれぞれもたせることにより、㉑これらの三つの機関の権力の間で抑制と均衡(チェック・アンド・バランス)を働かせようとするを採用している。権力が一つの機関に集中しないようにして

三つの機関のうち裁判所には、国会の定めた法律や㉒行政どが㉓憲法に適合するかしないかを判断する権限が与えられた。司法制度については、1999年から2001年にかけて司法制され、その結果を踏まえて大きな変化があった。その一例と説がある。㉔裁判員制度は、一定の刑事裁判の第一審に、参加して、裁判官とともに裁判をする制度である。

問5 下線部㉑に関して、「法学基礎ゼミナール」の授業で学生A～Eの5名が次のような議論をした。ア～ウの発言者がそれぞれどの学生であるかについて、最も適当な組合せを、次のページの①～⑥のうちから一つ選べ。

ただし、学生の意見は、「裁判官のみが判断をする制度」と「裁判員制度」とのどちらが望ましいと考えるかによって二つに分かれており、各学生の意見が途中で変わることはないものとする。 23

先 生：日本の裁判員制度について、皆さんの意見を聴いてみましょうか。陪審法は長く停止されたままとなっており、裁判員制度ができる前の刑事裁判の判断はすべて裁判官のみでしていましたが、「裁判官のみが判断をする制度」と「裁判員制度」とでどちらが望ましいかについて、Aさん、どう考えますか。

学生A：私は裁判員制度に賛成です。一般の国民が裁判に参加することにより、審理や判断の過程が国民に分かりやすくなって司法に対する理解が進みますし、裁判内容に社会常識がよりよく反映されるようになると思います。ですから、この制度に賛成したいと思います。

学生B：裁判官にだって日常生活はあるのだし、裁判官も他の人々と同様に常識が

大学での学習を意識し、こうした大学1年生のゼミでの議論を想定した出題などもなされました。

英語(筆記[リーディング])

(解答番号 1 ～ 38)

第1問

A You are planning to go to an amusement park in Hong Kong. You are looking at its webpage.



Blue Stone
Hong Kong

BLUE STONE AMUSEMENT PARK

TOP > Crowd Calendar

English Chinese

This webpage will help you find the best dates to visit Blue Stone Amusement Park.

What's New

A new show titled "Pirates' Adventure" will start on...

Crowd Calendar

On the following calendar, you can see the open crowd levels. The percentage in each box is an estimate expected to be in the park. The maximum, 100%, is percentage is calculated automatically based on advance...

On the days with the face icon, entrance to the without an advance ticket may have to wait at the. Advance tickets are only available online one week ahead.

By clicking each date on the calendar, you can see average waiting time for each attraction.

問4 Based on the reviews, which of the following are facts, not personal opinions? (You may choose more than one option.) 9

- ① Annie's Kitchen offers dishes from many countries.
- ② Johnny's Hutt is less crowded than Shiro's Ramen.
- ③ Johnny's Hutt serves some fish dishes.
- ④ The chef at Johnny's Hutt is good at his job.
- ⑤ The chef's meal-of-the-day is the best at Annie's Kitchen.
- ⑥ The menu at Annie's Kitchen is wonderful.

B You are preparing for a presentation about the characteristics of spices. You have found an article about black and white pepper. You are going to read the article and take notes.

Black and White Pepper

[Part 1] Some recent studies have increased our understanding of spices in helping us live longer. There are a variety of spices but most likely you are familiar with two of them, black and white pepper. Black and white pepper both come from the fruit of the same plant. However, they are processed differently. Black pepper is made from the unripe fruit of the pepper plant. Each piece of fruit looks like a small ball, just 3 to 6 millimeters across. The harvested fruit turns black when it is dried. White pepper is made from the ripe fruit of the pepper plant. Each piece of fruit looks like a small ball, just 3 to 6 millimeters across. The harvested fruit turns white when it is dried.

Complete the notes by filling in 28 to 33.

Notes

Outline:

Part 1: 28

Part 2: 29

Part 3: 30

Table: Comparing Black and White Pepper

Common points	Differences
31	32

Main points: 33

英語については、今年2月に試行調査を実施させていただきました。5月中には結果を公表したいと思っています。

英語教育改革の方向性や、民間試験との併用になることを踏まえまして、発音、アクセントの問題や語句整除の問題等は出題せずに、リーディングの問題として出題することとしております。最終的には、試行調査の解答状況を踏まえながら判断をしたいと考えています。

大学入試センター
National Center for
University Entrance Examinations

大学入学共通テストの導入に向けた試行調査 (プレテスト) (平成29年11月実施分) の 結果報告

平成30年3月26日

目次

I 調査の概要	P. 2
II 試行調査（プレテスト）の趣旨と分析・検討方針	P. 4
III 分析結果の報告	P. 5
1 各科目の問題構成、設問数、内容等の在り方に関する分析・検討	P. 5
（1）全体の結果の概要（マーク式問題）	P. 5
（2）科目別の結果の概要（マーク式問題）	P. 20
2 記述式問題の正答の条件の設定、採点、成績表示等の在り方に関する分析・検討	P. 82
（1）正答の条件の設定	P. 82
（2）自己採点の分析	P. 92
（3）解答方法、答案の読み取り	P. 95
（4）採点及び検収の体制及び期間	P. 100
（5）国語の記述式問題の成績表示	P. 107
3 マーク式問題を含めた成績表示の在り方に関する分析・検討	P. 111
4 実施面の課題検証とその解決に向けた分析・検討	P. 121
5 2024年度以降を見据えて引き続き行う必要がある分析・検討	P. 122

試行調査については、このような結果報告書が、全てセンターのホームページで公開されていますので、ぜひ御覧ください。今回は、高校関係者と大学関係者が一緒になって、言わば作問体制も高大接続という形で問題作成をいたしました。目標正答率は設定せずに、まずは新しいテストとしての作問のねらいを重視した問題を出題し、次回の試行調査に生かすことに重点をおきました。

試行調査の問題はあくまで検証のための問題です。出題の大きな方向性は変わりませんが、この試行調査での構成やバランスがそのまま踏襲されるわけではありません。次の11月の試行調査は、かなり本番を意識した構成になってくると思います。

III 分析結果の報告

1 各科目の問題構成、設問数、内容等の在り方に関する分析・検討

【分析・検討方針】

- 大学入試センターにおいて分析チームを構成し、次のような項目について試行調査の結果に基づくデータ解析を行い、科目別WGに提供する。
 - ① 設問ごとの正答率や誤答の選択状況
 - ② 設問ごとの五分位図
 - ③ 設問ごとの識別力（項目得点と総点とのピアソン相関）
 - ④ 正答数の分布
 - ⑤ 質問紙調査（試験時間、問題量、難易度、問題文の指示の仕方や図・資料等の提示の仕方、進路等に関する質問）を参考にした分析

(1) 全体の結果の概要（マーク式問題）

- ① 設問ごとの正答率や誤答の選択状況
(正答率の状況)
- 各設問の正答率は、別冊「大学入学共通テストの導入に向けた試行調査（プレテスト）（平成29年11月実施） 設問別のねらい及び正答率（確定値）」ののとおり、一桁弱から9割近くまで幅広く分布。なお、分析に当たっては、次の点も踏まえることが必要。
 - ・ センター試験の過去問から出題した問題の正答率を比較すると、センター試験よりも今回の試行調査の正答率の方が低い傾向にあること。
 - ・ 高校2年生が受験していること、高校3年生であっても年明けに行われる実際の大学入試に向けて学力が伸びる可能性がある時期であること。

- 今回の試行調査においては、素点以外の成績提供の在り方についても検証することを踏まえ、目標平均正答率は設定しなかったところであるが、「Ⅲ 3 マーク式問題を含めた成績表示の在り方に関する分析・検討」において後述するように、素点表示が社会的に浸透している現状を踏まえつつ、得点の分布情報を利用した段階別表示を行うとしても当面は素点と併記することになると見込まれる。
- このことを踏まえ、平成30年度試行調査においては、今回の試行調査における正答率等の分析を踏まえつつ平均得点率（又は平均正答率）を設定する方向性。具体的には、大学入試センター試験の作問を踏まえつつ、新しいタイプの問題の出題が求められることから、科目ごとの総合的な平均得点率（又は平均正答率）5割程度を目指すことを念頭に、難易度の高い問題から低い問題までをバランス良く出題できるよう作問していく予定。

今回は目標正答率は設けませんでした。が、次回の試行調査では平均得点率は5割程度を目指すことを検討しています。センター試験よりも難しくなるのではないかと御懸念されるかもしれませんが、これは、新しいタイプの問題ということを考えての上での5割です。

（誤答の選択状況）

- 各科目において、特定の誤答選択肢を選択した者の数が正答を選択した者の数を上回る設問数は次のとおり。各設問の分析では、この点にも留意して行った。

科目名	総設問数	特定の誤答選択肢を選択した者の数が正答を選択した者の数を上回る設問数	割合
国 語	30	9	30.0%
数学Ⅰ・数学A	45	14	31.1%
数学Ⅱ・数学B	45	11	24.4%
世界史B	36	5	13.9%
日本史B	30	5	16.7%
地理B	29	7	24.1%
現代社会	23	2	8.7%
物 理	21	7	33.3%
化 学	25	2	8.0%
生 物	28	11	39.3%
地 学	28	7	25.0%

その他、誤答の選択状況などについても分析しています。➡

(新しい出題形式の状況)

- 当てはまる選択肢を全て選択させる問題における正答率と、五分位図※のLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下であった問題は次のとおり。

科目名	問題番号	正答率	Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下
国 語	第5問問5 (解答番号7)	14.7%	
数学Ⅰ・数学A	第4問 (解答記号キ)	3.2%	○
	第5問 (解答記号サ)	0.8%	○
数学Ⅱ・数学B	第1問 (解答記号サ)	13.1%	
地理B	第5問問4 (解答番号28)	21.6%	
現代社会	第3問問3 (解答番号12)	17.0%	
	第4問問1 (解答番号15)	4.8%	○
物 理	第2問問1 (解答番号1)	21.9%	
	第2問問2 (解答番号2)	75.6%	
	第2問問3 (解答番号3)	18.0%	
	第3問問4 (解答番号11)	12.6%	
	第3問問6 (解答番号14)	55.3%	
化 学	第3問問1 (解答番号1)	22.1%	
地 学	第3問問3 (解答番号3)	21.7%	

物理は、「解なし」を含む。

- 解答が前問の解答と連動する問題（4問）において、五分位図のLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題はなかった。

※ 下記「五分位図とは」参照

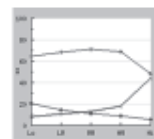
「全て選べ」形式の問題の正答率等も分析しながら次の問題作りに取り組んでいます。

② 設問ごとの五分位図

- 正答数により、大問の五分位図を見ると、国語、数学Ⅰ・数学A、物理、生物は、Hi群の正答率が60%を超えていない大問が比較的多かった。

今回の試行調査においては、「Ⅱ 1 試行調査（プレテスト）の趣旨、作問体制等」において述べたとおり、大学入試センター試験に関する既存のデータでは蓄積されていないタイプの問題に関する解答傾向等のデータを集めることを重視し、題材を複数提示したり、知識の深い理解を問うようにするなど新しいタイプの問題を重視して出題した。こうしたねらいの結果、問題文中の情報量が増えたり、未知の場面での知識の活用が求められるなど、受験者にとって新しい出題傾向となり難易度が高くなった可能性などが考えられる。平成30年度試行調査に向けて、特に上述の科目においては、提示する文章や資料の分量、問題のバランスなどを工夫し、正答率が中程度からやや高い問題を増やして、より多様な学力層を識別できるようにしていく。

※ 五分位図とは
当該科目の正答数により、受験者を五群に（ほぼ）等分割し、正答数の少ない順に、Lo群、LM群、M群、HM群、Hi群と名付け、各群ごとに選択肢の選択率を示したものを、
なお、大問の五分位図については、正答率のみを示しているが、小問の五分位図については、右図の例のとおり、誤答の選択肢の選択率が10%以上のものがある場合には、その率も表示している。

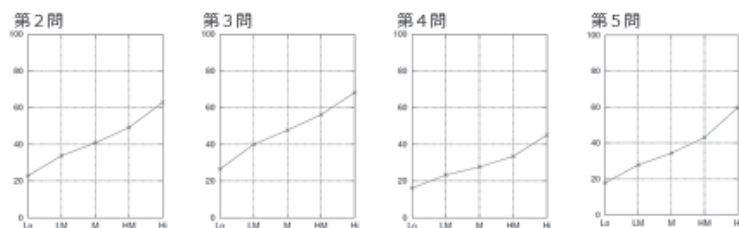


Hi群を識別
赤：正答
青：誤答

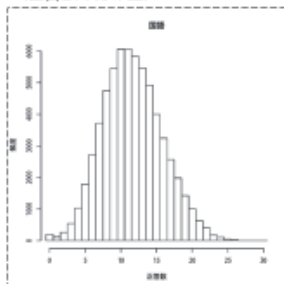
- 識別力を高めるために必要な問題数については、今回の試行調査では現代社会において設問数を23問（地理歴史科の科目では29問以上出題）としたところ、特定の正答数に受験者が偏る傾向が見られた。このため、平成30年度試行調査に向けて、設問数を増やす方向で検討している。

現行のセンター試験については、分析状況の全ては公表していませんが、問題作成に当たってはこのような「五分位図」と言われるものなどを活用しながら問題の作成・改善が行われています。試行調査についても同様の分析を行っています。

＜大問の五分位図＞
【国語】



＜正答数の分布図＞



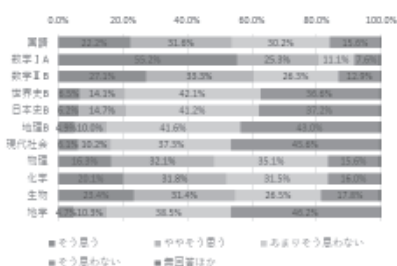
マーク式問題として出題した大問4題（論理的な文章を主たる題材とした問題、文学的な文章を主たる題材とした問題、古文を主たる題材とした問題、漢文を主たる題材とした問題）について分析すると、国語全体の正答数の多い受験者の方が各大問の正答率が高い傾向にある。Hi群とLo群の正答率の差は全て20ポイントを超えていた。ただし、第4問、第5問は、Hi群の正答率は60%を超えていない。

なお、古文・漢文を除いて活用する大学があるため、センター試験でも古文・漢文は近代以降の文章の問題よりも正答率が低い傾向がある。

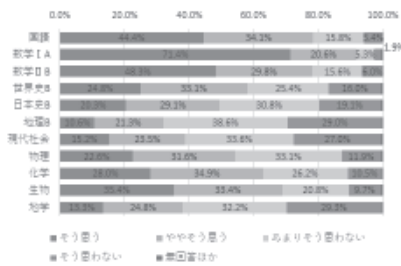
⑤ 質問紙調査（試験時間、問題量、難易度、問題文の指示の仕方や図・資料等の提示の仕方、進路等に関する質問）を参考にした分析

- 生徒のアンケートにおいて、試験時間が短かったという回答が50%を超えたのは、国語、数学Ⅰ・数学A、数学Ⅱ・数学B、化学、生物であった。また、問題の量（文章や資料等）が多かったという回答は、日本史B、地理B、現代社会、地学を除く全ての科目で50%を超えた。さらに、問題が難しかったという回答は、全ての科目で50%を超えた。
- 出願予定または出願済みの大学等については、世界史B、日本史Bを除く全ての科目で、国公立大学一般入試専願と国公・私立大学一般入試併願の合計が50%超であった。

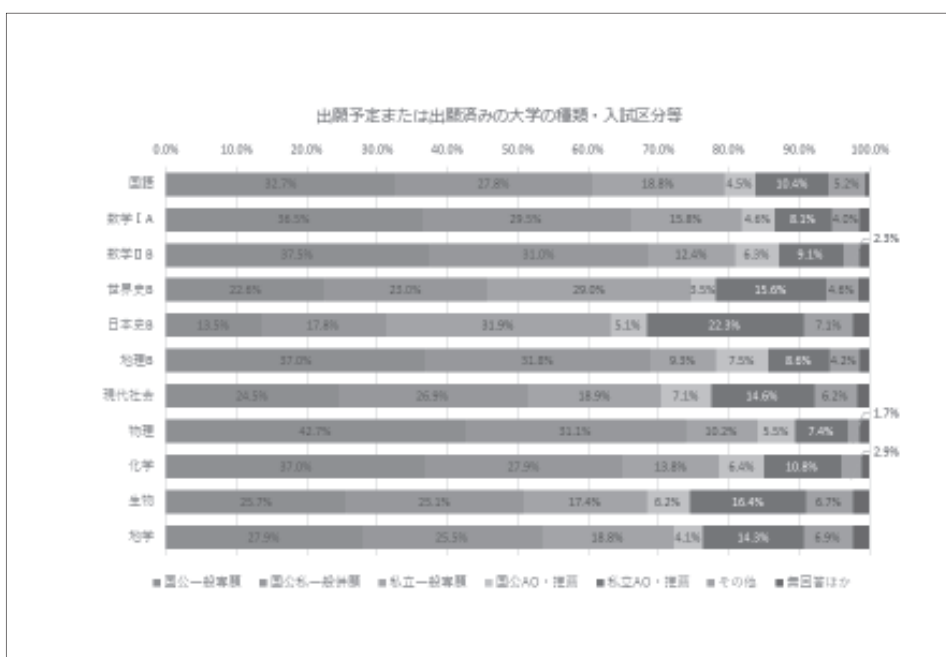
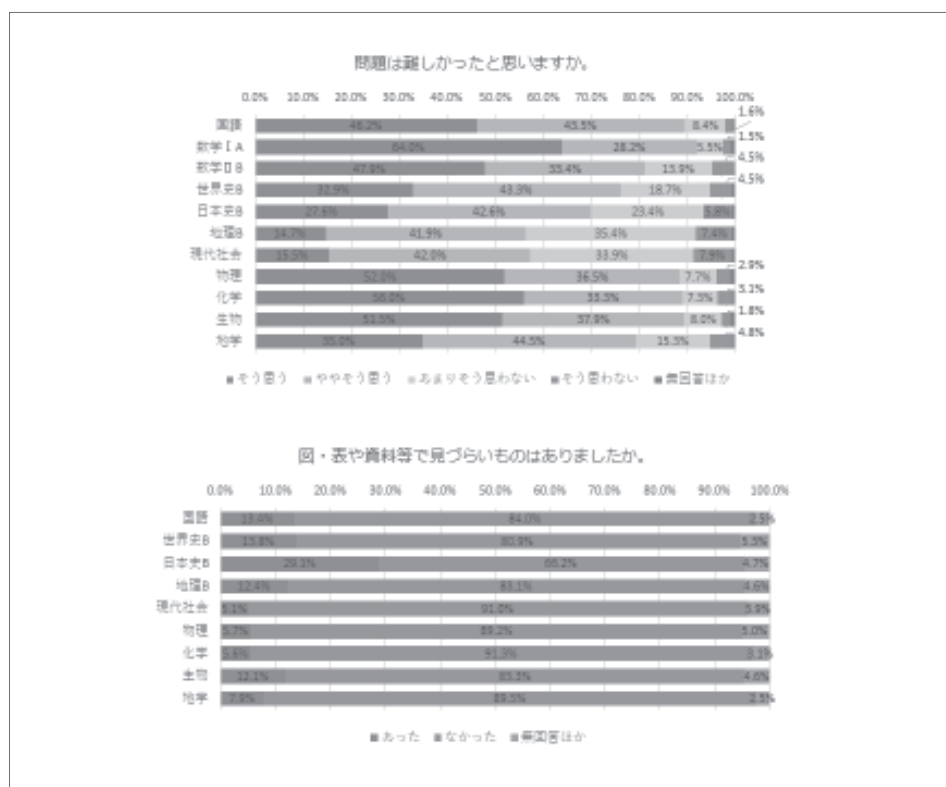
問題を解く上で、試験時間は短かったですか。



問題の量（文章や資料等）は多かったと思いますか。



試行調査では、生徒や教員に対するアンケート調査も実施しました。問題の量や難易度については、こうした調査の結果も反映しながら次の試行調査の準備を進めています。➡



【分析・検討方針】

- 科目別WGにおいては、提供されたデータを基に、例えば正答率が極端に低い問題の改善の在り方、正答率が総合的に高い受検者が誤答を選択している問題の分析、成績上位者の識別に寄与する問題と成績下位者の識別に寄与する問題のバランス、識別力が低い問題の分析、各設問において問いたい力と作問のねらいの妥当性等も含めて、大学入学共通テストの問題構成や設問数、内容、配点等の在り方に関する分析・検討を行い、平成30年11月に実施する試行調査に生かすこととする。

なお、科目別WGにおいては、作問者以外の外部有識者から問題構成、設問数、内容等の妥当性に関するヒアリングも併せて行う。

- 科目別WGにおいては、大学入学共通テストにおける問題の構成・内容を想定しながら、平成30年11月に実施予定の試行調査の問題構成・内容の検討を行っているところ。その際、前述の①～⑤に関するデータを大学入試センター試験の結果に関するデータと比較しながら、大学入学共通テストにおいて問いたい知識や思考力等を重視した作問の在り方と、選抜試験としてふさわしい難易度や識別力の設定とを両立させるよう検討を進めているところ。

- 作問者以外の外部有識者からのヒアリングについては、試行調査問題公表時に、各科目の有識者からいただいた問題に対するコメントを公表した。さらに、科目別WGにおいては、当該科目に造詣が深い大学の教員をそれぞれ5名程度、全科目で48名を選定し、①出題のねらい、②題材の選定や問題の場面設定、出題形式等、③各科目の問題構成や設問数、内容、難易度等について聞き取りを行った。（概要については、「Ⅲ1(2) 科目別の結果の概要（マーク式問題）」に記載。）

- なお、理科の選択問題については、探究の過程を重視した問題の中で難易度をそろえることはますます困難になることなどを踏まえ、今後の扱いについて関係者の意見を伺っているところ。

なお、理科については、履修範囲と照らし合わせつつ、選択問題を廃止し共通問題のみとすることも検討されています。

2 記述式問題の正答の条件の設定、採点、成績表示等の在り方に関する分析・検討

(1) 正答の条件の設定

【分析・検討方針】

- 解答類型ごとの解答状況に関する分析データ等を基に、国語WG及び数学WGにおいて分析・検討を行う。特に国語については、正答の条件の数の在り方、形式面、内容面の条件のバランス、重み付けの在り方等について総合的に検討しマニュアル化を目指す。

- 今回の記述式問題については、国語・数学ともに、解答に必要な場面や条件の設定としてどの程度までの複雑さが可能かを検証できるよう作問した。

【国語】

解答類型ごとの割合や誤答の傾向は次のとおり。

		解答類型	割合 (%)
問1	ア	条件①～④のすべてを満たしている解答	43.7%
	イ	条件②～④を満たしている解答（①のみ満たしていない）	2.2%
	ウ	条件①～③を満たしている解答（④のみ満たしていない）又は条件①、②、④を満たしている解答（③のみ満たしていない）又は条件①、③、④を満たしている解答（②のみ満たしていない）	32.2%
	エ	条件①、②を満たしている解答（③、④は満たしていない）又は条件①、③を満たしている解答（②、④は満たしていない）又は条件①、④を満たしている解答（②、③は満たしていない）	14.1%
	オ	上記以外の解答	5.4%
	カ	無解答	2.3%

解答類型		割合 (%)
問2	ア 条件①～③のすべてを満たしている解答	73.5%
	イ 条件①, ③を満たしている解答 (②のみ満たしていない) 又は 条件②, ③を満たしている解答 (①のみ満たしていない)	0.0%
	ウ 条件③を満たしている解答 (①, ②は満たしていない)	0.0%
	オ 上記以外の解答	23.4%
	カ 無解答	3.0%

(参考)

問2 空欄「ア」に当てはまる言葉を、要望の内容が具体的に分かるように、二十五字以内で書け(句読点を含む)。

- 正答例 例1 ・体育部同士の兼部及び文化部同士の兼部を認めてほしい (25字)
 例2 ・体育部と文化部間以外の兼部も認めてほしい (20字)
 例3 ・すべての部活動間における兼部を認めてほしい (21字)

正答の条件

- ① 25字以内で書かれていること。
- ② 文末表現が「という要望」に適切に続くように書かれていること。
- ③ 「体育部同士及び文化部同士の兼部」(又は「体育部と文化部間以外の兼部」, 「すべての部活動間での兼部」)ということが書かれていること。
 なお、体育部・文化部の一方に限定したもの(例:「文化部について兼部を認める」)は正答としない。

※ 正答の条件を満たしているかどうか判断できない誤字・脱字があった場合は、条件を満たしていないものとする。

解答類型		割合 (%)
問3	ア 条件①～④のすべてを満たしている解答	0.7%
	イ 条件①, ③, ④を満たしている解答 (②のみ満たしていない) 又は 条件②, ③, ④を満たしている解答 (①のみ満たしていない)	0.1%
	ウ 条件③, ④を満たしている解答 (①, ②は満たしていない)	0.0%
	エ 条件①～③を満たしている解答 (④のみ満たしていない) 又は 条件①, ②, ④を満たしている解答 (③のみ満たしていない)	11.1%
	オ 上記以外の解答	81.6%
	カ 無解答	6.6%

(参考)

問3 空欄「イ」について、ここで森さんは何と述べたと考えられるか。次の(1)～(4)を満たすように書け。

- (1) 二文構成で、八十字以上、百二十字以内で書くこと(句読点を含む)。なお、会話体になくてよい。
- (2) 一文目は「確かに」という書き出しで、具体的な根拠を二点挙げて、部活動の終了時間の延長を提案することに対する基本的な立場を示すこと。
- (3) 二文目は「しかし」という書き出しで、部活動の終了時間を延長するという提案がどのように判断される可能性があるか、具体的な根拠と併せて示すこと。
- (4) (2)・(3)について、それぞれの根拠はすべて【資料①】～【資料③】によること。

記述式問題の解答状況です。正答の条件を全て満たした割合が、問1で43.7%。問2は73.5%です。問3は0.7%となっており、問題の設定や正答の条件の複雑さが影響したと考えられます。

次回の試行調査に向けては、正答の条件をよりシンプルに整理することを検討しているところです。

(誤答例のイメージ)

申請時の手続きではなく、申請後の認定の手続きを記載

す	生	上	部
る	徒	活	の
こ	総	動	新
と	会	し	設
。	で	て	に
	週	い	は
	半	る	同
	教	こ	妙
	の	と	会
	賛	を	と
	成	衆	し
	を	待	て
	必	と	3
	要	し	年
	な	。	以

申請時の条件、手続き、申請後の認定の手続きの順序（時系列）を誤っている

	と	徒	所
	し	会	定
	て	部	の
	3	活	様
	年	動	式
	双	委	に
	上	員	必
	活	会	要
	動	に	事
	す	提	項
	る	出	を
	こ	し	記
	と	同	入
	。	行	し
		会	生

同例会として3年以上活動した後に申請したが、申請した後に活動すると読み取れる。

申請時の手続きについて、規約に基づき正確に記載できていない

と	で	活	部
。	に	動	の
	記	し	新
	入	。	設
	し	協	は
	、	該	同
	委	年	好
	員	度	会
	会	の	と
	に	四	し
	現	月	て
	出	第	三
	す	二	年
	る	週	双
	こ	ま	上

何に記入するのか（所定の様式）、どの委員会に提出するのか（生徒会部活動委員会）明確ではない。

。	徒	定	同
	会	の	好
	部	様	会
	活	式	と
	動	に	し
	会	必	て
	員	要	3
	会	事	年
	に	項	双
	現	を	上
	出	記	活
	す	入	し
	る	。	。
	こ	と	所

条件の手続きの一つである申請期限が示されていない。

このように、誤答例のイメージなども公表していますので、高校での指導などにもお役立ていただければと思います。

【数学】

解答類型ごとの割合は次のとおり。

		割合 (%)
問 (あ)	正答	2.0%
	誤答	48.2%
	無解答	49.8%
問 (い)	正答	4.7%
	誤答	38.3%
	無解答	57.0%
問 (う)	正答	8.4%
	誤答	45.1%
	無解答	46.5%

数学につきましては、全体的に正答率が低い結果となりました。無解答率が高いことも目を引きます。やはり、解いてみようという挑戦をしてもらわないといけませんので、開始当初はもう少しシンプルに数式あるいは短文で問うていくというようなことを検討しています。➡

(2) 自己採点の分析

【分析・検討方針】

- 自己採点の一致率に関する分析データ等を基に、国語WG及び数学WGにおいて作問や正答の条件の在り方に関する検討を行う。
- 国語と数学の記述式問題の自己採点と採点結果の一致率は以下のとおりである。

【国語】

国語の受験者数は64,500名。このうち、自己採点が正しく記入されていたのは、問1は61,248名、問2は61,193名、問3は61,151名であった。これらを対象に、自己採点と採点結果の一致率の分析を行った。

なお、採点不能とは「『正答の条件』に合致しているかどうか判断がつかない」、解答不明とは「下書きをしていない又は自分の解答を覚えていないため、自己採点ができない」と受験者が判断した場合である。

問1		一致	不一致	採点不能	解答不明
割合		71.6%	27.3%	0.5%	0.6%
(採点不能と解答不明を除く)		72.4%	27.6%	—	—

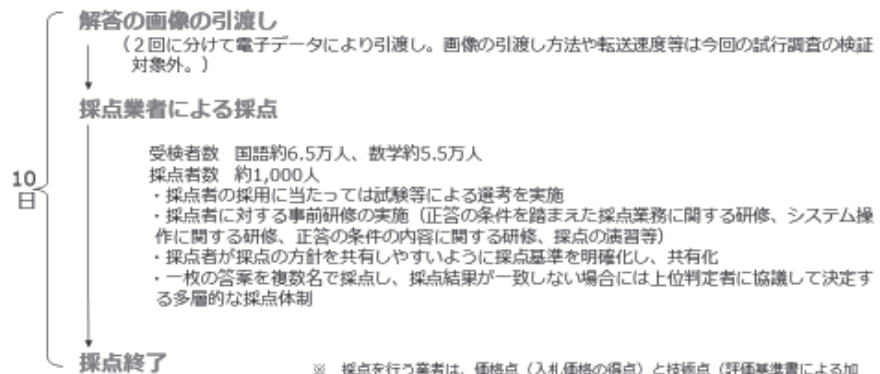
		自己採点							
解答	ア	34.8%	0.2%	7.0%	1.5%	0.1%	0.0%	0.2%	0.1%
	イ	1.6%	0.1%	0.4%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	ウ	5.2%	0.3%	24.0%	2.4%	0.2%	0.0%	0.1%	0.1%
	エ	0.8%	0.1%	3.9%	8.7%	0.3%	0.1%	0.1%	0.1%
	オ	0.4%	0.0%	1.5%	1.0%	2.1%	0.1%	0.1%	0.1%
	カ	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%	0.1%	0.1%

受験者自身による自己採点の分析も行いました。国語の一致率が約7割となっています。これを完全に一致させることはなかなか難しいと思いますが、正答の条件を分かりやすく示したりすることなどにより、受験生がより正確に自己採点ができるような状況を目指していきます。

(4) 採点及び検収の体制及び期間

【分析・検討方針】

- 採点及び検収の体制に関しては、必要な採点者の確保や事前研修の在り方、実際の解答を踏まえた採点基準の策定方法、多層的な採点の運用方法、採点システムの在り方、必要な検収者の確保や事前研修の在り方等について検証を行い、今後の採点及び検収体制の構築に向けた検討に生かす。
- 採点及び検収の期間については、必要なプロセスに要する日数を洗い出しながら採点及び検収を実施し、限られた期間内で実施するために必要な体制やシステムの在り方を検証する。
- 今回の試行調査では、採点を行う業者には15日以内での採点を依頼し、スケジュール内（10日）で採点終了。採点の主な流れは以下のとおりである。



↓
採点結果の検収：国語は4日、数学は3日かけて検収を実施

↓
再採点：検収結果を踏まえ、採点を行う業者による再採点（3日程度）

↓
再検収：国語、数学とも1日程度

※再採点では、検収結果を踏まえ、全体的な答案の見直しを行っている。

※今回の採点・検収プロセスは、工程を重ねることなく分割して実施した。実際には採点と検収の工程は同時並行で行う予定であり、全体の期間はこれらの日数の合計よりも短縮されることを想定している。

※なお、採点基準の作成は問題及び正答の条件確定後にセンターにおいて行った。また、検収の過程で、採点基準に盛り込むべき事項の検証も行った。
平成30年度試行調査に向けては、問題及び正答の条件の作成と同時並行で、可能な限り早期から、採点責任者に守秘義務を課した上で採点基準のすり合わせを行うことを想定している。

採点の過程についても様々な分析をしており、それらも全て公表しています。今回は採点基準の調整を採点作業と並行して行いましたが、次の試行試験では、試験の実施前に、作問と同時並行で正答の条件と採点基準を作り、試験実施直後に実際の解答例を見ながらそれを調整・確定させていくことになります。

(5) 国語の記述式問題の成績表示

【分析・検討方針】

○ 実施方針を踏まえ、試行調査の結果を活用して、小問ごとの段階別表示（3段階表示～5段階表示）、小問に応じた重み付けの在り方、総合評価としての段階別表示（3段階～5段階）等についてシミュレーションを行い、大学及び高校関係者の意見を聴取しながら、国語WGにおいて論点の整理を行う。

○ テスト関係の有識者、国語WG委員等で段階別評価の検討を行い、次のような意見をいただいているところ。

- ・記述式問題導入の当初は、小問ごとの段階はあまり細分化せず、なるべく少なくすることを考えた方がよいが、「正答」、「正答の条件を一部満たす」、「誤答」の3段階のみでは、特定の段階に受検者が集まりすぎてしまうので、4段階程度がよいのではないかと。
- ・大学での活用のしやすさを考えれば、小問ごとの段階だけではなく、総合評価を段階で示した方がよいのではないかと。また、センターでは点数化はすべきではなく、仮に点数化するのであれば大学の判断によるものとした方がよいのではないかと。
- ・小問間の重み付けについては、問3は文字数や問いたい資質・能力を勘案すれば他より重く重み付けをした方がよいのではないかと。
- ・総合評価の考え方を受検者に分かりやすく示す方法を検討すべきではないかと。

記述式問題の成績については、数学のほうは、正答か誤答かで段階のない出題となりますので、マーク式問題と記述式問題の配点を合わせて100点満点という形を想定しています。一方で国語は段階別表示になります。今のところは小問ごとに4段階、総合で5段階表示を考えていますので、マーク問題の200点とは別に段階別表示がなされることになります。その結果をどう扱うか、例えば点数化するかどうかなどは各大学ごとにお決めいただくことになってまいります。

- 段階別表示のシミュレーションを通じて、以下の課題が考えられる。
 - ・形式的な条件を一部満たし（又は、全て満たさない）、かつ、内容的な条件を全て満たしている解答数（②③）は少ないが、これを一つの段階として設定した場合、選抜に機能しない可能性がある。
 - ・②と③を一つの段階とした場合、形式的な条件の意味が薄れてしまう恐れがある。
 - ・「４段階」と「３段階 その１」のパターンでは、内容的な条件を一部満たす（半数未満）解答と一つも満たさない解答が同じ段階（評価）となる。
 - ・問１は、ある程度の正答率があるため、「３段階 その１」では、各段階の分布に大きな偏りはない。しかし、問題の難易度が高く、正答率が低い場合には、段階cに分布が偏る可能性がある。

- 小問問の重み付けについては、問３は文字数や問いたい資質・能力を勘案すれば重み付けをした方がよいと考えられる。

	文字数	問いたい資質・能力	予想正答率	重み付けの有無
問１	40字程度※	②テキストの全体を把握、精査・解釈して解答する問題	やや高い	なし
問２	20字程度※			
問３	80～120字程度※	③テキストの精査・解釈に基づく考えを解答する問題	やや低い	重み付けは、例えば1.5倍程度とすることが考えられるか。

※今回の試行調査では、50字、25字、80～120字とした。

こういった分析を踏まえ、新しいテストの問題作成の方向性を検討しているわけですが、６月には各高校、各大学に、検討中の方向性をお知らせする予定です。また、その方向性を踏まえた試行調査を、今年１１月に実施させていただきます。

試行調査の実施については、各高校、大学にいろいろなお願いをさせていただいているところで、御協力をいただき、まことにありがたいと思っています。

受験生が何をどのように学び、何ができるようになるかということの成果を、最大限捉えて次につなぐことのできるような試行調査、共通テストにしていくなためにも、ぜひ今後とも御協力をお願いしたいと思います。

以上、大変駆け足にはなりましたが、御清聴いただきましてありがとうございました。



特集 2●全体討論

大学入学共通テストの導入に向けた準備 状況と試行調査(プレテスト)について

山田 泰造（文部科学省大学入試室長）/大杉 住子（大学入試センター審議役）/島田 康行（筑波大学教授）/塩瀬 隆之（京都大学准教授）/
木谷 雅人（国立大学協会常務理事）/宮本 久也（東京都立八王子東高等学校長）/古沢 由紀子（読売新聞東京本社論説委員）/椿 美智子（電気通信大学副学長■司会）/浅田 和伸（大学入試センター理事■司会）

【椿・司会】 それでは、全体会2のパネルディスカッションを行います。はじめに5人のパネリストの方から御発言をいただきます。その後、先ほど御報告いただきましたお2人も含め7人で御議論いただきます。

まず、パネリストの皆様を御紹介します。筑波大学人文社会系の島田教授です。島田先生は、筑波大学アドミッション・センターの前センター長で、文部科学省の大学入学共通テスト、記述式の作問方法検討チーム委員も務めておられます。

次に、京都大学総合博物館の塩瀬准教授です。塩瀬先生は、文部科学省中央教育審議会、教育課程部会の高等学校の数学・理科にわたる探究的科目の在り方に関する特別チーム委員を務められました。

次に、国立大学協会事務局長の木谷常務理事です。木谷理事は、文部科学省大臣官房審議官、京都大学理事等を経て、平成25年7月から現職に就任されています。

次に、東京都立八王子東高等学校の宮本校長です。宮本先生は、今年3月まで東京都立西高等学校の校長で、この間の約3年全国高等学校長協会会長を務められ、文部科学省等の主要な会議にも数多く参画されています。

最後に、読売新聞東京本社論説委員の古沢さんです。古沢さんは、読売新聞ロサンゼルス支局長や、編集局教育部長を務められ、長く国内外の教育の動向を取材されています。平成28年9月から論説委員として御活躍されています。

また、先ほど御報告いただいた文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室の山田室長と大学入試センターの大杉審議役にも御登壇いただいております。それでは、島田先生から御発言をお願いします。

【島田】 筑波大学の島田です。どうぞよろしくお願いします。今日は、昨年11月

に行われた試行調査の国語の結果を振り返りつつ、大学入学共通テストの出題について考えたいと思います。先ほどの大杉審議役からの概略的なお話と、少し重なるところもありますが、私の方からは、やや具体的なお話をしたいと思います。

試行調査(マーク式問題)より

・ アンケート調査の結果

- * 試験時間(80分)が短かった ...50%
- * 問題(テキスト)の量が多かった ...80%
- * 問題が難しかった ...90%

・ 受検者にとって新規の傾向

- ・ 古典を含めて多様な出題パターンを提示
- ・ 30年度試行に向けて調整が必要

これは、大学入試センターが先般公開した試行調査の結果報告から、受検者に行ったアンケートの結果を抜粋したもので、国語のマーク式問題に関する部分です。これを見ますと、試験時間の80分は少し短かったという答えが約50%。問題の分量が多かったという答えが約80%。問題は総じて難しかったという答えが約90%となっていて、受検者がやや苦戦したことが伺えます。

大杉審議役の御説明にもありましたとおり、受検者にとって新傾向の問題であったことが響いたのだろーと思ひます。全ての大問で複数の素材文が設定されるというのは、従来のセンター試験や模試等でもほとんどなかったと思ひます。また、現代文では、文章と図表を比較して分析させるような出題というのも新傾向でした。教室の学習の場面、言語活動の場面が、全ての大問で設定されているところも新しかったと思ひます。

正答率もあまり高くはなかったのですが、これは国語の受検者が2年生が中心であったことも影響しているのだろーと考えています。

また、古文や漢文についても、同じように複数の素材文があつて、学習の場面が設定されていました。これは、現代文に限らず古典でもそういう問題が出される可能性があることを、お示しする目的もあつたわけです。

もちろん、本番の試験で、全ての問題がこのような新傾向になるということではありません。次回の試行調査で、さらに全体の構成、テキスト量、難易度等を調整することが必要だと思ひます。

試行調査(記述式問題)より

- 完全正答率
問1: 43.7% 問2: 73.5% 問3: 0.7%
- 解答の傾向
 - * 根拠を示して判断を述べる記述が不十分
...学習上の課題が浮き彫りに
- 設問側の要因
 - * 条件設定が複雑
 - * 指示に曖昧さも
- 30年度試行に向けて調整が必要
- 持続可能性

こちらは、記述式問題の解答状況です。完全正答率では、問1が43.7%、問2が73.5%、そして問3が0.7%と非常に低かったのですが、これは形式の要件、それから内容の要件など、全ての要件を満たした正答がこういう割合だったということです。とは言え、総じて正答率は低いわけで、その解答の一つ一つの中身を見ますと、やはり根拠を示して判断を述べる記述は、不得意だったようです。これは、従来指摘されていたような学習上の課題が、浮き彫りになったと見るができると思います。

もちろん、条件設定が複雑すぎるという設問側の要因も当然ありました。ただ、今回は、どこまで複雑にできるかというチャレンジもあったわけで、ここまで複雑にするとこれぐらいの正答率だということも今回分かったということです。そこは次回の試行調査あるいは本番に向けて調整をしていくことが必要だと考えています。

■ こういう新しい傾向の問題を、ずっと出し続けられるかということ
ことです。これは従来のように、大学の教員だけが作題に携わ
っていては、なかなか難しいと思います。(島田)

それから、設問の問い掛け文についても、どこまで書けばどういう解答が出やすいのかといった検証もしています。そのような知見も生かして、次回の試行調査に向けて調整をしていくことになります。

なお、一つ大切なことは、こういう新しい傾向の問題を、ずっと出し続けられるかということです。これは従来のように、大学の教員だけが作題に携わっていては、なかなか難しいと思います。高校教育の現場の知見も有効に活用する方途を、工夫していく必要があるだろうと考えます。

問いたい資質・能力と出題形式

【国語】 解きさせる内容（問題の例）と資質・能力、試験形式との関係について（先立考慮）			出題形式
解きさせる内容（問題の例）	資質・能力	試験形式	出題形式
①選択式・短答式 ②選択式・条件付記述式 ③選択式・条件付記述式 ④自由記述式・小論文	資質・能力 解きさせる内容（問題の例）	①選択式・短答式 ②選択式・条件付記述式 ③選択式・条件付記述式 ④自由記述式・小論文	①選択式・短答式 ②選択式・条件付記述式 ③選択式・条件付記述式 ④自由記述式・小論文

このスライドは、問いたい資質と能力をまとめた表です。横の欄に問いたい資質・能力が入りまして、縦の欄には出題の形式が並びます。大杉さんから説明がありましたように、共通テストで問うのは③のところまでということです。

右上に「検討中」とありますように、なかなか確定版にはならないわけですが、こういう枠組みの中で作問されたわけです。

■教科書は名文選、名作選であるべきだし、試験問題も良い文章を素材にしてほしいという意見もありました。そういう国語もいいのですけれども、／（島田）

御存じのように、去る3月に、高等学校の新学習指導要領が告示されました。平成36年度に向けましては、その新学習指導要領の内容も踏まえつつ、どういう資質・能力を測っていくべきなのかについて、引き続き整理が必要です。既に小学校、中学校の学習指導要領は、告示から1年経っているわけですが、例えば中学校の学習指導要領の国語を読むと、その中には、文章を批判的に読むというような1項も付け加えられています。高等学校の国語には、例えば、情報と情報との関係に関する事項として、推論の形式を理解するであるとか、各種の推論を使い慣れるなどの指導事項も含まれています。ですので、そういったことをどのような形で問題に落とし込んでいくのか、工夫が必要になってまいります。根拠の正確性や信頼性を吟味するとか、論拠の適切性を吟味するというようなことも、学習指導要領には入っていますので、その辺りも、

今後どのように作問に生かしていくか検討することになろうかと思います。

高校教員の受け止め ① (教員アンケートより)

- ・ 今までの学習に加えて、様々な視点で授業を行っていく必要性を感じた
- ・ 複数の要素を結び付けて思考する能力も必要
- ・ 情報処理能力が求められてくるという印象
- ・ 指導改善の課題になる
- ・ 資料を比較し分析する力、...的確に文章化する力を養うためにどう授業を工夫すべきか
- ・ 深い読解と考えを記述するというスタイルが、筆記で測ることのできる国語力...。良い文章を材料とし、練りに練られた問いを期待する

こちらは、高校教員へのアンケートの結果です。「今までの学習に加えて、様々な視点で授業を行う必要性を感じた」とか、「複数の要素を結び付けて思考する能力も必要」、「指導改善の課題になる」、「資料を比較し分析する力、的確に文章化する力を養うためにどう授業を工夫すべき」かが課題になる、といった御意見がありました。

一方、旧来の国語の価値観も根強く、教科書は名文選、名作選であるべきだし、試験問題も良い文章を素材にしてほしいという意見もありました。そういう国語もいいのですが、新しい国語で養う力は踏まえなければなりません。共通テストの問題も、全てが変わるわけではありませんし、新たに強調された点は適切に取り入れて、一体的に改善していくことが求められていくと思います。

高校教員の受け止め ② (参考文献より 1/2)

▼ 出題例について

- ・ 従来の国語教育の指導内容とのズレ
- ・ 個別試験の記述式問題との差が大きい
- ・ 思考力の測定に限界あり
- ・ 難易度が低い

(東北大学高度教養教育・学生支援機構編
『個別大学の入試改革』2018)

こちらは、東北大学の刊行物に記載されていた、同じく高校教員の受け止めです。例えば、従来の国語教育の指導内容と随分ずれているのではないかという御指摘。そうです。新しい国語が始まるのですから、教育内容をそちらへ寄せていただくことになります。それから、個別試験の記述式問題との差が大きいという御指摘もありました。高校の教育内容が変わって、共通テストの内容も変わるのですから、個別試験の記述式問題もそちらへ向けて転換する工夫が必要になるだろうと思います。思考力の測定には限界がありそうだという御意見もありました。おっしゃるとおりだと思いますし、採点のしやすさとのバランスは考える必要があると思います。しかし、記述式問題は、思考力、判断力の他に、表現力も測る問題です。中教審で高校国語における「書くこと」の指導が不十分であることが指摘されたように、今の高校生は、まとまった内容を短い文章にまとめるというような力の低下が相当深刻な状況になっています。「書くこと」を重視した授業への転換を促すことも、共通テストに記述式を導入することの一つの意味だと考えます。

それから、易しすぎて県立高校の入試問題と変わらないという意見もあったのですが、実際の正答率を見るとそうではありませんでした。

高校教員の受け止め ② (参考文献より 2/2)

▼ 授業への影響

- ・ これまでの授業で対応可能



- ・ 自分の考えを論理的に表現する場を設定
- ・ 記述力の養成に努めている
- ・ グループ内での対話を重視する
- ・ より広範な文章に触れさせる必要がある

こちらも高校教員の受け止めの例です。従来からの記述式の学習に取り組んでいるような高校では、これまでの授業で十分に対応が可能だという声もありました。一方で、自分の考えを論理的に表現する場を設定していきたいとか、記述力の養成に一層努めていきたいという声もありました。

総じて拝見しますと、授業改善の意識が相当はっきり表れていると思います。この試行調査が、その後押しになったのかもしれませんが。以上です。

【椿・司会】 それでは次に、塩瀬先生お願いします。

【塩瀬】皆さんおはようございます。京都大学の塩瀬と申します。最初に二つだけ、皆さんに質問をいたしますので挙手でお答えください。

この新テストの試行調査が、昨年の11月に行われていたことを知っていた方は、挙手をお願いします(→大部分挙手)。さすがにこの入研協大会に出席されている方たちですね。それではもう一問、試行調査の問題をどれか1科目でも実際に御自分で解いてみたという方はいらっしゃいますか。はい、40人ぐらい手が挙がりました。私はこのところ、幾つかの教育委員会に招かれて、入試改革や高大接続について高校の先生にお話ししているのですが、そういう場で聞いてみますと、この試行テストを御自身で解かれた先生は5~10%くらいでした。せっかくこうやって試行調査が行われて、その問題もHP上で確認できるので、まだ確定していないとはいえ、大事な生徒さんが挑む試験問題が具体的にどう変わっていくかを体験した上で、皆さんで議論を交わせたらと思っています。

テストは

「このような方向性で力をつけてほしい」

というメッセージ

新テスト試行調査のメッセージがどのように伝わったか、10校の高校生、高校教諭にヒアリングした結果から抜粋

私は、テストというものは、このスライドにあるように「このような方向性で力をつけてほしい」という大学から高校生をはじめとする受験生の皆さんへのメッセージだと思っています。ですから、今回の大学入試改革あるいは試行調査についても、そこに込められたメッセージを読み解いていただきたいと思っています。そのメッセージについての議論をした上で、その方向性に向かったの作問の方向性について議論できたら幸いです。

試行調査の公式の分析結果は、大学入試センターのホームページに載っていますが、私は、試行調査を受検した生徒さん自身やその先生方から、実際の試行調査問題文をたどりながら、どのような問題で悩んだのかということなどについて聴き取り調査をしましたので、それについて御報告したいと思います。

プレテストに対する高校教諭の感想

「新テスト、衝撃を受けました。これで受験観が変わるだろうなあと。高校の授業も、高校受験も変わっていかないといけないでしょうね。」

「これがセンターか(驚)。選択肢がなければ地方国立大レベルではないか。今までの準備では間に合わないと感じた。正直、今後どのような授業をしていけばよいのか、わからなくなった。」

「60分で解くにはボリュームがありすぎるかと。これが普通になれば、まずは読む力をつけることが必要だと思いました。」

「うちの生徒は高1のうちに実験などを生徒に考えさせているので対応できた。」「これは良問だと思う。一年生のうちからもっと考えさせる授業をしたいな、と思いました。」

これは、試行調査に対する高校の先生の感想です。「新テストに衝撃を受けました。」「受験観が変わるかもしれない。」「これで高校の授業も変わらないといけない。」「また、本当にセンターレベルなのか。選択肢がなければ、かなり難易度が高い」というコメントもありました。「60分で解くには分量が多すぎる」という声は、どの先生からも聞かれましたが、逆にそういう声を聞くと、読む力を付けることが必要だというメッセージがしっかりと伝わっているなとも思いました。

学校によっては、1年生のうちからしっかりと実験をさせたり、読解力を育てたりしているので、全く問題なく対応できたというところもありました。普段の教育内容を入試のメッセージにうまくマッチさせていけば十分に対応可能だという先生もいらっしゃいました。

プレテストに対する高校生の感想

「前文が長かったので間に合わないから読むのを諦めてしまった。」「せっかく長文を読んだところも、状況を把握したのに小問が少なくてがっかりした。」

「実験からデータを読み解いて考察する力を問われていると感じた。」「グラフは描かなくても選択肢で選べた。あとでみて確認した。」

「化学第4、5問など現実社会の基本原則、理屈など考える問題は面白かった。」「でも問題文が長すぎてページを戻らないと変数が分からなくなった。」

こちらは、実際に受けた高校生の感想です。「この問題は飛ばしてしまいました」とか、「この問題は何を聞かれているのかがだんだん分からなくなりました」などのコメントを聞きながら、物理や化学の試験問題を実際に確認していったのです。「長過ぎるから」とリード文を読むのを諦めた生徒さんもいれば、「読まなくても解けるぞ」と判断して読まなかった生徒さんもいました。

さらに、「実験からデータを読み解いて、考察する力を問おうとしているのだろうな」と、生徒さん自身が話しながら解いていたり、「これはグラフを書かなくても、選択肢から選べました」と言って、グラフを書くところをすっ飛ばしてしまった生徒さんもいらっしゃいました。

化学の第4問、第5問などは、現実社会の基本原理や理屈などを考えさせる面白い問題でした。しかし第4問は、長い問題文のページと図で1ページを使ってしまっているため、設問は次のページから始まりますので、問題を解くために何度もページを行きつ戻りつしなければなりませんでした。こういう点は作問の工夫で改善する必要があるかもしれません。

試行調査から受けとられたメッセージ

「文章量が増えたが、それは会話文や長文の問題が増えたからであり、問いそのものと関係のない文章も多い。」「問題を解くうえで、必要な情報が多いのは、生徒の科学的思考を試すのにとても良い方法」

「化学第4問は課題研究や探究活動とも関連が高い良問。目的意識をもって濃度計算をした経験がある生徒には溶存酸素の問題などは有利」

「複数正答や解なしなどの新たな挑戦は面白い。」「しかし、出題箇所が必然性のある設問でなければ、テクニックとして避けられてしまう懸念がある。」



作問の方向性は概ね高評価。戸惑いや消極的意見に対しては運用の工夫で対応し、改革に込めたメッセージは維持していただきたい。

試行調査がトライしようとしているメッセージは、高校生や教員の皆さんには多分しっかりと伝わっていると思います。文章量自体は増えたけれども、実際には、解くプロセスそのものには直接関係のない文章も多くあります。問題を解く上で、必要のある情報とない情報を分けて、必要のある情報を取り出すという力自体がとても重要なので、これは、科学的思考を問うにはよい問題だというコメントを、寄せてくださった先生もいらっしゃいます。特に、化学の第4問などは、課題研究や探究活動と関連が強く、課題研究や探究活動に力を入れてきた学校としては、特に新たな対応を要しないという先生もいました。

今回はマーク式問題の中で、複数正答の問題や解無しなどの、新たな挑戦がされていましたが、受験テクニックにおぼれて引っ掛かっている生徒もいました。

例えば、1～6まで選択肢があった場合に、1～3と4～6の二つの群を考えて、複数解答なのだから多分両群から1個ずつだろうと当たりを付けて選択している生徒さんも多かったようです。実際には、片方の選択肢群の中に正答が二つあるという今までにない作問方法であったことから、受験現場では戸惑いがあったようです。

選択肢の読み取り方から問題を解こうとする生徒さんが引っ掛かってしまうという意味においては、うまく受験テクニックだけの受験生を振り分けるスクリーニングが機能しているのかもしれませんが、今までのマークシート試験についての暗黙の了解が崩れていることでもあります。この暗黙の了解が崩れるということが、出題上のメッセージであるならば、そこはそれでよいと思いますし、そこで生じた戸惑いは、いずれはまた新たな受験テクニックとして解消されることだろうとは思いますが。

「解無し」に関しては、今回の試行調査では実際に正答を「解無し」とする問題までは出題されていませんが、アメリカの数学の教科書でこんな秀逸な選択肢を見かけました。たとえば、1～5の選択肢から選ばせる問題で、5番目の選択肢は、It cannot be determined from the information given.という選択肢なのです。与えられた情報からだけでは解けませんということをしっかりと表明する選択肢です。これは非常に重要な選択肢の作り方で、単なる解無しではなくて、これはこの条件設定では解けないということを理解した上で、解答させる高度な解答方法の選択肢になります。ですから、「選択肢の外側に解があるかどうか」ということや、ただ「単に解けない」という、「どれも当てはまらないから、消去法的に解く」のではなく、積極的に、「これは無理に解答を出すべき問題ではない」ということを表明する力を問うようなマークシート問題なのです。

そういう意味で、マークシート方式の問題でも、思考力、判断力を問えるような問題は作れるのではないかと思いますし、今回の作問の方向性に関しても

おおむね高評価を得ているようです。つまり、社会がこういうことを求めている、そして、入試もこういうことを目指していかないといけないということは、メッセージとしては分かったと言ってくれる方々もいらっしまったので、そういった改革のメッセージをきちんと維持した上で、次の改革に向かっていくべきではないかなと思います。

試行調査のチャレンジを新テストに活かすために

1) 10分試験時間の延長(読解時間の確保)

- ・長い前文は科学的思考に直結するが読み込めていない生徒が多い
- ・ここで文章を減らす安易な対応は読解力不要の後退したメッセージ
- ・時間を増やすか問題数を減らすかでメッセージを後退させない現実解は時間延長か

2) 10%科学的思考共通問題(科学技術人材 基礎の基礎定着)

- ・理科試験範囲に「数理探究基礎」の範囲を盛り込んでおく
- ・理科横断で科学的思考／理科的思考など「数理探究基礎」範囲から2問ずつ出題する
- ・平成18年理科総合A「ろうそくの科学」の物理化学融合問題など参考
- ・2006年PISA型科学的リテラシー「グランドキャニオン問題」15か国中最下位を看過しない

3) 10%チャレンジ問題枠(ムーミンを守る機運づくり)

- ・新たな試みを安易に叩く風土が作問を保守的にさせてしまう
- ・新しい方向性と作問の完成度を切り離して前向きにPDCAを回す仕組み(安易に止めない)
- ・「判断が分かれる問題を出せない」という消極的な空気を払拭し日本全体で挑戦

このスライドに書かれているのは、完全なる私見ですが、三つの項目を 10 という数字で括ってみました。

まず、一つ目の 10 ですが、理科は 10 分試験時間を延長していただけないでしょうか。それはなぜかという、今回、読解時間が足りなくて、解答を諦めてしまったという生徒さんたちがたくさんいます。前文の文字数を減らすとか、問題数を減らすという解決策もありますが、読解力が大切だということがメッセージであるならば、試験時間を延長するという解決策もあるのではないかと思います。もちろん、試験時間延長がどれほど困難なことかはよく理解した上での提案で、そうでなければ中途半端に問題文が長文化するだけに留まらないかが心配です。

二つ目の 10 ですが、これは 10%程度、科学的思考の共通問題を作れないかということです。センター試験のような試験問題を作ってこられた先生方にもヒアリングしたのですが、生物などは物理や化学と違って思考力を問う問題を出すのがやはり非常に難しいという前提があるからです。そこで、科学的思考力、理科的思考力について共通問題が作れないのかという提案です。例えば、平成 18 年度の理科総合 A に出ていた、ろうそくの科学に関する問題は、物理と化学の融合問題として非常に優れた問題だと思います。

また、今回の学習指導要領の改訂の中で、理科の課題研究がなくなり、数理

探究になったわけですが、例えばその数理探究の基礎などでは、科学的思考力を問うことを求めていますし、そういったところを共通問題にできないだろうかと思えます。

そう思っている理由の一つですが、2006 年の PISA 型の調査の中で、科学的リテラシーを問う調査がありました。その中に、グランドキャニオン問題というものがありました。グランドキャニオンの景色を見せて、一つは、歩行者が増えたことで浸食度が増すことについて、科学的調査が可能かどうかという質問です。もう一つが、この景色の美しさが 100 年前と同じであるかどうかについて科学的調査が可能かを問うものです。

**■日本の生徒は知識を問う問題への正答率は非常に高いのです。
つまり、日本の科学力の高さは、知識で順位を稼いでいたのです。(塩瀬)**

正解は、前者については「はい」、後者については「いいえ」が模範解答として準備されているのですが、日本の生徒の正答率は、当時調査の 15 か国中最下位でした。日本の生徒は知識を問う問題への正答率は非常に高いのです。つまり、日本の科学力の高さは、知識で順位を稼いでいたのです。そう考えると、科学技術立国を目指す我が国において、どのような人材が必要なのかということに関連してきますので、科学的思考、理科的思考をしっかりと問う共通問題をうまく作れないかと思っています。

最後に三つ目ですが、10%チャレンジ枠と書いたのは、2018 年の 1 月のセンター試験で出題された「ムーミン問題」を守る気運ができないかということです。当時はいろいろとマスメディアでも騒がれていたと思いますが、実際にムーミン問題で受験した生徒さんたちに感想を聞く機会を得ました。その生徒さんたちのうち 7 割ぐらいの人は面白かったと言っていました。嫌だったと答えた 3 割の生徒さんに、なぜ嫌だと感じたのかを尋ねたところ、高校の先生からは「センター試験には習っていないことは出ないぞ」と聞いていたのに実際には出たことがショックだったようです。習っていないはずの「ムーミン」が試験に出たから嫌な気持ちになったということでした。でも、それは、習っていないことが出題されたことに対する嫌気であって、問題そのものは、自分で解けば他の知識の活用で十分解けた問題であるということは分かっていたようです。つまり、この問題が何を問おうとしているのかは分かっていたと。しかし前提として、センター試験には習ったこと以外は出ないと、先生から教わってきたと言っていました。ですから、そういう意味では、習っていること、習っていないことにかかわらず、思考力をしっかりと問う問題であるということが、メッセージでちゃんと出せていればムーミンだろうが他のキャラ

クターだろうが何が登場してもよかったはずではないかと思います。

■今回のムーミンの問題は、作問の方向性そのものはすごくいいと思うのですけれども、日本の場合は、ちょっとネットで炎上すると、すぐに全部に蓋をしてしまいます。(塩瀬)

特に今回のムーミンの問題は、作問の方向性そのものはすごくいいと思うのですけれども、日本の場合は、ちょっとネットで炎上すると、すぐに全部に蓋をしてしまいます。そうすると、こういうチャレンジはすぐ止めてしまおうになってしまう気がします。きちんと PDCA のサイクルを回すためにも、新しい試みのどこが問題でどこがよかったのかということを冷静に検討する気運が大切だと思います。そういう意味で言うと、10%ぐらいは、いろいろなチャレンジをした結果としていろいろなことが生まれるということを、社会全体の気運として守ることができれば、どの大学もしっかりとチャレンジができるのではないかと考えています。今はマスコミに叩かれたり、ネットで炎上することを恐れて、大学だけでなく、高校も中学校も、入試問題を作るときに保守的に過去を踏襲する方法しか選択できずにいるように感じます。

どの学校も真剣に入試を作っています。
いい人材に入学してもらいたいから当然。

挑戦したうえでのミスを笑わないとがめない
健全な社会でこそ改革が進むはず。

55万の受験者が受ける新テストだからこそ
前向きの教育改革のチャレンジを
ぜひこのままリードしてってください

最後のスライドです。このスライドの中で言いたいことは、みんな真剣だということです。入試ミスを起こそうとして問題を作っている人は、誰もいらっしやらないはずです。どの学校もいい人材に入学してもらいたいから真剣に入試問題を作っているはずです。その中で、新しいチャレンジをしたいのですけれども、入試ミスと言われることを恐れてしまって、結局今までと同じようなものを踏襲する問題しか出せないということが、改革のボトルネックです。

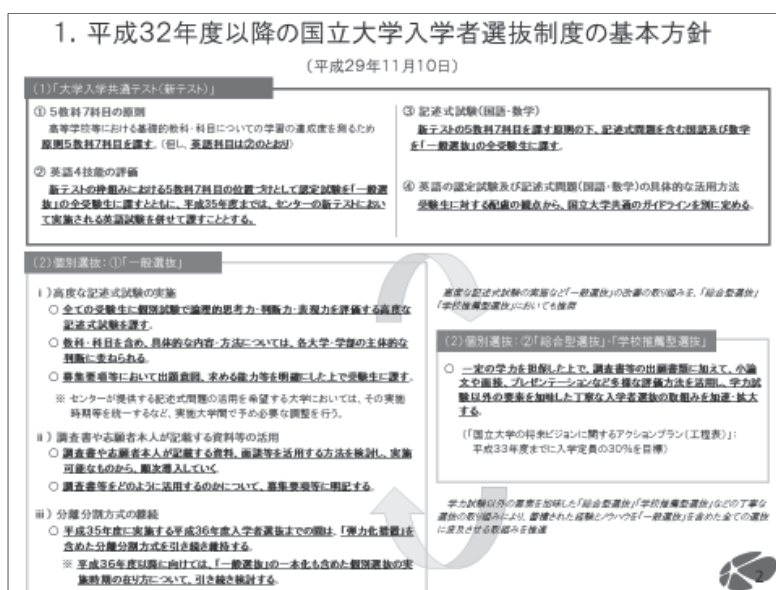
そのような新たなチャレンジを認めるのか、ただ単にミスをゼロにするのかというところを考えたときに、全体としてどちらを望むのかという気運の問題

だと思うのです。

挑戦した上でのミスを笑わない、とがめない。そういう健全な社会でこそ、新しいことにチャレンジできます。失敗を恐れない子どもたちを育てたいと言っている大人が、一番失敗を恐れている。そんな大人の背中を見て、チャレンジしようなどという子どもたちは、絶対に生まれてこないと思います。失敗を恐れずにチャレンジし続けるような子どもたちを育てるためには、55万人の受験者が受けるこの新テストだからこそ、チャレンジをしていただきたいと個人的に思っています。ですので、今回の試行調査でなされたチャレンジが、皆さんの中で建設的に、前向きに議論されることを願ってやみません。

【椿・司会】塩瀬先生、どうもありがとうございました。それでは次に、木谷理事をお願いします。

【木谷】国立大学協会の常務理事の木谷と申します。私どもの現在の会長は、京都大学の山極総長ですが、入試につきましては、昨年9月までは長崎大学の片峰学長、現在は、山口大学の岡学長が委員長を務めます入試委員会というところで、この共通テストのみならず、今回の高大接続改革についての様々な検討をしてまいりました。



最初に、まず基本的な考え方を申し上げます。もちろん国大協としては、今回の高大接続改革、学力の3要素であるとか、三位一体の改革については基本的に賛成でして、その利用を進めていくことを支持します。しかし一方で、やはりこれだけの大きな影響力を持つ事柄ですので、本当に実効力がある改革ができるのかを考えて、適宜それについて意見を述べてきました。今回の改革は平成32年度から始まるわけですが、それは、あくまでも出発点です。その後

に高等学校学習指導要領の改訂もあります。北海道大学の山口前総長なども、この改革は10年仕事と考えるべきだとおっしゃっていました。そういう意味で、やはり段階的に円滑で実効的な改革を進めていかなければならない。そういうところが我々の基本的な姿勢です。

2番目には、特にこの大学入学共通テストとの関係ですけれども、御承知のように、この前身は現在のセンター試験であり、その前身は、共通第1次学力試験であったわけです。共通第1次学力試験は、まさに国公立大学の試験だったわけですが、それがセンター試験になって、多くの私立大学も参加するようになりました。そして、今度の大学入学共通テストは、高大接続改革全体の一環として導入されるものですから、かなり試験の性格が変わってきたと言えると思います。

■入試改革と言いますと、とにかく大学入学共通テストばかりが注目されるわけですが、入試は、共通テストと個別選抜の両方で構成されているわけです。(木谷)

現在のセンター試験を最も活用しているのは、何と言っても国立大学です。今回の改革が本当に進んでいくためには、単に国立大学だけではなくて、国公立大学全てが改革を進めていかなければなりません。そういうふうな立場で、国立大学は先導していくことが必要だと思います。

入試改革と言いますと、とにかく大学入学共通テストばかりが注目されるわけですが、入試は、共通テストと個別選抜の両方で構成されているわけです。各大学が各アドミッション・ポリシーに従って、様々な個別選抜を実施しています。その改革も非常に重要なものだということを申し上げておきたいと思います。

国立大学は、昨年1月にこの基本方針を定めました。基本方針の中では、大きく5教科7科目の原則、従来どおり、そうした幅広い勉強をした学生を採りたい。そして、英語4技能評価については、認定試験と大学入学共通テストの英語の両方を課すことにしたわけです。

これについては、受験生の負担という問題もありますけれども、一方で、国立大学としては、もともと、民間の認定試験を選抜に活用すること自体については、従来からずっと意義のあることだと言ってきたわけです。それではセンター試験の英語を廃止して、一気に認定試験だけで選抜しようという案も出ましたが、やはり、それは認定試験の現在の実施状況であるとか、あるいは、センター試験との相関などをいろいろと検証しながら、段階的に進める必要があるだろうという考え方もある。当面は、やはり両方の試験を課すという考え方に至ったということです。

記述式問題の導入は当然のことですが、これについては、ガイドラインを定めようとしています。共通テストの記述式問題で問える内容にはやはり限界があります。従来から各国立大学は個別試験で記述式の問題をいろいろと課していますが、それをさらに充実していくということで、国語に限らず、他教科でも当然記述式の問題を充実させるという方向があると思いますし、あるいは小論文、総合問題等々での工夫を今後もやっていくということです。

それから調査書等の活用についても、電子化の状況も見ながら、順次可能なものから導入をしていきます。

また、最後の分離・分割方式についてですけれども、御承知のようにこの分離・分割方式は、受験機会の複数化であるとか、多様な選抜方法を取り入れるために採られた方式です。これについては、一方で、現在の AO 入試、推薦入試、今後は総合型、学校推薦型と呼ぶ、丁寧な選抜方法も、今後は 3 割を目標にして拡大をしていくという方針を立てました。

そういうふうな状況になってくると、一般選抜についても、もう少し丁寧なことを考えていかなければいけません。そうすると、現在は 2 月の末から 3 月いっぱい、2 回の期日を設けるという、かなり窮屈な日程になっているわけですが、場合によっては期日の一本化ということも検討していく必要があるのではないかと思います。

2. 大学入学共通テストの枠組みにおける英語認定試験及び記述式問題の活用に関するガイドライン(平成30年3月30日)

(1)「英語認定試験結果の活用」

① 対象とする認定試験
国立大学としては、受験生の受験機会の公平性を確保する観点から、センターが認定した全ての資格・検定試験を対象とする。

② 認定試験結果の活用
新テストの枠組みにおける認定試験結果の活用については、各大学・学部等の方針に基づき、次の方法のいずれか、または両方を組み合わせて活用することを基本とする。

(1) 一定水準以上の認定試験の結果を出願資格とする。

(2) CEFRによる評価表に基づき、新テストの英語試験の得点に加点する。

CEFRによる評価表に基づき加点する点数等の具体的な設定については、各大学・学部等が主体的に定めることとする。

※平成36年度以降に向けて、認定試験の実施・定章状況とともに入学者選抜機能としての実効性を十分に検証しつつ、大学入学共通テストにおける英語4技能評価の在り方について、引き続き検討する。

※CEFRによる評価表に基づき加点等を行う具体的な方法の例や障害等のある受験生への配慮に関する事項については、引き続き検討する。

(2)「国語の記述式試験結果の活用」

国語の記述式の段階別成績表示については、その結果を点数化しマークシート式の得点に加点して活用することを基本とする。

段階別成績表示に基づき加点する点数等の具体的な設定については、各大学・学部等が主体的に定めることとする。

各大学・学部等は、以上のような記述式問題の具体的な活用方法等について、予め募集要項等において受験生に詳しく明示する。

※記述式の段階別成績表示に基づき加点等を行う具体的な方法の例については、引き続き検討する。

(3)「数学の記述式試験結果の活用」

数学の記述式の段階別成績表示については、正誤のみで判定であること、及び大問の中でマークシート式問題と一体で出題される記述式問題にも配点がなれることから、従来のマークシート式と同様の取扱いとする。

ガイドラインについては、英語については 3 月 30 日に公表しました。センターが認定した全ての検定試験を対象とすることとしました。それから、認定試験の結果の活用については、もちろん各大学・学部等の方針に基づくわけですが、いわゆる資格として活用するか、あるいは加点方式を採るのか。あるいは、その両方を組み合わせるのかということについて、こういった方法を基本

として各大学が決めていくということです。

3. 平成32年度入試に向けてのさらなる検討・準備状況

英語認定試験及び国語の記述式問題の具体的な活用方法の例示

(1) 英語認定試験の結果についてCEFRによる対照表に基づき加点等を行う具体的な方法の例（英語全体に占める加点の比重など）や障害等のある受験生への配慮

(2) 国語の記述式の段階別成績表示に基づき加点等を行う具体的な方法の例（国語全体に占める加点の比重など）

「国立大学入学者選抜実施要領・同細目」の見直し

(1) 共通テスト成績の各大学への提供時期後ろ倒し（1週間程度）への対応（共通テストを利用する総合型選抜、学校推薦型選抜への影響）

(2) 一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜入試における出願・入試・発表時期変更の対応

入試ミス防止のための対応（入試情報の開示の在り方を含む）



ただ、その場合の留意点としては、資格とする場合は、英語だけで資格化するとすると、他の教科、科目が非常に優れていても、英語だけで間口を閉ざしてしまうことも起きえますから、やはり資格の水準を慎重に考えていく必要があります。また、加点する場合も、4技能評価を進める趣旨を十分に勘案しつつ、あまり十分な実績のないままで極端に加点の比重を高めては、高校現場等に混乱を招くことにもなりかねませんので、バランスを取ったものを定めていかなければならないという考え方を示しているということです。

国語については、一応加点方式だけを示していますがけれども、これは国語の試験の一部に記述式の問題があるということです。問題の構成、全体の比重、時間配分等々を考慮した形で、それを総合的に評価するためには、やはりまずは加点方式を基本とするということが考えられるのではないかと思います。数学についてはほぼ従来どおりということです。

今後は、参考例については、恐らく来月の6月に発表できると思っています。ただ、あらかじめお断りしておきたいのは、あくまでもこれは参考例であるということです。基本的には、各大学・学部がそれぞれのアドミッション・ポリシーに従って決めていくことだと思います。

あとは、共通テストの成績提供後ろ倒しへの対応と書いていますがけれども、現在国立大学の場合は、多くは共通テストを利用して、AO・推薦入試を行っており、共通テストの成績提供が遅れますと、試験日程が非常に窮屈になります。これにどう対応するかということで、いろいろな技術的な検討も行っているということです。

4. 平成36年度以降に向けての継続的な検討課題

平成36年度以降に向けて

国立大学協会としては、今後、文部科学省や大学入試センター等と連携を図りながら、特に次の点について継続的に検討を行い、実効性のある高大接続システム改革が着実に実現されるよう取り組む。

- (1) 個別選抜における高度な記述式試験の開発・調査書等の活用
- (2) 英語4技能評価の在り方
認定試験の実施・定着状況、入学者選抜機能としての実効性、認定試験と大学入学共通テストの相関などについての検証を行いつつ、今後の英語4技能評価の在り方を引き続き検討
- (3) 個別入学者選抜の実施時期
分離分割方式の見直し、一般選抜の時期の一本化を含む検討
- (4) アドミッション・オフィスの整備及びアドミッション・オフィサーの育成
- (5) 入学定員管理の在り方
「1点刻み」の選抜からの脱却、「入口管理」から「出口管理」への転換への対応
- (6) 外国人留学生選抜の在り方
国立大学総体としての広報、募集、選抜、受入れのためのシステムの構築による留学生受入れの抜本的な拡大方案の検討



最後に、最初に申しましたけれども、平成32年度が出発点ということで、今後とも、高度な記述式問題のさらなる改善、充実を図っていかなければいけませんし、いろいろな課題があります。例えば今回は、段階評価は国語の記述試験だけにとどまっています。しかし、今後、本当に1点刻みの選抜から脱却していくということを考えると、いわゆる定員管理についても考えなければいけないと思います。また、ともすれば日本人学生の高大接続ということだけに目が向けられがちですが、一方では今後の国立大学は、恐らく外国人留学生の入学を拡大していくことになります。そうすると、そうしたグローバルな観点から、どういうふうな選抜が適切かが、課題になると思います。

最後に一言付け加えます。今日は、高校関係者の方もたくさんいらっしゃると思います。いろいろなことを申し上げましたけれども、決まっていないところが多いということで、御心配をいただいている向きもあるかもしれません。ですが少なくとも、例えば、皆さん一番関心がおありの英語については、今申し上げましたように、基本は決まっています。大学入学共通テストの英語と、認定試験の英語を両方課すのだ。そしてその両方を活用して、加点方式なり資格方式なりその組み合わせなり、各大学・学部が工夫をして、それを活用していくのだということは決まった方針です。全大学がそういう方向で動いています。個別の工夫についてはいろいろなこともありますが、基本的な方針は固まっているということで、御理解をいただければありがたいと思います。

【椿・司会】 宮本先生、どうぞよろしくお願いします。

【宮本】 都立八王子東高校の宮本です。今般の入試改革に対する高校側の受け止め

方についてお話をしますが、他の方のお話しと重複するところもあるかもしれません。

1. 入学者選抜の役割

(1) 合格者決定のための重要な資料

上級学校での教育を受けるに足りる能力が
身に付いているか

(2) 受験生が在籍する学校へのメッセージ

上級学校進学に際しこういった能力を身に付けさせてほしい
隠れた教育課程 (hidden Curriculum)

私は校長の前に、長く教育委員会におりまして、20 年ぐらい都立高校の入試問題の作成や試験実施の業務に当たってきました。入試の役割は、これは高校も大学も同じだと思うのですが、一つは、当然のことながら合格者を決定するための重要な資料です。都立高校の場合は、現在約 4 万 7,000 人の志願者が受験します。その志願者の学力を適正に判断するための問題作成、平均点の設定など、どこの学校においても適正な選抜ができるような問題を作ることが一つです。

そしてもう一つは、受験生が在籍する学校、高校入試の場合は中学校ですが、中学校に対するメッセージという役割です。ですから、我々はその両方の役割を負いながら問題を作るのだということを、常に意識していました。

2. 試行調査

○ これからの時代に求められる学力について、
各教科で具体的な方向性が示された

● 共通テスト全体がどうなるかについての
情報は十分ではなかった

昨年 11 月に実施された試行調査を見ますと、これからの時代にもっと求められるのは、どういう学力かということは、非常によく分かりました。国語も数学も、そして 2 月に行われた英語も、やはりこういう力がこれから求められるのだ

ということが大変よく分かったわけです。しかしその一方で、共通テスト全体がどうなっていくのか。まさか、全部このような問題にはならないだろうけれども、一体本当にどうなるのだろうかという情報については、十分メッセージが届いていなかったというのが正直な感想でした。

3. 試行調査に対する高等学校の反応

- 作問に関しては肯定的評価が多い
 - ・ 思考力・判断力・表現力を重視した問題
 - ・ 複数の情報を比較・分析・判断する能力を問う作問
 - ・ 探究の過程を重視した作問 など
- 試験時間・問題量、難易度、出題方法の改善を求める声も多い
 - ・ 試験時間に対して問題量が多い
 - ・ 情報量が多く、題意を把握するのが難しい など

試行調査に対する高等学校の反応ですが、作問に関しては非常に肯定的な評価が多かったです。思考力や判断力、表現力を重視した問題がたくさんありました。複数の情報を比較・分析する力を問うたり、探究の過程を問うたりするという、これからの高等学校教育にも求められるようなことを意識した新傾向の問題があって、大変好評でした。その一方、やはり問題量、情報量が多すぎるのではないか、この試験時間で、確実に解くのはなかなか難しいのではないかという声もありました。センターでも、その辺りは十分承知されていて、恐らく次回に向けての改善がされているのだらうと思います。

4. 記述式問題に対する高等学校の反応

- 作問の方向性に関しては肯定的評価が多い
- 国語については、無解答率が低いが、数学は難易度が高く無解答率が高かった
- 自己採点に関する不安を解消するには至らなかった

記述式問題についても、比較的肯定的な評価が多かったと思います。国語については、無答率は低く、多くの受験生がきちんと問題を解いていました。ですが、数学についてはかなり難しく、歯が立たなかった生徒たちがいたこと

は事実です。

また、自己採点については、採点方法の解説動画を作っていただくなど、センターも相当配慮されたようですが、まだ正直、自己採点に対する不安の解消までには至っていません。

5. 高等学校の現状

○ 一部の学校、一部の教員の中での理解は深まっているが、全体として共通テストへの理解が十分深まっているとは言えない

【理由】

- ・ まず目の前の3年生、2年生の指導に注力
- ・ 大学入試センターからの情報が十分キャッチできていない
- ・ 共通テストの全体像が現時点で明らかになっていないので、どのような準備をしてよいかわからない

など

高等学校の状況はどうかというと、共通テストについては、一部の学校や一部の先生方の理解は深まっていますが、全体としては、共通テストへの理解が深まっているとは言えない状況です。

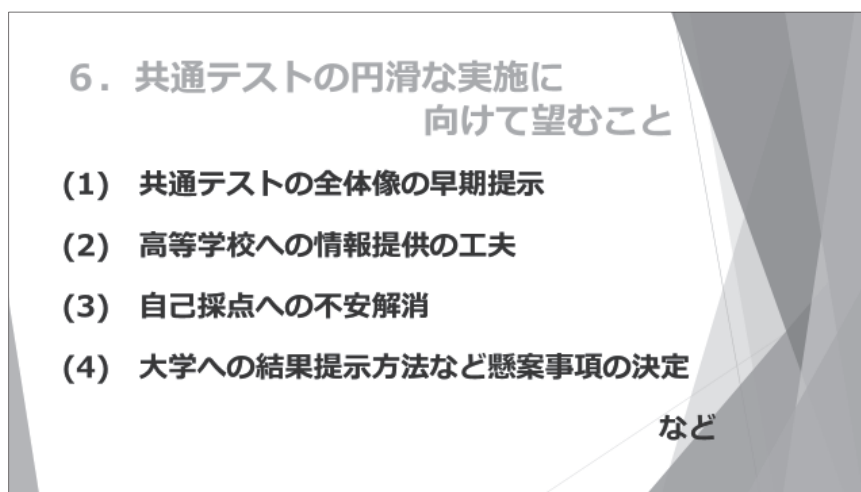
その理由は、そこに三つ挙げましたが、まずはとにかく、今の目の前の3年生、それから2年生。ここの指導に、どうしても力が入ってしまう。これは当然のことだと思います。もう共通テストを受ける1年生は入っているのですけれども、まだそこまで考えられない。

■ 試行調査があったことすら知らず、そういえば新聞に出ていたねという認識の教員が多い状況だったわけです。(宮本)

二つ目は、大変申し訳ないのですが、大学入試センターからの情報が、各学校に十分届いていないのです。その原因の一つは、11月の試行調査では、試験終了後に問題冊子が回収されてしまいました。そこで問題を持ち帰らせていただければ、教員も問題を見て生徒の反応を聞きながら、出題の意図などについても理解することができたと思います。問題がすぐに入手できなかったことも、なかなか全体像が見えなかった一因だと思います。

センターのほうから、その後の12月に速報があり、3月末にも報告が出ましたけれども、あの分量ですから理解するのはなかなか大変です。特に3月は、年度末で教員の異動があるなどして、ほとんどそのようなものを見ている状況ではありません。試行調査があったことすら知らず、そういえば新聞に出てい

ましたねという認識の教員が多い状況だったわけです。



それと三つ目は、最初に言ったように、新しい傾向の問題は見えましたけれども、では全体がどうなるのか、どういう準備をすればいいのかが、まだまだ分からないということです。とにかく早く、こういうふうな形の試験になるのですよという全体像を、しっかりとお示しいただきたいと思います。

併せて、やはり高等学校への情報提供の工夫だと思います。なかなかホームページだけでは伝わっていきません。公立学校の場合は、都道府県の教育委員会への働き掛け、そこから各学校への働き掛け。そういうことをやはり、ぜひ丁寧にやっていただきたいと思います。次の試行調査では、問題や出題の狙いを、すぐに公表していただくようお願いしたい。また、併せて、自己採点への不安の解消もお願いしたいと思います。

また、同様に各大学への結果の提示方法についても、早めにお知らせいただきたいと思います。

■いつもお願いしていることですが、ハードルは低く、ウエートは小さくお願いします。(宮本)

最後に、ここには書いてありませんが、英語の資格・検定試験について少しお話をします。4技能の育成、それを評価するという方向性は、高等学校としても十分理解しています。しかし、今の段階では、民間の試験を使うことについての不安は、依然として解消されていません。高校の学習実態の問題や地域格差、経済格差という問題、当初から非常に不安がありますけれども、残念ながら今の段階でも、安心して受験できる状況にはなっていません。そういう状況だということはお分かりいただきたいと思います。その上で活用されるとい

うことは、これはもう仕方がないと思っていますけれども、いつもお願いしていることですが、ハードルは低く、ウエートは小さくお願いします。つまり、あまり高いレベルを設定すれば今の高校生にとっては相当難しいですし、ウエートが大きくなってしまうのも困ります。スタートの段階ですから、ぜひ導入しやすいところの設定をお願いしたいと思います。

■一人一人の子供にとっては、一度の試験です。たまたま改革の年に当たったからといって、痛みを甘んじて受けろというのは、たまりません。(宮本)

いずれにしても、大学入試改革を進めることは、高等学校も望むところです。やはりいい改革をしてもらいたい。そうでなければ、これからの世の中を担う子供たちは育てられない。その点は承知しておりますが、ぜひ無理のない改革をお願いしたい。よく、改革には多少の痛みが伴うなどとも言われますが、一人一人の子供にとっては、一度の試験です。たまたま改革の年に当たったからといって、痛みを甘んじて受けろというのでは、たまりません。やはり子供たちが安心して受験ができるような大学入学共通テスト、大学入学者選抜にしていきたいということをお願いして、私の話を終わります。ありがとうございました。

【椿・司会】宮本先生，どうもありがとうございました。それでは最後に，古沢さんをお願いします。

【古沢】読売新聞の論説委員の古沢と申します。よろしくお願いします。私は先ほど御紹介いただいたように、読売新聞の論説委員として、普段は主に教育関係の社説を担当しています。社会から見た入試改革ということですが、私ども新聞社などのメディアにとっても、教育関連の中でも、大学入試は別格と言っていいほど関心の高い重要なテーマです。記事の扱いも大きいことが特徴だと言えます。社説でもたびたび取り上げています。今日は、これまでの記事や社説をお示ししながら、我々が共通テストについてどのように伝えているかということをお紹介しつつ、お話ししたいと思います。

これが、昨年5月に大学入学共通テストの実施計画案が公表されたときの社説です。社説は、一応合議制ということで、例えば筆者が私であっても、一応毎日会議を開いて、こういう方向でいきましょうということで決めています。言葉遣いなども、事実関係以外に主張も述べるということで、多少古風な感じになっています。



この社説では、記述式問題が導入されることであるとか、思考力、表現力を問うという内容については、大学入試改革の趣旨に沿った問題形式だと言えようと評価しています。その上で、採点基準の明確化ですとか、質の高い採点者の確保など、またこの時点では、英語の民間試験へのA案、B案とがありまして、全面移行は慎重に検討したほうがいいというようなことを書いています。要は、改革の理念や方向性には賛同できるけれども、技術的な課題の解消が求められるということです。これに尽きるというか、これが基本的な見方だと思います。

そして、今回の改革で期待するのは、先ほどからお話に出ているように、指導要領の改訂との一体的な改革であるということに大きな意味があると思います。受験対策で暗記中心、知識偏重になりがちだと言われる高校生の学習を変えろということは、簡単ではないでしょうが、大きな目標であるかと思います。

プレテストについても触れています。私も問題を拝見して、考える力、課題解決力を測る工夫が非常に印象的で、入試改革のメッセージという点では非常にインパクトがあったと思います。その上で、やはり問題量が多く難しかったこと、正答率が低迷した問題が目立ったということを、社説でも指摘はしました。ただ、これはあくまでプレテストであって、このままの出題形式になるわけではないということは記事にもありますし、高校関係者や一般の方には、比較的冷静に受け止められているのではないかと思います。そういう意味でも、今年11月の試行調査は非常に関心が高く、注目される場所かと思っています。

大学入試の改革というと、社会に与えるインパクトは相当大きいのですが、

将来の全面移行については、やはり慎重に判断する必要がある、将来的には、入試用に実践的な英語力を問う新たな統一試験を作ったほうがいいのではないかと考えます。そしてこの記事にもあるように、受験生の不安解消を最優先にしてほしいということを、あらためてお願いしたいと思います。

海外の入試についても少し触れたいと思います。読売新聞には、教育関連の問題を取材する教育部という部署がありまして、私も一昨年までそこにいました。そのときに、米国、韓国、台湾などでの入試改革をテーマとした連載をする機会がありました。現地に記者を派遣して、ルポ形式なのですが、これが『大学入試改革 - 海外と日本の現場から』という本にまとめられて、中央公論新社から出ましたので、その表から引用しています。

時間がないので概略だけお話ししますと、アメリカでは御存じのとおり、SAT という共通テストが年間 7 回あって、特に有力大学では、そこで一定の点数を取っていれば、あとは個別に選抜していく。東アジアで、日本と同じようにペーパーテスト偏重だった台湾、韓国などでも大きな変化の兆しがあって、AO 的な入試に変わりつつあるということです。

アメリカでは、現在、格差の解消ということが重視されていて、2016 年度からその SAT も大幅に変更されています。東アジア——中国、韓国からの受験生が大変増えて、非常に高得点を取るそうです。背景としては、塾に行っ対策をするからではないかということで、どこまで実効性があるかは不明な点もあるのですけれども、その対策が通じない方法を模索しています。難しい語彙をなくすとか、思考の過程を見るなど、ある意味、日本の改革とも共通しているところがあり、理念としては非常に共鳴するところがあります。満点が優秀とは限らないということで、共通テストの扱い方としては、イギリス、これはオックスフォード大学の方のインタビューですが、共通している傾向かと思っています。

■思考力を問う入試といっても、例えば困窮家庭に育った方は不利ではないかという指摘もあります。それでも、今の 1 点刻みの選抜が本当に公平なのか、ベストなのかということは、社会の納得を得ながら／（古沢）

韓国では、AO 入試制度、入学査定官制度というものが発達しています。韓国は日本以上に、受験競争が厳しいところで、それを抑えるために AO 型に移行しています。そして台湾も、地方と都市部の格差を縮めるために、地方枠を非常に重視しているということです。

日本でもこのように、推薦、AO というものは、私立も含めて、国立でもか

なり導入されているところですし、今後も多面的、総合的な入試が広がるのではないかと思います。ただ、1点刻みの選抜からの脱却は容易ではなく、あまり賛同が広がっていない感じもします。思考力を問う入試といっても、例えば困窮家庭に育った方は不利ではないかという指摘もあります。それでも、今の1点刻みの選抜が本当に公平なのか、ベストなのかということは、社会の納得を得ながら、方向としては考えていかなければいけない問題かと思っています。

当初、センター試験を二つに分けたらどうかとか、複数回やったらどうかという案もあったのですが、私としては長期的に改革していただきたいと思っています。大学入試センターを中心に、様々な入試の方策について、必ずしも外国のものがいいとは限りませんが、模索していただきたいと思っています。この記事にあるように、日本ではあまりに1点が重いということもあって、大学が非常に序列化されている面があったり、入学後の流動性や、成績評価の問題などいろいろとあるかと思うのです。ですが、まずは2020年度の入試改革を突破口にするためにも、着実に新しいテストを実施していく。同時に、国公立の個別試験や私立大学の入試でも、地道に改革を行っていく必要があるかと思っています。長くなりましたが以上です。ありがとうございました。

【浅田・司会】最初のお二人の報告と、今の5人の方からの御発言で、様々な角度から全体像、あるいはポイントが見えてきたと思います。ここからは、パネリストの方の御質問や会場の皆様から頂いた御意見にお答えいただく時間にしたいと思います。

大杉さん。宮本先生のお話の中で、試行調査の出題内容や形式は、そのまま本番の試験でも踏襲されるのかという質問。また、次の試行調査では問題を早めに公表してもらえないかという御希望がありました。その辺をお話いただけますか。

【大杉】昨年11月の試行調査では、先ほども申し上げたとおり、特定の難易度というよりも、まずは出題内容について新テストとしてのねらいを前面に出した上で、結果としてどのような正答率になるのかを見るものでした。次回の試行調査では、先ほど申し上げた5割程度を目指しながら、問題量や難易度についてのバランス、について、より本番を意識したものになってまいります。

前回は、新テストに関しては初めての大規模な試行調査ということで、問題も正答率等のデータとセットで公表しなければ、分析もしにくいだろうと考え、また、実施期日も各試験場が共通ではなく、幅もあったということで、問題の公表まで時間を要しました。今回は、A日程、B日程はありますけれども、共通日時で11月の2日間で実施しますので、前回よりは早く、問題を公表できるものと考え準備を進めているところです。

【浅田・司会】ありがとうございました。宮本先生、各学校の各教科で、どういう資質能力を育むかをよく考えて、それを授業作りにつなげるような取組というのはされているのでしょうか、という御質問をいただいています。

【宮本】少しずつではありますが、そういう動きは進んでいると思います。特に都道府県の教育委員会が、この試行調査や学習指導要領改訂の狙いを踏まえたような研修を、今後様々に行っていくと思います。また、かなりの学校で、既にいろいろな形での校内研修が進んできています。

ただ先ほど言いましたように、学校間の差がありますので、全ての学校で同じレベルで取り組んでいるわけではありません。そこは、なかなか難しいところです。しかしながら、かなり大きく教育が変わる、自分たちもこのままではいけないという危機感が強くあることも事実ですので、だんだんと、理解が深まっていくと思います。

【浅田・司会】島田先生と塩瀬先生にお聞きするのがいいかと思うのですが、新しい大学入学共通テストでは、記述式問題の導入以外にマーク式問題の見直しも行われます。個別入試も含めてでしょうが、これからの時代に求められる力をどう捉えていて、それをこれからマーク式問題の見直しや、あるいは記述式問題でどう問おうとしているか、お考えをお聞きできればと思います。

【島田】説明の中でもお話ししかけたところですが、新しい学習指導要領（平成30年告示）には、これからの時代に求められる学力に対応した内容が随所に盛り込まれています。共通テストの改善についても、記述式、マーク式問題ともに、教育課程改訂の内容に即して検討していくことになりますので、新しい学習指導要領の内容と整合性のある問題になっていくだろうと考えています。

■マークシート試験の中での暗黙の了解のようなものが崩れていることは、いい傾向だとは思いますが、／（塩瀬）

【塩瀬】先ほどお話ししたように、受験テクニックの中の、選択肢から選ぶという体制に対して、今回の試行調査の中では、それをうまく回避できる問題が幾つかありました。逆にそれで引っ掛かっている生徒さんが出てきたときに、マークシート試験の中での暗黙の了解のようなものが崩れていることは、いい傾向だとは思いますが、そうなれば多分、また対策は練られてくると思うのです。実際そのマークシートの中でも、何を問うかというところがすごく重要なのだと思います。

先ほどちらりと御紹介しました、PISA 型の科学的リテラシーの問題の中でも、今、その追試的なものを使って、中高生や大人の科学的思考力を問う仕掛けを作ろうと思っているのです。その科学的調査について理解できているかどうか、解答者になぜそのように答えたのかその理由を高校生や大学1年生に聞いてみました。そうすると、「数値化できるから」とか、「シミュレーションができるから」というだけではなくて、「分かるから」などという非論理的な解答をしてしまっている人もいます。景色の美しさが比較できるかという問いに関しても、「科学的調査が可能だ」と解答する人たちの中には、例えば「しっかりと美しさを定義すれば」、「グランドキャニオンの地層の色相のようなものを定義すれば」というふうに、きちんと分かっていた上で、用意された答えとは違うものを出している人たちもいるのです。

そういう意味で言うと、一つ目の科学的調査が可能かどうかという最初の問いだけだと、表面的なところしか理解を問うことができないところがあります。そこからつなげて、その問題について正しく理解しているかどうかを問うマークシート方式も、十分可能だと考えられます。そのときに、どこまでその深さ、思考力、判断力を問うのかを作問方法の中にしたためることができれば、何を問いたいかは自ずと決まってくると思います。そういう意味で言うと、今まではやはり、その知識を知っているか、知っていないかというところで作問していた可能性があり、その次の段階にまで踏み込むような作問が、次から挑戦として必要なのではないかと思います。

【浅田・司会】ありがとうございました。やはり会場からの質問には試行調査に関するものがかなりありました。大杉さん。例えば、記述式の採点は大丈夫だったのでしょうか。今回の試行調査でどういう課題が分かり、今後どう対応するのかなど、可能な範囲でお話いただけますか。

【大杉】採点についての課題は、期間の話と質の話の両方があるかと思います。今回は、国語は6.5万人、数学は5.5万人の答案を、約1,000人で採点しました。点検作業も含めて、想定の間内には終わっています。この結果を踏まえて、次回のさらに大規模な11月の試行調査で採点過程の在り方についても検討していくことになると思います。

また、今回は作問を先にして、その後採点基準を作り、それを採点サイドに渡して、作業に入っていただくというプロセスとなりました。ですが、やはり作問と並行して、採点過程で想定される状況も踏まえながら採点基準を作ることの必要性や、実施直後に現実の解答例を見ながら、採点基準の調整をしていくことの必要性などが浮かび上がってきたところです。次回は、このような点についても検証する予定です。

【浅田・司会】それに関連して、私からも少し質問にお答えしておきます。今年の11月の試行調査については大学が会場になるわけですが、どういうやり方をするのかという詳しい要領は、いつごろ示されるのだろうかという御質問がありました。基本的には毎年8月に、全国で大学の関係者を対象にセンター試験の説明会を開催していますけれども、その場を利用して試行調査の概要についても御説明させていただきます。それから、警備なども本番並みにやるのでしょうかという質問がありましたが、そんなことは全く考えていません。できるだけ大学に御負担をお掛けしないようにしたいと思っています。

それから、先ほどの記述式や、英語に関する御質問もかなりあったのですが、そういったことを含めて様々な課題、あるいは心配がなおある中で、2020年度からの実施はもう変わらないのだろうか。質問紙の言葉をそのまま使うと、再検討のお考えはないかという質問がありましたが、いかがでしょうか。

【山田】ありがとうございます。記述式一つを取りましても、また英語の、特にスピーキングの評価なども、なかなかこれまで難しかったからこそ、残ってきた課題なのだろうと思っています。ただ、方向性については、間違っていないと考えていますから、課題を一つ一つ解消しながら、2020年度をなるべく円滑に迎えられるように、様々な手段を取ってまいりたいと思っています。

【浅田・司会】ありがとうございます。木谷理事にお伺いします。先ほど、国大協の検討状況、対応状況を御説明いただきました。質問の中には、各大学が具体的に共通テストや記述式問題、資格・検定試験をどう活用するのかは、いつ頃分かるのでしょうかというものがあったのですが、これはいかがでしょうか。

【木谷】御承知のように、入学者選抜については、基本的な枠組みについては2年前予告ルールというものがあります。今既に一部では、ある程度発表されているところもありますが、今の時点では、大まかな考え方だけだと思います。

いずれにしても、各大学は、受験生がきちんと準備できるような時期に、各大学の御判断により段階を追って示していくことになると思っています。国大協としては、この先さらに統一のルールを定める予定はありません。

【浅田・司会】それぞれの大学で、自大学の入学者選抜をどうするかを真剣に御検討いただいていると思いますが、我々も含めて大学の関係者は、高校関係者や受験生等に正しく情報が伝わるように、努力や工夫はしていく必要があるのだろうと思います。

古沢さん、他の国の取組の例で、日本の大学の入学者選抜で、参考にしたいほうがいいと感じられることなどありましたら、御紹介いただけますか。

【古沢】先ほどお話ししたように、共通試験はどの国にもあるわけですが、使い方としては、その共通したテストの1点差、あるいは、日本の場合は圧縮して0.1点差というものもあるようですけれども、それで合否が決まるのは、今は主流ではないとは言えると思います。中教審などでもずっと検討されていることですけれども、各大学が共通テストの成績を資格試験的に扱って、一定のレベルを超えていればクリアしたと見なして、あとは個別のアドミッション・ポリシーに基づいて、学力試験も含めて選抜していくということが、やはりよいのではないかと思います。

【浅田・司会】会場からいただいた質問ですが、資格・検定試験が入試に使われるとなると、受検者は相当増えると思われるが、そのときに、会場がいっぱいで受験を断られるというようなことは生じないのでしょうか。また、スピーキングなどでは、試験官がどういう人で、公平さが保たれない恐れはないのでしょうかという御懸念がありました。山田室長、この辺はどうでしょうか。

■今回参加することになった各団体は、それぞれ実績がある団体ばかりです。それぞれのノウハウを生かして適正な採点がされるものと考えています。(山田)

【山田】大変重要な御指摘だと思います。入試で使うと言いながら、受けようと思ったら満席で受けられないということは、あってはならないと思います。

先ほど最後に御紹介しましたが、実際に、いつ頃にどこでニーズがあるのかを、事前にある程度把握をして。それをなるべく早く各団体に伝えて、準備をしてもらうことが大変重要だと思っています。

調査は、基本的には高3の、受験に活用する2回を中心にしてしていますが、それ以前に入試と直接関係なく、学習上必要なものとして受けるであろうニーズについても、併せて聞いています。高等学校の御協力をいただきながら、ニーズを実施団体に提示して、十分なキャパを確保していただく必要があるかなと思います。

面接の問題ですが、これは大変採点が難しいのは確かだと思います。ただ、今回参加することになった各団体は、それぞれ実績がある団体ばかりです。それぞれのノウハウを生かして適正な採点がされるものと考えています。

【浅田・司会】ありがとうございます。ちょっとまた違う話になりますが、御存じのとおり、大学入試センター試験は、様々な障害等をお持ちの方に対する受験上の配慮を、これまでも行ってきました。この記述式問題に関しては、何らかの受験上の配慮は考えているのでしょうかという御質問があったのですが、

これは大杉審議役いかがですか。

【大杉】受験上の配慮については、2月に、英語の試行調査と同時期に点字問題の試行調査も実施しました。試験時間が最大で1.5倍という制約の中で、例えば点字問題ですと、自分の打った文字のカウントに時間がかかったりですとか、訂正にもかなり時間がかかったりという事情があります。そういう事情を勘案した上で、どのような配慮が必要かということも検証させていただきました。

また併せて、来年度は、例えば文字を書くこと自体が難しい場合などを想定してパソコンの利用も念頭に置きながら、検証をさせていただく予定でいます。センター試験で行われている配慮はしっかりと受け継ぎつつ、記述式問題の導入に伴う新しい配慮についても、併せて検討を進めさせていただいています。

【浅田・司会】ありがとうございます。ほかには、入試が変わっても大学教育そのものが変わらないと意味がないのではないかという御指摘がありました。これはどうでしょうか。島田先生、塩瀬先生、木谷理事あたりからお伺いするのがいいかと思いますが、どうでしょう。

■今回の教育課程の改訂や、入学者選抜の改善が進むことによって、これまで初年次教育で行ってきた内容に大きなコストをかけなくて済むようになるとすれば、／（島田）

【島田】大学によって取組は様々かと思いますが、今日は高校の先生方もたくさん会場にいらっしゃるということで、一例を御紹介できればと思います。

例えば、近年ではほとんどの大学が初年次教育に力を入れるようになっていきます。その内容は多様ですが、最も多く見られるのはアカデミック・ライティングといいますか、大学で学ぶために必要な文章作成の技術の指導です。中には、ライティングセンターというような機関を作ったり、あるいは、勉強の仕方を大学院生が新入生に教えるような仕組みを、例えば中央図書館をプラットフォームにして作ったりするなどの試みも見られるようになっていきます。また授業そのものを、一斉講義型の授業から双方向型のものに変えていこうとする取組もかなり以前から進められています。

今回の教育課程の改訂や、入学者選抜の改善が進むことによって、これまで初年次教育で行ってきた内容に大きなコストをかけなくて済むようになるとすれば、初年次教育ではまた少し違うこともできるようになるのではないかと期待もするところです。以上です。

【木谷】いろいろな大学が、学士課程教育改革に取り組んでいます。よく言われる

アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーをきちんと連関させて、今回のアドミッション制度の改定について、きちんとカリキュラムにつなげる。そしてディプロマにつなげるということが、もちろん求められるということで、各大学がいろいろと工夫されていると思います。

特に英語について言えば、御承知のように既に多くの大学で、英語教育の、いわゆるクラス編成を含め指導の改善を考えるために、初年次に TOEFL や TOEIC などを受験させることもやっています。今後、アドミッションが変わってくれば、英語教育についても、そういうものを身に付けてきた学生を、さらにどういうふう育てるかを、それぞれ工夫されることになるだろうと思っています。

【塩瀬】京都大学のアドミッション・ポリシーに、『対話を根幹とした自学実習』というものがあるのですが、最近学生に、そういうポリシーを掲げている割には、「意外と対話がない気がします」と言われてしまうことがあります。

そういう意識の学生がいたときに、専門知識をしっかりと詰め込みたいと思っている先生と、アクティブ・ラーニングなどでしっかりと自分で考える学び方で学んできた入学者との間に、少しずれが生じている部分があります。

そのどこまでをアクティブに考え深める方法でやるのか、どこまで専門知識を詰め込むのかというバランスが、大学の学生と教員との間で、まだうまく折り合いがついていないような気がします。

■医学や歯学など、やはり詰め込まなければいけない専門知識がたくさんあり、まずは資格試験をパスしないといけない場合にまで本当にアクティブ・ラーニングが効果的なのかと問われたことがあります。(塩瀬)

ある大学の医学部の先生方に、アクティブ・ラーニングの方法を指導してほしいと依頼を受けて研修に行ったときに、医学や歯学など、やはり詰め込まなければいけない専門知識がたくさんあり、まずは資格試験をパスしないといけない場合にまで本当にアクティブ・ラーニングが効果的なのかと問われたことがあります。どちらを優先するかという二択となれば、もしかしたらそれは詰め込みになるのかも知れませんが、他方で実際に今、高校でアクティブ・ラーニングなどをしっかりと深く学ぶ方法で知識を身に付けた上で入学してくる学生の場合には、そのモチベーションの高い学習方法に応えるだけの授業が必要で、それが提供できているかについては大学側もカリキュラムの見直しが必要だということです。そのうえで、専門知識を詰め込み式で身に付けるのか自学自習で思考を深めるのかのバランスを、しっかりと学生側に明示しないとい

けないと思うのです。

ですから、何でもかんでも生徒に投げかけて、「自分で考えろ」と言って考えさせることもあれば、しっかりと生徒自身が受け取ったものを吸収するというバランスも必要であります。そこが詳細に問われることなく、ただ全部主体的であれとか、全部アクティブにやりますよとか、極端になりがちです。受験する生徒と試験を課す学校との間で折り合いがしっかりとつけば、その入学テストの中でも、どこまで判断力を問うのか、どこまで知識を詰め込んだものを確認するのかを問う約束事だと思います。今、それが何でもかんでもアクティブにやるだとか、主体的にやるなどということが言われすぎていて、逆に学生からすれば受動的にでもいいので、しっかりと知識を身に付けさせてほしいという要望もあるようです。そのずれをしっかりと埋めていくことが重要だと思います。ですので、まずは入試のメッセージとして、ここまでの力を皆さんには問うていて、うちの大学の中ではこういうふうに育ってほしいということを伝えることが重要だと思います。もちろんアカデミック・ポリシーでそれが実現されているはずですが、受験生は本当にそのアカデミック・ポリシーを理解して受験しているのか、ということを考えるとそれをしっかりと伝える努力がもっと必要かも知れません。そして新テストにとってのアカデミック・ポリシーのようなメッセージがどんなものかも周知徹底されていく必要があります。

■何でもかんでもアクティブにやるだとか、主体的にやるなどということが言われすぎていて、逆に学生からすれば受動的にでもいいので、しっかりと知識を身に付けさせてほしいという要望もあるようです。(塩瀬)

【浅田・司会】時間がなかなか厳しいのですが、なるべく多くの御質問にお答えしたいと思います。山田室長に二つほど伺います。今日壇上におられる先生は国立大学の関係の方が多くなっています。公立あるいは私立の大学の取組状況について、文部科学省として把握していることがありましたら御紹介いただきたい。これが一つです。もう一つは、学力の3要素の中で、特に主体性についてはどのような方法で評価するのかというお尋ねです。これについて何かお答えいただけるものがあればお願いします。

【山田】ありがとうございます。今、昨年の基本方針を受けまして、2年前予告に向けて、多くの大学が検討を進めていると伺っています。私立大学、公立大学の現在の動きは大きく二つに分かれると思います。一つは、この大学入学共通テストはいいのではないかと。4技能試験も結構使えそうなので、全面的にこ

れを取り入れようという大学と、他の大学の様子を見ていらっしゃる大学との二つに分けられるかなと思います。競合する大学の動きを見てから決めたいなというお考えの話をよく伺います。

主体性の評価は、御指摘のとおり大変難しいものです。いろいろな学校で様々な経験をしている者を、一律評価をする、特に一般入試ですということ、かなりハードルが高いことは我々としても承知しています。ただ、今紙で送られてくる調査書を、例えばみんなで話し合って、電子化できるようにするですとか、あるいは、先ほどちょっと御紹介申し上げましたけれども、JAPANE-Portfolioを大学入試で活用できるようになれば、主体性を完璧に測り切ることは無理だとしても、入試の大きな一助になるのではないかということで、関係大学と一緒に、今、調査研究をさせていただいています。ぜひ注目していただきたいなと思っています。

【浅田・司会】ありがとうございます。宮本先生と古沢さん、すみません、あまり当てられなかったのですけれども、きっと何か、ぜひ言っておきたいことがおありではないかと思います。一言ずつ頂けますか。

■今、高校の教員は正直懐疑的です。「校長、そうは言っても変わらないのではないのか。一部は変わるかもしれないし、推薦AOではそういう力を評価してもらえないかもしれないけれども、大多数の一般試験が変わらなかったら、これはどうするの？」(宮本)

【宮本】ちょうど私は先週まで、私の高校の全員の先生方の授業を見てきたのですけれども、見てきて感じることは、やはり高等学校の授業も確実に変わってきています。小学校、中学校の授業が変わってきている。そういう中で受けた子供が、高校に入ってきているからということもありますけれども、例えばグループワークやペアワーク、発表ということに対して、子供たちは非常に抵抗感がなく、どんどんやっていきます。教員がびっくりしています。できないと思ったら意外とできますねと。そういう意味で、思考力、判断力、表現力を身に付けさせようという動きは、かなりできてきている。ただ、これも学校によって違うのと、今、それをどう評価していくのかということが、本校などの課題です。

ただやはり、これからの時代に求められる力を、高等学校で付けようという努力は進んでいます。また、着実にその実は上がってきていると思っています。ですから、こういう力を本当に、大学入試でしっかりと評価をしてもらいたいということです。結局これは、評価をしてもらえなかったらまた元に戻ってし

まうわけです。例えば、個別試験は全然変わらないだとか、そういうことをやるよりは、やはり問題集を解いたほうが良いというような状況が続くのであれば、やはりこれは戻ってしまうし、今、高校の教員は正直懐疑的です。「校長、そうは言っても変わらないのではないのか。一部は変わるかもしれないし、推薦AOではそういう力を評価してもらえるかもしれないけれども、大多数の一般試験が変わらなかったら、これはどうするの？」やはりそういうような気持ちで、疑心暗鬼になっている先生方や学校はかなりあると思うのです。

まだ、これから個別入試がどう変わるかについては、全く今のところは分かりません。先ほど木谷先生がおっしゃったように、2年前ルールですからこれからです。ですがそういう中で、せっかく今こういう形で、高校だけではなくて小学校、中学校の教育も変わりつつある中で学んできた子供が、もうやがて大学に入ってくるわけです。やはり、それをしっかりと受け止めていただけるような大学入試に、ぜひしていただきたいと思います。以上です。

【古沢】先ほどからお話に出ている、高大接続や主体性ということなのですが、実際に大学入試には、かなり変わってきている部分はあるなと思っています。例えば、高大接続、主体性の評価も関係してくると思うのですが、ゼミ形式の入試が今、少しずつ広がってきています。お茶の水女子大学であるとか、秋田の国際教養大学、それからICUなどでも、大学の講義を聞かせて資料を調べさせるなどの、かなり手間は掛かると思うのですが、大学で学ぶ力を身に付けるということでは、注目すべき動きです。

先ほど私もちょっと触れた海外の入試でも、アメリカでは、実は共通テストよりAP（Advanced Placement）による評価が主流になっています。御存じの方も多いと思いますけれども、大学レベルの授業を高校で受けさせて、単位を取らせる。初年次教育の先取りのようなことで評価する方向に流れています。高校での授業にばらつきがあるなど、課題はあるようではありますが、一考の余地はあるのではと思います。

そしてやはり、個別試験で文章を書かせるということは、どの国でもすごく重視しています。長文を書かせるということで、知識だけではなくて考える力を知るという意味では、今後、国公立大学でも個別試験で取り入れるということですが、私学も含めて広がってほしいと思います。以上です。

【浅田・司会】どうもありがとうございました。ほぼ予定の時間になりました。午後の日程もありますので、まとめに入らせていただきたいと思います。

今回の全体会2では、大学入学共通テストの導入に向けた準備状況と試行調査について、進捗状況や主な成果、課題を概観していただけたのではないかと思います。高大接続改革全体の方向性については、おおむね理解、賛同が得られていると思いますけれども、やはり具体的になってくればくるほど、様々な

心配や懸念も出てきていると思います。それを一つ一つ乗り越えながら、先に進めていかなければならないということで、大学入試センターとしても、引き続き努力をしております。皆様方の御協力をどうかよろしくお願い致します。一緒に司会をしていただいた椿副学長からも、一言お願いします。

【椿・司会】私は、アドミッション・センター長になってから、多くの高校の文化祭に出向いています。それは、やはり、高大接続を考える上で、現代の高校生が何を考えているのかを知りたかったからです。実際に高校生に接してみますと、彼らは、やはり時代感覚に鋭くて、発信力もありますし、思考力もあり、とても将来性があるように、私には見えます。

ですから、そういう若者を大切に育てるということが、この高大接続の根幹ではないかと考えています。

一方、高校の先生たちにとって、やはり、この時代の変化の中で要求されている能力を教えるということは、それほど容易なことではなく、土日いろいろな研究会に出ていらっしゃる方もたくさんいます。

私も能力測定の研究が専門ですから、全国規模の共通テストで難易度や識別力を整えることの大変さもよく分かります。

私たちは、これから各大学で個別試験をさらに詰めて、細部まで設計していかなければなりません。大変ですが、将来性のある高校生を育てていくためにも、今後も皆さんで頑張っていけたらと思います。どうもありがとうございました。以上で全体会2を終了します。







平成30年度
全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(第13回)



なぜ 16 種類の入試を行うか

中津 将樹（国際教養大学入試室長）



皆さん、こんにちは。国際教養大学の中津と申します。

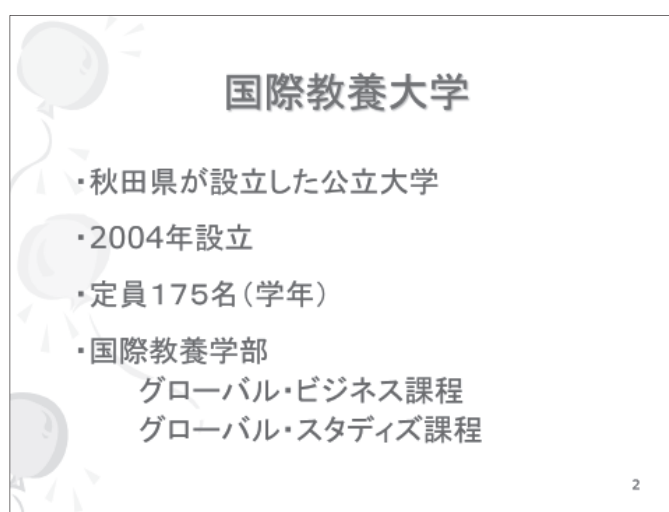
今回発表するに当たり、テーマをこのように決めました。「なぜ 16 種類の入試を行うか」。国際教養大学は、学年定員が 175 人に対して 16 種類の入試を行っています。恐らくこのようにきめ細かな入試を行っている大学は多くはないと思います。

今日のテーマの問いに対して、最初から答えを言います。私たちは国際社会で活躍できるような人材が欲しいからです。では、国際社会で活躍できる人材はどのような気質、どのような素養が必要でしょうか。いろいろ考え方はあると思います。「英語ができるほうがいい」「英語だけではなく他の科目もできたほうがいい」あるいは「英語以外の他の科目・分野も含めて教養力が高い」、もしかしたら「専門知識も必要だ」と言う人もいるかもしれません。それ以外にも、コミュニケーション能力、交渉力、いろいろな考え方があるかもしれません。

ただ、高校生の時点でこのような気質、素養をトータルにしっかりと身に付けている生徒は恐らくいません。それでも私たちは今申し上げたような気質・素養を一つでも持っていそうな生徒を見付けて、入学後に、彼らにそれぞれの夢、目標、ゴールの実現のために国際教養大学を活用してもらいたいと思っています。そして、

入試は国際教養大学を志願する生徒たちがどのようなスキルを持っているか、それはどの程度なのか、どのような内容なのか。これらを見極めるための選抜と考えています。

そのような学生が国際教養大学に集い、少人数での授業や寮生活などを通じて居住空間を共有することにより、高校時代までに身に付けた知識、経験、考え方などをお互いにシェアして、刺激し合い、切磋琢磨することによって、学生は伸びます。大学での学びを通じて知識を知力に変え、寮生活、留学制度などの経験を通じて人間力を鍛え身に付けます。そのような大学を作りたいと思っています。そうすることによって、学生も伸びますし、大学も伸びます。これによりお互いに win-win の関係になるのではないかと思います。



国際教養大学は、2004年に秋田県が開設した公立大学です。学年定員も175名たらずで、恐らく皆様の大学よりもずっと小さい、歴史も浅い大学だと思います。学部は国際教養学部の一つのみの単科大学です。その中に課程が二つあります。グローバル・ビジネス課程とグローバル・スタディーズ課程です。グローバル・ビジネスと申しますのは、いわゆる経済学部、経営学部、あるいは商学部のようなものです。グローバル・スタディーズ課程では、北米や東アジアの政治、経済、歴史、文化、あるいは国際関係を勉強します学問の分野的は社会科学に位置付けられます。受験の際に専攻する課程を決めるのではなく、入学後に最初に英語力を身に付け、基盤教育課程にて人文科学、自然科学、社会科学、芸術など幅広く勉強し、それを基に、3年生なる前に二つの専攻に分かれていきます。➡

国際教養大学の特徴

- ・授業はすべて英語
- ・一年間の留学義務づけ
- ・少人数教育
- ・教養教育
- ・24時間開館の図書館
- ・安価な費用
- ・キャンパスは異文化空間

3

国際教養大学には、様々な特徴があります。まず一つ目は、授業を全て英語で行っていることです。入学式やオリエンテーションも英語です。高校生からは、よく「帰国子女、高校留学経験者が多いのですか」と聞かれますが、このような学生は2割程度です。残りの7～8割は海外経験がない、海外に行ったことがあっても、お父さん、お母さんと1週間ぐらい旅行した程度です。不安がる高校生には、「ほとんど『純ジャパ』です」と言っています。

二つ目は、1年間の留学義務付けです。大学生活4年間のうち3年間は秋田、1年間は海外で過ごします。今提携大学は190大学に増えました。学費相互免除で留学し、留学先では専門科目を現地の学生と一緒に勉強します。そして、先方の大学が出した成績証明書を基に単位認定を行います。

三つ目は、少人数教育です。1クラス当たり平均学生数は18人です。授業も今でいうアクティブラーニングです。学生には自分で考える授業、発言する授業を求めています。

四つ目は、教養教育です。先ほど言いましたように、学生は入学時に専攻ごとに分かれるのではなく、まず最初に幅広く様々な分野を勉強し、その後に所属する課程を決めます。

■今学生が勉強する時間帯に図書館が閉まっているは意味がないと考え、24時間開けています。好きなときに来て好きなだけ勉強できる環境を作っています。

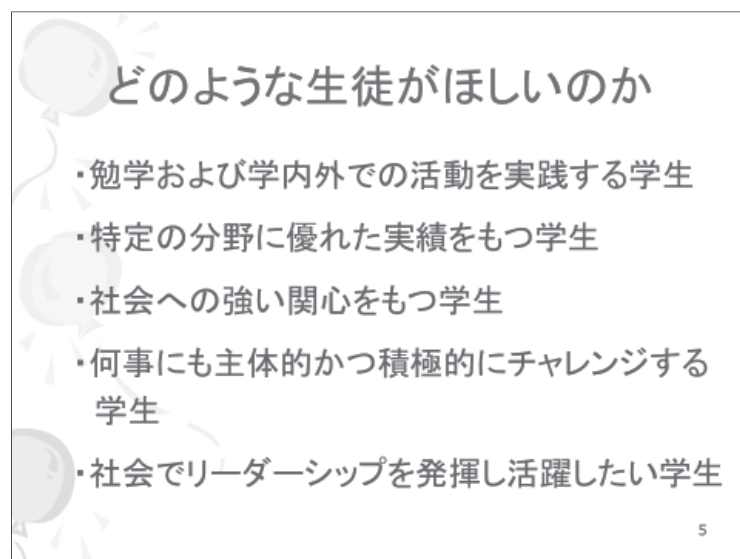
五つ目は、24時間開館の図書館です。高校生、大学生が何時頃勉強しているのか調べてみると、ほとんどが19～23時です。5～6時の朝方の人もあります。学生が勉強する時間帯に図書館が閉まっているは意味がないと考え、24時間開けています。好きなときに来て好きなだけ勉強できる環境を作っています。

六つ目は、費用です。学費は、公立大学ですから、私立大学よりは若干安いのですが、他の国公立よりは少し高めの設定であり 69 万 6,000 円です。ただし、学費相互免除で 1 年間の留学ができ、寮生活も 1 日 3 食付き、インターネット代・光熱費込みという環境で月に約 5 万円の支出と考えるとかなり安いと思います。

最後に、大学のキャンパスが異文化空間になっているということです。授業は全て英語で、学生はほぼ 100% 英語ができ、外国人とディスカッションできるレベルです。学内の学生の 2 割は留学生で、彼らの出身地域は北米が 4 割、ヨーロッパが 3 割、アジアが 3 割です。教員の半分が外国人であることに加え、大体の職員は英語ができることにより、キャンパスはグローバルな異文化環境が成立しています。



先ほど申し上げましたように、国際教養大学は将来国際社会でリーダーシップを発揮して活躍できる人材を養成したいという目標を持っておりますし、そのような学生を採りたいと思っています。一部のパンフレットや英語のポスターには「Be a Global Leader」、あるいは「Be a Leader in the Global Society」と記載されています。



最近いろいろな大学の先生方や保護者の方から、様々な大学がアドミッション・ポリシーを発表し、求める学生像をうたっているが、どれもこれも抽象的だ、国際教養大学はどのような学生が欲しいのか、もっと分かりやすく教えてほしいと言われます。

それに対し、私たちはこのような説明をしています。

まず一つ目は、勉学及び学内外での活動を実践する学生です。分かりやすく言うと文武両道です。

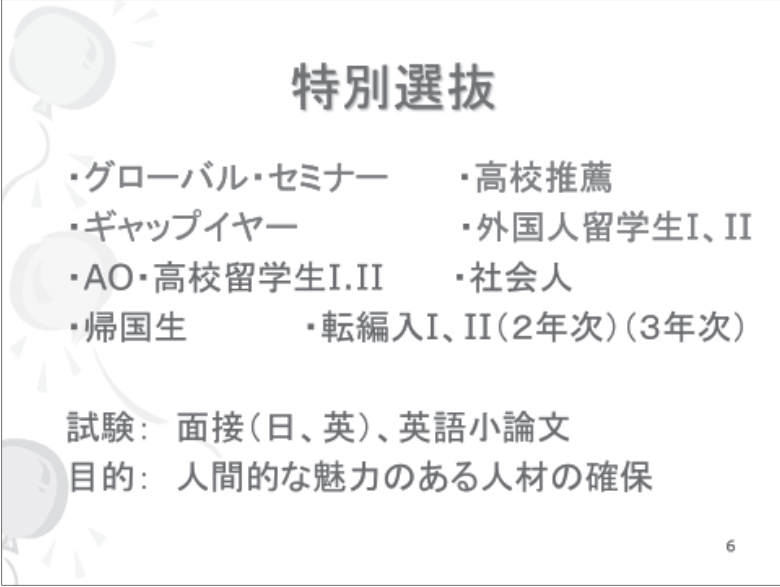
二つ目は、特定の分野に優れた実績を持つ学生です。例えばスポーツならば、インターハイや国体などへの出場経験など、何らかの実績があればいいです。いい意味での「オタク学生」が欲しいと思っています。

三つ目は、社会への強い関心を持つ学生です。学校の勉強や受験勉強だけではなくて、日頃から新聞やニュースを見て、今社会はどうなっているのか、どのような問題があるのか、そして自分だったらこれらの問題をどのように解決するのか、そのようなことを考えるような学生が欲しいと思っています。

四つ目は、何事も主体的かつ積極的にチャレンジする学生です。高校で授業を受け、帰宅後は予備校に行くというのではなくて、部活動やインターンシップ、ボランティアなどを積極的にやるような学生です。

最後に、社会でリーダーシップを発揮し活躍したいと考える学生です。これは先ほどの「Be a Leader in the Global Society」です。

このどれかに当てはまるようでしたら、国際教養大学への進学をぜひ考えてくださいと高校生に伝えています。



特別選抜

・グローバル・セミナー	・高校推薦
・ギャップイヤー	・外国人留学生I、II
・AO・高校留学生I、II	・社会人
・帰国生	・転編入I、II(2年次)(3年次)

試験：面接(日、英)、英語小論文
目的：人間的な魅力のある人材の確保

6

では、このような学生を集めるために、私たちはどのような入試をやっているのか、いくつか紹介させてください。

特別選抜に関し、いろいろなことをやっています。まず、一番上のグローバル・セミナー入試です。これは秋田県の高校生限定の入試です。5月と8月に2泊3日の合宿型セミナーを行います。目的は二つあります。一つ目は、秋田県の公立の大学として地元の高校生の教養力の向上や修得への貢献です。本学の教員が日本語で高校生に国際関係や環境問題など、通常は高校で習わない学問を教え、学問的に対する意欲やアカデミックな意識を高めてほしい、ある種の地域貢献です。

もう一つの目的は、大学を知ってほしいということです。高校生は国際教養大学に来て、本学の学生が使っている同じ教室で同じ教員から同じような授業を聞き、そして学生が住む寮と一緒に泊まります。2泊3日間の擬似国際教養大学生活を経験し、真の大学の姿を見た上で、気に入ったら受験してほしいと考えています。

9月に実施されるグローバル・セミナー入試は、このグローバル・セミナーに参加した学生が出願の対象になりますので、必然的に秋田県の高校生のみの入試になります。グローバル・セミナーに参加する生徒には、セミナー期間中にレポートを書いてもらいます。レポートは本学の教員が添削して、講評を付けて学生にお返しします。そのレポートの評価と9月の試験当日の面接、そして高校から提出される調査書なども含めて総合的に合格者を決めています。

面接に関しましては、個別面接と同時に集団面接もやっています。集団面接では、ディベート、ディスカッションを行っています。通常の高校でディベート、ディスカッションはなかなかやりません。そのため、高校生は最初はそのやりかたすら分かりません。私たちはグローバル・セミナーのイベント期間中に、過去に出題された問題を利用して、ディベート、ディスカッションの仕方を教えています。例えば去年は、山岳遭難救助の際のヘリコプターを有料にすべきか、無料にすべきかといったテーマでディベートをしました。数年前には、これからは少子化で若者が減るのに大学の数は増えていることの是非を問うような問題を出しました。このような面接と高校からの調査書とレポートの評価を基に、グローバル・セミナー入試を行っています。

■指定校制は採用していません。指定校ではない高校の生徒は出願できないことは、ある意味フェアではないと思います。

その右は高校推薦です。評定値が4.0かつ英検2級以上が出願要件です。高校時代にしっかり勉強や部活動をやっている学生を確保するための入試であり、これは他の大学と同じだと思います。指定校制は採用していません。指定校ではない高校の生徒は出願できないことは、ある意味フェアではないと思います。むしろ全国、どこの高校から何人でも出していただいて、私たち大学が合格者を決定するという方針でやっています。当日の面接と小論文を基に合格者を決めています。

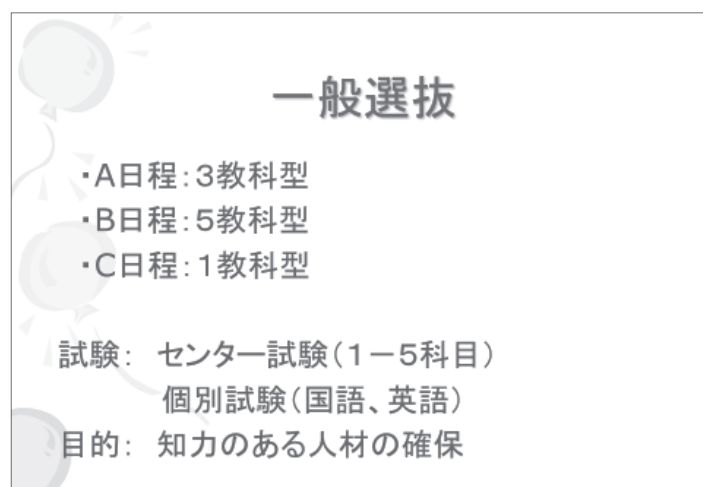
2行目の左、ギャップイヤー入試です。恐らくギャップイヤーをやっている大学、

そしてまたそれを入試と絡めている大学はなかなかないと思います。これは9月入学です。3年生の11月に選抜、入学は翌年の9月です。合格者は高校を卒業して4月から8月までの期間に、インターンシップ、ボランティアなどの活動を行います。入試の際には、面接の一部として、予定している活動に関するプレゼンテーションや英語の小論文、高校からの調査書や志願理由書など確認し合格者を決めます。大学としては、彼らにただ受動的にやらせているわけではなくて、担当教員がメールや面談をしていろいろとアドバイスしたり、あるいはその間に2〜3回大学に来て、英語でプレゼンテーションをやってもらったり、適宜助言をしています。

通常、ほとんどの高校生は4月に大学に入学するのは当たり前だと思っていますが、この入試の合格者は9月に入学します。他の学生より入学を遅らせても自分のやりたいことを主体的に、自主的に、能動的にやるような学生向けの入試です。

外国人留学生に関しましては、私たちは書類選考のみでやっています。研究生として一度日本に來たり、日本で面接をしたりということは、やっていません。私たち日本人がアメリカの大学に行くにしても、わざわざアメリカまで試験や面接を受けに行くということは、通常はありません。まさにそれと同じです。

その他、AO、社会人、帰国生入試、転編入など、いろいろあります。外国人留学生を除く試験に関しましては、先ほど言いましたように、日本語と英語の面接、そして英語の小論文、かつ高校からの調査書、志願理由書も含めて、トータルに見て、いわゆる人間味のある魅力的な学生を採りたいと思っています。



一般選抜

- ・A日程:3教科型
- ・B日程:5教科型
- ・C日程:1教科型

試験: センター試験(1-5科目)
個別試験(国語、英語)

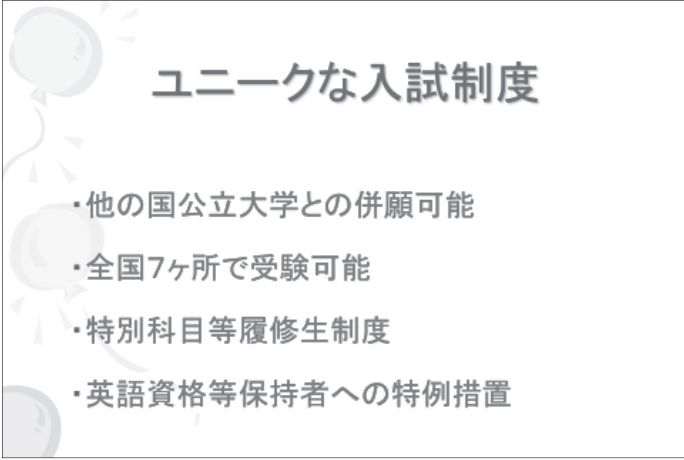
目的: 知力のある人材の確保

一般選抜に関しましては、A〜C日程の3タイプあります。それぞれセンター試験の得点の合計と本学の個別試験の得点の合計で合否を決めています。

A日程はセンター試験の3教科と国際教養大学の英語と国語、B日程はセンター試験の5教科と、同じく国際教養大学の英語と国語、C日程に関してはセンター試験の英語と国際教養大学の英語で合格者を決めています。

一般選抜では面接はなく筆記試験だけです。学力・知力を重視した選抜ということです。ただ、その学力に関しましては、他の科目は自信がないけれども英語だけなら自信があるというような学生はC日程で出願すればいいですし、満遍なくオ

ールマイティーにできそうな人は A・B 日程で出願してくればいいというように、学力に関しても様々なタイプの学生を採ろうとしています。



ユニークな入試制度

- ・他の国公立大学との併願可能
- ・全国7ヶ所で受験可能
- ・特別科目等履修生制度
- ・英語資格等保持者への特例措置

一般選抜に関しては他の国公立との併願が可能です。通常高校生は、推薦や後期日程を別にすれば、国公立大学は1度しか受けられません。試験日が同じだからです。そこで、私たちはあえて試験日をずらすことによって、高校生に受験・進路選択のチャンスを与えたいと考えました。そして、本学も含めて他の国公立大学と二つ受かったら、本人がどちらに行くか決めればいいという発想です。

二つ目に、全国7か所の会場で受験が可能です。私たちが秋田で「地方会場」というのは、東京や大阪の会場のことです。(笑)

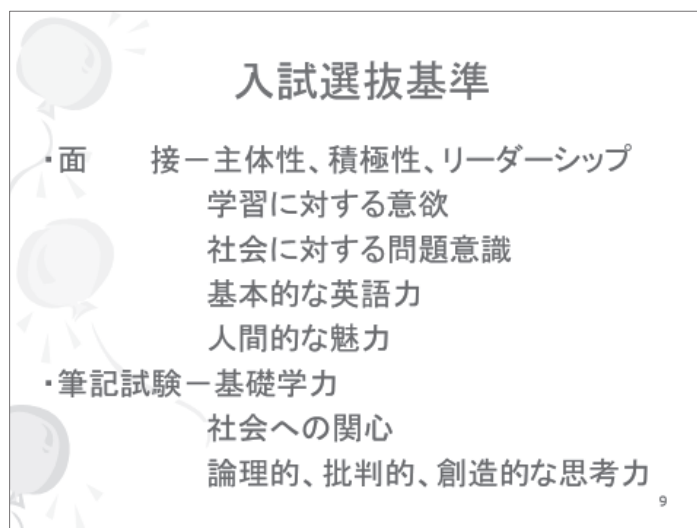
三つ目は、特別科目等履修生制度です。簡単に言えば仮合格、暫定入学の制度です。入試選抜の可否の判断は、恐らくどこの大学も基本的には同じだと思います。どこかでボーダーラインを引きますよね。1点差でぎりぎり合格、1点差でぎりぎり不合格、場合によっては小数点で決まるかもしれません。しかし、ボーダーライン上で可否が分かれた場合、不合格の学生が合格した学生よりも学力が低いかというと、必ずしもそうではありません。たまたまできる問題が出題されたり、たまたま調子がよかったり、たまたま選んだ選択肢が正解だったりという偶然もあるでしょう。

■不合格になった学生でも、調査書などを確認し、この学生は国際教養大学の学生としてぜひ採りたいと思ったら、そういう学生には仮合格、暫定入学を打診します。

それでもやはり日本の大学はアメリカなどと違って入試ごとに定員が決まっていますから、どこかで可否のラインを引き、歩留まりを考えないといけません。私たちはぎりぎり不合格になった学生でも、調査書などを確認し、この学生は国際教養大学の学生としてぜひ採りたいと思ったら、そういう学生には仮合格、暫定入学

を打診します。そして、正規で合格した学生と1年間、同じカリキュラム、同じ授業、同じ寮に住んでもらいます。そして1年後、一定基準を超えた時点で、彼らが希望すれば2年次編入という形で書類選考により入学させます。最初の1年間、暫定入学中にとった単位も認めます。ですから、4年間での卒業が可能になります。これは、私たちが日本の入試制度の特徴の一つである、いわゆる「一発勝負」を打破するために作った制度です。

最後に、英語資格等保持者への特例措置です。英検準1級相当を持っている受験生のセンター試験の英語の得点を満点扱いにする制度です。これは最近ではいろいろな大学がこのような制度をやるようになりましたが、私たちが始めた頃は、ほとんどありませんでした。読んで訳すだけの受験英語を少しでも変えたい、高校生の皆さんに今でいう4技能、よりプラクティカルな英語力をつけてほしいという願いを込めて作った制度です。

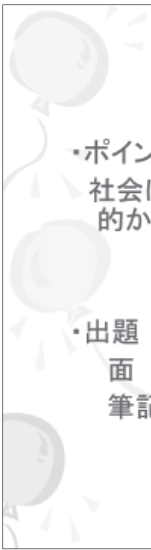


入試選抜の基準に関し、面接では、まず主体的・積極的に行動できそうか、あるいは大学在学中や卒業後もリーダーシップをとって行動できそうか、そしてまた学習に対する意欲はあるか。さらには、学校の勉強だけではなくて、社会の動きに対して敏感で問題意識がある学生か、見極めていきます。次に、基本的な英語力を持っているかどうかということです。よく「国際教養大学は英語ができないと入れないのですか」と言われます。必ずしもそうではありません。英語嫌いは困りますが、ある程度の英語力があれば、入学後に結構伸びます。ただ、その伸びの基礎となるような力があるかどうかは入試で確認します。

そして、人間的な魅力です。これは結構重要です。このような生徒に教えたい、このような若者は多分社会でも活躍するだろう。そのような人物を見極めたいと思っています。

筆記試験に関しましては、基礎学力を見極めます。社会的なテーマを基に、それに対して論理的、批判的、創造的視点を持って書けるかどうか、英語ではロジカル

シンキング、クリティカルシンキングと言いますが、そのようなことを確認します。英語や国語の試験では、穴埋問題は出題したことはありません。ほとんど 100% 論述式です。



入試問題

- ・ポイント
社会に対する関心を有し、自分の意見を論理的かつ批判的視点をもち伝えることができるか
- ・出題
面接：社会問題に対する関心、意見
筆記試験(論述式)：
出典－(国語)現代の名著
(英語)時事雑誌、新聞

10

実際の入試問題に関しましても、面接では、社会に対する関心、そして意見を問います。先ほども申し上げたように、批判的な視点を持って伝えることができるかどうかというところを考えています。

筆記試験に関しましては、国語では、現代の名著といわれているような、例えば最近丸山眞男、中根千枝などの結構固い文章を出しています。最近の学生は SNS の普及もあり、なかなか長い文章や固い文章を、読んだり書いたりすることは苦手だという話を聞きます。ただ、大学に入ってから、そういう文章を書いたり読んだりすることが必要になります。ある意味、入試対策でもいいので、そういうものに接してほしいと思っています。

英語に関しましては『TIME』や『Newsweek』など英文雑誌の記事を素材にしています。こちらも目的は同じであり、大学の授業では英語の雑誌や新聞を題材にディベートやディスカッションをやりますので、そういうものを億劫がらずに読むような意欲のある人が欲しいのです。

■入試の面接官に卒業生を起用していることです。／ユニークな学生をとる一つの方法として、それならば初期の頃に存在していたユニークだった現在の卒業生にやってもらおうじゃないかということになりました。

過去の入試制度の変更と 新たな試み

1. 一般選抜における英語の配点・比率
2. 卒業生の起用
3. アドミッション・オフィサーによる高校生確保・
募集活動

入試制度に関して、これまでにいくつか改善をいたしました。一つ目は、一般選抜における英語の配点比率です。当初は英語の配点が一部の入試では総計の半分以上を占めていましたが、英語を話せることだけが重要なのではなくて、英語で何を話すか、英語でどう自分のメッセージを社会に伝えていくかが重要です。そう考えるならば、他の科目もできなければいけないということが、英語の配点を下げた理由です。

二つ目は、入試の面接官に卒業生を起用していることです。正直申し上げますと、開学当初に比べると今の入学者の方がセンター試験の成績も英語の成績も上がっており、ある意味、教員にとっては教えやすくなっています。ただ、開学当初からの教職員の話を聞くと、最近では、確かに頭のいい学生は多いが、面白い学生が減ってきているということでした。例えば、教員の言ったことに対して異を唱えるような、個性的な学生が初期の頃に比べると減ったといえます。

■我々が本当に入学させたいという生徒がいたら、在籍高校の先生方を通じてその生徒に会い入学を勧奨する、あるいは高校の先生からの紹介に基づき私たちが会いに行くという、プロ野球のスカウトのようなことをやっています。

そのようなユニークな学生をとる一つの方法として、それならば初期の頃に存在していたユニークだった現在の卒業生にやってもらおうじゃないかということになりました。彼らには、大学の後輩として、あるいは会社の後輩として入学させたいと思うような高校生を自分たちの視点で選んでほしいと言っています。

三つ目はアドミッション・オフィサーによる高校生確保・募集活動です。アドミッション・オフィサーについては、昨日もいろいろと議論が出ていましたが、私たちは欲しい学生を積極的に採る入試を目指しています。国際教養大学の理念を理解してくれて、我々が本当に入学させたいという生徒がいたら、在籍高校の先生方を

通じてその生徒に会い入学を勧奨する、あるいは高校の先生からの紹介に基づき私たちが会いに行くという、プロ野球のスカウトのようなことをやっています。本来はこれをそのまま入試に直結させたかったのですが、我が国の場合は法令上の規制などもあり、そこはなかなか難しいようなので、対象となる生徒には既存の入試制度を使って入学してもらいます。採りたい学生、求める学生の入学をなるべく多く増やしていきたいと考えた上での試みです。

ちなみに先ほど言いましたギャップイヤー入試の実施時期に関し、当初は3月下旬に行っていましたが、今は前年の11月にやっています。3月下旬ですと、本来のギャップイヤー活動の趣旨を理解することなく、A～C日程の試験で落ちた人が受けにくるということがありました。それなりに出願者も多く良かったのですが、彼らは必ずしも本来私たちが欲しい学生ではないということで、あえてAOや推薦入試と同時に行うことにより、ギャップイヤー活動にこだわる学生を採れるようになりました。

私たちが考えていることは、入試は大学からの社会に対するメッセージだということ。ここに、いくつかポイントを挙げました。

メッセージとしての入試

1. 「育てる入試」の実践
 - ・教養力の向上ーグローバル・セミナー
 - ・主体的、能動的人材の育成ーギャップイヤー
2. 高校教育への提言
 - ・実践的な英語の習得ー英語資格等保持者への
特例措置
3. 求める学生像に合致する学生の確保
 - ・社会に対する関心ー入試問題
 - ・論理的、批判的、創造的思考ー入試問題
 - ・英語力ー4技能。配点・比重の変更

一つ目は、「育てる入試」の実践です。先ほど2泊3日の合宿型のセミナーを踏まえたグローバル・セミナー入試のお話をしました。参加する高校生は、別にグローバル・セミナーに出たからといって、国際教養大学を受ける義務はありません。他の大学を目指してもいいのです。ただし、この合宿に参加することにより、大学での学びや学生たちの生活を知り、国際教養大学を目指したいという意欲が芽生え、最終的に入学してくれればいいと期待しています。

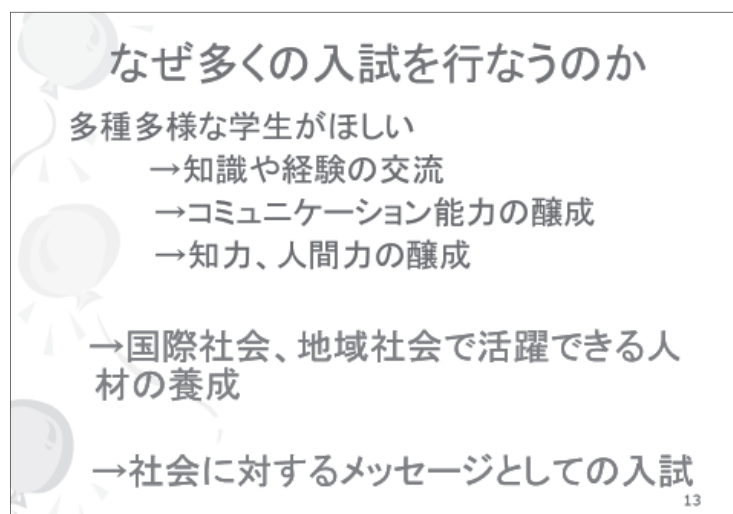
グローバル・セミナーには、予想外の効果もありました。セミナーに参加し、その後に本学に入学した学生から聞いたことですが、秋田県内の様々な高校の学生がセミナーで知り合って、LINEやスカイプなどを利用し、自分たちでテーマを決めてディベート、ディスカッションをしたそうです。入学試験についても、「新しい

学長は経営学が専門なので、試験問題はビジネス関連から出題されるだろう」などと、自分たちで新聞記事の切り抜きをもとに、問題を作ってディベート、ディスカッションをしたそうです。結果的にその山は外れましたが、そのように学生独力で勉強をする、ディベート、ディスカッションをやるということを会得したことは、私たちが期待していた以上の効果でした。

ギャップイヤー入試では、学生が自分たちで計画を立て、ファイナンシャルプランや期待すべき成果、いわゆる様々な評価指標も自分たちで作ります。もちろん、その節目に担当教員がアドバイスしますが、そのようなことによって学生も主体的、能動的になります。

二つ目は、高校教育への提言です。先ほど言いました外部試験の導入、英語資格等保持者への特例措置をやることによって、国際教養大学に入りたいから英検やTOEFL、TOEIC、GTECを受験する、より実践的な英語を身に付ける学生も増えてきました。

三つ目は、求める学生像に合致する学生の確保です。先ほどどのような入試問題が出題されるかについてお伝えしました。これを明らかにすることにより、高校の先生方には高校生に受験対策ではありますが、社会的関心を深め、また論理的思考、論理的に書く、話すといったことができるような教育をしてほしいというメッセージがあります。そして、英語力に関する4技能もしっかりです。これは今の時代、言うまでもないかもしれません。



なぜ多くの入試を行なうのか

多種多様な学生がほしい

- 知識や経験の交流
- コミュニケーション能力の醸成
- 知力、人間力の醸成

→国際社会、地域社会で活躍できる人材の養成

→社会に対するメッセージとしての入試

13

最後に、なぜ多くの入試を行うのかということです。先ほど言いましたように、私たちの求める学生像は、将来国際社会で活躍したいという学生です。そのために多種多様な学生が欲しいのです。いろいろな経験をした学生が国際教養大学に集って、知識や経験をシェアしコミュニケーション能力、あるいは人間力、知力を高めてほしいと思います。我々はそのようなメッセージを込めて入試をやっています。そういう自負があります。以上です。



特集 3●報告 2

関西国際大学における多面的・総合的評価 の開発—言語運用力と数理分析力テストの活用の可能性—

濱名 篤（関西国際大学長）



濱名です。よろしくお願いします。私どもの関西国際大学は、東京大学や国際教養大学ほど自由に学生を選べる大学ではありません。今日は、そのような大学では多面的・総合的評価をどのように考えていくべきかについてお話したいと思います。

■よく1点差を付けなければ入試で合否が判定できないとも言われますが、それは1点刻みで測定できるという前提の入試での話でして、／

私は、人間の能力を100点満点の1点刻みで評価するというのは、私立中学の入試から大学入試、正確には大学卒業までの間の期間、極めて限定的に行われている営みだと思っています。よく1点差を付けなければ入試で合否が判定できないとも言われますが、それは1点刻みで測定できるという前提の入試での話でして、今求められている入試というのはそういうものではありません。

たとえば、オリンピックの競技を考えてみても、評価には3タイプあるわけです。球技や格闘技のように勝敗を決するもの、水泳や陸上競技のように0.01秒単位で時間を競うもの、フィギアスケートや体操のように、評価の観点や基準は決めているものの、審判の主観により採点するものがあるわけです。

我々がこれまでやってきた入試は、どちらかというと陸上競技・水泳型でした。しかし、それではだめだと言われた場合に、どのように考えていけばいいのかということです。

多面的・総合的評価の在り方について

- ・ 人間の能力を100点満点で“1点刻み”で測定しようとするのは、私立中学入試～大学入試のみ
- ・ 各大学のDP（到達目標）は多様。アドミッションポリシーはDPを達成できる蓋然性・可能性を示したもの
- ・ 選抜性の高い大学（“ランキング型”）と適格性判定大学（“アクレディテーション型”）では、入試に求める機能が異なる
 - cf. アメリカのACTやSATが認める“誤差”幅、これらの民間テストを用いない動き
- ・ 入学後の追跡調査結果（IRデータ）に裏付けられた“多面的・総合的”評価を実現することが重要
 - 複数の方式がありえる。様々な協働・連携の在り方も可

大学生がなぜ勉強しないのかというと、大学でいい成績を取っても社会で評価してもらえないからです。やはり我々大学も自分たちの評価の在り方を根本的に見直していかなければいけません。

■選抜性の高い大学と、そうではなく、ある程度の適格性があれば、ほどほどのところまで持っていきますよというお約束ができる大学の場合では、入試に求める機能が異なるわけです。

なおかつ高校入試と大学入試の違いは、高校は学習指導要領で教えることが決まっていますが、大学は各大学がDP（ディプロマ・ポリシー）で定めているわけですから、最終到達目標は同じでなくてもいいわけです。そうすると、アドミッション・ポリシーは、そのDPを達成できそうな可能性のある人に求める資質・能力を示したものですので、選抜性の高い大学と、そうではなく、ある程度の適格性があれば、ほどほどのところまで持っていきますよというお約束ができる大学の場合では、入試に求める機能が異なるわけです。

そういうことを考えていくと、我々が提供する入学者選抜の在り方は、一定の多様性を保持しながら、あるレベル、ある選抜方法で大学に入れた学生が、大学での教育についていけているかどうかを検証しながら、その選抜方法を活用して

いくことであり、これがいま求められている多面的・総合的評価を取り入れた入試においても必要な方法だろうと思います。

いろいろな方法があると思いますけれども、我々のような小規模な大学では単独で様々な種類の方法論を開発するのは難しいと考えました。

私どもの大学で現在取り入れようとしているのは、AO 入試に代わる「マッチング入試」、つまり本学の教育システムにマッチングしているかどうかを 3 タイプの選抜方法でやっていきたいと思いますということです。

一つは「対話重視型」というコミュニケーションで、グループワークと面接を中心に力を測っていきます。二つ目が「授業参加型」です。うちにはお茶の水女子大学の「新フンボルト入試」のように時間をかけても、受けに来てくれませんので、1 日のうちに授業をやって、その内容に基づいて記述型のものを書かせて、それで評価をするというものです。それと、三つ目は、「基礎力展開型」です。これは我々が大学間協働で開発したテストを使った形で、このテストである程度基礎力を測れるという前提で取り入れました。これらの三つの選抜方式を受験生に選ばせたわけです。なおかつ 1 種類でなく三つとも受けてもいいというやり方で、どの型の入試であっても、本学のバックデータと照らし合わせて、本学での勉強についてこられる蓋然性が高いと分かった人には入学の権利を与えるということです。

1-1. 関西国際大学 DP 「修得・涵養する能力・資質」6項目

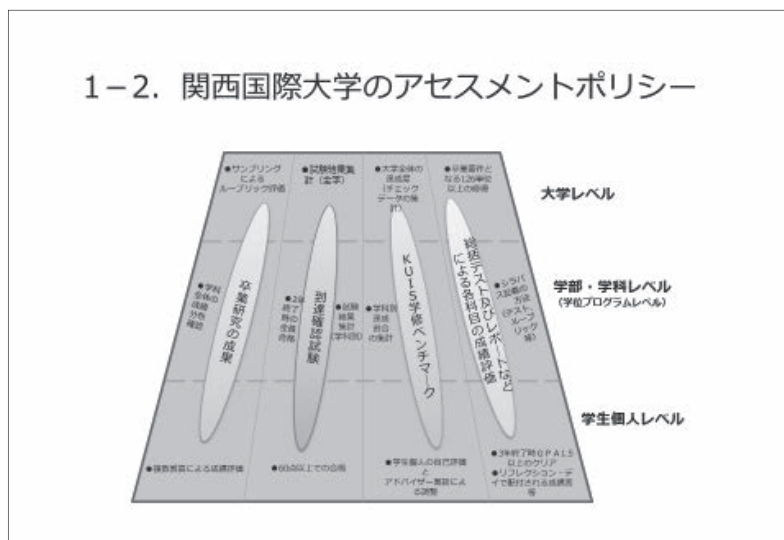
1. 自律的で主体的な態度 (自律性)
2. 社会に能動的に貢献する姿勢 (社会的貢献性)
3. 多様な文化やその背景を理解し受け容れる能力 (多様性理解)
4. 問題発見・解決力
5. コミュニケーションスキル
6. 専門的知識・技能の活用力

※全項目、KUIS学修ベンチマーク大項目に相当

では、関西国際大学は、学生にどういう力を身に付けさせるのか。実は、我々は全国で最初に 3 ポリシーを公表した大学で、このスライドのような DP で、六つの力を身に付けさせようとしています。自律性、社会的貢献性、多様性理解、問題発見・解決力、コミュニケーションスキル、そして、それぞれの学位に応じた専門知識・技能の活用力というものを KUIS*学修ベンチマークという到達目標として掲げています。

* Kansai University of International Studies

1-2. 関西国際大学のアセスメントポリシー



これから皆様方も恐らく苦しまれるかと思いますが、私が今関わっている中教審の部会では、今後各大学にはアセスメント・ポリシーを明確に示していただくということを議論しています。

私どもの場合はこれを学生個人、学部・学科、大学の各レベルについて四つのレベルでアセスメントしていこうとしています。いちばん右の総括テスト・レポートによる各科目の成績評価というのは、さきほどの6項目で言えば、専門的知識・技能についての評価です。それ以外の5項目についても学修ベンチマークを半年おきに確認して積み上げていきます。それと、到達確認試験は専門知識の総括的な能力を測る評価です。それと卒業研究の成果についての評価。この四つで最終的に適性を評価するということです。

1-3. 関西国際大学の学修成果のアセスメント方法

		大学の学び	
		専門的	汎用的
評価方法	直接的	○学修ポートフォリオ (学修成果物をエビデンスとする 「大学の教育目標」の達成状況の確認) ○卒業論文(←ルーブリック) ○教員採用試験合格率、 国家試験合格状況など ・到達確認試験(←形成的) ...	○テスト(←新開発の可能性) 言語運用力テスト 数理分析力テスト 日本語運用能力テスト ...
	間接的	○卒業率、単位修得状況	○適応調査・ 大学IRコンソーシアム学生調査 (↑学修成果に関する項目)

アセスメントの方法は、直接的な評価と間接的な評価に分類できると思いますが、専門的な能力・スキルを測っていく場合と、汎用的な能力・スキルを測る場合で方法は違ってきます。それらの方法にどのようなものがあって、どの段階で評価するのかということ、大学教育の中で設計するわけです。

2－1．他の機関と連携した 大学入学者選抜方法の開発

1) 大学入試センターとの連携（2017年度～）

2) 文部科学省の大学間連携共同教育事業を通じての連携 「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」 (2012年度～2016年度)

3) 一般社団法人学修評価・教育開発協議会（JHEDS）を通じての協働開発

7

こういうことを実現するための入試は、受験生の確保が難しくなるのではないかという危惧から、ともすればハードルを下げたくなるわけです。そこを何とかしなければならないわけですが、単独で全部を開発することは、私どものような大学では難しかったです。それで、最初に始めたのが2)でした。大学間連携共同教育事業で大学入試センターにステークホルダーをお願いして、「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」というものを2012年から2016年にかけてやりました。

その後、今年の4月29日に朝日新聞でも報道されましたが、一般社団法人学修評価・教育開発協議会というものを作って、大学間の連携で教育方法、評価の方法などを開発していこうということをやりました。入試センターとは、2017年から同センターが開発したテストを継承する形で我々が活用させていただくという連携を取らせていただいています。➡

2-2. 大学間連携共同教育事業での取組の流れ

- 1年目（2012年度）：
- 連携事業を促進するための組織体制の整備
 - DP等の見直し
- 2年目（2013年度）：
- 淑徳、北陸学院、くらしき作陽から関西国際に教員が出向
 - FD企画・ルーブリックの開発・アクティブラーニング等の要件作成
- 3年目（2014年度）：
- 出向教員が本務校に戻り、取組を推進
- 4年目（2015年度）：
- 4つの部会を実施（AL研究部会、HIP学生交流部会、IR研究部会、論理的思考テスト開発部会）
- 5年目（2016年度）：
- 部会の継続実施
 - 一般社団法人学修評価・教育開発協議会の設立

8

その流れをこのスライドにまとめていますが、結局この取組のポイントというのは、期待される学修成果を身に付けていくための評価の内容・方法の開発は個別大学ではできないから共同しましょうということです。

2-4. 取組の3つの柱

- ①ハイ・インパクト・プラクティス（HIP）の充実
＝教育方法の改善

 - ・ アクティブラーニング（AL）型授業の導入
 - 指標1：授業外学修時間の伸長
 - 指標2：アクティブラーニング導入率
 - ・ 教室外体験型プログラムの充実
 - 指標3：教室外プログラムの学生参加率

②学修成果の可視化
＝測定方法の開発

 - ・ ルーブリックの開発・活用、テスト開発
 - 指標4：教室外プログラムへのルーブリックの導入率
 - ・ 入学時の学力測定（大学入試センターモニター調査）
 - ・ 学修行動調査・教員調査の実施
- ③教学マネジメントの確立

 - ・ 学長を中心とする教育改革マネジメント体制の整備
⇒FD研修会⇒組織的な教育の実現
 - ・ DP,CPの見直し
 - ・ アセスメントポリシー（プラン）の策定あるいは検討
 - ・ 学生一人ひとりのデータをIRで活用
⇒学修・学生支援＋教育方法の改善

}

学生支援型IR

9

共同事業の柱は、①教育方法の改善、つまりハイ・インパクト・プラクティスの充実、②学修成果の可視化、③教学マネジメントの確立の三つです。

2－5．分科会方式での取組

- ◆関西国際大学学修支援センターでは、2009年度入学生から、入学前/時に「基礎学力診断テスト」を実施し、新入生指導のための情報提供を行っている。
- ◆入学時には高校までの成績情報があるものの、高校による「差」があり、履修指導等には直接活かせていない。
- ◆「基礎学力診断テスト」とは、「日本語運用能力テスト」（25問）と「論理思考力テスト」各10分×2＝20分の簡易診断テスト。

本学の入学時の学力測定については分科会方式でやっています。入試を多様化すると、学力を標準化して入口段階の力をキャッチできません。そのため、2009年から基礎学力診断テストを始めました。少なくとも当時は高校の調査書はあまり当てにならないと思っていました。

2－5．分科会方式での取組（2）

- ◆「日本語運用能力テスト」については、平成21年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」により3パターンを開発し、現在も活用中。
- ◆2013年度から実施している「論理思考力テスト」についても精度を上げる必要性があると考え、連携事業で汎用性のある内容を構築するために分科会を発足。

基礎学力テストは、「日本語運用能力テスト」と「論理思考力テスト」の二つからなっているのですが、これは、実は大学入試センターの研究開発部が当時試行的に開発しておられたテストのモニターに私どもがなったということです。

それで、当時作られたものは私ども以外にも長崎大学など、いくつかの大学が活用されていましたが、入試センターは自ら問題をどんどん増やしたというのではなく、問題開発のためのノウハウをマニュアル化する形で各大学にシェアされました。我々はこれを利用して、しかも単独大学ではなくて、大学間で連携しての問題作成を始めたわけです。➡

2-6. 新テストの開発・活用（1）

<共通課題>

・新たなテスト開発

➔入学時の学力を測る論理的思考テストの開発

➔専門基礎知識の評価ツールとして、到達確認試験（2年次）を導入（関西国際大）

内容としては、入学時の学力を測る論理的思考テストがベースですし、私どもの大学独自のものとしては、専門知識の必修科目から2年修了時に到達確認テストをやって、専門基礎力が付いているかどうかを確認しています。それができなければ4年生にせず、だめなら再試験を受けさせて、1年間で追い付かせるというやり方を取っていました。

2-6. 新テストの開発・活用（2）

<共通課題>

・大学入試センター開発テストの活用

(1)「言語運用力」（マークシート方式 40 分）

日本語および英語の文章、短文、会話文や図表を材料として、情報の把握（文章内の情報を正しく読み取る能力）、内容の理解（文章の内容の理解や解釈を行う能力）、推論と推察（推測、評価、判断等を行う能力）を問う。

(2)「数理分析力」（マークシート方式）40 分

数と式、関数に関わる計算、定義やルールを理解して適用する能力、グラフや数表の内容の読み取り、数理的な思考力を働かせた問題解決力を問う。

(3) 能力・資質に関する質問紙調査

➔入学時の学力（言語運用力、数理分析力）の把握。

➔他の学生データと連携して傾向分析

13

もともと入試センターが作られたテストは言語運用力と数理分析力で、マークシートで40分のものでした。これを私どもは使っていましたが、やはり4月のオリエンテーションに80分の時間をとるのはなかなか厳しいのです。しかし、このデータは極めて貴重です。最近IRがだいぶはやってきていますが、私のバックグラウンドが社会学ということもありまして、パネルデータの重要性をよく知っていますので、個々人に全部ひも付けした個別データでつないでいくという

ことをやりました。他大学との比較よりも、うちの大学に多様な学生が入ってきますから、どのような入試で入ってきた学生が、あるいはどのような特性を持った学生がどう変化するかということを追いかけていくということをやりました。

2-7. AP変更に伴う入試方法の変更（2018年度）

2018年度入試では、

- AO相談型にグループワークを導入
- 志望理由書をループリック評価



入学後のデータと組み合わせて分析

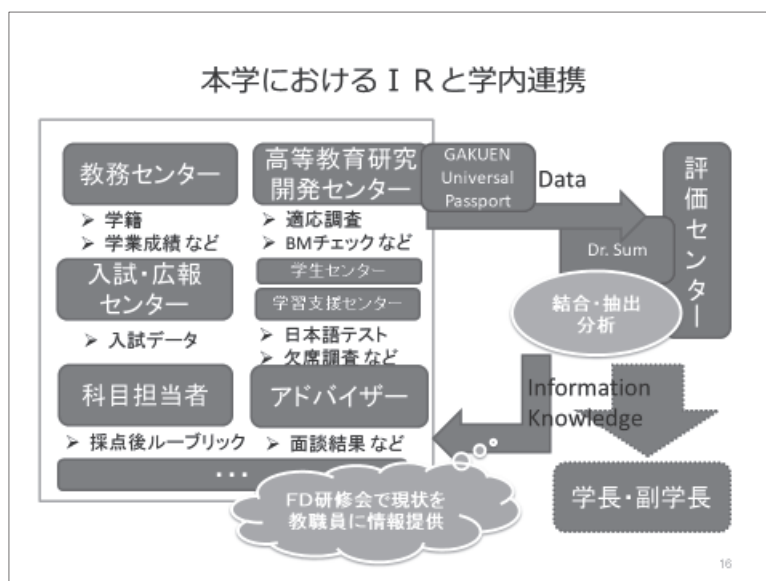
それをベースにしながら入試方法を変えていきました。AO 相談型にグループワークを入れたり、あるいは志望理由書をループリック評価したりします。ループリック評価は私どもの大学の得意技ですので、評価の観点・基準を記述的にやっています。

ちょうどいま、JAPAN e-Portfolio なるものが開発されていますが、問題はそれをどう評価するかです。定量的評価に置き換えるのは簡単ですが、定性的評価をどう評価するのが極めて重要なのです。入学後のデータで裏付けして逆算していかなければ、評価の方式が正しく有効かどうかは分からないということです。

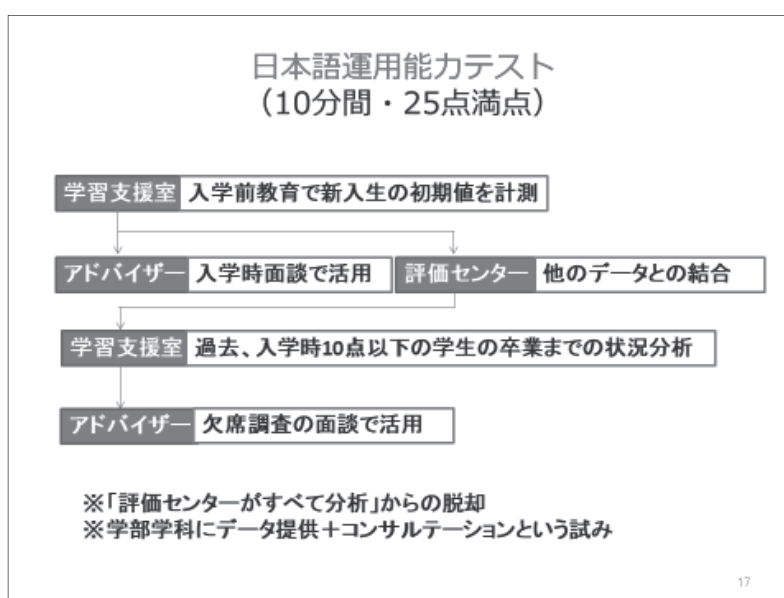
入学者選抜の方針（AP）

本学アドミッションポリシー		学力の3要素
知識・技能	高等学校の教育課程を幅広く修得している。	知識・技能
科学的基礎力 (看護のみ)	高等学校までの履修内容のうち、看護学の基礎として「理科（生物基礎または化学基礎）」を身につけている。	
言語運用 ・表現力	高等学校までの履修内容のうち、「国語総合（現代文）」と「英語」を通じて、聞く・話す・読む・書くというコミュニケーション能力の基礎的な内容を身につけている。	
論理思考 ・判断力	社会の様々な問題について、知識や情報をもとにして、筋道を立てて考え、その結果を説明することができる。	思考力・判断力・表現力
関心・意欲 ・態度	学びたい学部・学科の知識や経験を社会で活かしたいという目的意識と意欲がある。	主体性・多様性・協働性
主体的協働性	学校でのグループ学習、課外活動やボランティア活動等の経験があり、他の人たちと協力しながら、課題をやり遂げることができる。	

私どもの今の AP は、このように学力の3要素との対応関係を作って、➡



評価センターという所が結合する形で学内にフィードバックをしています。



それで、日本語運用能力の結果はやりっ放しではなくて、多様な学生の指導にフィードバックするというやり方で活用していきました。

状況分析例

日本語テストが10点以下の学生

・退学・除籍	X%
・過年度	Y%
・標準年限卒業 (うち、3年終了時のGPAが1.5未満)	Z% α%)

学生への助言：リスクは高いが、卒業はできる。だから、1年春学期の折り返し以降に“きちんと出席する”、“提出物は必ず出す”、“期末のレポートやテストには、十分に準備時間をとる”など、頑張らなければならない

【IR分析事例1】

基礎能力（＝言語運用力＋数理分析力）の変化

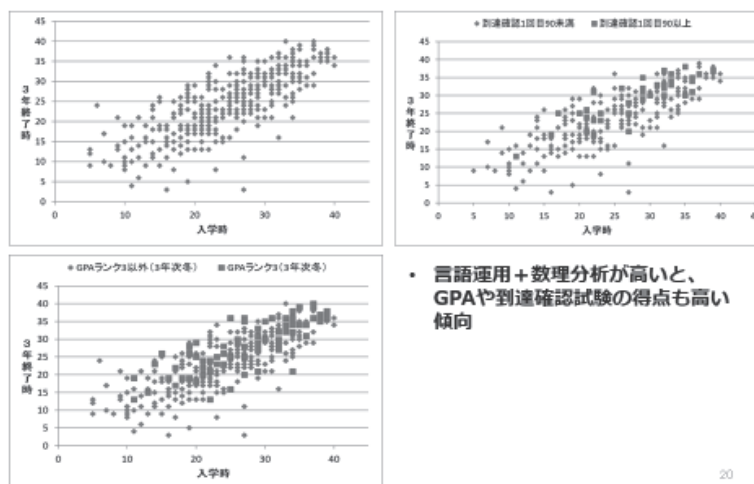
1. 大学教育で基礎能力は伸びるのか？
 ▶ 関西国際大の2013年度生を対象に、3年終了時に言語運用力と数理分析力のテストを実施
 ▶ 入学時のデータと比較
2. 基礎能力は成績、専門知識理解に関係があるか
3. 基礎能力はコンピテンシーの伸長に関係があるか
 ▶ 基礎能力とPROGテストとの関係を見る

※ PROGテスト＝(株)リアセックが開発したジェネリックスキル測定テスト。リテラシー（知識を活用し問題を解決する能力）とコンピテンシー（自分を取り巻く環境に実践的に対処する力）を測定。

http://www.riasec.co.jp/prog_hp/

19

言語運用＋数理分析と、GPA・到達確認試験 2013年度生

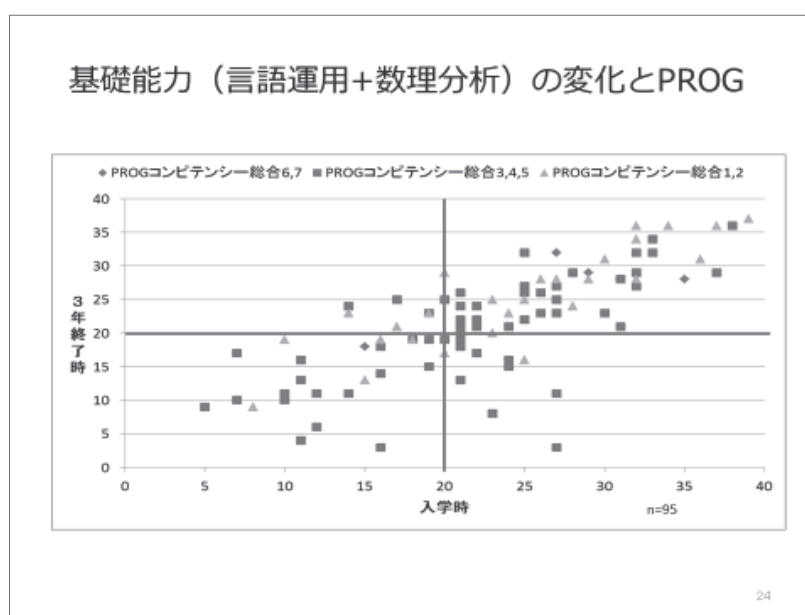


20

その結果、退学や除籍のリスクも算出できますし、基礎学力診断テストの入口の結果で平均 GPA がどのぐらいか、上がった子と下がった子にはどのような経験の違いがあるのかということはかなり綿密にひも付けして分析しています。

しかし、単独大学ではデータの数に限られるので、コンソーシアムを組んで、それも利害の対立しない、地域が離れた大学で組んだわけです。その結果、大学教育で基礎能力は伸びるのか、専門知識理解と関係があるのか、コンピテンシーと関係があるのかというようなことを見ていきますと、我々のように選べない大学でも、あるいは学生にとっても、リスク回避をしていくことができます。これは一覧ですが、入学時の基礎学力と 3 年次修了時の成績はどう変わっていくか、GPA の分布と入学時の基礎能力の分布で見ていきますと、かなり相関が高いことを御理解いただけるかと思います。

こういう状態であることを考えれば、ある程度、基礎能力に、GPA の予測可能性があるということが分かりますし、到達確認試験の成績と、その到達確認試験で 1 回目に点数が悪かった子と 90 点以上で良かった子の分布などを見ると、そんなにきれいではありませんが、ある程度は相関しているということが分かります。



つまり、GPA だけではなくて、総合的に一番エッセンスとなる力との相関はどうなるのかと見ていきます。さらにこれは PROG という株式会社リアセックが開発している汎用的能力テストですが、それとの関係を見て入学時とテストをした段階で上がっているのか下がっているのか、もともと高かったのか低かったのかというようなことを検証しているわけです。

そういうことをやっていくと、1 点刻みはおろか、私どもがやっている方式、つまり入試センターが開発されたものを大学間連携で加工して作り上げたテスト

で、入試の成績のばらつきから推論される蓋然性よりもそれに勝るとも劣らない形である程度の適性を見ることができます。これが多面的・総合的評価を私どものような一般大学の中で実現する方法だと考えました。

新たな多面的・総合的選抜の可能性

AO入試に変わる『マッチング入試』（3タイプ）

- ・「対話重視型」、「授業参加型」、「基礎力展開型」と3つのタイプから選択

「対話重視型」：グループワークと面接で力を測る

「授業参加型」：授業を聞いて、レポートにまとめる

「基礎力展開型」：知識を活用し問題を考えて解く

- ・自分の特性に合わせたタイプを選択し、本学の教育スタイルに合っているかを確認し、合否を判定

元に戻りますが、対話重視型であっても、授業参加型であってもこのような分析をしていけば、入試問題が適切でなかった学年があったとして、これが測れていないからその問題は良くなかったということにもなります。そのようなやり方の中で他の方式と比べてその選抜方式で入った入学者が伸びているのか伸びていないのかを見ていくことで、私どもの DP やアドミッション・ポリシーとの整合性を考えても、多面的・総合的評価を実現することが可能です。

これからはまさに我々のようなストップ・ウォッチで測る水泳・陸上型でない大学でも、必ずしも結果の出ていない学生にサプリメントにどのような学習支援をすれば改善したのかなど、総じて私どもの DP が達成できるような仕組みを作り上げられますし、これこそが私どものような大学にとってのミッションであると思います。小さい規模の大学が単独でやるのではなく、共同・連携していくことができます。つまり、多面的・総合的評価は DP の数だけ多様でありますけれども、最大公約数的な部分での連携や共同は一定程度可能であり、そのインフラを大学入試センターに今後も供給していただくことが、それを受けて立つ私ども末端の大学にとっては大きな助けになってくるということを期待しています。

皆様方の御参考になるかどうか分かりませんが、私どもの取り組んでいる事例について御報告をさせていただきました。御清聴ありがとうございました。



特集 3●報告 3

東京大学の推薦入試は何をみているのか

濱中 淳子（東京大学教授）



東京大学の濱中です。よろしくお願いします。今日は、導入以来3年目を迎えた東大の推薦入試について御紹介させていただきたいと思います。

まず、東大の推薦入試とお聞きになって、皆さん、どのようなイメージを持たれますか。スライドには本学の推薦入試を取り上げた報道記事を載せましたが、御覧のような見出しが躍っています。「国際派」「異才」「ハイスペック」…。インパクトのあるワードだと思います。本日お話したいのは、こうしたワードによって見えにくくなってしまっていると言ってもいいでしょうか、東大の推薦入試が本当にねらっているものは何なのか、ということです。

報告の目的と構成です。まず、目的ですが、東大推薦入試の特徴を私なりに整理することを通じて、一つの入学者選抜の在り方を御紹介したいと思っています。

そして、報告の構成としては、はじめに東大の推薦入試導入の時期から言える特徴についてお話しし、次に、改革に至った三つの要因を御紹介します。最後に入試設計の理念、そして現状の評価について御報告いたします。

東大推薦入試関連報道

見出し例

スーパー高校生にのみ開かれた
東大「推薦入試」の門

東大「推薦入試」合格までの高すぎるハードル

東大の推薦入試の内容がレベル
高すぎ！数学オリンピックや国
際的実績など。ハイスペック学
生を求む！

東大推薦「求む国際派」

入試改革 概要発表

語学や理
数受賞歴

東大推薦入試「異才」集まる？

100人募集
受け

報告の目的と構成

目的

東大推薦入試の特徴を適切に伝えることを通して、1つの入学者選抜のあり方を紹介

構成

- 1) 推薦入試導入の時期からいえる特徴
- 2) なぜ、改革が試みられたのかー 3つの要因
- 3) 入試設計の理念
- 4) 現状評価

推薦入試導入の時期からいえる特徴

東大推薦入試

東大推薦入試 16年度から



100人程度 浪人生にも門戸

2013年3月16日 日本経済新聞
改革の検討＝2010年春～

入試改革（多面的・総合的評価）

- 1985 臨教審第一次答申
■入試の多様化、評価の多元化
- 1997 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（答申）」
■総合的かつ多面的評価など、丁寧な選抜
- 1999 「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」
■大学と学生のより良い相互選択
■AP概念
- 2014 高大接続答申
■学力の三要素を踏まえた多面的な評価

P

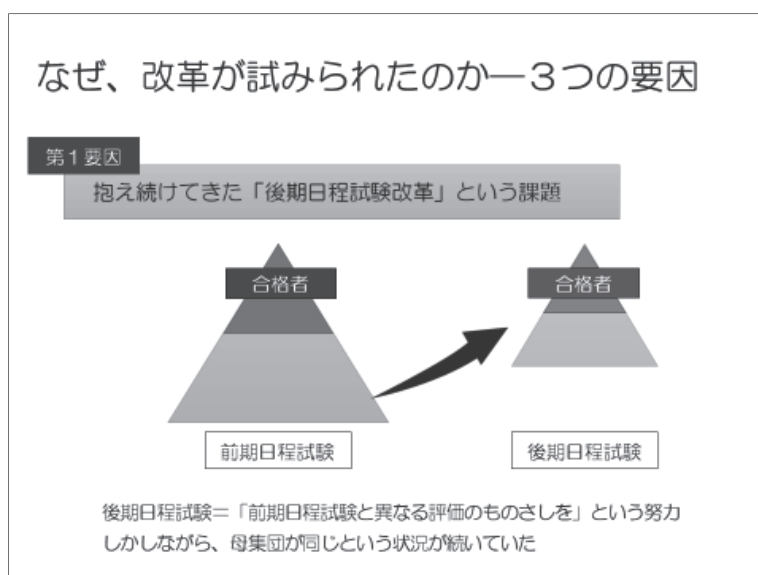
東大は、「学力の三要素→多面的な評価」とは関係なく、東大独自の判断で動いていた

まず、推薦入試導入の時期です。東京大学は、2013年3月に、2016年度からの推薦入学の導入を発表しました。

もちろん、導入はこのときに急に決まったわけではありません。本格的に導入に向けた議論が始まったのは2010年の春だと聞いています。そのときにできたワーキンググループで、東大でも推薦入試を設けたらいいのではないか、それはどう設計すべきなのかというようなことが話し合われました。

ここで日本の入試改革を振り返ってみれば、多面的・総合的評価についてはかなり前から議論されており、1985年の臨時教育審議会第1次答申までさかのぼることができます。1997年の中央教育審議会（中教審）答申でも総合的かつ多面的評価、丁寧な選抜がうたわれ、1999年の中教審答申には、大学と学生のより良い相互選択というような言葉が見えます。アドミSSION・ポリシーという言葉が登場したのもこの答申です。ただ、現行の入試改革に大きな影響を与えたのは、やはり2014年の中教審答申いわゆる「高大接続答申」だと言えるのではないのでしょうか。この答申で、いよいよ「学力の3要素」を踏まえた多面的な評価というようなことが言われるようになったわけです。

こうした流れを踏まえたとき、東大における推薦入学の導入について指摘されるのは、2010年春からの検討という点からも分かるように、2014年の中教審答申をめぐる動きが直接的なきっかけになったわけではないということです。多面的・総合的評価をめぐる大きな流れの中で、東大が独自の事情に基づいて試みたものだということが、一つのポイントになると思います。



第2要因
東大入学者層の固定化問題



知的刺激が多く、発想の種が豊富で、偏りのない議論を導く集団はどちらか？

実態

首都圏出身者が半分	私立高卒が2/3	男子が8割以上
-----------	----------	---------

あまりに不自然／研究の発展・イノベーションの障壁
…タフな東大生を育成する土台作りの必要性

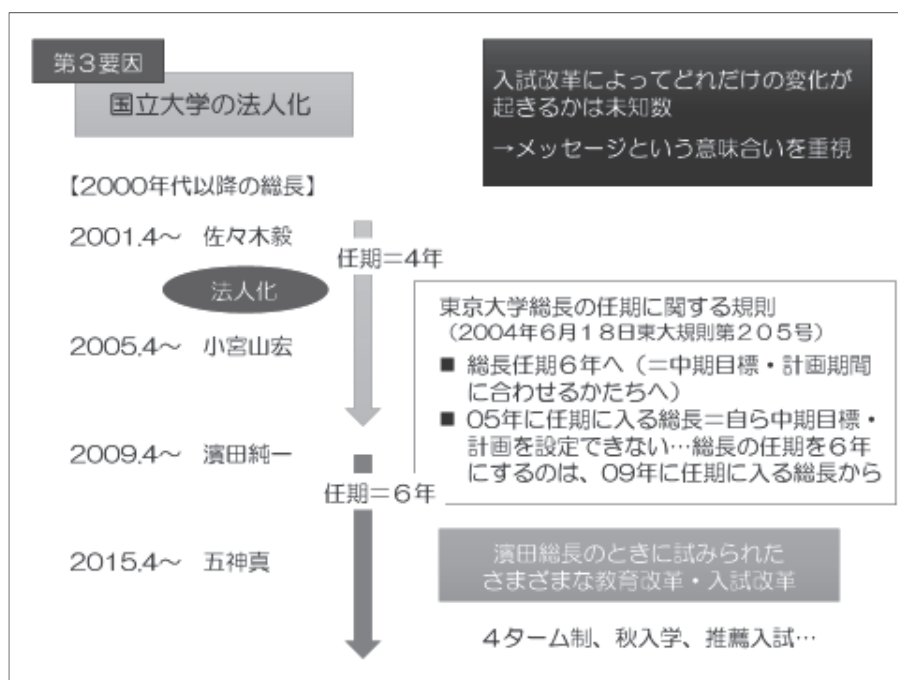
では、なぜ、東大は2010年の春に入試改革の可能性を探ろうとしたのでしょうか。三つの要因を挙げておきたいと思います。

■東大の入学者層は、実態としてかなり固定化されています。まず首都圏出身者が半分であり、私立高校の出身者が3分の2、男子が8割以上を占めるというような状況がずっと／

一つは、後期日程試験の母集団が前期日程試験の出願者とほぼ同じという状況を変えたいと考えたことです。東大としては、前期と後期とでは、それぞれ異なる母集団から、異なる物差しで合否の判定をしたいと思っていました。しかし、前期日程試験の後に後期日程試験があるという日程の関係上、これが困難になっていた。なんとか打破したい。これがまず入試改革に踏み切った第1の理由になります。

2点目の理由としては、東大の入学者層の固定化問題が挙げられます。東大の入学者層は、実態としてかなり固定化されています。まず首都圏出身者が半分であり、私立高校の出身者が3分の2、男子が8割以上を占めるというような状況がずっと続いています。昨年、やっと女子の比率が2割を少し超えたのですが、また今年は2割を切ってしまいました。

一方、今、東大が重視しているキーワードは多様性です。研究の活性化、教育の活性化を実現するためには、多様な学生を集めなければなりません。入学者の層の固定化は、発想の種の固定化であり、研究の発展、イノベーションの障壁になると言えるからです。➡



そして東大入試改革の要因の3点目は、要因と言うより改革を可能にした条件と言えるかもしれませんが、東大の総長の任期が、濱田総長のときから中期目標・計画期間に合わせる形で4年から6年に変わったことです。

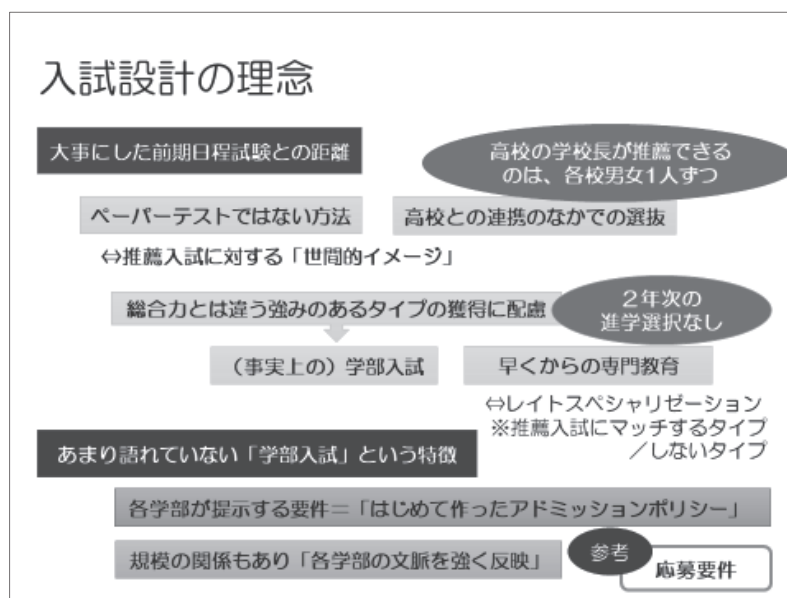
学部長や学長などリーダーの御経験のある方はよくお分かりだと思いますけれども、就任後、最初の1年、2年というのは、どうしても助走期間になってしまいます。そして、最後の1～2年はまとめの期間になりがちです。そうすると、4年任期の総長では、助走期間が終わった途端にまとめ期間に入るというようなことになってしまいます。

■私も20数年前は駒場の一学生でしたけれども、当時の駒場と今の駒場は全く違います。教養教育が非常に充実していました、／

しかし任期が6年になれば、特に3、4年目で大きく動けます。1、2年目で「自分が描く方向性はこうだ。これをやるためには一体どういう仕掛けが必要だろうといろいろ探って、3、4年目で動き、5、6年目に結果をまとめるということが出来ます。6年任期となった濱田総長の時代にとっても大きな改革がいろいろと試みられました。4ターム制、世間をにぎわせた秋入学、そして教養教育の充実。私も20数年前は駒場の一学生でしたけれども、当時の駒場と今の駒場は全く違います。教養教育が非常に充実していました、「これから君たちは学問を学んでいくんだよ」と

いう体制がしっかり整っています。そのような教育改革を試みた濱田総長のときに、入試改革も大きく進んだ。これが三つ目の要因です。

まとめれば、後期日程試験の抱えている難点、そして受験者層の固定化という悩みを持ち続けた中、法人化をきっかけとして実現したのが推薦入試の導入ということになります。



このスライドに、推薦入試がどのように設計されたのかをまとめておきました。先ほどからも申し上げていますように、とにかく前期日程試験で入ってくる合格者とは違うタイプの学生を採りたいということで、前期日程試験との距離を大事にした設計になっています。前期はペーパーテストですから、ペーパーテストではない方法とする。ある特定の日のペーパーテストの成績で合否が決まるというのではなく、高校生活全体の活動を重視した選抜というスタイルにしたのです。

また、今の前期日程試験では、文系にも数学を、理系にも国語を課していることから分かるように「総合力」を見ています。そして、その総合力を見るやり方は、1～2年生は教養、3年生から専門というライト・スペシャリゼーションの理念に沿ったものと理解することができます。しかし推薦入学では、そこも距離をおきたい。総合力とは違う強みを持った学生を獲得したい。何かに打ち込んだ学生に入学してほしい。各高校にこれぞという生徒を推薦してもらうことにしました。

先ほども言いましたように、東大は1～2年が教養で、その後専門が決まります。少し表現を選ばずに申しますと、東大の入試は駒場に入る学生を選ぶ「駒場入試」でした。しかし、推薦入試で入った学生に関しては早くからの専門教育を行い、2年次の進学選択は無し、最初に希望した学部そのまま進学してもらうという方法を取っています。

つまり、推薦入試の導入は、東大として、初めて事実上の学部入試を行うという

ことでもあったわけです。東大の推薦入試についてはよくその要件が話題に上がりますが、私は、それ以上にその学生が推薦入試の理念にマッチするかしないかが大事なポイントだと考えています。

私見ですが、東大のレイト・スペシャライゼーションは、理にかなった制度だと思っています。というのは、高校3年間で見える学問領域は限られていますし、自分のやりたいことができるのはこの学部だと思って入学しても、その判断が実は違っていたということも多々あるからです。新入生には、いい意味の裏切りにあってくださいと言っていますが、教養課程での学びを通じて、ときには自分のやりたいことはこの学部ではなかったというような気づきとともに、専門を選んでいくところに東大の良さがあると考えています。

■推薦入試は事実上の学部入試と申し上げましたが、そう位置付けますと今回の推薦入試の要件は、実は各学部が初めて作ったアドミッション・ポリシーとも言えます。／東大医学部は、今回のこの推薦枠を研究医養成枠として位置付けると断言しています。

しかし、ここで推薦入試に話を戻すと、推薦入試で入学した学生にはそれが許されません。原則として入試で合格した学部そのまま進学していただきますので、早くから専門教育を受けられるというメリットがあると同時に、当初の選択の変更ができないということを考えると、迷いたい人は推薦入試にマッチしないとも言えるかと思います。

さきほど、推薦入試は事実上の学部入試と申し上げましたが、そう位置付けますと今回の推薦入試の要件は、実は各学部が初めて作ったアドミッション・ポリシーとも言えます。そして実際、各学部の示した要件には、我が学部はこういう学生にこそ入ってほしいというメッセージがとても強く表れています。

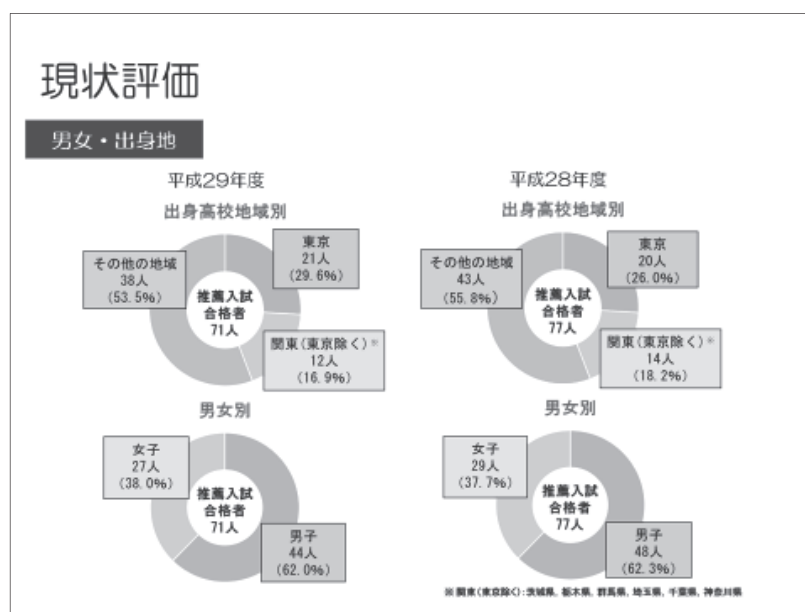
たとえば、医学部医学科は、「生命現象の仕組みの解明、疾病の克服および健康の増進に寄与する医学研究を推進するため、推薦入試枠を医学研究者養成枠と位置付け」としています。一般的な医学部入試とは違う選抜をしているのです。医学部に行きたいという人の志望動機は、子供のころの病院での受診経験だったり、医師であったお父さんへの憧れであったりというのが通常ではないでしょうか。そうしたなか、東大医学部は、今回のこの推薦枠を研究医養成枠として位置付けると断言しています。

法学部の要件には「現代社会、とりわけグローバルな場でリーダーシップを発揮する素質を持つ学生」と記されています、その後もずっとグローバル、語学力というような言葉が並べられます。これもやはり伝え聞くとくによると、東大法学部の事情を反映しています。東大の法学部は創立以来ずっと官僚や法曹の育成に力を

入れてきましたが、これからはもっとグローバルな現場で活躍できる人材の育成にも力を入れていきたいわけです。そういった法学部のシフト変更と一緒に支えてくれる学生にぜひ来てもらいたい。そうした方向性がここに表れています。

他方で文学部の推薦入試は、小論文を書かせるところに特徴があります。書くことを大事にする世界ですから、その能力をきちんと見たいということです。

今日は三つの学部しか触れることができませんでしたが、いずれにしても各学部の要件には、それぞれの学部の学問領域の特性、そして今抱えている問題意識が反映されています。

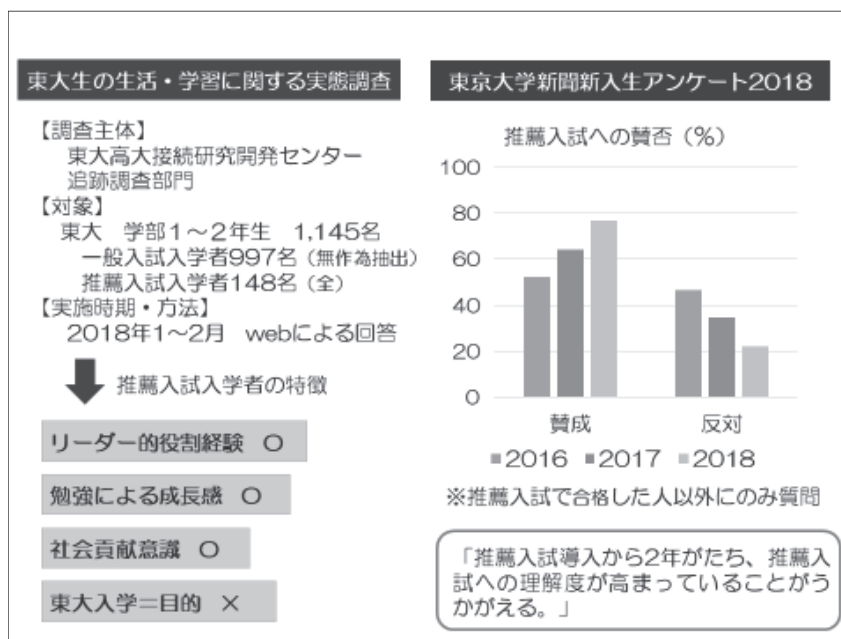


最後に、推薦入試で入ってきた学生についてお話しいたします。先ほども、東大入学者は首都圏の出身者が半分で男子が8割ということを申し上げました。

そうしたなか、推薦入試で入学した学生は、首都圏以外の方が5割以上、そして、4割弱は女子です。各高校の推薦枠を男女1名ずつにしていることが効いていると思います。

私ども高大接続研究開発センターは、今年の1月から2月に、駒場の1～2年生を対象にどのような学生生活を送っているのか、そして高校時代はどうだったのかというようなことに関してウェブ調査を行いました。

一部結果を紹介しますと、推薦入試で入ってきた学生の中には、高校時代にリーダー的役割を担ったことがあるという人がとても多かったです。また、高校での勉強による成長を実感していた人たちも多く、社会貢献をしたいという意識もとても強い。一方、東大への入学自体が目的だったというような人たちは、一般入試の学生に比べて極めて少ないという特徴も持っています。➡



では、推薦入試による入学者は、周囲からどう思われているか。導入当初、その資質に疑問を抱く教員・学生も少なくなかったようですが、3年が経ち、推薦入試もなかなかいいのではないかという人の比率が増えている。このようなデータを見ることができます。これは東大新聞が行った調査の結果ですが、2016年の1年目は、推薦入試賛成派5割だったのが、今は大体8割ぐらいまで比率は上昇しています。

私もこれまで推薦入試で入学した学生たちに話を聞いてきましたが、実際、推薦生たちはとても元気で、周りの学生はもちろん、時には教員たちにもよい刺激を与えてくれているとみています。とは言え、東大の推薦入試はまだまだ成長過程にあります。制度としていかに強くしていくのが、今後の課題です。

今日は、とりあえず、導入に至る経緯と現状について御報告いたしました。ありがとうございました。



特集 3●指定討論 1

大村 勝久（静岡県立浜松北高等学校教諭）



浜松北高校の大村と申します。よろしくお願いします。本日は地方の公立高校の立場から、皆様のお話をお聞きして感じたこと、あるいは日頃から思っていることをお話ししたいと思っています。

まず、国際教養大学です。16 もの入試をやっていらっしゃるの、将来国際社会で活躍できる人材が欲しいからということでした。そこで、お聞きしたいと思ったのは、その 16 の入試で入学した学生さんにはどのような違いがあって、入学後はどのようにお互い活性化し合っているのかということです。特に、気になったことは C 日程です。センター試験が英語 1 科目、そして個別試験が英語の小論文です。確かに小論文の中身を見ますと、社会的な内容を問うようなものを書かせています。しかし、これほど英語のみを重視した入試で入学後はどうなのかが正直に言って気になるところです。

次に関西国際大学さんです。非常に様々な取組をされていて、感心しました。お話の中で、JAPAN e-Portfolio に言及されていましたが、これについてのお考えをお聞かせください。高校の中にもいくつかの業者さんが入って、今一生懸命取り組んでいらっしゃる所もありますが、私個人は非常に危惧しています。自分の学習記録を入力していくわけですが、個人の日記ならばまだしも、非常に個人的な情報が企業のデータベースの中に入れていくと、ずっとそれが残ってしまう、漏洩があったときにどうになってしまうのでしょうか。学習履歴が残るのは個人的にはありがたいですが、それが入試どころではなく、就職にも使われるようなこ

とになったりはしないか気になっています。

電子化されたポートフォリオがどこまで有効的なのか、誰のためのポートフォリオなのか、何のためのポートフォリオなのかということが、私にはよく分かりません。下手をすると、受験テクニックならぬポートフォリオテクニックなどというものが出てきはしないだろうかと危惧します。一部の大学のお話を聞いていると、現在の紙ベースの内申書を推薦・AO入試などで使おうとしても、量が多過ぎてどこを読んでもいいのか分かりづらく、多くの時間がかかるということです。

関西国際大学が、一所懸命学生さんを伸ばしていこうと御努力されていることはよく分かりました。高校時代の教育活動が不足であったために大学が御苦労されている部分もあるのではないかと考えています。濱名先生から見て、高校側の教育に欠けているところ、また、高校時代に偏差値とはまた違う視点で普通の子を評価する方法があれば、教えていただきたいと思います。

また、かつては高校の調査書をあまり当てにしていなかったけれども、あるときからよく見るようになったというお話があったかと思います。それはどのようなきっかけがあったのでしょうか。今後、調査書も1枚の紙ではなくて、何ページにわたって書いてもよいということで、実は高校の教員も頭を抱えています。ぜひヒントをいただければと思っています。

最後に濱中先生の東大です。お話したいことはたくさんありますが、まず、推薦入試は本当に東大が狙っている受験生が受験をしているのかということです。現在募集人員の100人はとれていないということですが、そこをどのように分析されているのでしょうか。

■例えば科学オリンピック、確かに本校からも日本代表が出たりもしましたが、大学に進むのはそういう生徒ばかりではありません。

東大に関してというだけではなく、午前中に宮本校長先生がお話されたように、いろいろな意味で地域間の差を私も感じています。例えば科学オリンピック、確かに本校からも日本代表が出たりもしましたが、大学に進むのはそういう生徒ばかりではありません。本校は情報を与えているつもりですが、やはり時間とお金の格差があります。やはり都市部と比べるとどうしても文化的な刺激が少ないのではないかと思います。多様な生徒に進学してほしいと言っておられる東大はどのような格差についてどのようにとらえていらっしゃるのでしょうか。

推薦入試の合格倍率はそう高くないといわれても、そもそもハイスpekですから、併願を考えます。しかし、東大の推薦に限らずAOと一般入試の併願というのはなかなか負担が大きいものなのです。初めから一般のみの生徒であるなら

ば、点数によって受ける大学が決まります。浜松からは、東大の本郷キャンパスと、京大の吉田キャンパスまではほぼ同じ時間で行けます。ですから、AO 同士の併願や AO と一般の併願となったときにはどうしても考え込んでしまいます。そういうところを乗り越えて志願してほしいと願っていらっしゃるのかどうか、もう少しお話を聞かせてください。

東大だけではありませんが、国立大学への推薦文は、教員の書く分量が結構あります。通常はそのクラスの担任の先生が書くわけですが、進学先の専門分野を知っているとは限りません。特に医学部はテクニカルワードが分からず、一生懸命こちらでも勉強しながらやりますが、厳しい部分があります。学びの計画書のようなものも、博士レベルの入試のことを求めているのではないかと感じることもあります。そんなふうに苦労して作成した推薦文をどのくらい大学側は見ているのでしょうか。

また、そのような推薦入試で入学した学生たちは期待どおりに活躍できているのでしょうか。週刊誌を見ると、地方の学生がなかなか周囲に溶け込めずに、仲間内で固まってるというようなことも以前報じられました。そんなことになっていないか心配です。東大の推薦入試は、言わば学部入試だというお話でしたが、私の知っている東大生の中には、入学時の志望とは異なった学部に進学した卒業生もいます。推薦入学で入った子にはそのような学生はいないのでしょうか。そこも気になることです。

最後に、大学入試についての私の個人的な思いをお話しさせていただきます。やはり科学オリンピックの類での成果は学習指導要領外で、特別な教育活動です。高校の教員の立場からは、学習指導要領に則った教育活動の成果を評価をしていただきたいと思います。そして、これは東大の元学部長の先生からも教えていただきましたが、受験対策のみで入ってきた学生は、入学後に必ずしも成功するとは限らないそうです。なんとか、塾や予備校に頼らない入試ができないものかと思います。推薦・AO が流行れば今度は推薦・AO の塾ができて、入試は塾に頼らなければならないのかと、これが日々生徒に接している側の正直な考えです。

それから、午前中に宮本校長先生もおっしゃっていましたが、地域の差、文化の差、情報の差というのは大きいと思います。東京都は高校入試の英語で4技能試験を課すそうですが、地方ではそのように多額のお金を使うことはできません。そういう差がそのまま大学入試に反映されていいものなのでしょうか。

昭和のある一時期には、現在よりも多様な学生さんが有名大学に入れたと聞いていますが、都心の子が地方にきたり、地方の子が都心に行ったりといったことがいまよりも多かったようです。21世紀はさらにグローバル化が進み、海外の子も入ってきます。多様であり、かつ普通の子たちを受け入れられるような入試ができないのでしょうか。そういった入試をするために高校側がお手伝いできることは何かないのだろうかと思っています。私からは以上です。



特集 3◎指定討論 2

西郡 大（佐賀大学教授）



佐賀大学の西郡と申します。ただいま、御報告を頂いた3大学は全国的に見ても非常にユニークな試みをされている大学だと思います。今日は、そこまでユニークでない普通の大学にとっても何か学べることはないのか、特に私はアドミSSIONの現場に関わっていますので、現場的な視点からいろいろと掘り下げて、3名の先生方にお伺いしたいと思います。

■例えばここに御飯が大盛りのドンブリがあるとします。それにいろいろな角度から箸をつける。多様な部分を食べたつもりでも、／

まず、中津先生の発表についてです。16種類の入試をする理由は多様な学生を受け入れるためということでした。多様な学生を受け入れようとする大学は多いのですが、私が避けなければいけないと思うのは、多様なと言いながら実際には同じ母集団から採ってしまうことです。例えばここに御飯が大盛りのドンブリがあるとします。それにいろいろな角度から箸をつける。多様な部分を食べたつもりでも、結局は一気にしゃもじで上半分を取って食べたのと同じことになっています。つまり、1回の入試ですむわけです。多様な入試を行って多様な学生を入学させるのであれば、大盛りの御飯以外の丼を採さなければいけません。とすれば、入試を

行う上での大前提として、志願者集団をどのように形成すべきなのは、大学にとって非常に重要なことだと思います。16 種類の入試を行う場合、そうした志願者集団を形成する上で大事なことや何か工夫すべきこと、そういったものがあれば、お聞かせ願いたいと思います。

そして 2 点目は、多様な特性を持った学生をどう生かせるのか、大学に入学させてそのまま放っておいては、相乗効果は限定的だと思います。そういった多様な学生を生かせる仕組みをどう構築されているのでしょうか。いろいろなことをされていると思いますけれども、これまでの経験上、特に有効なものはどのようなものか、お聞かせいただきたいと思います。

次に濱名先生の発表ですが、ランキング型とアクレディテーション型の評価というお話がありました。ランキング型という入試を全ての大学でできるわけではありませんし、今ランキング型の入試をやっている大学も、2018 年問題を境に志願者数、18 歳人口が減少するのに伴って競争率を維持するのは難しくなってくるのかもしれません。そうなったときに、アクレディテーション型の入試を適切に実施していくために必要な条件や環境、体制はどのようなものか、御教授いただきたいと思います。

■ いろいろな大学が高大接続改革に関心を示し取り組んできていると思いますが。その成果とは一体何なのか、どういった状態になればこの改革は成功したと言えるのか／

そしてもう一点は、多面的、総合的な評価を推し進めるための指標は何かということです。発表の中には様々なデータの分析がありました。いろいろな指標をお持ちだと思います。我々大学は AO 入試や推薦入試で、例えば主体性等の評価などをやった際に、その追跡調査を行います。多くの大学では、いろいろと手間暇をかけた入試をしても、一般入試で入学してくる子のほうが入学後の GPA がいいので、一般入試に逆戻りというようなことをずっと繰り返してきました。

しかし、総合的・多面的な評価をするためには、学部の先生方にも相当協力していただかなければいけません。そうしたときに、成果を適切に検証する手だてがないと誤った方向の意思決定がされてしまいます。最近は IR という言葉も大学関係者はよく耳にします。いろいろなデータ等を用いて意思決定や PDCA を回す仕組みのもののようですが、どういった指標が活用できるのかということについて、お聞かせいただきたいと思います。

次に濱中先生の発表ですが、推薦入試によって獲得した新たな学生集団を入学後にどう生かすのか、多様な学生の特長をどのような形で伸ばしていくのか、あるいは他の学生に対していい影響を与えていくのか、そういった仕組みについて考えておられることがあれば、教えていただきたいと思います。

また、入学後の追跡調査をして、どういった学生であればこの推薦入試は成功したと考えられるのか、こういった指標を想定しているということがあれば、教えていただきたいと思います。

最後に、全員にお伺いしたいと思います。いろいろな大学が高大接続改革に関心を示し取り組んできていると思いますが。その成果とは一体何なのか、どういった状態になればこの改革は成功したと言えるのかということについて先生方のお考えを聞かせていただきたいと思います。私もいろいろな取組をしていますけれども、最近、どこが終着駅なのかということについて、関係者間でイメージの共有はしておいたほうがいいのではないかなと思うようになりました。そういったところについて、ぜひ先生方の御意見をお聞かせいただきたいということで、指定討論とさせていただきます。



特集 3◎全体討論

個別選抜における多面的・総合的評価

中津 将樹（国際教養大学入試室長）/ 濱名 篤（関西国際大学長）/

濱中 淳子（東京大学教授）/ 大村 勝久（静岡県立浜松北高等学校教諭）

/ 西郡 大（佐賀大学教授）/ 山路 浩夫（電気通信大学教授 ■ 司会）/

大津 起夫（大学入試センター試験・研究統括官 ■ 司会）

【山路・司会】 それでは、お二人の指定討論者から各先生に御指摘を頂きましたので、各先生から御指摘に対する御回答を頂き、さらに、それを踏まえて会場から頂いた御質問などにもお答えしながら議論を進めていきたいと思っています。まず中津先生からお願いします。

【中津】 いくつか質問がありました。いろいろな入試のタイプで入った学生は入ってから、どうなのかという話です。高校で習った分野をどれだけ覚えているか、筆記試験やセンター試験の点数がどれだけ高いかという学力で申し上げると、やはり一般選抜を経た学生のほうが特別選抜で合格した学生よりも平均的には入学時の学力は高いようです。英語力に関しては、特別選抜の方のほうが高いです。これは入試制度を構築する時点で私たちが予測していたことです。

本来は様々なバックグラウンドを持った学生が欲しいという意味での多様性、ダイバーシティーですが、学力でも多様性は出てきています。そこは、少人数教育や能力別の授業で対応しています。

■ 私たちは、大学は必ずしも4年間で卒業しなくてもいいのではないかと考えています。むしろ一定基準を満たした学生を社会に送り出す、／（中津）

また、国際教養大学では留学が義務ですが、一定基準を超えない限り留学させません。つまり、留学する学年や時期により、4年間の進度が分かれます。また、留学終了後に卒業要件を満たしているかなど、いくつかの節目を設けて学力を維持、確認しています。

なお、私たちは、大学は必ずしも4年間で卒業しなくてもいいのではないかと考えています。むしろ一定基準を満たした学生を社会に送り出す、これが社会に対する本来の大学の責任ではないかと考えています。3.5年で卒

業する学生もいますし、4.5年で卒業する学生もいます。4年で卒業する学生は5割、4.5年、5年も含めるならば9割です。ただ、就職を希望する学生は100%就職できています。

多様なタイプの学生が集まることによる良い効果もあります。ギャップイヤーで入った学生、つまりインターンシップやボランティアなどを実践して入学した学生とそのような経験の少ない一般選抜で入った学生と一緒に授業を受けます。本学は1クラス当たり平均18名であり、少人数教育での授業や最初の1年間の学内での寮生活のためお互いに顔見知りです。そうすると、ギャップイヤーで入った学生は一般選抜で入学した学生と出会うことにより、もっと勉強しなければいけないということで勉強し始めますし、一般選抜で入った学生は、ボランティアやインターンシップはこんなに面白いのか、それならば自分もやってみようという意識が沸き立ち、お互いに刺激しあい、相乗効果が発生しています。恐らく私たちが「インターンシップやボランティアをやりなさい」、「もっとしっかり勉強しなさい」と言うよりも、同年代の学生同士が互いの経験をシェアすることによって、それぞれが知力、人間力を高めあうという効果が出てきたのではないかと考えています。

卒業間近の学生と話をすると、多くが国際教養大学に来てよかったと言います。その理由を聞きますと、「留学ができた」「英語力が身に付いた」という学生もいますが、「多様なタイプの学生と出会い刺激を受けた」という学生も多いようです。このような声を聞くと本当に私たちも嬉しく思います。

英語を重視したC日程入試に関する質問もありました。学内の調査によれば、開学の頃に比べると、最近は英語しかできない学生もだんだん出てきています。入学後の成績が必ずしも芳しくない学生も少なからずいます。そのような学生に対しては、必要に応じて呼び出し指導をします。

入試ごとに志願者集団が異なるべきという話もありました。説明会では採りたい学生像、つまり、「このような学生が欲しいので、このような入試をやっています」と説明しています。私たちは高校訪問で全国300~400校に毎年行っていますが、それぞれの高校の特徴、例えば進学系なのか、グローバル系なのか、またそれまでの本学での実績も含めて、恐らくこちらの高校の生徒さんはこのような入試タイプが適当ということも含めて先生方や生徒の皆さんに説明しています。

相談会では、高校生からの入試に関する質問に対し、「あなたはどの学校なの?」「学校の成績はどれぐらい?」「英語資格はどれぐらい取っているの?」「部活動は今何をやっているの?」といろいろ聞いて、「それだったらこの入試が向いているでしょう」と助言します。「高校推薦とAOのどちらも出願資格を満たしているけれども、どちらがいいのですか」「これまでの受験倍率はどうですか」というような質問も来ますが、「今突然そういう質問をされても、私たちはすぐには答えられません。なぜなら、皆さんの高校までの実績

が分からないからです。もし分かれば向いている入試形態をアドバイスできます」「受験倍率は参考であり、むしろ出願要件や受験科目があなたに適しているか考えてください」と言って、個別相談を進めています。

入試タイプごとの仕組みを作ったり、工夫したりしているかという質問ですが、実は何もやっていません。ただ先ほども申し上げましたように、本学は少人数で、学生同士もみな顔見知りですから、お互いに刺激し合って、足りなかった部分、例えば一般選抜で入った学生は主体性や積極性を身に付けるためにインターンシップやボランティアをやったり、特別選抜で入った学生はもっと勉強したりすることにより、プラスの効果が出ているのではないかと考えています。

【山路・司会】中津先生、どうもありがとうございました。濱名先生、よろしくお願いします。

【濱名】まずは大村先生の御質問ですが、調査書をしっかり見るきっかけになったのは何かということでしたが、それは、割と単純な話で、きちんと学習習慣が付いていて、ほどほどの成績を取っている子のほうが、入ってから伸びるという分析結果がありました。それがきっかけです。また、丁寧にきちんと書いている調査書はやはり読む気になります。

■学生が面接で話すのは大体クラブとアルバイトの経験です。しかし企業側はそんな話はほとんど評価していませんし、大学の成績などはもっと下に見られています。(濱名)

実は、私たち大学も、就活のときに大学の成績があまり評価されないということについて悩んでいます。学生が面接で話すのは大体クラブとアルバイトの経験です。しかし企業側はそんな話はほとんど評価していませんし、大学の成績などはもっと下に見られています。

では、企業は何を評価するんでしょう。実は私は阪神大学野球連盟の会長をやっているのですが、毎年500人ぐらいの新入の野球部員にこんな話をします。就職面接で、私はベストナインになったことがありますと言ったところで、会社はそれを評価してくれないよ。むしろ同じ野球の話だったら、プレーでものすごい失敗をした、あるいはそこから何を学んだかという話のほうが、面接する側は聞くと聞く。

つまり、そのように内化して、もう一度外化するというプロセスを踏んだ経験が評価されるわけです。同様に調査書に成功経験をひたすら並べ立ててもしょうがないんです。これは実はポートフォリオのリスクにも通じます。

むしろ失敗した話をベースにその子がどういうアクションを起こしたかということを書いていただいたら、大学側は読む気になります。

私は実は JAPAN e-Portfolio というネーミングには反対で、学習者が自ら記入するポートフォリオの持ち味を殺すリスクが高いと思います。拙速に入試に使ったりしては失敗すると危惧しています。というのは、私どもの大学はアナログ時代からポートフォリオを 20 年近く使っていますが、非常に成功しているというわけでもありません。ポートフォリオの強みは、定性的な気付きとしての学習成果の記録です。形成的な評価を可視化していくというプロセスが大事です。

ところが、ひたすら記録を残していくと、本当は記録の宝箱にならなければいけないのに、往々にしてごみ箱になってしまいかねません。何でもかんでも入れていけばいいというものではなくて、そういう点でも内化と外化のプロセスが必要になってきます。現時点では高等学校にそういう指導の準備ができていません。また、大学の方でもポートフォリオをどう評価するかの方法が確立されていません。

■「クラブのキャプテンをやっていました」ということが評価されそうだと、なんちゃってクラブがどんどんできて／（濱名）

調査書も、電子化するのはいいですが、本来教育のツールとして使うべきものを入試に持ち込むのは非常に危ないと思います。誰のためのものかといえば、誰よりも本人のためのものです。本人の形成的な評価であり自分の成長を他者に説明できる材料ですから、その評価方法が確立していない状態で使うと、下手をすると非常に滑稽な定量化をもたらします。「クラブのキャプテンをやっていました」ということが評価されそうだと、なんちゃってクラブがどんどんできてしまいます。それではだめだということで部員数は 10 人以上と限定すると、幽霊部員だらけになってしまう。そんなことでは意味がありません。

プライバシーの問題はおっしゃるとおりで、アメリカでもポートフォリオを大学がウェブサイトアップしているのは、オープンにして構わないという学生のものだけで、全体がオープンになっているわけではありません。また、恐らく今構想されている JAPAN e-Portfolio とアメリカでいうポートフォリオにはだいぶギャップがあると思います。アメリカでもここまでの評価を形成的にしましょうというような、評価ルーブリックを開発している大学も徐々に始めているようですが、まだ時間はかかると思います。

普通の子を評価する方法は、私は定性的なものの評価の観点と基準をできるだけ示してやるということだと思います。もう一つの大きなポイントはフ

フィードバックをどれだけ我々がしてやるかということです。これは高校も大学も同じだと思います。そして、フィードバックをして終わりではなくて、再内化して、もう一回直して出させるというプロセスの習慣を高等学校で付けていただいたら、恐らく大学で半端な教育をやると、新入生がクレームを付けるようになります。それが連動することで、高大接続改革として本当につながった一連の改革になっていくのではないかと思います。

また、学生から評価データをたくさん取ると、「あんなにアンケートやテストをやって、どう使っているの?」というようなクレームがきます。そこで、私どもは2年前に「評価と実践」という授業を開設しました。評価とは何か、コンピテンシーとは何か。社会人基礎力とは、学習力とは、出口でどのようなことが評価されるのかということを説明しながら、アンケートやテストを受けさせるわけです。新入生たちは高校を卒業するまで人から評価されたことはあるけれども、自分で評価したことは全くありませんから、何もしなければそのまま大学を卒業してしまいます。そんな人間が企業に入って大卒者を評価するところでもない評価になってしまいます。これは問題です。やはり評価についての知識もそうですし、自分のやっていることや、私どもが学生支援型IRで使っているデータの意味を理解させて、「君の自己評価能力を高めていって、自分で評価してごらんという」と言って実践に持っていくことが必要です。それなりの自己評価能力とエビデンスを示すプレゼンテーションを実践できる状態、実はそれこそがポートフォリオなのだろうと思います。

多様な学生に向けての入試というのは、結局学生が納得して入学してくるかどうかがです。私どものマッチング入試の「授業参加型」というのは、結局うちの教員が授業をやって、それに基づいて出されたものに答えられたから合格したということです。「君はうちの大学の授業に付いていけるときちんと保証してもらったんだよ。相談型のAOよりもいいよ」と言ったら、相談会でたまたま一緒に御飯を食べた保護者と親子が「そうですね」と納得してくれました。そのような納得を作ることが大切だと思います。入試は我々が一方的に選ぶのではなくて向こうも選ぶわけですから、お見合いだと思います。双方に選ぶ権利があります、やはり納得できるような形での入試システムが非常に重要になってくるだろうと思います。

本学の場合、例えばグループワークが苦手な子やアクティブ・ラーニングが嫌だという子は不適応を起こしやすいと思います。それはアドミッション・ポリシーにも書きますし、説明会などでもうちとマッチングするかどうかということについては発信していかなければいけないと思います。

また、ア krediteーション型の評価に必要な条件というお話もありましたが、御推察のとおりでIRデータを全部ひも付けしていくということです。入試の多様化で我々が基礎学力テストに注目したのは、入口の段階で英語の

プレイスメントはやりますが、それ以外の情報がないと他の基礎学力は、調査書だけでは学校差があるので分かりません。そこで、子どもは入学前教育でeラーニングの教材を受けさせていますが、そこでは、どれだけできるかだけを見ているのではなくて、実は、ログを見て学習習慣が付いているか、何%やったか、といったデータも見ています。入学前の時点からもう既に情報収集が始まっていますし、授業アンケートもすべて、学籍番号で管理し、学生生活実態調査などといった大学に対する直接的なクレーム以外は全部ひも付けています。

子どもは規模が小さいですから、そのようなデータを何年か分蓄積し、大学間連携でデータを共有したりして、母集団を大きくしてデータを分析するというような工夫もしています。

また、プレゼンの中でIRの図があったと思いますが、私どもの場合、プロフェッショナル・ディベロップメントという場で、全ての職員に分析結果をきちんと示し共有します。大学の教員というのは科学的な思考には耐えられますから、エビデンスを示してこういう状態だということが分かれば、取りあえずそのとおり動いてくれるかどうかは別にして、最初の納得は得やすいものです。

逆に、理性的な納得がなければ、学長が言ったからというだけでは言うことを聞きません。文科省が言っているから変えなければいけない、あるいは大学入試センター試験がこう変わったから対応しなければならないというのではなく、やはりうちの大学に置き換えたならこうでしょうという理解がベースになっていきます。それは、最終的には学生に対しても、保護者に対してもそうです。

高等学校にお願いしたいのは、やはりそういう努力を見ていただきたいのです。その大学のポリシーをきちんと読む、あるいはそれが実践されているかどうかを見ていただくようお願いしたいということと、できれば高等学校の場に我々を呼んで、このような議論をさせていただいて、相互理解が成立し、点が線になり面になっていくと、高大接続改革は成功するのではないかと思います。

■私は、高大接続改革の目的というのは、一つは適応する学生の割合が増えること、もう一つは大学の学修成果の達成度が上がっていくことだと思います。(濱名)

西郡先生のもう一つの問いは、どういう状態になることが高大接続改革の成功かということでした。私は、高大接続改革の目的というのは、一つは適応する学生の割合が増えること、もう一つは大学の学修成果の達成度が上が

っていくことだと思います。要するに、ミスマッチで退学する子が減り大学が到達目標として掲げているものが実際に達成されるようになったら、高大接続改革の成果があがったということだと思います。

今後、アセスメント・ポリシーという観点で、自分たちが掲げた目標がどのように達成できたかをエビデンスベースで語ることが社会から求められます。内部質保証というよりは、説明責任や可視化するということを我々がもっと日常的にやっていくことができれば、社会との関係がより改善していき、大学での学びが出口でも評価されるようになるでしょう。我々の学修成果が社会で評価してもらえという状態になることが最終ゴールではないかと思っています。つまり、学生が頑張っている成績をとって、その評価が妥当であれば社会も評価してくれるということが高大接続改革の最終ゴールではないかと思っています。

■大学に適應できることがいい高大接続なのではないかという
濱名学長の御意見はおっしゃるとおりだと思いますが、適應で
きるとは一体どういうことなのかを考えてしまいます。(濱中)

【山路・司会】 それでは濱中先生、よろしくお願いします。

【濱中】 まず、求めるタイプの受験生が受験をしているのか、推薦入試を狙ってほしい人たちが受験にチャレンジしているのかという大村先生の御質問です。私が触れ合うことのできるのは合格者の方だけなのですが、少なくとも合格者層を見る限り、何事にも意欲的で、主体的な方々が入っていると思います。

その一方で、やはり170数名しか出願してこないということは、まだまだ課題が多いのだろうと思っています。いろいろな要因があるでしょうけれども、最大の要因は、情報公開の問題だと思っています。募集要項に書かれている「求める学生像」と、大学案内というパンフレットの「推薦入試合格者の声」が、東京大学側が出している数少ない情報です。募集要項に関しては、私は去年の4月に東京大学に着任したのですが、横断的に学部を見渡す1年間を過ごして、ようやくあの募集要項の本質的なところが見えてきたと感じています。「この学部には、こういう文脈があって、だからこんな書きぶりなんだ」ということがずっと入ってくるためには、前提となる知識が必要だと言えるかもしれません。

募集要項も、毎回バージョン・アップはしていますが、いわゆる学内用語で書かれているところはあると感じています。きちんと学外にも分かるような、本当に来てほしい受験生に届くような表現にしなければいけないと思い

ます。

昨年度1年間、地方の高校を回って、推薦入試の意図や東京大学の良さを説明するという行ってきました。20数回の高校訪問で、1月に大体2回以上新幹線に乗っていましたので結構大変でしたけれども、これからもうこういうことが知りたいということがあって声を掛けてくだされば御説明に上がります。

現場の先生からは、先ほど申し上げた大学案内の「推薦入試合格者の声」に高い評価をいただいています。実際に高校時代はどのような過ごし方をきて、大学でこういうことを学びたいということを具体的な声として載せているものです。ただ、残念ながら、昨年度のものには、全部で10学部あるにもかかわらず6人しか載っていません。6学部の事例しか出していないわけです。これは決して望ましい状況ではないので、今回は私のほうから強くお願いしまして、今年の大学案内からは10人の声が載ることになりました。

これは宣伝にもなりますが、今年の夏ぐらいに高大接続研究開発センターで高校生向けの東大のホームページを開きたいと思っています。本学の一体何がいいところなのか、困ったときはどうすればいいのか、先ほども高校時代は専門分野のイメージがなかなか湧かないというようなことを申し上げましたけれども、例えば天文学を学ぶためには、東大には一体どのような授業やイベントがあるのか、心理学を学ぶためには一体どういうところがあるのかということを、学生ライターさんにもお願いしていて、学生目線で書いていただいています。もちろん推薦入試の情報も含めて、高校生たちの目線で情報を発信していきたいということで今頑張っていますので、また進展があったらぜひ見ていただければと思います。

続きまして、一般入試との併願が大変で、それを乗り越えてでもやってほしいものなのかどうなのかという御質問です。難しいところではありますが、合格者の声を聞いていますと、あの併願を大変だと思っていない方々が合格しています。併願してでも自分を見てほしい、東大の先生と話したいというような人たちが出してくださっています。逆に言うと、正直なところ、多分そこまでのメンタルがないと、少しきついのではないかという気もしています。

合格した人にいろいろと話を聞いていますと、面接も楽しかったと言う方々も多いですが、やはり厳しい質問を受けてショックを受けるというような方々もいます。どのように気持ちを切り替えたのかを聞くと、「安田講堂の前で30分泣いて、切り替えて帰りました」、「帰りの新幹線の中でひたすら泣いて終わりました」と、大体の皆さんはそうにお答えになりますので、それぐらいの気持ちの切り替えができる方用の入試になっているのだと思います。

ただ、これは今の段階ではそうだということです。これからどのようなようになっていくのかまではまだ分かりませんし、実際、変わっていく余地はあると感じています。

**■あの推薦文と、本人が書く志望書と、大体40分ぐらいの面接を
すると、学問に対しての構えや意欲、またこれまでの準備な
どが大体見えてきます。(濱中)**

推薦文をどれだけ見ているのかという御質問もありました。私自身が選抜しているわけではないのでお答えするのは難しいのですが、とてもよく見ているのではないかと考えています。というのは、あれほど現場の先生方が詳しく書いてくださるので、受験生のことが非常によく分かる資料になっているからです。地方の高校を回ると、あの推薦文を書くのは負担だといつもお叱りを受けますが、本当に助かっていると感じている本学教員も多いはずですよ。あの推薦文と、本人が書く志望書と、大体40分ぐらいの面接をすると、学問に対しての構えや意欲、またこれまでの準備などが大体見えてきます。その上で可否を出しているということをお伝えしておきたいと思います。

推薦入試で入った学生は大学ではどのように評価されているのかということについては、概ね好評です。

進学領域の迷いについても御質問があったかと思います。ごもっともな御質問だと思います。高校3年生の時点で、例えば物理をやりたい、文学をやりたいと決心して推薦入試で入ってきていただいて、そのまま3年生、4年生まで行ければいいですが、一般入試で入った学生が、教養課程で本当に多様なことを学びながら楽しく迷っている姿を見ると、少し心が揺らぐようなことはあると思います。推薦入試1期生にインタビューをしたら、あくまでも私の感覚ですが、3分の1ぐらいの方が少し迷いを感じたようでした。

では、迷いを感じたときに一体どういうことになるのかというと、本学としては、原則その学部に進学をしていただくことになってはいますが、決して血も涙もないような判断をしているわけではありません。アドバイザー教員も付いていまして、一体どういう迷いなのか相談した上で、その後の進路を改めて検討するという時間も設けています。ただ一方で、やはり1～2年生で学問の広がりが見えてきたとはいっても、勘違いで迷っているようなこともありますので、そういう場合はメンターの先生から「君のやりたいことをするには、まずこちらを踏まえた上でないと、大変だよ」というような指導がなされることもありますので、進みたい領域がある程度決まっている方で、メンタルの強い方、元気な方は推薦を考えていただいたらどうかと思います。

【大村】推薦入試による入学者は他の学生に刺激を与えたり、教員の評価も高かったりというお話でしたが、学生自身の満足度はどうでしょうか。

【濱中】推薦入試の方々の満足度は、現在も調査をしています。率直に申し上げますと、半々というところでしょうか。と言いますのは、今回の推薦入試は早期専門教育とセットということが一番大きな特徴になりますが、その早期専門教育はやはり東京大学側としてもまだ手探り状態ということがありました。制度として、早期専門教育をやって単位はどうするのか、単位は関係なく個人指導のようにやったほうがいいのか、それとも教員ではなくて院生との触れ合いのほうが大事なのではないか、そういった部分は、今 1 期生、2 期生の意見を聞きながら徐々に整えています。そういう意味では、1 期生は最初の方々だったので申し訳なかったところもありますが、本当に元気な方々が入っていて、大学にその声を届けてくださっていますから、一緒に大学を作っていけたらと思っています。

次に西郡先生の推薦入学者の特徴を生かす入学後の仕組みという御質問です。今 1 期生の方が 3 年生になったばかりで、1～2 年生の間は選択した第二外国語で振り分けられるクラスで、一般入試で入った方々と一緒に生活をしていただきます。私は推薦入試ですという看板を掲げるわけではありませんから、先生方はどの学生が推薦入試か分かっていますが、学生同士が分かり合っているわけではありません。ただ、推薦入試で入った方々はフットワークが軽く、いろいろな所に出没して、いろいろな経験をしていますので、それが一般入試の方々に影響を与えていることは確かだと思います。ただ、これに関してはまだデータを取っていませんので、引き続きの課題とさせていただきます。

もう一つ、追跡調査で設定している指標などはあるかという御質問ですが、なかなか難しい問題だと思っています。と言うのは、本学の推薦入試の場合は、完全に学問の領域を生かした推薦入試となっておりまして、しかもその規模が小さいからです。例えば、理学部で十何人入っているとしても、物理は 2 人、化学は 1 人、天文学は 1 人といった具合に、それぞれの領域に沿った早期専門教育や入試の在り方になっていますので、共通した指標というのがどうも作りにくいわけです。

そういった中で今重視しているのは、質的調査のほうです。先ほどから「学生に会った」と私が申し上げているのは、推薦入試で入った方々のインタビュー調査のことです。昨年は 1 期生で入った 70 数名のうち、26 名の方々に会って、それぞれの状況を聞き、それをまとめました。

高大接続改革の成果をどのように考えるべきかという御質問です。成功のイメージは本当に難しいと思います。私は 2007 年に大学入試センターに着

任したのですが、先ほどの高大接続はそのときからのテーマだと御紹介いただきましたが、実は、ずっと申し上げているのが、私は高大接続という言葉は嫌いだということです。というのは、高大接続と言われてもそれが何を指すのかのイメージが湧かないからです。大学に適應できることがいい高大接続なのではないかという濱名学長の御意見はおっしゃるとおりだと思いますが、適應できるとは一体どういうことなのかを考えてしまいます。接続という言葉だと、今のところデータを見る限り、適應できるというよりも困らない学生が増えているような気がしています。高校で手取り足取りの進路指導がなされ、大学に入っても丁寧ケアされている。16～19歳という年齢で挫折も知らない、困ったこともないと、果たしてどういう大人になるのだろうかという気がします。

■／母親失格だと落ち込んだり、今日は良かったと笑ったり、一喜一憂しながらだんだん母親になっていくのだと思います。大学生も同じじゃないでしょうか。まず大学というものに入ってみて、泣きながら、笑いながら／（濱中）

私には小学校3年生の娘がいます。妊娠していたときに母親学級に行っていました。育児の上でそれが役に立った試しがないのです。実際に産んでみて、目の前に赤ん坊が出てきて、毎日毎日、母親失格だと落ち込んだり、今日は良かったと笑ったり、一喜一憂しながらだんだん母親になっていくのだと思います。大学生も同じじゃないでしょうか。まず大学というものに入ってみて、泣きながら、笑いながら、一喜一憂しながらだんだん大学生になっていく、それを適應と表現すればいいのだと思います。そのような使われ方になっていけばいいと思いますが、ただ学生が一体いつ挫折するのか、いつ笑うのかというのは全く読めませんから、学生の示す何かを指標にして、適應を語るのはいささか危険じゃないかという気もしています。

しばらくの間、高大接続という言葉が分からず悩んでいましたが、東京大学に移ってから、自分の中に湧いてきた高大接続のイメージは、接続を学生レベルで考えるのではなくて、機関レベル、学校レベルで考えるべきなのではないかということです。つまり、大学と高校という組織間の信頼関係を築くということが本当の高大接続なのだろうと思います。これまでは、高校と大学はそれほど交流がなく、お互いに相手が何をやっているのかも知らないままに入試をしていました。今後は、「この大学だったら、この生徒が1度くらい挫折してもいいかな」というような感じで送り出せるような機関としての信頼関係が築けたときに、本当の高大接続が構築されたと言えるのではないかというのが、今の気分です。以上です。

【山路・司会】濱中先生，どうもありがとうございました。本当にたくさんの質問を頂戴しながら，御紹介できないものが大変多くて申し訳ありませんが，一方で以心伝心といいますか，先生方のお話の中で，かなりの部分がお答えになっているとも思います。そうした中で，大村先生からは，入試は特別でできる子だけのものであってはいけなと，普通に頑張っている子のためでないといけなという御指摘をいただきました。濱中先生，今後の推薦入試の展望や拡充などに関連して何かありますか。

【濱中】科学オリンピックなどに関係なく普通に頑張っている高校生にも機会ということですが，今回幸いにも大学案内に載せるためにインタビューした10人は，そういった高校時代を送っている学生たちでした。彼らの声をお知らせすることが最初のメッセージの発信だと思っています。

■先生方の負担は，多分他大学ほどは重くないと思います。例えば，個別試験の監督は教員ではなく，事務職員がやっています。
(中津)

【山路・司会】ありがとうございます。中津先生には「16種類もの入試をどういう体制で運営されておられるのでしょうか」とか，「教員の先生方の御負担が大きく，大変だなどというお声はないのか」といった御質問が寄せられています。この辺りの運営について，一言お願いします。

【中津】16種類の入試は大変です。入試だけでなく，オープンキャンパスや高校訪問，高校生向けのセミナーもやっています。これらに加え，かつ年3回の大学院の入試も担当していますので，私も含めて5人のスタッフは，大忙しです。

先生方の負担は，多分他大学ほどは重くないと思います。例えば，個別試験の監督は教員ではなく，事務職員がやっています。

【山路・司会】ありがとうございます。最後に，指定討論者の大村先生，西郡先生，コメントがありましたら一言お願いします。

【大村】本当に勉強になりました。大学側がものすごい勢いで改革に取り組んでいることを肌身で感じました。高校は甘いことを言っていてはいけなと反省して帰ります。

【西郡】今後の方向性について重要な示唆を頂いたと思います。また関係者の皆様といろいろと意見交換させていただければと思います。どうもありがとうございました。

【山路・司会】ありがとうございました。それでは、大学入試センター試験・研究統括官の天津先生から総括をお願いします。

【天津・司会】要するに、我々の未来にとってどういう人材が重要なのか完全には読み切れないために、一元的な価値や視点で人を育てたり選抜しては対応できなくなるということだと思います。未来が不可知であることの必然的な帰結として、多様性というものを前提に人を育てていかなければいけないということだと思います。もちろん、個々の大学の入試が全て多様化する必要はなくて、恐らく教育システム全体として多様性が担保されていればいいのだと思いますが、その中でどのような立ち位置をとるのが各大学の課題になると思います。

本日は、登壇者の先生方から非常に充実した内容をお話いただきありがとうございました。会場の皆様方にも進行に御協力いただきありがとうございました。また、電気通信大学の関係者の方の献身的な努力にも感謝いたします。本日の内容を今後のそれぞれの大学・高等学校等の取組の参考にしていただけたらありがたいと思います。それでは、登壇者の皆様に改めて大きな拍手をお願いいたします。







大会日程

期 日：平成30年 5 月24日（木）～26日（土）

会 場：電気通信大学（東京都調布市調布ヶ丘 1－5－1）

主 催：独立行政法人大学入試センター

共 催：電気通信大学

後 援：文部科学省，一般社団法人国立大学協会，一般社団法人公立大学協会，日本私立大学団体連合会，全国公立短期大学協会，日本私立短期大学協会

5 月 24 日（木） 於：講堂

全体会 1 入試担当者(アドミッション・オフィサー)の育成課題	
14:00～14:05	趣旨説明 ●山地 弘起（大学入試センター研究開発部長）
14:05～14:35	報告①米国における入試担当者の位置づけと役割 ●Jim Rawlins（オレゴン大学副学長補佐・入試部長/大阪大学特任教授）
14:35～15:05	報告②阪大アドミッション・オフィサー（H A O）育成プログラム——背景・現状・課題 ●川嶋 太津夫（大阪大学教授）
15:05～15:35	報告③アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会——その狙いとプログラム評価 ●木村 拓也（九州大学准教授）
15:35～16:05	報告④アドミッション担当教職員支援セミナー——ねらいと課題 ●夏目 達也（名古屋大学教授）
16:05～16:20	〔休 憩〕
16:20～16:30	指定討論 1 ●山本 以和子（京都工芸繊維大学准教授）
16:30～16:40	指定討論 2 ●志村 知美（追手門学院大学教務部アサーティブ課長）
16:40～17:30	全体討論 ●司会・山地 弘起（大学入試センター研究開発部長）

5 月 25 日（金） 於：講堂

9:00～9:30	主催者等挨拶 主催●山本 廣基（大学入試センター理事長） 共催●福田 喬（電気通信大学長） 後援●山田 泰造（文部科学省大学入試室長）
全体会 2 大学入学共通テストの導入に向けた準備状況と試行調査（プレテスト）について	
9:30～9:35	趣旨説明 ●椿 美智子（電気通信大学副学長）
9:35～9:55	報告①大学入学共通テスト等入学者選抜改革の進捗状況 ●山田 泰造（文部科学省大学入試室長）
9:55～10:25	報告②平成 29 年度試行調査の分析結果の概要 ●大杉 住子（大学入試センター審議役）
10:25～10:40	〔休 憩〕
10:40～11:35	全体討論（パネリスト発言）
	発言①国語（マーク式・記述式）の出題に関して ●島田 康行（筑波大学教授）
	発言②新テスト試行調査のチャレンジを教育改革につなげる方法を探る（理科を中心として） ●塩瀬 隆之（京都大学准教授）
	発言③大学入学共通テストの導入に向けた準備状況 ●木谷 雅人（国立大学協会常務理事）
	発言④大学入学共通テストへの期待と高等学校の現状 ●宮本 久也（東京都立八王子東高等学校長）
	発言⑤大学入試改革への期待 ●古沢 由紀子（読売新聞東京本社論説委員）
11:35～12:30	全体討論 ●司会・椿 美智子（電気通信大学副学長）/浅田 和伸（大学入試センター理事）

全体会 3 個別選抜における多面的・総合的評価	
14:00～14:10	趣旨説明 ●山路 浩夫(電気通信大学教授)
14:10～14:35	報告①なぜ 16 種類の入試を行うか ●中津 将樹 (国際教養大学入試室長)
14:35～15:00	報告②関西国際大学における多面的・総合的評価の開発 ～言語運用力と数理分析力テストの活用の可能性～ ●濱名 篤 (関西国際大学長)
15:00～15:25	報告③東京大学の推薦入試は何をみているのか ●濱中 淳子 (東京大学教授)
15:25～15:45	〔休 憩〕
15:45～15:55	指定討論① ●大村 勝久 (静岡県立浜松北高等学校教諭)
15:55～16:05	指定討論② ●西郡 大 (佐賀大学教授)
16:05～17:00	全体討論 ●司会・山路 浩夫 (電気通信大学教授) / 大津 起夫 (大学入試センター試験・研究統括官)

5 月 26 日（土） 於：B 棟

日 程	研 究 会	会 場
9:30～12:00	第 1 セッション ■多面的・総合的評価	B 棟 202 講義室
9:30～11:40	第 2 セッション ■A O 入試, 推薦入試	B 棟 201 講義室
9:30～12:00	第 3 セッション ■入試制度, 追跡調査, 英語資格・検定試験	B 棟 102 講義室
9:30～12:00	第 4 セッション ■高大接続, 高大連携	B 棟 101 講義室
12:00～13:30	〔休 憩〕	
13:30～16:20	第 5 セッション ■調査書, パフォーマンス評価	B 棟 202 講義室
13:30～16:20	第 6 セッション ■入試方法, 選抜方法, C B T	B 棟 102 講義室
13:30～16:40	第 7 セッション ■入試広報	B 棟 201 講義室
13:30～16:20	第 8 セッション ■高大接続, 高大連携, 志願者動向	B 棟 101 講義室

9:30～16:45	大学入学者選抜改革エキスポ	講堂
------------	---------------	----

* 上記のほか、講堂ロビーで、文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅢについてのポスターセッションが開催された。

研究会発表テーマ

【第1セッション】〔多面的・総合的評価〕

司会：山路 浩夫（電気通信大学），山村 滋（大学入試センター）

9:30～ 9:50	一般入試における「主体性等」評価に向けた評価支援システムの開発 ●西郡 大，園田 泰正，兒玉 浩明（佐賀大学）
9:50～10:10	「主体性等」を評価する一般入試の制度設計と成績開示等対応の検討 ●植野 美彦（徳島大学），西郡 大（佐賀大学）
10:10～10:30	理工系大学における多面的・総合的評価と出願提出書類の活用——一般選抜における調査書活用の可能性を中心に—— ●山路 浩夫，椿 美智子，湯山 加奈子（電気通信大学）
10:30～10:40	〔休憩〕
10:40～11:00	大学入学者選抜における調査書活用に向けた課題(2)——調査書記載事項の活用可能性—— ●脇田 貴文，北原 聡，伊藤 博介，井村 誠，中田 隆（関西大学）
11:00～11:20	多面的・総合的評価の実現に向けて——Web 出願システムのあり方—— ●井ノ上 憲司，山下 仁司，川嶋 太津夫（大阪大学）
11:20～11:40	多面的・総合的評価の実現に向けて——入試専門家育成のあり方—— ●石倉 佑季子，川嶋 太津夫，山下 仁司（大阪大学）
11:40～12:00	入学後追跡調査のための学修成果評価の研究——入試と大学教育の接続のあり方—— ●和嶋 雄一郎，山下 仁司，川嶋 太津夫（大阪大学）

【第 2 セッション】〔AO 入試, 推薦入試〕

司会：倉元 直樹（東北大学），荘島 宏二郎（大学入試センター）

9:30～ 9:50	分散評価システムの開発と導入ー薬学部 AO 入試における書類審査での活用事例からー ●関 陽介, 植野 美彦, 澤田 麻衣子, 石田 竜弘（徳島大学）
9:50～10:10	国立大学における推薦入試の課題に関するー考察ーアンケート結果からー ●橘 春菜, 永野 拓矢, 石井 秀宗（名古屋大学）
10:10～10:30	推薦・AO 入試の選抜スケジュールに関するー考察ー高校現場に与える影響からの検討ー ●竹内 正興（鹿児島大学）
10:30～10:40	〔休 憩〕
10:40～11:00	新ガリレオ入試で入学した学生の入学後の検証ー質的調査と学部別での比較ー ●菊池 明泰, 塚越 久美子, 碓山 恵子, 細川 和彦, 石田 眞二（北海道科学大学）
11:00～11:20	AO 入試の実施における「学力の 3 要素」の関連付けーメディア芸術分野での私立大学 AO 入試実施事例を手がかりにー ●齋藤 保男, 大久保 真道, 吉野 弘章（東京工芸大学）
11:20～11:40	高大接続改革への対応に関する高校側の意見ー自己採点利用方式による第 1 次選考, 認定試験及び新共通テスト記述式問題の活用ー ●倉元 直樹, 長濱 裕幸（東北大学）

【第 3 セッション】〔入試制度，追跡調査，英語資格・検定試験〕

司会：杉原 敏彦（広島大学），荒井 清佳（大学入試センター）

9:30～ 9:50	九州工業大学における入試区分毎の PROG・GPA を用いた追跡調査と制度設計 ●安永 卓生，山本 鈺，藤江 美奈，播磨 良輔，山下 修充（九州工業大学）
9:50～10:10	私立大学教員養成学部における入試区分と卒業後の進路との関連 ●竹内 聖彦（椋山女学園大学）
10:10～10:30	高校での学習成績の状況と大学入学後の成績との関連性 ●宮下 伊吉，飯田 和生（三重大学）
10:30～10:40	〔休 憩〕
10:40～11:00	インターネットを介した入学前教育「高知大学入学前 moodle」— アドミッション・ポリシーに関する「自己評価」への試み— ●大塚 智子，喜村 仁詞（高知大学）
11:00～11:20	追跡データにみる入学者選抜と「学士力」指標の関連性について— 琉球大学を事例として— ●山田 美都雄（琉球大学）
11:20～11:40	国立大学の入学者選抜における英語外部検定試験の活用について— 広島大学を事例に— ●杉原 敏彦，高地 秀明，永田 純一（広島大学）
11:40～12:00	資格・検定試験における長文読解用英文の難易度比較 ●秦野 進一（東北大学）

【第 4 セッション】〔高大接続，高大連携〕

司会：雨森 聡（静岡大学），伊藤 圭（大学入試センター）

9:30～ 9:50	琉球大学アドミッションセンターが進める高大接続事業―北米・ハワイ調査の知見をふまえて― ●山田 恭子，保坂 雅子，盛山 泰秀，山田 美都雄，天野 智水，鹿内 健志，高山 千利，多和田 実，山城 新（琉球大学）
9:50～10:10	早期合格者に対する入学前教育―鳥取大学での 15 年間の実践― ●森川 修，山田 貴光，小山 勝樹，小倉 健一，古塚 秀夫（鳥取大学）
10:10～10:30	新潟大学における奨学金制度の検討―入学前予約型奨学金を中心に― ●吉田 章人，並川 努，坂本 信（新潟大学）
10:30～10:40	〔休 憩〕
10:40～11:00	高大接続に必要なこととそのデザイン―静岡県における工学系の高大接続事例をもとに― ●雨森 聡，宇佐美 壽英，藤井 朋之（静岡大学）
11:00～11:20	高等学校における数学および理科の履修状況に関するアンケートの分析 ●平井 佑樹，高野 嘉寿彦，小山 茂喜（信州大学）
11:20～11:40	「言語活動の充実」によって高校までの「書く」学習の機会は増えたか ―大学新入生を対象とする定点調査― ●渡辺 哲司（文部科学省），島田 康行（筑波大学）
11:40～12:00	AO 入試における高校生の理数系分野の主体的活動事例と評価 ●進藤 明彦（神戸大学）

【第5セッション】〔調査書，パフォーマンス評価〕

司会：吉村 宰（長崎大学），林 寛子（山口大学）

13:30～13:50	高校調査書の評定平均値は何を予測できるのか ― 指定校推薦入試の事例分析― ●日下田 岳史，福島 真司（大正大学）
13:50～14:10	入学者選抜における調査書の活用について ●吉村 宰，花堂 奈緒子（長崎大学）
14:10～14:30	調査書得点が一般入試に及ぼす影響 ●永野 拓矢，橘 春菜，石井 秀宗（名古屋大学）
14:30～14:50	山口大学の一般入試における高校調査書活用の可能性 ●林 寛子（山口大学）
14:50～15:00	〔休 憩〕
15:00～15:20	調査書の記述内容についての検討― パーソナリティに関する記述に注目して― ●並川 努，吉田 章人，坂本 信（新潟大学）
15:20～15:40	AO・推薦入試を見据えた文系パフォーマンス評価― 社会科目のパフォーマンス課題の実践― ●中切 正人，橋本 康弘（福井大学），宮下 伊吉（三重大学），雨森 聡（静岡大学），大久保 貢（福井大学）
15:40～16:00	高校生による科学研究発表会の状況 ●樫田 豪利（東北大学）
16:00～16:20	福島県における高校生のサービス・ラーニングと「社会貢献活動コンテスト」 ●前川 直哉（福島大学）

【第 6 セッション】〔入試方式，選抜方法，CBT〕

司会：福島 真司（大正大学），石岡 恒憲（大学入試センター）

13:30～13:50	新しい入学者選抜法への試みー合コン・高校採点・自己採点・大学オファー・大高接続・中大接続・外部面接員ー ●本多 正尚（筑波大学）
13:50～14:10	入学者選抜における括り入試の状況と評価についてー地域・系統・入試別募集定員，高等学校教員への調査を踏まえてー ●三宅 貴也（電気通信大学）
14:10～14:30	入試科目，受験倍率が入学者のコンピテンシー・リテラシーに与える影響を巡って ●福島 真司，日下田 岳史（大正大学）
14:30～14:50	国公立大学における大学入試センター試験の選抜機能 ●石上 正敏，倉元 直樹（東北大学）
14:50～15:00	〔休 憩〕
15:00～15:20	大学入試問題（国語）の出題形式と成績の関係ー高校生を対象にした調査からー ●宮本 友弘，田中 光晴，庄司 強（東北大学）
15:20～15:40	タブレットを用いた「基礎学力・学習力テスト」の開発と実施結果 ●西郡 大，園田 泰正，兒玉 浩明（佐賀大学）
15:40～16:00	高大接続を視野に入れたタブレットを用いる評価問題の試作(3)ーペーパーテストとの比較ー ●安野 史子（国立教育政策研究所），柳澤 秀樹（駒場東邦中学校高等学校），山下 卓弥（富山県立富山中部高等学校），高木 繁（名古屋工業大学），中島 範行（富山県立大学），林 誠一（富山県立砺波高等学校），松原 静郎（桐蔭横浜大学）
16:00～16:20	「情報科」大学入学者選抜のための CBT システム開発と模試の実施 ●西田 知博（大阪学院大学），植原 啓介（慶應義塾大学），角谷 良彦（東京大学），中野 由章（神戸市立科学技術高等学校）

【第7セッション】〔入試広報〕

司会：船橋 伸一（富山大学），大津 起夫（大学入試センター）

13:30～13:50	国立大学のインターネット出願システム導入状況―鳥取大学でのシステム導入に向けて― ●小山 勝樹（鳥取大学）
13:50～14:10	オープンキャンパスで変わる参加者の志望順位―オープンキャンパスの広報効果の測定手法の提起― ●野口 将輝（小樽商科大学）
14:10～14:30	進学希望の変化に与えるオープンキャンパスの効果研究―九州地区国立4大学によるベンチマーキングを通じて― ●三好 登，望月 聡（大分大学），福井 寿雄，西郡 大（佐賀大学），吉村 宰，當山 明華（長崎大学），藤井 良宜（宮崎大学）
14:30～14:50	学部の魅力はどう伝わっているか―オープンキャンパスアンケート分析からの知見― ●保坂 雅子，山田 美都雄（琉球大学）
14:50～15:00	〔休 憩〕
15:00～15:20	富山大学における入試広報戦略 ●船橋 伸一（富山大学）
15:20～15:40	中国人留学生の日本の大学への進学行動 ―Push-Pull 要因分析を通じた留学生獲得のための入試広報戦略― ●三好 登（大分大学）
15:40～16:00	アドミッション・ポリシーの具体化に関する現状 ●齋藤 朗宏（北九州市立大学）
16:00～16:20	入試広報戦略策定に関する―考察―入試データベースの活用および大学組織における連携を中心として― ●大竹 洋平（お茶の水女子大学）
16:20～16:40	新しいタイプのアドミッションオフィサーの役割―入試広報に関する挑戦― ●鈴木 律子，藤 修（山梨大学）

【第 8 セッション】〔高大接続，高大連携，志願者動向〕

司会：永田 純一（広島大学），内田 照久（大学入試センター）

13:30～13:50	米国における高大接続を見据えたカリキュラム改革 ― ハワイ州を事例に― ●永田 純一，杉原 敏彦，高地 秀明（広島大学）
13:50～14:10	大学入学者選抜における外国・国際資格の評価方法及び認証枠組みの開発―UK NARIC と UCAS の役割・機能及び評価方法の比較を中心として― ●飯田 直弘（北海道大学）
14:10～14:30	センター試験利用による私立大学出願の特徴と年次推移 ●内田 照久（大学入試センター），橋本 貴充（帝京大学）
14:30～14:50	地域系学部の入試動向に関する考察―新設の地域系学部と鳥取大学地域学部の入試動向から― ●山田 貴光（鳥取大学）
14:50～15:00	〔休 憩〕
15:00～15:20	大学入試センター試験を課さない入試による入学者の特徴―入学時調査から見えること― ●和久田 千帆（島根大学）
15:20～15:40	受験者の意思決定要因としての大学教育情報の役割 ― 入学および学びの動機づけとしての理念，AP の在り方― ●平 知宏（大阪市立大学）
15:40～16:00	多面的・総合的な評価に関する高校の取り組みと教科毎の評価の観点―3 県の高校教員に対する調査結果の報告― ●宮下 伊吉（三重大学）
16:00～16:20	山梨高大接続研究会（高大研）の取組と今後の展開―なぜ 毎回 40 名以上の参加者が集まったのか― ●藤 修，鈴木 律子（山梨大学）





大学入学者選抜改革エキスポ

5月26日(土)、講堂において、文部科学省の大学入学者選抜改革推進委託事業の選定機関により、プレゼンテーション及びパネルディスカッションが行われた。

また、講堂ロビーでは大学教育再生加速プログラム(AP)テーマⅢ選定大学によるポスターセッションが行われた。

9:30～9:45	挨拶 宮谷 真人(広島大学理事・副学長) 事業説明 吉岡 路(文部科学省専門官)
9:45～10:10	発表■人文社会分野(国語科) ●個別学力試験「国語」が測定する資質・能力の分析評価手法に関する研究 鈴木 誠(北海道大学教授), 倉元 直樹(東北大学教授)
10:10～10:35	発表■人文社会分野(地理歴史科・公民科) ●地理歴史科・公民科における新たな入学者選抜・評価手法の検討 佐藤 正志(早稲田大学教授), 久保 純子(早稲田大学教授), 都丸 潤子(早稲田大学教授), 齋藤 純一(早稲田大学教授)
10:35～11:00	発表■理数分野 ●高大での教育改革を目指した理数分野における入学者選抜改革 松浦 伸和(広島大学教授), 木下 博義(広島大学准教授), 影山 和也(広島大学准教授)
11:00～11:25	発表■情報分野 ●思考力・判断力・表現力を評価する作題手法と作題例 萩原 兼一(大阪大学特任教授)
11:25～12:00	発表■主体性等分野 ●各大学の入学者選抜改革における課題の調査分析及び分析結果をふまえた改革の促進方策に関する調査研究と「主体性等」をより適切に評価する面接や書類審査等 教科・科目によらない評価手法の調査研究 佐藤 真(関西学院大学教授), 時任 隼平(関西学院大学専任講師), 尾木 義久(関西学院大学アドミッションオフィサー・学長特命), 西郡 大(佐賀大学教授)
12:00～13:30	〔休憩〕
13:30～13:50	発表■ ●大学入学共通テストでの問題例の説明 大杉 住子(大学入試センター審議役)
13:50～16:30	各教科における思考力の評価方法と問題例の解説■ 13:50～14:10 ・人文社会分野(国語科)／北海道大学

	14:10～14:30 ・人文社会分野（地理歴史科・公民科）／早稲田大学 14:30～14:40 ・人文社会分野（国語科，地理歴史科・公民科）の質疑・意見交換 14:40～15:00 〔休憩〕 15:00～15:20 ・理数分野／広島大学 15:20～15:40 ・情報分野／大阪大学 15:40～15:50 ・理数分野，情報分野の質疑・意見交換 15:50～16:20 ・主体性等分野／関西学院大学，佐賀大学 16:20～16:30 ・主体性等分野の質疑・意見交換
16:30～16:45	講評■ 木俣 元一（名古屋大学副総長）



参 加 者 数

第 13 回入研協大会の参加者数は以下のとおり。大会全体での参加者 950 人は過去最多。

		国立大学	公立大学	私立大学	高等学校	その他	合 計
参加大学数		79(74)	48(38)	180(100)	—	—	307(212)
参 加 者 数		322(297)	101(83)	323(162)	104(85)	100(98)	950(725)
内 訳	教 員	195(178)	38(42)	82(49)	100(85)	15(27)	430(381)
	その他	127(119)	63(41)	241(113)	4(0)	85(71)	520(344)

単位：人 （ ）は 12 回大会。

〔参考〕参加者数の推移

回（年 度）	共催大学	開催場所	会 場	参加者数
第 1 回（平成 18 年度）	静岡大学	静岡市	静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ	511 人
第 2 回（平成 19 年度）	北里大学	東京都	国立オリンピック記念青少年総合センター	536 人
第 3 回（平成 20 年度）	東京外国語大学	東京都	国立オリンピック記念青少年総合センター	575 人
第 4 回（平成 21 年度）	千葉大学	東京都	学術総合センター	454 人
第 5 回（平成 22 年度）	北九州市立大学	北九州市	北九州国際会議場	411 人
第 6 回（平成 23 年度）	早稲田大学	東京都	早稲田大学早稲田キャンパス	574 人
第 7 回（平成 24 年度）	岡山大学	岡山市	岡山コンベンションセンター	579 人
第 8 回（平成 25 年度）	首都大学東京	東京都	国立オリンピック記念青少年総合センター	496 人
第 9 回（平成 26 年度）	岩手大学	盛岡市	アイーナ いわて県民情報交流センター	359 人
第 10 回（平成 27 年度）	東京電機大学	東京都	東京電機大学東京千住キャンパス 1 号館	602 人
第 11 回（平成 28 年度）	立命館大学	茨木市	立命館大学大阪いばらきキャンパス	723 人
第 12 回（平成 29 年度）	富山県立大学	富山市	富山国際会議場	725 人
第 13 回（平成 30 年度）	電気通信大学	東京都	電気通信大学	950 人

大学入試研究の動向

第 36 号

平成 31 年 3 月

発行/独立行政法人大学入試センター

〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23

<http://www.dnc.ac.jp/> ☎03-5478-3311

編集・文責/総務企画部入試研究推進課

印刷/株式会社コームラ

大学

ひらけ、
INNOVATIONS

電気通信大学
創立100周年
2018-2019

333

100
電気通信大学
100th Anniversary

100年を越えて、未来を創り続ける

18年 祝 創立100周年

同窓会事務局

